連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 14 No. 1

第53号

JUNE　2023

対人援助学会

No.53　M O K U J I

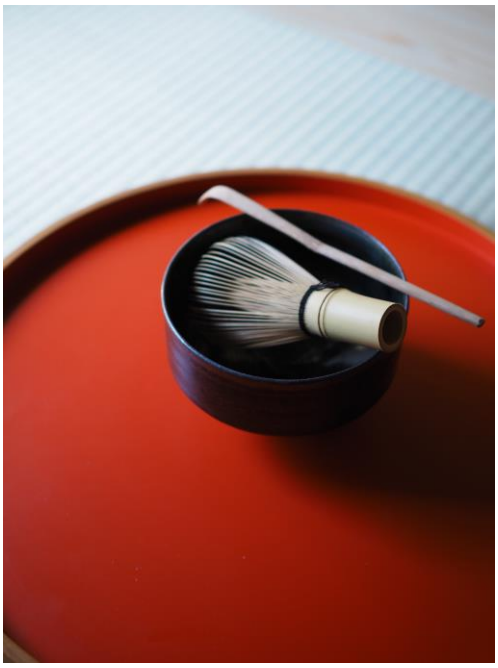
目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
付け加えることができる価値は何か？	千葉　晃央	017-021
臨床社会学の方法（41）	中村　正	022-031
団遊の脱線的経営言論	団　遊	032-034
解放の心理学へ（2）	藤　信子	035-037
カウンセリングのお作法（35）	中島　弘美	038-040
晩年 D・A・N 通信	団　士郎	041-049
幼稚園の現場から（53）	鶴谷　主一	050-054
福祉系対人援助職養成の現場から（53）	西川　友理	055-059
ああ、相談業務（13）	河岸　由里子	060-064
きもちは言葉をさがしている（50）	水野　スウ	065-071
路上生活者の個人史（8）	竹中　尚文	072-073
男は痛い！（47）	國友　万裕	074-079
役場の対人援助論（45）	岡崎　正明	080-084
臨床のきれはし（21）	浅田　英輔	085-086
発達検査と対人援助学（12）	大谷　多加志	087-089
対人援助点描（31）	小林　茂	090-091
立場が変わると何かが見える（5）	坂口　伊都	092-098
周辺からの記憶－東日本大震災家族応援プロジェクト－（39）	村本　邦子	099-121
精神科医の思うこと（29）	松村　奈奈子	122-124
馬渡の眼	馬渡　徳子	125-126
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	127-134
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	135-137
先人の知恵から（40）	河岸　由里子	138-142
うたとかたりの対人援助学（25）	鵜野 祐介	143-146
ああ結婚（26）	黒田　長宏	147-148
PBL の風と土（25）	山口　洋典	149-154
接骨院に心理学を入れてみた（24）	寺田　弘志	155-162
現代社会を『関係性』という観点から考える（24）	三浦　恵子	163-168
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（20）	迫　共	169-172
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（23）	杉江　太朗	173-177
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	178-179

生体肝移植ドナーをめぐる物語（21）	一宮　茂子	180-184
こころ日記『ぼちぼち』partⅢ	脇野　千恵	185-186
原田牧場 Note（13）	原田　希	187-190
ザイコロジー（1）新連載	川畑　隆	191-195
応援、母ちゃん（13）	玉村　文	196-198
HITOKOMART（13）	篠原ユキオ	199-203
川下の風景（10）	米津　達也	204-205
幾度となく会い、語り合うことの意味	本間　毅	206-214
一語一絵（10）	畑中　美穂	215-217
福祉教育への挑戦（最終回）	高井　裕二	218-219
対人援助をリブートするこの一冊（15）	渡辺　修宏	220-222
対人援助をリブートするこの一冊（16）	二階堂　哲	223-224
対人援助をリブートするこの一冊（17）	小幡　知史	225-226
島根の中山間地から Work as Life（9）	野中　浩一	227-231
かぞくのはなし（6）	きむらあきこ	232-234
ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（5）	高木　久美子	235-241
こかげのにちじょう（4）	鳴海　明敏	242-243
私はここにいる　−現象学としての書道−(4)	櫻井　育子	244-245
社会教育の周縁（3）	山本　竜司	246-247
コソダテノシンリ（3）	中谷　陽輔	248-252
教室の窓から	來須　真紀	253-255
社会科の授業を対人援助学の視点から	内田　一樹	256-265
家族面接の実践から里親家族支援を考える その③	坂口　伊都　他	266-272
ある訪問看護師のアタマの中　新連載	山岸　若菜	273-278
人生は対応のバリエーション　新連載	宮井　研治	279-284
講演会＆ライブな日々（34）	古川　秀明	285-287
対人援助学マガジントークライブ報告	編集部	288
編集後記	編集長＆編集員	289-290

ハチドリの器 36

見野 大介

Mino Daisuke









左上：雨燕釉茶盌
右上：蒼天釉大鉢
右下：鳥ノ子釉ぐい呑
左下：黄鶲釉そばちょこ

第５３号

執筆者＠短信

山岸　若菜　新連載

今回から千葉晃央さんのお誘いを受け、連載させていただくことになりました、山岸と申します。

仕事は看護師をしています。看護師免許を取ってからはもう 20 年になり、これまで色んな科で働いてきました。

看護学生の時は人の命を救う救急救命がかっこいいな～！と思っていました。

「戻ってこ～い！」と言いながら心臓マッサージとか「はい！離れて！」ドカン！とか、憧れていました。

実際にそういう急性期の病棟にいたこともありますが、現在私が働いているのは精神科の訪問看護です。

医療行為はほとんどなく、利用者さんのお家に行って利用者さんやご家族のお話を聞いています。

毎日車で移動して訪問するので、大事なことは日焼け対策とトイレタイムの確保です。

派手さはありませんが日常の中にある利用者さんとのやり取りに魅力を感じ、10 年以上続けています。

執筆は自分らしさを大切に、面白く続けていきたいです。よろしくお願いします。

ある訪問看護師のアタマの中
P273～

宮井　研治　新連載

はじめまして、初参戦します。対人援助学マガジン史上、最後の大型新人と言われています、宮井研治と申します（自分調べ）。とりあえず、よろしくお願いします。

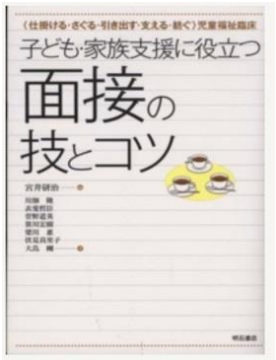
今回は、なぜこの雑誌に書かせていただこうと思ったのかの動機について、お話ししたいと思います。

私、三十数年ほど、大阪市で公務員をしておりました。大阪市の枠の中では、臨床心理職員という肩書きの専門職採用でした。公務員なので、当然異動があり、いくつかの職場で働いてきました。その中で、いわゆる「児童相談所」という機関にいた時間がもっとも長くなりました。現在は、縁あって（まあ、世の中のことは、だいたいご縁で繋がってるわけですが）京都市の山科にある京都橘大学で、先生をしてます。

かたい言い方をすると、児童福祉臨床業界で長らく働いてきたわけで、その当時から、この業界で働いていて、団士郎の名前を知らない人はモグリでした。したがって、この特筆すべき Web 誌の存在も知っており、有難いことに、「書いてみない？」なんて声をかけてもらえることもありました。その度に躊躇した理由は、締切です。締切が嫌です。夏休みが終わり、明日から新学期なのに、読書感想文ができてませんわ、あの感じがダメです。思えば、人生は締切の連続です。好き好んで、自ら締切を一つ増やすようなことをする必要があるの？ないでしょ！

つまり、忌み嫌う締切を設定してでも、書きたいという個人的な動機が高まったということです。続きは本文にてお読み下さい！

人生は対応のヴァリエーション
P279～



内田　一樹

最近月日が過ぎることが早くなりました。それから 1 年の中で自分が元気なときとそうでない時のリズムがなんとなく分かるようになってきました。暑い季節に向かって元気になり、寒い季節に気持ちが沈んでいきます。それでも不思議なことに好きな季節は冬です。暑がりなので寒い方が好きなのです。気持ちのリズムと逆になって不思議だなーと感じています。

社会科の授業を
対人援助学の視点から
P256～

來須（らいす）真紀

二回目です。一回目と二回目の間で、自身にとてつもない変化がおこりました。「転勤」です。しかも「管外」要するに教職ではない仕事です。

実は４月から児童相談所　一時保護所で仕事をしています。自身、学校という組織を冷静に外から眺めていたいと思っていたのと、児童福祉と教育という2つをつなげるにはどうしたらよいかと思っていたので、希望して転勤させていただきました。（本当に風変りだと言われましたが）授業はもちろんないですが、学習指導と生活指導なので、仕事内容的にはあまり変化は感じられないのですが、児相のほうが「より子どもたちのために仕事してる」感が強いのと、夜勤、準夜勤、早出、遅出、日勤とまあ、仕事時間に変化があり、ただいま体重増量中です。（夜勤すると2倍お腹がすきます）

見ているのは同じ子どもなのに、学校と児相では微妙に見方考え方が違うというところが、新鮮です。これから自分自身どのように変化していけるのか。「やっぱり学校ってええわぁ。」と思うのか「やっぱり学校って変だわぁ」と思うのか楽しみです。

教室の窓から
P253～

山本　竜司

５月には新型コロナウィルス感染症の位置付けが法律上5類に移行し、ようやくコロナ前の日常に戻りつつあるようです。もちろん、ウイルス自体が何かに変化したわけではなく、あくまで人間か決めた分類に過ぎませんが。100 年後には、かつてスペイン風邪が流行した時のように、「令和時代のコロナ流行」というように歴史の一頁として語られるのでしょうか。

社会教育の周縁
P246～

中谷　陽輔

連載 3 回目です。春という気持ちの良い季節を噛みしめたい思いと新年度で切り替えるべきところとのアンバランスさがある中で、あれよあれよと 4 月、5 月が過ぎていっています。

新たに、というところで最近の出来事。古い調理キットを入れ替えていた際、新たに購入したスライサー。切れ味の良さに流石！とズッキーニの薄切りをしていたら、うっかり右手中指の先をさっくり切ってしまいました…（こういった話題が苦手な方、唐突にスミマセン）。

・・・幼少期ぶりに休日の病院に行きました。平日日中はガヤガヤとしているであろう静かな外来で待ちつつ、「新たなものへの好奇心も大切に、年齢に応じた慎重さと節度も大切に！」と自分の行動を振り返っていました。

そして最低限のスタッフしかいない病院で手当てを受けながら、当たり前に思える日常生活を支えてくれているいろんな人の仕事は、普段は目にしないものであったとしてもずっとそこにあり、それは決して当たり前ではなく「有難い」ことだな～としみじみしていました。

ついでに、今現在ややタイピングが思うようにいかないのもまた、日常の有難さを感じる機会だと思えばさほど大したことではない・・・とやせ我慢をしています。

引き続きよろしくお願いいたします。

コソダテノシンリ
P248～

櫻井　育子

最近、フランス語を習い始めた。理由は自分の車がルノー社のカングーだから、とか、フランス映画で聴いたフランス語の響きが美しくてずっと憧れていたから、とか探せばいろいろある。が、とにかく「なんとなくやってみたい！」という単なるノリである。平日の昼間に制約のないひとたちが（平均年齢は相当に高い）少人数で集まり、知的な会話と、ときにくだらない親父ギャグを聞きながらフランス語、である。そして 44 歳はだいぶ若いと言われ調子に乗る。語学に全く自信がなく、コンプレックスの塊だったが、なんの評価もない学びの時間は最高だとしみじみしている。

わたしはここにいる
P244～

鳴海　明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設（現在は、児童心理治療施設）の園長を引き受けてから、14年目に入っています。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。

この施設の開設を決意し建物を建て、私を園長に呼んでくれた当時の理事長の、夢や希望が込められているような気がしています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

青森カウンセリング研究会という集まりがあり、友田不二男先生の日本カウンセリングセンターと連携しながら、月例会や3泊4日の浅虫ワークショップの開催や日本カウンセリングセンター主催の夏季ワークショップの共催などの活動を続けてきました。

浅虫ワークは、2020年令和2年3月に第49回の開催を企画しましたが、コロナ禍ということで、急遽中止せざるを得ませんでした。それ以来、対面で集まることを極力避けて、ズームを利用しての文献の読み合わせの活動を細々と続けていました。

ようやく、6月23日から25日まで2泊3日に短縮して再開することにしました。どんな展開になるか、今から楽しみです。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P242～

高木　久美子

なんとか無事に投稿が1シーズンをめぐり、おかげさまで 2 年目に入ることができました。

ボランティア先で「投稿を楽しみにしています。」と声をかけてくれる人。「マガジンの URL を仲間とシェアしましたよ」と連絡をくれる人。いろいろな形でヨミトリとヨミトリ君でご一緒してくれる人がいて、大いに励みになります。

昨年秋の視覚障害の友人のコンサートの成功に味を占め、今年は「遷延性意識障害の友が語る会～音楽演奏付き」をプロデュース中です。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P235～

きむら　あきこ

昨年の10月に放送大学に入学しました。生涯学習のつもりです。11 月には中間テストのような存在の課題があり、今年の 1 月には、単位認定試験がありました。前期目標としていた 15 単位、無事合格することができました。

放送大学は、インターネットでも視聴することができ、様々な学習科目を学ぶことができます。社会人経験があるからこそ、理解がスムーズになる科目も多々あります。知識が広がることをとても楽しく感じています。今年はもう一つ、挑戦したいことがあります。挑戦できたら、また近況報告したいです。

かぞくのはなし
P232～

原田　希

農協通じて関東の女性から問い合わせがあり、誰かな？と思ったら 15 年前に生協の生産地訪問ツアーでウチへ見学来た当時 10 歳の女の子でした！25 歳になって新婚旅行で北海道へ行くので再訪したく探してくれたとのこと。えーそんな特別な旅行でウチに！ってなんか泣ける。電話口でうるっとしてたら、その子ももらい泣き（一回しか会ってないで、私ら…笑）



酪農情勢悪い中で、自分がやれることを考えてみるも、結局は酪農や牛乳ファン

を作らないと！と思ったところだったから、なおさらね、感動でした。ちなみにウチを探すためにネット検索をしてくれて、このマガジンにも辿り着いてくれていました。細々の投稿なりにも執筆することの意味、肉づいてきたように思います。今回は泌乳のメカニズムについて書いています。知られざる酪農の世界へどうぞ。

原田牧場Note
P187～

野中　浩一

コロナが五類に移行し、地域の行事が復活の兆しを見せています。

私が住む島根県の中山間地域では今も自治会が地域の紐帯として機能しており、コロナ前は、地域の運動会、旅行、飲み会、お祭りなど、集まる機会が年に何度かありました。しかし 3 年半のブランクにより、（私も含め）戸主のおじさんたち以外はほとんど顔を合わせる機会がなくなっていました。

地域の子どもたちの成長が早すぎて、もはやどこの誰だか分かりません。

「島根の中山間地から Work as Life」
P227～

畑中　美穂

庭を、つばめが低く飛ぶ季節になった。我が家には巣はないが、近所の農家では毎年、稲家に迎える家もあるようである。今、田んぼには、まだやわらかな苗がさわさわと揺れる頃。少し前の時期にはなるが、田植え前の、水が張られたばかりの田が一年で一番好きである。風がなければ鏡のよう。ほんの 2 日間ほどのことであるが、我が家まで湖のなかに建っているように感じられるのだ。

さて去年の今頃は、母が我が家に滞在していた。毎日庭を、飽くことなく眺めていた。ふと見れば、母は椅子に座ったままうつらうつらと居眠りをしていることもあった。「今年も、つばめが」。

母はどうしているかな？　報せの手紙でも出してみようと思う。

一語一絵
P215～

渡辺　修宏

パンデミックはもう終わったと、お考えの方も少なくないようです。かといって、COVID-19 が消滅したわけではありません。

感染予防を重要視したいけど、やりすぎると毎日の営みが大変になる。これってある種のコンフリクトですね。

なんどもほどほどが大事、とか、絶妙なバランスとりが最良、とか、多様な指針が飛び交っております。

最適解は、A であって B でない、かつ、B であって A でない。恩師の言葉、「そうであって、そうでない」を思い出します。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P220～

米津　達也

勝手に職場の事務所に「図書コーナー」を作った。自宅の狭い本棚は既に満杯。仕方なしに以前は小まめに手放していたが、やはり愛着ある本は置いておきたい。誰かに自慢するわけでも、無理に読んでもらうためでもない。言葉を共有し、差異を意識する。これもひとつの方法としてやってみました。

川下の風景
P204～

高井　裕二

転職に伴いまして、車通勤から電車通勤へと変わりました。満員電車は非常にストレスではありますが、色んな気分転換の方法を見つけて頑張っていきます。手始めにスマートウォッチを購入し、健康管理アプリを使いながら「歩く」ことに力を入れています。健康を管理するというより、アプリに管理されているという感じですが、新生活を頑張っていきます。

福祉教育への挑戦
P218～

本間　毅　退院支援研究会

本号から「幾度となく会い、語り合うことの意味」を再開する。

前回の執筆者短信でお伝えしたが、本年 3 月 9 日～3 月 18 日の間に遠見書房が「第 11 回ナラティヴ・コロキウム」を開催した。私が担当したワークショップに頂いたお題は、**「チーム医療とナラティブ」**である。全くの偶然であるが、この依頼を受ける直前、私はマガジン第 52 号に**「チーム医療におけるナラティブの意味」**を掲載する準備を始めていた。

時はさかのぼり 2018 年春、我が退院支援研究会は、立命館大学総合心理学部の齋藤清二教授から**「医療における多職種協働と物語能力」**という特別講演を賜った。その翌年、私が斎藤教授に頂いた論文の題は、**「医療におけるナラティブ・アプローチと物語能力」**である。物語は偶然に意味を与える。

幾度となく会い、
語り合うことの意味
P206～



土元　哲平

『対人援助学マガジン』を卒業します。というのは、最近、書籍の編集や学術論文の執筆などを含めて、様々なプロジェクトに巻き込んでいただくことが多く、50 号以来、休載が続いていました。そうした中で一度区切りをつけ、目の前のことに注力したいと考えたためです。連載中、対人援助学マガジンを読んだよ、と声をかけてくださった方もいらっしゃいました。「キャリアと文化」は自分にとって大切なテーマのひとつですので、今後も探究していきたいと思います。ご愛読ありがとうございました！

玉村　文

元同僚や同僚に家族が増えています。新しい命の誕生の喜びを感じ、それぞれが親になっていく姿をみるのもなんだか嬉しいです。せっせとお古を詰めた段ボールを送ったりしているのですが、我が家にもたくさんのお古が届くので荷物が減っている気がしません。

そんな新たな家族を迎える時期に、最

近では父親の育休取得の話も聞くようになってきました。育休を取得して子育てに関わりたいという思いは、父親にだってあっても当たり前だと思います。ということで今回のテーマは男性の育休。

応援　母ちゃん！
P196～

川畑　隆

「さようなら」してすぐに「こんにちは」です。べつに「さようなら」から逃げているわけではありませんが、心新たに続投させてもらいます。

ゴールデンウイークに小2の孫を連れて、東かがわ市にある「しろとり動物園」に行ってきました。「自由すぎる動物園」としてテレビで取り上げられたそうです。象やキリン、ホワイトタイガーやライオンからウサギやモルモット、ひよこまで約 70 種類の動物がいて、あちらこちらで触れ合える仕掛けになっています。入場すると 1 杯 600 円のエサをバケツで売っていて、それをもってまわります。象くんは大きな口をおっぴろげて催促しています。ひよこの入った箱は離れた何か所かに置いてあるので、手に取るのに行列になったりしません。虎がたくさんいましたが、もちろん放し飼いにはなっておらず鉄格子の向こうです。でも、他の動物園のような「あちら側の観賞用」という感じではないのです。私を睨みつけます。私が移動すると追いかけて威嚇するときもありました。そんな感じで触れ合ってくるのです。これも格子の中ですが、ハイエナがうろついているのとその鳴き声は不気味でした。そんなに広い敷地ではないのですが、結局 5 時間ほどいました。飽きませんでした。公立ではなく民間がやっているのがうなずける気がしました。泊ったのは隣のさぬき市の「津田の松原」にある「クアパーク津田」。温泉バーデゾーンと温水プール施設があって重宝しました。車で 5 分のところに「日本ドルフィンセンター」もあって、イルカに餌やりをしました。自宅からも現地からも早く出発したおかげで、車の渋滞にはまったく巻き込まれませんでした。

孫サービスの面白い一泊旅行でした。

サイコロジー
P191～

松岡　園子

今、実家の片づけをしています。祖父や祖母が暮らしていた時の道具で片付いていないものがあり、なかなか苦戦しています。今の自分たちに必要なものだけを残すと考えると、ほとんど不要なものでした。人に譲るもの、捨てるものをまとめると、部屋2つ分ほどありそうです。

私は道具を増やさないようにしよう……。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P178～

一宮　茂子

【G7 広島サミット】

G7 広島サミットは 2023 年 5 月 19 日から 21 日の 3 日間、広島で開催されました。連日のマスメディア報道から G7 の主役は、現在ロシアによる軍事侵攻と大量破壊兵器の使用リスクの高まりをうけているウクライナのゼレンスキー大統領でした。彼のスピーチや質疑応答の内容は、世界中から注目をあびたと思います。緑ゆたかで平和な広島を訪れたゼレンスキー大統領は、第二次世界大戦で原爆投下された広島と現在戦時下にあるウクライナのバフムトの街などを重ねたスピーチで世界の注目を集めたと思います。

被爆地広島でのサミットの意義は核廃絶の道筋を示すことだといわれえています。しかし公表された核軍縮についての文書は、核抑止論を正当化したものだったため、安全保障を核兵器に依存する G7 各国の本気度は見えてきません［核軍縮に関する G7 首脳広島ビジョン（https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100506500.pdf, 2023.5.19）］。原爆資料館を 40 分かけて視察し、被爆者と面会もした G7 や招待国の首脳たちは、核がもたらす悲惨さをどこまで理解できたのでしょうか。核は絶対悪として世界が認識すべきだと思います。

生体肝ドナーをめぐる物語
P180

杉江　太朗

児童家庭の領域で働く杉江です。最近、自転車での通勤を始めました。とは言っても電動自転車を使用して、20 分程度の移動時間であるため、それほど大それたことではありません。自転車で通勤するようになって、日々の草木の成長に気付きやすくなったのと、花粉の脅威にさらされやすくなったそんな気がしています。ちょうど、同じタイミングで自転車にもヘルメット着用が努力義務という形で推奨されるようになりました。ちょうど 1 週間経ったころでしょうか、立った状態で自転車に乗っていて、自転車を停めようとしたときに、なんと駐輪場の屋根の柱で頭をぶつけることがありました。ヘルメットを使用していたため、怪我はありませんでした。皆さま、自転車にはヘルメット着用が必要です。交通事故ではないときにも頭を守ってくれます。ありがとうヘルメット。

「余地」–相談業務を楽しむ方法–
P173～

浅田　英輔



3年ぶりにバドミントンをやった。久しぶりだと汗をかく前に息が切れるが、動いていると汗だく。運動するのって、体を動かすのはもちろんいいのだが、「よしゃー！」とか「くそーー！」とか大声出すのもすごくいい気がしている。案外なくない？大声出すの。そして2日後に、もうすごくケツが痛い。筋肉痛が痛い。

臨床のきれはし
P85～

三浦　恵子

先般の「執筆者短信」では、役所からの帰路、徘徊し家がわからなくなった高齢者の方を、交番と連携しなんとか家族のもとに帰すことができた経験を通し、いわゆる「正常バイアス」に陥ることなく、少しの気付きや違和感といったものを大切にしていきたいと改めて感じたということを記載しました。

それから 2 月が過ぎたある日、今度は出勤途中で、路上に倒れている方を発見しました。

この日は事情があり始発電車に乗車するため家を出た時間も相当早く、その方を発

見したのも朝 4:30 頃でした。まだ薄暗い中で、私も直前まで気付かず、びっくりして足を止めました。これが繁華街やターミナル駅の駅前であれば、「酔いつぶれてしまった人がいる」と思うところですが、場所は住宅地の路上、しかも新聞配達のバイク等との衝突なども起きかねないと感じました。

日赤救急法救急員の講習で学んだとおりに「大丈夫ですか」と声をかけましたが、返事はありません。一見すると若い男性で大きな外傷もありませんが、大きな鼾が気になり、体を揺らすことは控えました。風がやや強いため酒臭を確認しようにもよくわかりません。

通報先を 119 番か 110 番にするか迷いましたが、結局 110 番を選びました。事情を話すとまず帰ってきたのが「酔っ払いですか」という質問で、酒臭の確認を求められましたが、当方から「酒臭ははっきりとわからないこと。ただ、声かけに反応がなく、鼾が大きいことが気になること」「119 番か 110 番か迷いましたが、警察官職務執行法第 3 条の案件かと判断しましたので110番しました」とお伝えし、ちょうど近くをパトロール中の警察官の方に引き継いでその場を後にしました。

「警察官職務執行法第 3 条の案件と思われます」と伝えた時は、少し驚かれました。実は仕事上泥酔者として幾度となくこれに基づく警察官による保護を受けた方の処遇も何度か経験していましたので、咄嗟に言葉が出てしまったのでした。

結局ぎりぎり始発電車に間に合いましたが、「酔っぱらって路上で寝るなんて」と苦々しく思いつつ行き過ぎることもできたかもしれません。しかし、この状態を放置して自転車やバイクと接触すれば事故に発展する危険もあると考えましたし、何よりも「酔い」は度を過ぎれば命を落とす（吐しゃ物が喉につまってしまうなど）こともあり得ることを、長年の依存症に関する処遇や学びの中で私は経験していました。

仮に彼が飲酒をして寝込んでしまっただけで、何事もなく冷めて起き上がることができ、酒の上での失敗談として笑い話で済んだ出来事だったかもしれませんが、それで済まないことが世の中には往々にしてあり得ます。結果的に何事がなければ「余計なお世話」と言われてしまう出来事かもしれませんが、違和感に気付いた人が声をかけたり、助けを求めることが、結果的に「何事もない」ことにつながっていけば、それに越したことはないと考えています。

更生保護護官署職員

（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える

P163～

迫　共

不適切な保育への対応や保育士配置基準の改善に向けた機運がようやく高まりを見せています。私自身、保育士の給与水準の改善や、ブラック保育の問題とかを様々な形で発信してきましたので、ようやく何かが変わるのかなと少し期待をしています。「財源どうする」論がブレーキを引くばかりで、これまで大きく変化してこなかったことを考えると、1 ミリでも前進してもらいたいと思っています。学童保育の待機児童（またはつめこみ）問題など、子どもに関する社会課題の整備は、いつも後回しになってきました。対策可能ギリギリ（アウト？）なタイミング。そちら方面のソーシャルアクションも引き続き行っていく必要がありそうです。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P169～

黒田　長宏

本文に関連して、NHK でさえ特定企業の製品であるチャット GPT を連日紹介しているわけだ。それなら対人援助学会にこれを書いても大丈夫だろうと思い、今回はこのネタで行こう。比較して安価なのが理由で、ひかり TV で CS を見始めて6年になっていたが、これには録画に工夫が必要で、ソニーのソフトを使用してパソコンで録画するのが主流だったのだが、船井電機からひかりTVレコーダーが出てきたので早速購入していい調子で録画することになっていたのだった。ところが急にルーターとの兼ね合いが変になってしまい、思案して以前の主流のスカパー！にすべて戻した。こっちのほうがお金は比較するとかかるが録画は安定しているのだ。船井電機のレコーダーもBS専用の録画にして、もう一台で地上波とCSを録画することにした。なにかしらまるで無駄にはならないものだ。そしてひかりTVとセットだとお得なプロバイダーから、ひかりTVなしで安いプロバイダーに変えるところである。そしてそして、これを記述している今だが、CSに録画が入ってしまうと、GAORAスポーツで観ていた日ハムが出てこなくなってしまい、録画している番組になってしまったため、その場合には、Fire TV Stick 経由でのDAZNに切り替えてファイターズを観ることにした。テレビやインターネット閲覧にも方法がいくつかあるものだ。だいたいいくら努力しても結婚難で独りなわけだから、こういうことしかネタにならない。結婚の方法はいくつあるんだろう。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚

P147～

松村　奈奈子



春に、生まれて初めて山形県に旅に行きました。目的は有名なクラゲ水族館と「即身仏」

旦那に教えてもらうまで「即身仏？何？」という私でしたが、お寺の方のお話では、日本は湿度が高いので、自然に御遺体がミイラの様になる事は無く、千日ほど山に籠って木食修行（穀物を食べずに、木の実や草の根だけを食べ、肉体が腐敗しない様に体脂肪を落とす）し、死が近い事を悟ると山を下りられて、土中入定（地下3mのたて穴の石室でお経を読みながら断食をして死を迎える）し、数年後に掘り起こし、おまつりしたお姿が「即身仏」・・・との事です。

全国に16体あるのですが、庄内地方に多くあり、今回は3つの即身仏を拝ませて頂きました。来世までの人々の苦しみを救い、願い事を叶えるために、自らの命を捧げて「即身仏」になった・・・という数百年前の住職様のお姿に、静かにじっと手を

合わせました。

関西人にとって、東北はまだまだ知らない事がいっぱい。帰りに木食修行されたという、まだ雪が残る美しい湯殿山を見ながら、いろいろ考えてしまいました。

精神科医の思うこと
P122～

柳　たかを

“時の交わるところで、また会おう”2011 年 3 月 11 日(金)のこと、我が芸大マンガコース主催のマンガ賞(メディアコンテンツ大 賞)で、優れた個性的な作品 1 点に松本零士賞を授与させていただいていました。 これははっきり言って本コンクールの目玉ともいうべき賞で選ばれた作者へは、副賞にト ロフィーの代わりとして松本零士作品のキャラクターフィギア(メーテルかキャプテンハー ロック)を授与することになっていました。 松本先生が授業でキャンパスへ来ていただいた時に、ついでにフィギアもご持参いただい ていましたが、2011 年は、私が東京の松本先生の零時社に直接受け取りに行くことになり ました。当時、私は都内文京区にワンルームのアパートを借りていて、そこからなら先生 のところまでさほど遠くないのでした。 お昼ごろアパート近くの地下鉄駅から巣鴨へ、そこから別の経路に乗り換えます。 ちょうど地下鉄が一駅手前の千石駅に着いた時、とつぜん「ユッサ、ユッサ、ユッサ」停車している電車が左右に大きく揺れ始めました。「あっ地震！これは大きいぞ」 幸い電車は停車してドアも開いていました。まもなく車内放送で「皆さま、地下鉄は地震 には強い構造になっております、あわてず落ち着いて行動してください」と、続いて「た だ今安全確認ををしております、そのまましばらくお待ちください」とのアナウンス。しかし 5 分経っても 10 分たっても全く運行再開の気配がない。「このままじっと待ってたんではダメだ、フィギアは何としてもいただいて帰らない と…」 こう思うや電車を飛び出し階段を駆け上がった。地上は地震に驚いたサラリーマン達が携帯電話で話しながらあちこちのビルからゾロゾロ出てきている最中。 そこへ一台の空タクシーがやって来た、とっさに手が上がり急停車、後部シートに滑り込 み、零時社の住所を告げた。「高速に乗りますか？」機転を利かした運転手が聞いてきた が、おそらくどんどん渋滞が始まる気がしたのと下を走っていれば、いよいよ動かなく なっても歩いて行けると思い直し、「下道を走ってください」とお願いした。 結果的にこの判断がよかったと思う、下道は渋滞もさほど影響なく見覚えのある零時社の 手前まで到着できた。さてここでタクシーを乗り捨てたら帰りが不安、カーラジオは各電 鉄は安全点検の為すべてストップしているらしい。「帰りもお願いできますか？ここで待っていてください」 年配の運転手の了解を確認してから向かった。 この日、松本先生は所用でお留守と聞いていた、ところが呼び鈴に応えてドアを開けてく ださったのはなんと松本先生ご本人！ 地震はここでもかなりの揺れだったようで玄関土間に崩れ落ちた段ボール箱が散乱。 挨拶もそこそこに、あらかじめ来訪はお知らせしていたのでトロフィーのフィギアの入った箱をいただくことができた。何だかんだごあいさつしてると奥からこられた奥さまの牧 美也子先生がおっしゃった「あなたここまで何で(交通手段)いらっしゃったの？」「タクシーです」「そのタクシーゼッタイ逃しちゃダメよ、つかまえときなさいよ！」この非常事態、こちらの帰宅手段に強くご配慮くださることにマジ感動でした。 確かに帰路の道路は車がどんどん渋滞し始め、道路沿いの歩道は電車が動かないため歩く 群衆でスシ詰め状態、ついに我がタクシーも全く動けなくなり、しかたがないので私も人 波に混じって何キロか歩きで帰ることに。 さてこの 6 月はじめ、“松本零士先生お別れの会”(東京大手町)があります。「時の交わるところでまた会おう」と言葉を残された先生に、ひとことお世話になった御 礼を申し上げてこようと考えているところです。23 年 5 月

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P127～

団　遊

家電芸人に負けないくらい「家電」が大好きな友人がいます。久しぶりに会うと、嬉々として最近導入した家電を説明してくれました。ちなみに彼は、奥さんと、幼稚園年中さん、年少さん、猫 1 匹の 5 人家族です。

まずは猫のお世話を自動でしてくれる「PETKIT」という家電。猫との暮らしは 7 年目になるそうですが、PETKIT は指定した時間に餌を設置し、糞尿の砂を取り換え処理し、ろ過した水を絶やすことなく補給してくれるそうです。

もうひとつは「Tapo」という室内カメラ。リビング、寝室など、あらゆるところに設置し、夫婦で決めたルールのもと運用しているそうです。24 時間録画されている映像は手元のスマホで確認ができます。Tapo のおかげで、PETKIT の作動状況もリアルタイムで確認することができます。



これらのおかげで、家族旅行や夫婦のお出かけが容易になったと喜んでいました。子どもたちを寝かしつけた後、「近所のバーに奥さんと二人で」なんてことを楽しんでいるそうです。

「けど年中さんになると、自由に動き回れる分、例え映像で状況が知れたとしても夜中に起きると不安でしょ」と尋ねると、「スマホから Tapo を通じてしゃべりかけられるので、すぐ帰るからリビングでアンパンマン見て待ってて。机にあるお団子、食べていいよ、とか伝えれば、全然泣かないしおとなしく待ってるよ」と言っていました。

どちらの家電も、高級品ではありません。誰でも買える値段です。すごいな。

団遊の脱線的経営言論
P32～

村本　邦子

コロナの緊急事態も一段落で、3 月には十年目に企画したまま延期になっていたハワイでのプロジェクトが実現し、懐かしい人たちと新たな出会い、また新たな人たちとの出会いがあった。

4 月には初めて済州島を訪れ、4.3 事件の公式行事に参加し、ここでも種々多様な方々と交流した。災厄は多くのものを奪っていくが、同時に、新しいものをもたらしてくれるというのもまた事実である。時間

経過とともに地域の記憶の形は変化し、出来事を共有しない世代が年々増えていく。こんなふうに人類の歴史は紡がれてきたのだろう。今、あちこちに伝承館と名づけられた施設ができている。伝承する主体は誰なのだろうと考えている。

周辺からの記憶 ―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P99～

國友　万裕

今年のクリスマスに洗礼を受ける計画を立てています。

キリスト教の勉強を始めたのは今から 5 年くらい前です。ちょうどその当時、ある牧師さんと親しくなって、その牧師の先生がなさっているツアーでアメリカにも行きました。大阪の伝道師さんがなさっている集会にも何度か行きました。

その後、コロナ禍になり、京都の同志社教会に通うようになりました。それから聖歌隊にも加えていただけるようになりました。洗礼は焦って受けることもないと言われていたのですが、もう 60 歳を前にして、そろそろ洗礼を受けようかという気持ちになってきました。

洗礼はあくまでもスタートであって、ゴールではないので、これで完全に自分のクリスチャンへの道が成就したわけではありませんが、スタート地点には立てるかと思います。洗礼は天国へのパスポートなのです。

別に仏教が悪いと言うのではありません。一時期は仏教の本もたくさん読んでいました。しかし、僕は子供の頃からアメリカ映画が好きで、アメリカ文学を勉強して、海外もアメリカしか行ったことがない身なので、自分のアイデンティティはアメリカという気持ちがあるのです。

まだ半年ぐらいあるのでどうなるかはわかりませんが、60歳になる前に洗礼を受けて、キリスト教の勉強を僕の終活にしようかと思っています。

男は痛い！
P74～

西川　友理

大和大学白鳳短期大学部で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

この記事を書いている時期は、毎年恒例、実習先確保の時期です。何回か前に男性保育士について記事を書きましたが、今年もまた、男子は苦戦しています。「うちは男の子の実習生を受け入れていないんです」という言葉をまだ普通に発する保育園・幼稚園があります。「うちは女性の先生しかいないから、トイレや着替えの場所がないのよ。だから、十分環境が整っていないと思うのよね…だから、あなたの為にも、ね…」と言われた学生。「優しい気持ちでおっしゃっているのかもしれないけど、これって、マイクロアグレッションじゃないの？」「どうしたら実習が出来るのか、一緒に考えてくれることは出来ないのかな？」と学生たち。

実習環境、保育環境を整えるため、これは私も声を上げ続けたい問題です。

福祉系対人援助職養成の現場から
P55～

坂口　伊都

コロナ騒動が落ち着いてきたので、88 歳の母の故郷に行くことになりました。母の生まれは、静岡県浜松市で、そこに母の妹がいます。私も新幹線に乗るのは久ぶりで、随分と勝手が変わっていそうだなぁと思っていました。

母にとっては、最寄りの電車に乗ることすら大イベントなので、新幹線に乗るとなったらもう大変です。私の行く気が母より低そうだから、行くのやめると言い出す始末。昔からなのですが、母子は違う人間という理解が低いようで、母と娘が同じでないと不満なようです。

次は、ひかりに乗るのに自由席で行くと言い出します。老人会で、春休みも終わったしすいているよと皆が言っているとか。うーん、その人達は最近、新幹線に乗ったことあるの？何故、ケチるのそこ？何とか予約席を取ることができました。

最寄りのJR駅で待ち合わせだったのですが、移動当日、お腹壊したから迎えにきてと電話が。無茶言うなよぉ。タクシー呼ぶのも嫌と言うので、夫にお願いして母を迎えに行ってもらいました。

ようやく浜松に着くと、10 年以上ぶりに会う叔母と従姉妹の顔。老婆 2 人は、「あの人は生きてるだ、死んでるだ」で盛り上がり、それを聞いているこっちも笑ってしまいます。母は、これが最後になるかもと言っていたのですが、次も行けると自信を持ったようです。はい、よく笑い、よく頑張りました。

立場が変わると何が見える
P92～

岡崎　正明



地元広島で G7 サミットが開催された。いろんなところに影響が出て、大きな会社は休業したり、学校が休みで子どもたちは喜んだり。全国各地の警察官が街にあふれ、「神在月の出雲国は、こんな感じでそこら中神様だらけなのかな～」と思ったり。普段は忘れ物やゴミ扱いの物が、突如“キケンな不審物”とされて度々騒がれる様子には、「やっぱり世界は唯心論で作られているなー」と感じたり。

私自身批判的な見方もしちゃうし、そういう精神が必要なのも分かるし、いろんな人の思惑や、大人の事情があって広島で開催となったのだろうけど。でも、それでも。この地で、こうしてたくさんの国のリーダーが来て慰霊碑に献花し、資料館を見学し、被爆者の話を聞いたことは、ポジティブに受け止めたい。身分の上下を問わず、初めてそれを経験した人は、必ずそれまでよりも核兵器や戦争に向き合うことが避けられないはずだから。

国際社会がきれいごとですまないのも分かるし、この国の周りの心配な状況に何か手を打ちたくなるのも分かるけど。ただ、「知らない相手が怖い」⇒「だから身を守るために攻撃的になる」⇒「相手が攻撃的になれば対抗したくなる」というループから逃れるには、どちらが正しいとか損か得かよりもまず、「相手を理解すること」「こちらを理解してもらうこと」。結局そんな単純なことの積み重ねしかないのだと思う。

役場の対人援助論
P80～

河岸　由里子

【コロナ後？】

友人のところに 6 回目のワクチンの案内が来たそうだ。正直、もういいと言いたい。ワクチンも良いが、インフルエンザのように、治療薬が一般の医院に十分供給されれば、何も怖がる必要もないだろう。しかし、実際には治療薬が一般に回っていないのに 5 類になってしまった。まだまだコロナ感染者数は増えたり減ったりしているし、中々安心安全とは言えない。ビニールやプラスティックの仕切りはなくなったが、マスクをつけることや消毒は続いている。

そのような中、コロナの影響で、あちこちが人手不足になっている。インバウンドの拡大、人の動きの活性化が進み、飛行機は満席、ホテルは以前の倍以上の値段になっている。一気に増えた人の移動に対し、航空業界も飲食店もホテル業も人手が足りない。人手を確保するために、アルバイトの時給が上がっているというニュースを見た。時給が 1000 円どころか、2000 円にも 3000 円にもなっているところがあるそうだ。空港も保安員が足りず、飛行機の運行に支障が出るからと政府が支援をすると言っていた。支援をすると言っても、金銭的な支援は出来ても、人員的な支援は難しいだろう。

一方アルバイトを探している学生側も、コロナ禍の影響で、オンライン授業が続き、生で人と関わることが苦手になってしまった学生も増えた。昨年あたりから大学の授業も対面式になったが、それでも、コロナ感染の不安を抱えている人は多い。飲食店など、人と接するアルバイトを敬遠する学生もいるという。需要と供給が合わない。コロナの影響でアルバイトが出来ず、大学を中退した学生もいた中で、皮肉なものだ。某ファストフード店のテーブルに置いてあったフリーターへのアルバイト募集のパネルには「給与は1分単位で支給」とあった。時給は平日920円だそうだが一分単位というのは初めて見た。あの手この手でアルバイトを集めようということだろう。

時は留まることなく、ただただ流れていく。世の中の変化に柔軟に適応して生きていくのは中々大変だ。コロナの影響はいつまで続くのやら。早く落ち着いた世の中になってほしいものだ。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ああ、相談業務
P60～
先人の知恵から
P134～

大谷　多加志

この夏に息子がホームステイすることになった。実は私自身はこれまで海外に出たことがなく、数年前にようやくオーストラリアに行く予定を立てた途端に、コロナ禍が訪れてキャンセルで流れてしまいました。その後、依然として行けないまま、この度息子に先を越されることになりました。

その対抗策、というわけではないのですが、これまで苦手意識のあった英語をもう少しどうにかしてやろうと、今年度は現在書きかけの論文を、最終的には英語論文にしてやろうと画策しています。少しずつ大人に近づいている息子から刺激をもらえることが、何となく嬉しいです。ホームステイも論文も、次号の頃には後日談が出せるのかなと思います。がんばります。

発達検査と対人援助学
P87～

馬渡　徳子

勝手に職場の事務所に「図書コーナー」を作った。自宅の狭い本棚は既に満杯。仕方なしに以前は小まめに手放していたが、やはり愛着ある本は置いておきたい。誰かに自慢するわけでも、無理に読んでもらうためでもない。言葉を共有し、差異を意識する。これもひとつの方法としてやってみました。孫が、「深いねえ」と、しみじみとつぶやいた。

2018 年度から始まった仏教伝道協会主催の「お寺の掲示板グランプリ」。

2022 年度のグランプリは、
『武器を捨てて　数珠を持とう』であった。作者はお寺のご住職の 15 歳の子どもさんであった。



この原稿を書いている時期に、隣の広島県で、G7 会議が開かれている。ウクライナの大統領も来日されている。

子どもたちにどんな未来を手渡すのか、私たち世代に課せられた課題から目を逸らさないようにしたい。

馬渡の眼
P125～

鶴谷　主一

先日は、執筆者トークライブにて 2 時間喋らせて頂きありがとうございました。現在、幼稚園、保育園、こども園などの幼児教育関連施設は、送迎バス置き去り事故や不適切保育、誤嚥事故、保育士の処遇の悪さなどの話題が満載で、ネガティブな話題の方が、世間の注目を浴びてニュース性があるのでしょうが、国や行政を動かし、改善に繋がるメリットがある反面、仕事としての保育者のイメージダウンという負の側面があり、ただでさえ保育士不足と言われているのに悩ましいところです。

トークライブでもヒントをいただいて有難かったのですが、保育現場の楽しいプラスになる情報を自分で発信していくことも一つ、大切なことだなあ、と感じさせられました。どんなことができるかまだ分かりませんが、何かしなきゃという気持ちだけは抱いているこの頃です。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P50～

水野　スウ

この季節は、濃淡さまざまのみどりが、目においしいごちそうです。あ、フキもワラビも山ウドもアスパラガスも絹さやももちろん、色とりどりみどりの、目にもおなかにもごちそう。

さて、マガジンでの連載 50 話となる今回は、「紅茶の時間」でひらいた小さな上映会のことを書きました。沖縄発ドキュメンタリーを何本も撮ってきた映画監督・三上智恵さんが、沖縄の現状をなんとか知ってほしいと 45 分動画にした DVD を、わが家のテレビで仲間たちと見たのです。その映像、実は来年完成予定の三上さんの映画、

「沖縄、再び戦場へ」(仮)の中の、生の素材。沖縄を戦場にさせない、の一心で三上さんが、この DVD を無料で貸し出します、どんなに小さな会でもいいので、スピンオフ作品見る会をしませんか、と全国に呼びかけたのでした。

この「沖縄、再び戦場へ」(仮)スピンオフ見る会は今、全国にひろがっていて、7 月 8 日には私の母校でも上映することになりました。主催は「平和を求める日本女子大有志の会」13:30～　会場は日本女子大学成瀬記念講堂。作品上映後は 14:40～16:00、大矢英代さんがオンラインでお話しくださいます。三上さんと一緒にドキュメンタリー映画「沖縄スパイ戦史」をつくり、今はニューヨーク州シラキュース大学でジャーナリズムを教えている、とてもすてきなひと。この日の大矢さんは、朝のヨーロッパから zoom でお話をされるそうです。参加は無料で、申し込みもいりません。ご都合ついたらこの機会にぜひ、ごらんになってくださいな。

きもちは言葉をさがしている
P65～

脇野　千恵

仕事の他に、趣味の時間を持つことが、何よりの楽しみだ。体を使うこととして、野菜を育てること。これは 30 年以上続いている。住まいの周りには水田が広がり、コメ作りの様子を感じることができる。空いた畑を借り野菜の世話をすることは、日々のストレス解消となる。たくさん収穫することを目的にしていないから気楽だ。鳥が食べにきてもモグラの餌になっても、それは自然の中での出来事、気にならないのが不思議だ。今年も夏野菜の苗を植えた。育てるプロセスを楽しみたいと思っている。

他に最近始めたことが、ピアノ。小学校教員をしていたころは弾けていた。我が家には、子どもたちが練習していたピアノがある。誰も弾かなくなったピアノがかわいそうになり、調律をした。生き返ったような音色に嬉しくなり、ピアノを習うことにした。先生も高齢者。

さぞ高齢の生徒は大変だろうなと思う。教えられる側の気持ちがよくわかる。この年になっての適度な緊張感もいいものだと思う。夢は街角でのピアノ演奏。

こころ日記「ぼちぼち」
P185～

中村　正

2023年度をもって永く勤務した立命館大学を定年となる。この3年ほど、退職準備期としてこつこつと動いている。難儀なのは研究室の整理だ。昨年 1 年かけてまずは3分の1くらい書籍を整理した。以前は大学図書館に寄付できたのだが今は受け付けていない。廃棄してよいものをまずは古本屋にだした。それなりの値段をつけてくれた。今年度も同じようにして整理するが、文系の研究者が本を手放すのには決断が必要だ。本当はブックカフェでも開きたいくらいだ。そして、まだ先は長いとすると何をして過ごすのかについてもあれこれ思案し、準備することになる。私の理想は、名刺に、「中村正」とのみ書くことだ。「私の仕事は中村正です。」という意味だ。これは敬愛する寺山修司から学んだこと。次の10年はこの名刺だけで過ごしたいと。社会活動や社会実装が好きで、あまり学者らしくないので同じようなことをしているとは思うが。

臨床社会学の方法
P22

篠原　ユキオ

9月で後期高齢者となるが毛髪の伸び方は衰えない。少し毛が細くなった気がするが毎月2回はカットする。夏場は特に髪の毛の伸びが気になって衝動的に切りたくなる。40 年近く散髪屋さんには行かず、自分でカットしている。市販の家庭用の電気バリカンを使って合わせ鏡でするのだが毎回ドンブリ鉢一杯ほどの毛の塊ができる。最近は白髪が目立つようになった。ヒゲの伸び方も同じでこれは頻繁に自分で剃刀やハサミで整える。



100 歳近くになるおじいさんの耳毛や眉毛や鼻毛が異常に伸びているのを見たりする事があるが、老いて来ると発毛をコントロールする神経の調節が効かなくなるからしい。

そんな事を思いながら毎日のように新聞やネットの画面に広がる発毛剤の広告にはうんざりしている。

HITOKOMART
P199～

山下　桂永子

新年度が始まり、バタバタとしているとあっという間に 2 か月が経ちました。仕事においての忙しさは毎年新記録を更新している気がします。忙しいというのは心を亡くすと書きますので、私は年々心を見失いがちなのかもしれません。

10 年以上前に、同じ職場の先輩が「あのね、仕事は減らそうとしたら絶対増えるから」と言っていました。その時はなんのことかよくわからなかったのですが、自分の仕事を減らそうと動きだすと確実に増えてしまうホラー現象は実感している今日この頃です。とはいえ、忙しい仕事を一人で抱え込んで苦しんでいるのかといえば、そうでもなくて、職場の方々と協力し合い、工夫とアイディアで支えあってどうにかこうにか乗り切っている結果、新しく取り組めることが増えてきているのかな、とも思います。そんな日々を書いてみました。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P135～

千葉　晃央

実家に帰るとスマホやパソコンのことを母にきかれる。今回、前のスマホを買い替えなくてはならなくなり、新しいギャラクシーに変えていた。SNSの移行ができていなくて、それをして！とのこと。まずは恒例「パスワード地獄」の始まり。格闘後、何とかミッションクリア。音楽を聴くのが好きな母は、ドンキにあるCDレスキューコーナーでよく買って聴いている。「そうか、だったら Spotify(スポティファイ)を母のスマホに入れてみよう！」とインストール。無料版でも十分使える。そして、歌詞も出るからカラオケにもなる！すると母は早速使いこなして、私にイントロドン！を仕掛けてくる。それでワイワイ楽しく盛り上がった。今回の帰省で、私は母にカラオケに行くことを誘ったが断られてしまった。「声が出ない！」というプロのような理由だった。次回は Spotify 効果でめっちゃ声が出て、歌え

ること間違いなし。

母子デートでは秋田の象潟に行き、過去に噴火、山体崩壊、隆起による陸地の拡大もあった地域にある蚶満寺（かんまんじ）とその周辺へ。大きな被害の一つは、江戸末期にあった。その被害に対する100 年後供養を明治時代にして、その時の供養碑がたくさんのお地蔵さんと共に祀られていた。その後、由利本荘市郷土資料館に立ち寄る。噴火被害に加えて、飢饉、凶作の歴史にも触れた。さらに雪国で暮らす知恵が詰まった民具の数々にも出会う。私にとって、母は専属解説者である。「これは使った！」「これは家にあった！」と当時の暮らしも交えて話してくれる。印象に残ったのは「下駄スケート」と「竹スキー」。そして秋田藩の隣、土崎藩の土崎港歴史伝承館、さらに秋田城跡歴史資料館、秋田大学鉱業博物館にも足を延ばした。

「日本最古の水洗トイレ」としてブラタモリでも紹介されたものが再現されていて、秋田城跡歴史資料館にはあった。実際に使おうとする人がいるようで、今使用できるトイレはここ！という掲示も横にあった。江戸時代まで紙は高価で、おしりを木のへら「クソベラ」で拭いていたというのは聞いたことがあった。この遺跡でも当時のクソベラが多数発見されている。クソベラは使い捨てのようで、まるで割りばしのようにクソベラが複数かごに入れてあってトイレの横に置かれていた。クソベラは、私は勝手に「使いまわすのかな？」と思っていた。西洋では使いまわすスポンジ状のものもあったと聞いていたので、おそらくそうだろうと勝手に思い込んでいた。木に文字を書く時代はおしりも木で拭き、紙に文字を書くと紙で拭く…。他にもクソベラの横に甕（かめ）に水を入れて、その上にひしゃくが置いてあった。1000 年以上前の暮らしの一端であるこの「おトイレ」をリアルに母と共にじわじわ感じて…母と大爆笑！！大陸を含む各地から人々が移住してきた秋田の歴史がより立体的に感じられました。そら、秋田美人もうなずける。次回も行くところを決めている。夏秋編もこうご期待！

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論
P17～

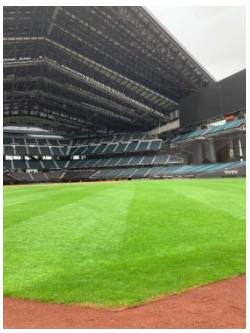
団　士郎

近年は「家族理解ワークショップ」と称することが多くなったものを、全国各地で継続開催するようになって四半世紀以上になった。この間ほぼ、自宅から業務場所に移動して、終了すると直ぐ帰路が習慣だった。翌月曜には仕事が詰まっていたからだ。

それがここ五年程で大学院、相談室の定例勤務から解放された。スケジュール表を完全に自分の意志で差配できるようになった。

そこでWSや講演の前日や終了後に、出先周辺を散策しようと思い立った。一月には浜松で砂丘や浜松まつりの展示館を除いた。四月には久しぶりのお伊勢参りをした。GW明けは上野の都立美術館と国立西洋美術館を訪れた。

そして先日は東広島市（北海道）に新しくできたエスコンフィールドの見学ツアーに参加した後、支笏湖からの水力発電所風景に驚いた。



この先も、可能なところではこんな風にしたいと思っている。いずれもたいした目的があるわけではなく、散歩に過ぎないが、「出来るあいだに･･･」なんて言わなきゃならない年齢であることは間違いないのだから。

晩年 D･A･N 通信❹
P41～

中島　弘美

コロナ緩和により、相談に来られる方の中にも、マスクなしでお話されることが少しずつ増えてきた。

私が講義を担当させていただいている〇大学では、この 3 年間すべて遠隔授業だった。が、この 4 月から対面授業ができるようになり、本当に久しぶりに学生さんと直接顔を合わせている。授業の中では、カウンセラー役、クライエント役のグループワークなども取り入れて、学生さん同士の交流も再開した。

最近、少しずつ暑くなってきた。そのため、学生さんたちに断りを入れて、授業中、私が話をする場面に限ってマスクをはずすことを伝えた。「飛沫が気になる人は、前の席は控えてくださいね」と。

すると、息苦しくなく、とっても話しやすい！

こちらの思いを、表情とともにみなさんに伝えることができるのといいなぁと願いながら、授業をしている。

カウンセリングの場面でも、マスクなしで話し合いができるといいなと思い、それぞれのご家族に対して、不安につながらないように、無理のない範囲で、かつタイミングを逃さないように、少しずつ呼びかけている。

カウンセリングのお作法
P38～

藤　信子

今年の春は、雨が多くて思うように散歩に行けなかった。雨が多いのとは関係ないかもしれないけれど、浅利が小さくて、なかなか思ったような料理が出来なかった。熊本産という偽装が出来なくなったからだろう、と家族は言うのだけれど、偽装できなくなったからと言って、浅利が小さくなったわけではないだろう。何か採れにくいことがあるのではないだろうか。八百屋さんでは、天候のせいで不作になったものや、いろんな作物の話を聞けるのだけれど、魚屋さんは、私が行くときはいつもお客さんが多くて、今年は浅利がなぜ小さいのか聞くことはできなかった。ここ数年、春先に鱚を見かけないので、それも聞きたいと思っているまま聞けていない。気候変動と関係があるのか知りたいのだけれど。

解放の心理学へ
P35～

竹中　尚文

長野県中野市でショッキングな事件が起きました。報道の中で、少し考えることがありました。犯人に精神鑑定がおこなわ

れるだろうという識者の声があり、それを当然の如く受け入れる社会があるようです。このような非人間的な行動の理由に精神疾患を疑うことが当然とする私たちの社会常識に疑問を持ちます。私たちは一年あまり前のウクライナでのロシア兵の行動に精神疾患を疑ったでしょうか。私たちの社会で理解できない行動に対して、精神鑑定を持ち出すのは精神疾患に対する偏見がありはしないでしょうか。

昨日のお参り先での話です。私のお参り先の数軒は精神疾患を患う一人暮らしです。この時もその 1 軒でした。訪れると彼は怯えていました。どうしたのかと尋ねると、数日前に近所で首のない猫の死骸が置かれていたそうです。そのことで彼は警察から 3 日続けて訪問を受けたそうです。そのうちの 1 日は警察署での聞き取りだったそうです。「〇日の〇時ごろ、何をしていたのか？」という聞き取りだったそうです。彼の病気の症状として、他人と話すことが苦手です。彼がストレスなく話すことができるのはほんの数人です。彼は人と話したくないので自分の顔が隠れるように髪の毛を伸ばした風貌です。「僕の風貌や近所の人たちとコミュニケーションをとらないので、あやしいといわれたのかもしれません」と彼はいいます。私は、彼がそのような行動をできる人間ではないと思っています。悲しい偏見です。

私は普通の僧侶としてお参り先で、いろんな人に出会います。精神疾患でその偏見を受けている人たちに出会います。LGBTQ の偏見に苦慮している人もいます。お参りをしていていろんな差別偏見を受けている人たちに出会います。そんな時、差別や偏見はしてはならないと強く思います。ところが、社会を俯瞰的に見るときに私たちは差別や偏見を簡単に持ってしまうことを認識しておかねばならないと思います。中野市の事件にたいする私たち社会の姿勢に表れていると思います。

ところで、欧米の識者で LGBTQ 差別の原因に宗教的背景を述べる人がいます。これはキリスト教の教義や宗教史だけの知識で話されているようです。宗教議論がキリスト教ベースで語られることの一因に、宗教議論が始まるとそのテーマから降りてしまう東アジア人の姿勢があるのでしょう。英語で議論ができる東アジア人が増えましたが、宗教議論になると何も語れない現状があります。中国韓国の仏教に対するアカデミックな研究はわずか数十年ですし、百数十年の日本の仏教研究に対しては一般的な日本知識人の忌避的な姿勢があります。この日本の傾向は、江戸時代に精神的封建制度を支えるために無宗教を強調したところから始まりました。近年の日本社会の保守的動向と共にそうした姿勢が強くなっています。

路上生活者の個人史
P72～

寺田　弘志

2月に亡くなられた大学時代の恩師佐々木雄二先生の本を参考にしつつ「自律訓練法とこりの改善」について書いてみました。

シュルツが自律訓練法を開発し、それが多くの人に認められてブラッシュアップされ、大いに世の中の役に立っていく流れを学びなおしました。

思えば大学時代、自分は周りの環境に不満ばかり言っていました。

偉大な先生のもとにいて、幸せな環境にあったのに、学ぶチャンスを無駄にしてしまいました。ほんとに馬鹿だな、俺。涙。

接骨院に心理学を入れてみた
P155～

見野　大介

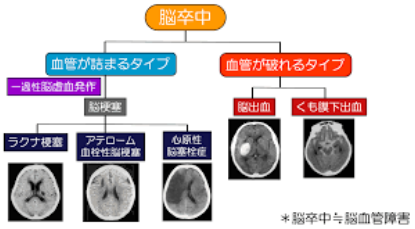
1年前の5月にマガジンの原稿を作成していた時は、引っ越しによりあと1週間で退去しないといけなかった。GWの信楽の陶器祭が終わった直後から引っ越し準備を始め、合間に窯を焚き続けて注文の納品も済ませ、気付いたらあと1週間で退去という状況。絶対間に合わないと思いながら原稿を書いていたのが今思うと面白い。

結局、退去立ち会い当日の待ち合わせ5分前に部屋の掃除が終わって、なんとか間に合った。こうして今、新居で平和にこの原稿を作成できていることに安堵しつつ、もう二度と引っ越しはしたくないと強く思ったという、どうでもいい話。

ハチドリの器
P4

鵜野　祐介

「病気入院のため、1回中断しましたが、今回なんとか復帰できてよかったです。この間の経緯を書きとめておきましたので、ぜひお読みください」



うたとかたりの対人援助学
P143～

山口　洋典

マスクをつけない生活が徐々に日常となってきました。一方で 4 月に咳喘息という診断を受けることになりました。しばらく咳が止まらないのが気がかりで内科にかかったところ、気管支炎の一歩手前、という見立てでした。長らくマスクで守られてきたためかもしれません。

そうした中、4 月から立命館大学サービスラーニングセンター長を務めることになりました。サービスラーニングセンターは、2004 年に産業社会学部によって設立されたボランティアセンターを発展・改組したものであるため、一部で例外はあるものの、これまでは慣例で産業社会学部の教員から選出されることが慣例となってきました。少なくとも、学部所属ではなく全学の教学を企画・設計・評価等を担う機構所属の教員がセンター長となるのは初めてのため、新たな歴史の一幕に身を置いた感覚です。そのプレッシャーに耐えかねて、センターの息が続かなくなるようなことは避けねばならぬ、と、日々、深呼吸を重ねています。

PBLの風と土
P149～

小林　茂

前号に引き続き、どうも大学教務の仕事に追われ、またまた共時的事件が集中して執筆に追われてしまった。具体的な事情は、また落ち着いたら話題にしたいと思うが、思索するという事柄が遠のいて、不全感というか、モヤモヤとしています。しかしめげずに次号に向けて励みたいと願っています。

対人支援点描
P90～

古川　秀明

小中高生の自殺が増えています。SC として学校現場にいるので、その実情をリアルに体験しています。個別の面接だけではなく、学校全体のアセスメント能力と、チーム学校の新しい在り方を模索する時がきていると思います。しばらくこのテーマで書かせていただきます。

講演会＆ライブな日々
P285～

荒木　晃子

近年、国内の多くの地方自治体毎にスタートしたパートナーシップ制度が、2023年10 月島根県で導入されることが決まり、喜んでいる。市町村単位での導入が多い中、県単位の取り組みであることもその理由の一つにある。かつて、県内初の生殖医療専門医療機関（内田クリニック）の院長から、開業に際し苦労した数々のエピソードを聞いたのは約16 年前。以降、毎月の不妊心理カウンセリング業務を継続するなか、再び新たな時代の目撃者となるかもしれないと期待している。



伝統を重んじ、出雲大社を有する神道の国、島根。小泉八雲が愛した日本一夕日が美しいといわれる宍道湖には、嫁島（よめじま）という、わが子を失った母にまつわる悲しい伝説が残る小島が浮かぶ。其の地はのどかで海の幸山の幸に恵まれ、そこに暮らす人々はシャイで心優しく、あたたかい反面、保守的で、当初、私のような外部者にとってはどこか閉塞感を感じることさえあった。

今では第二の故郷と称する島根に、この秋からパートナーシップが導入され、11月25 日には第1 回島根レインボーパレードが開催されることとなった。県警、県庁、国立島根大学などからのエールを受けた県内初の一大イベントとなる。今筆者のこころは、その準備のスタート地点に、県下で暮らす当事者と共に在る。パレード当日は、島根の大地を当事者と支援者、そして同志と共に踏みしめているだろう。

それを必要とする人たちに、これまでの経験と研鑽を活かし、島根でつながった多くの仲間と共に私たちにできること、私たちだからできる援助を提供したいと願っている。以上、待ちに待った援助実践に注力するため、今回は休載とさせていただくことにする。

生殖医療と家族援助
休載

工藤　芳幸

駅で倒れて救護されるという経験しました。意識を無くしたわけではなく、平衡感覚を失って立てなくなり、大阪駅のホームで座り込むことに。実は以前からこういうことがあったのですが、駅員さんに車椅子で救護されたのは初めての経験でした。どこかの親切な会社員と思しき男性が「大丈夫？駅員さん呼ぼうか？」「あんまり無理しちゃダメだよ」と声をかけてくれました。徐々に人にお世話をされるようなことが増えてくるのかもしれないな、という予感がしつつも役割が増える一方の年齢でもあり、体には気をつけないと…と思う今日この頃です（そんなこともあり、今回も休載いたします）。

みちくさ言語療法
休載

小池　英梨子

ねこから目線。のフランチャイズ１号店が６月からなんと沖縄にできることになりました。その開業前支援として４泊５日沖縄入りし、現地のスタッフと密に打ち合わせや研修を実施しました。２人で気合を入れすぎたのか、研修翌日に私は関西で、沖縄スタッフの伊波さんは沖縄でそれぞれ熱を出して寝込みました（笑）。久しぶりの風邪にすっかりやられ（関西寒い・・）、いつもギリギリにマガジンを書き始めて完成させる私は、今回書ききることができませんでした・・。書きたいことは山ほどあるはずなのですが、今回はごめんなさん、休載です。

そうだ、猫に聞いてみよう
休載

中村　周平

度々休載で申し訳ありません。書きたいことがたくさんあるのですが、体調があまりよくなくフラストレーションがたまる時期でもあります。次回は皆さんに原稿をお届けしたいです。

ノーサイド
休載

付け加えることができる価値は何か？

～82000 キロ離れてみた経験から～

2

千葉　晃央

ベルトコンベア方式で焼く

到着した翌朝 7 時に朝食会場に行く。入り口で料金プラスの目玉焼きベーコンセットにするか？と聞かれる。お断りをしてセルフ方式の朝食。自動パンケーキマシン、パン焼きマシンが初見だった。パンケーキマシンはベルトコンベア前方で生地を絞り出し、コンベアベルトとその上部が熱くなっていて、流れながら焼けていき、最後にペロンと出てくる。そのため、出口の下に皿を置き、待つことになる。しかし、翌朝にいくとスタートボタンを押しても始まらない。その様子を見ていた別の宿泊客が私に声をかけてくれた。「今日は機嫌が悪いみたいだね…」という感じのことだった。お礼を言って、笑顔を返す。

パン焼きマシンもベルトコンベアである。投入口から食パンを一切れ入れると金網製ベルトの上を通って両面焼いた状態で出口から出てくる。合理的なのか、非合理的なのかわからない。けれどもエンタメ性はある。



じわじわ動いて焼けて、コロン！と出てくるのである。その待ち時間も機械の前に立っていて何とも言えない…。しかし、メンテナンスはどう考えても大変そう。パンケーキの機械のように実際不機嫌になっていた。部品点数も多いだろうなぁ。

同じ、近いルーツのワーカーが担当する

一か所目の福祉機関へ向かう。ＮＰＯでフォスタリング業務、障害福祉業務など幅広く自治体から委託を受けて運営されていた。前回も述べたように、セッションの始めには先住民への敬意を表す。

「今いるこの場所は古くからの伝統的な土地に私たちは今立っている。過去、現在、未来にわたる長老の方々に敬意を表します。この土地の先住民の暮らしがあることをあらためて確認します。現在こうして私たちがその土地で暮らしがあることに感謝を申し上げます。そしてアボリジニの若者の方々へも敬意を表します。オーストラリア固有の植物を育て、そこから食べ物を採取し、伝統的儀式を有します。それらについて変えがたい価値があることを認めます…」概ねこのような文意であったように思う。以上を宣言し行われた。こうしたセッションすべての取り組みにおいて行うことを国は先住民との和解のための行動計画で推奨している。目的は、国が犯した間違いを改善していくことであることは言うまでもない。

先住民の方も、もちろん支援者の一員となって働いている。特にそのルーツの文化や風習を大切にできるよう、同じく先住民の方に対する支援を中心に従事している。また、その文化を大切にし、継承する目的のために配置されていた。ルーツやアイデンティティの幸福を追求する役目といえる。

ボートピープルへのサポート

オーストラリアの福祉において、①先住民の方々への支援、②亡命者への支援、③移民への支援が重要であることがこの研修から感じられた。これらは日本では福祉対象者として大きく取り上げられていない状況がある。潜在化されているともいえるし、先延ばしにされているとも言える。

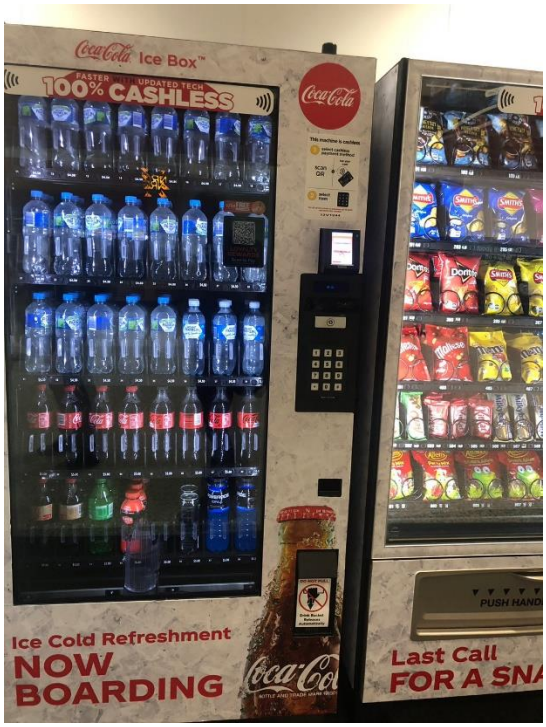


先住民のおおよそ 4 割が要保護対象ともいわれている。そのギャップを埋める対策が急務であり、そのコミュニティ事態をサポートもしている状況がある。



オーストラリアにはクリスマス島というところがある。そこはオーストラリアとはいえ隣国マレーシアのすぐ南である。マレーシアは人口が世界 4 位。政情不安も抱えている。つまり、そこからのボートピープルがオーストラリアに来るのである。その課題への対処は、オーストラリアにとって継続的な問題として存在している。その対処も時の政府によって、様々工夫がなされ、変遷があった。時には、オーストラリア国外で対処した取り組みもあった。到着する人々へのスクーリング機能を隣国に依頼し、その見返りに軍事的サポートをするという契約をしたこともあった。こうした隣国との協力関係もあるのかと新鮮に思う。

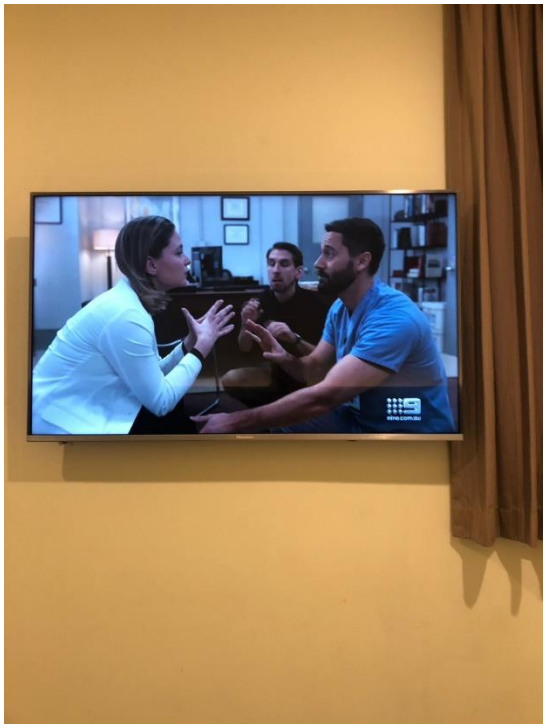
オーストラリアはイギリスの植民地としてスタートした。その国の成り立ちから考えても移民の国であり、移民への支援は相当歴史があり、支援の経過がある。

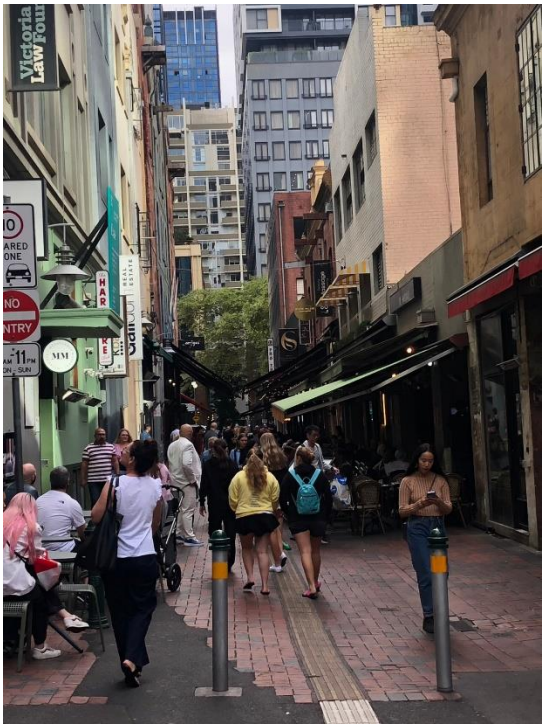


福祉職の給与アップではなく、税の免除

現地のワーカーからの話で、かなりの政府機関を外部に委託しているとの話があった。オーストラリアでは、ＮＰＯで働く人が人口の 15％ぐらいになっているそうである。そのため、ＮＰＯで働く職員の待遇も改善せざるを得ない状況があるとのことであった。また、そうした職務の人への給料アップだけではなく、年収がいくらまでの人は税の免除をしているとのことである。こうした免除における福祉の実現はイギリスの社会学者ティトマスが「財政福祉」として、税の減免も福祉政策と整理したことの実践と言えるだろう。福祉を確保するには、福祉職者を確保する必要があるのは当然である。

物価は高い。人数が多いので、フードコートでの食事が合理的ということになり利用することがあった。そこはカジノの施設のフードコート。入り口ではセキュリティが立っており、海外渡航者にはパスポート本体の提示を求めてくる場面もあった。そこだけは、唯一現金での支払いの選択肢が常備されていた。インドカレーをいただいたが 32 オーストラリア・ドル。2400 円ぐらいか？その施設の周辺は、ヤラ川に沿って整備もされ、スタイリッシュでデザインされたビルばかりだった。未来的超高層ビルも、近代アートな橋もあった。





て横で通訳をする。独特な演出でありながら、センスを感じた。

対人援助とテレビ番組の重なり

海外で動画サイトを観ると、広告が海外のものになる。印象深い広告も複数あった。ネット環境は初心者におすすめと教えていただいた「イモトの Wi―Ｆｉ」。ホームページで申し込み、出発前に自宅に配送。それを持参し、各所で活躍した。福祉機関での学びを終え、部屋に戻り、仕事もしながら、テレビもみた。

あるドラマでは、聴覚障害の主人公女性医師が登場。その医師が会話をするシーンになるとどこからともなく手話通訳が現れて、相手役の人の横に行き、手話通訳を行う演出がされていた。雑踏の中から出てきて、通訳をするときもあるし、後ろの同僚の中に紛れていて、会話が始まると立ち上がっ

ＬＧＢＴＱをテーマにしたドラマも、ドキュメンタリーも複数放映されていた。同性同士のキスシーンのあるＣＭも流れていた。また、出産の奇跡も伝えるドキュメンタリーも印象に残った。登場するのは日本で言えば「新婚さんいらっしゃい！」のようなカップル。タイミングが新婚！ではなく、初産後という設定。番組最後に「来週は…」と次週の予告があり毎週放映であった。

感じたことは、子育てのしやすい社会制度を整備して、多様性に基づいた自分らしさを自由に表現していい！出産という選択肢の魅力も日々伝えているということである。先進国の宿命である「少子高齢化」に対して、出産も、自分らしい人生という選択も欠落しないよう試みている印象がある。こうしたさまざまな可能性も自由も喚起する仕組みに出会うことになったように思う。

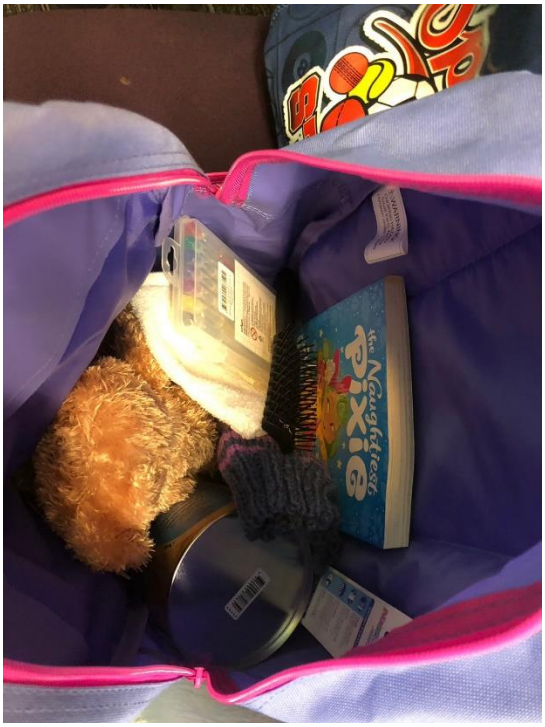
行き交う人もタトゥーも、ピアスも結構な割合の人が選択している。特に若者は 8 割ぐらいはチョイスをしていた。

家庭裁判所より特化した、子ども裁判所



チルドレンコート・オブ・ビクトリアは、子ども司法裁判所といったところか。日本の「家庭」という大きな括りよりも、細かく絞っている。司法手続きの遅延で、子どもの福祉が失われないよう特化していると聞く。その裁判所で働く裁判官も、その他の専門職も児童福祉領域の特別なトレーニングを受けて業務にあたることを徹底している。

支援スタート時に児童に送るセットも興味深い。リュックの中にファイルやノート、筆記用具、色鉛筆、ぬいぐるみも主に男児向け、女児向けに分けて想定されてセットされ送られていた。スターウォーズなどのキャラクターのグッズも多く見られた。(続く)





臨床社会学の方法

(41) DV 防止システムの構築–地域における暴力抑止の体系化

中村 正

1. 暴力をめぐる国会や社会の動向

今回の内容は、暴力の加害者対策の話である。2023 年春の国会で審議されている案件に筆者の関心領域に関わる課題が 2 件ある。DV 防止法（配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律）の改正と刑法の性犯罪規定の改正である。

DV 防止法は衆参両院で可決され、2024 年 4 月 1 日施行となった。審議の過程で、衆院では 14 項目の、参院では 12 項目の附帯決議がつけられた。課題が多いことを意味する。

国会の附帯決議とは、その法律の運用や将来の立法措置により、さらに改善が必要なことについて希望や意見を表明するものである。法的拘束力は有しない。しかし立法府としての意思が示されていることから政府はこれを尊重することが求められる。附帯決議の内容は委員会での審議を踏まえたものとなるため、原則として審議中に議論されなかった事項に関しては決議されることはない。このことから、附帯決議は政治家の関心やその背景にある世論の動向がわかる。

もう一つは刑法の性犯罪規定の改正提案である。2017 年に強姦罪が強制性行等罪に改められ、男性も被害者として対象になったこと等、110 年ぶりの刑法の性犯罪規定の改正があった。さらに今回の改正では、強制性交等罪（強制わいせつ罪）が、不同意性交等罪（不同意わいせつ罪）に改称される。2017 年の改正で強姦罪が強制性交等罪となったが、今回、「同意のない性交は処罰対象」であるとするさらなる改正が決定された。

これは 2017 年改正の際、積み残した課題があったことによる。内容は、強制性交等罪が不同意性交等罪へと改められるほか、性交同意年齢が 13 歳から 16 歳へと引き上げられるなどがある。「不同意性交罪」への変更では、被害者が「同意しない意思」を表わすことが難しい場合を具体的に示すほか、時効は今より 5 年延長される。

また、性行為への同意を判断できるとみなす年齢を、現在の 13 歳以上から 16 歳以上に引き上げる。同意の有無にかかわらず、16 歳未満との性行為は処罰される。しかし若者どうしの恋愛などは除外するため、被害者が、13 歳から 15 歳の場合の処罰の対象は「5 歳以上」年上の相手となっている。

また、被害者に不利な要件の改正（暴行・脅迫要件の改正）も含まれている。

この性加害・性犯罪問題は、ときあたかも未成年男子への性加害を繰り返したジャニーズ問題で揺れていることもあり、若者の関心は高く、正確な理解と情報を伝えたく、講義内容を一部変更して「性加害・性犯罪の社会病理学」として追記をしたくらいだ。この課題も詳しく紹介する機会をもつが、今回のマガジンでは、前者の DV 防止法改正について紹介・検討したい。内閣府で開催された第 122 回「女性に対する暴力に関する専門調査会」(2023 年 5 月 23 日) において、委員でもあることから意見を述べる機会があったので、この点について詳しく書いておきたい。

2．2023 年国会での DV 防止法改正論議

今次の DV 防止法改正は一定の評価を行うことができる内容となっている。改正内容は次のとおりだ。

まずは①保護命令制度の改善である。保護命令とは、被害者への接近禁止命令（身辺へのつきまといや住居・勤務先等の付近のはいかいの禁止)、同居する未成年の子／親族等への接近禁止命令、被害者への電話等禁止命令（無言電話や緊急時以外の連続する電話・FAX・メール送信等の禁止)、退去等命令（被害者と共に住む住居からの退去、住居付近のはいかいの禁止）である。今次改正は接近禁止命令の発令要件を拡大した。「更なる身体に対する暴力又は生命・身体・自由等に対する脅迫により心身に重大な危害を受けるおそれが大きいとき」に拡大（現行は「更なる身体に対する暴力により身体に重大な危害を受けるおそれが大きいとき」) したのである。「心身」という表現になり、身体的暴力だけではなく精神的暴力も対象になる。

さらに、接近禁止命令等の期間を 6 か月間から 1 年間に伸長、保護命令違反の厳罰化（1 年以下の懲役 100 万円以下の罰金を 2 年以下の懲役／200 万円以下の罰金）となった。

そして、「協議会の法定化」として「関係機関等から構成される配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する協議会を法定化」した。子ども虐待のために設置されている要保護児童地域対策協議会（要対協）と同じような体制をとることを義務づけた。

しかしこの改正は、被害の現実や日本の家族の実態にフィットしているのだろうかと問うこともしてきた。たとえば、保護命令の発令数が一貫して減少している。逆に、相談件数は増えて続けている。その内容は心理的暴力が断然多い。また、相談する相手は友人・家族が多い。さらに、暴力の後、別れなかった男女の方が多く、その理由は、「子どものことを考えて」が第一位であった。こうした被害者の行動実態に即して、被害者救済と加害者対策を組むことになる。

DV の現在について、どんな事態なのかをまとめると、①在宅（逃げられない・逃げたくない)、②精神的暴力が多い、③子どもがいる（虐待防止法との関連づけ)、④面前 DV、⑤相談しない・できない・したくない（件数多い)、⑥加害者対応なし、⑦保護命令発出数減少、⑧男性（青少年）の被害対応の必要性（男性間暴力も含む）であるとなる。これが DV 問題の現在といえる。

こうした事態において、制度は、配偶者暴力相談センターへの被害相談、保護命令の発令、シェルターや保護施設への避難とい

う過程を想定している。これは「理想とする被害者行動」である。あくまでもこれは最終的な防止網である。もちろん、積極的に脱暴力にむかう介入と支援としての加害者対策は公的に存在していない。被害者だけが可視化されている。

3．加害行為と加害者への対策の視点

そこで、加害者対策、広く脱暴力のための体系的な指針を構築し、そのなかに加害者プログラムなどの実施を組み込んだ公衆衛生的な理念の構築がまずは課題となる。これをゼロ次防止・一次防止・二次防止・三次防止の体系化として考えて提案した（図１）。

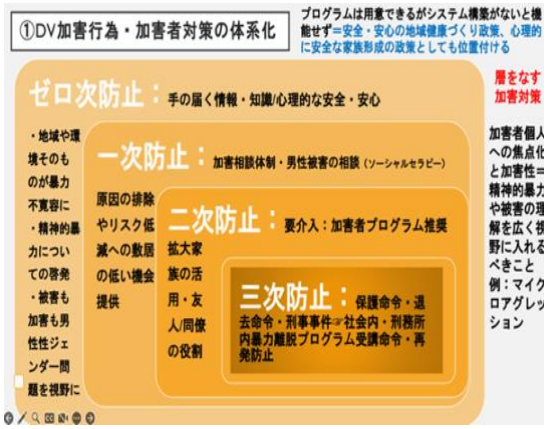


図１　加害行為・加害者対策の体系化モデル

なかでも精神的暴力を保護命令の対象にしたということは、かなり広い範囲のコントロール行動が対象になることを意味する。DV 加害行為がさらに広く捕捉されていくことになる。心身を傷つける行動なので精神的な暴力としてのコントロール行動それ自体は保護命令の対象とはならないが暴力連続体論からすれば防止すべき対象となる。とりわけ地域社会という環境への意識啓発や市民社会の良識ある隣人として暴力を見聞きした場合の態度が市民に問われることになる。友人・知人、家族、同僚、隣人としての暴力への態度も社会問題化していく際には重要となる。一般的な社会啓発ではなく、多層的な対象設定をすべきだろう。

そうすると、ゼロ次防止の体系が要請される。そこに続いて第一防止として男性相談体制の構築がどうしても必要となる。男性の悩み相談のメインのテーマの一つに加害相談を位置付けるべきである。主なテーマは、男性相談体制整備を軸として暴力から離脱するシステムを構築することである。

背景にあることは、加害者更生相談も含む男性相談は多様な主訴を含んでいる点である。沈黙させられがちな男性被害者の背後にあるジェンダー作用や家族システムが視野に入る。また、自分も被害者だという加害者も含む男性相談となる。被害が加害に展開していく過程に男性性ジェンダー作用があり、その悪循環を断つ役割もある。男なら暴力に耐えろという男性性ジェンダー作用である。愛の鞭というわけだ。

この点を考慮すると、男性問題相談はこれまでの被害者相談の理論だけでは通用しない面があるので、独自な暴力発現の「機微と機制」を踏まえた研修と実践が必要となる。

そして、加害者の更生と被害者支援を地域社会において実現させるには、要保護児童対策地域協議会と DV 対策地域協議会の連携は当然のこととして、それ以外にも、現行の男性相談体制の機能再編、加害者プログラムに関る組織や団体との連携、ソーシャルワークをとおした多機関連携の実現、オンラインも活用した加害者への脱暴力の

伴走などの組織行動を可能にするシステム構築が必要である。

そして加害者プログラムが単体で脱暴力を可能にするわけではないことの理解も大切となる。問題解決の手段、支配とコントロールの手段としての暴力をゼロにする、安全・安心の地域社会形成の一環として暴力対策を練る必要がある。

４．精神的暴力と加害行為・加害者対策

「モラルハラスメント」という言葉で精神的暴力を自覚する男性は多くなってきた。しかし、被害性や被害者理解は弱い。さらに被害者や家族全体の心理的健康や安全に配慮すること、自らの日常行動への落とし込みはできていない。暴力の定義を広げたので、精神的暴力からの離脱にはさらに時間がかかるし、ひとりではできない課題となる。特に、「ケアレスマン（セルフケアでさえも十分ではない)」とも言われる男性は、心身への暴力の傷について理解する概念・思考が育まれていないこと、さらに保護命令以前の状態であることも多く、また、同居継続や、別居しながら子育てに関与する男性が多いこともあり、地域社会での加害者プログラム実施には人材と財政とシステム構築が必要不可欠である。

虐待であれ DV であれ、グループワークに参加している男性の経験からすると精神的暴力は子どもにも悪影響となることの啓発は更生への動機づけとなる。虐待と DV のからんだ事案において脱暴力へのケースワークが機能するようなシステム作りにまず着手すべき点である。暴力の連鎖の切断にもなる。

精神的暴力の理解においては、単に身体的暴力だけではないことというだけではなく、次のような諸点を踏まえて把握すべきだと考える。つまり精神的心理的暴力と身体的暴力の交差の理解である。

その際に、①暴力の文化があること（体罰など)、②何を精神的暴力とするかについての概念や文脈が必要で、それは認識的（認知的）不正義の克服となるべきこと、③関係コントロール型暴力（地位や関係性の利用）という把握を基礎にすべきことが焦点となる。

地位や関係性に基づくコントロール型暴力という点では、加害と被害の二分法ではなくてグラデーションがあることを理解する。そして関係性を基礎単位にして介入と支援のシステムを構築することになる。

また、ライフステージの諸相において暴力はある。親密な関係性では葛藤も大きく、暴力が誘発されやすい。その加害者個人に焦点を当てることは第三次防止となるが、加害行為が発現する場所である親密な関係性を次のように切り出していくアプローチとなる。一方で、臨床性や相談の組み立ては個人である。幼少期・学童期・思春期・青年期・脱青年期・前成人期・中期成人期・後期成人期・前期高齢期・後期高齢期などの分類は伝統的なライフサイクル上の課題に即応する個人の発達段階であり、そこに暴力がある場合は年齢や発達の視点を加味することになる。

他方、虐待や DV は関係性を視野に入れる。たとえば、初期親子関係期、中期親子関係期、学齢期友人関係、思春期・青年期友人関係、定年前後家族関係期、離別と再統合期などである。こうした相互作用の場とし

ての関係性を視野にいれた相談、介入そして支援となる。関係性と相互作用が基本にあり、諸個人の行動が構築される。そして、この関係性と相互作用において男性性ジェンダーは大きな機能をもつので、その男性性ジェンダーに起因する暴力をはじめとした何らかの不全について、関係性に分け入っていく。第１次防止の核にあるのはこうした男性性ジェンダーに由来する困りごとに対応する男性相談の機会提供である。特に精神的暴力を振るい悩む男性は数多く、相談の機会を開くと来談する。

５．衆議院附帯決議への加害者対策からの意見

両院附帯決議のそれぞれに以下のような見地を提示しつつ、詳細に説明する資料を提出した。以下、衆議院の附帯決議に即して加害対応の見地からのコメントを紹介しておく。下線を付した部分が附帯決議の各項目であり、その後にコメントを記している。

１）　接近禁止命令の発令要件に精神的暴力による危害等を含める改正は、加害者が自己への従属を強いるために生命・身体・自由等に対する脅迫を用いることに着目したものであることを踏まえ、発令要件の対象となる精神的暴力等が限定されることのないよう、その趣旨を周知徹底し、運用に万全を期すこと。

精神的暴力を加害者プログラムの対象としてどのように組み込むべきなのかについて検討することになる。わかりにくい精神的暴力もある。とくに保護命令にまでいたらない段階での暴力が多い。非対称な関係性や地位を利用した暴力の特性について、例えば、イギリスの Coercive Control（孤立させる、辱める、罵る、時間を統制するなど）論での DV 定義において例示されているような具体例をもとに、制限的に、狭く定義しないことが重要である。

２）　接近禁止命令の発令要件に精神的暴力による危害等を含めることとした一方、退去等命令の発令要件には含めないことにより、精神的暴力等が身体的暴力に比べて重大な被害をもたらさないものであるという誤解を与えることのないよう、その正確な趣旨の周知を徹底すること。併せて、退去等命令の発令要件について、精神的暴力等へ対象を拡大することを含めた見直しを検討すること。

マインドコントロール、マイクロアグレッション、グルーミング、ガスライティング、ストックホルムシンドローム、モラルハラスメントなどとして精神的暴力を説明する概念が豊富になっている。身体的暴力を正当化する機能、被害者非難、無価値化も含んでおり、危険な概念として作用するおそれもあるので、適切な意味理解のために社会啓発をすべきである。家庭内における心理的安全をとおした健康の確保という意味もあり、アタッチメントの歪み、多様な境界侵犯も含めて生起する。精神的心理的コントロールについて、相談員や警察への研修課題への反映や事例にもとづく社会啓発を繰り返していくことになる。子どもの人間観形成にも否定的に影響する。

３）　被害者本人による保護命令の申立てが困難な場合についての必要な支援を検討すること。

異性カップルの男性が被害者となる場合の困難もある。同性カップルの場合の被害

男性もいる。男性被害者の場合、保護命令申請まで至ることは至難であるし、そもそも相談に至らないことが多い。生きづらさを対象にした男性相談体制はあるが、さらに焦点を定めた相談体制の構築が必要である。これは男性の性被害相談、パワーハラスメント被害相談、体罰を受けていることの相談など、何らかの被暴力相談の必要性とも通底する課題である。

また、男性性ジェンダー作用が援助要請を困難にする。女性被害者をもとにして蓄積されてきた相談理論では通用しない面もあり、事例をもとにした調査研究が必要である。当面、暴力被害についての男性相談体制を構築すべきである。夜間相談、オンライン相談も効果がある。

4） 保護命令の申立てから発令までの平均審理期間は約十二日となっており、その期間の長さから被害者が保護命令の申立てをちゅうちょすることのないよう、被害者の保護を最優先にした必要な対応を講ずること。

さしあたり別居を選択しながら関係を維持し（離婚を選択せず)、加害者プログラムに通う男性がかなり存在している。プログラム実施者は、被害者の安全を確保する努力を加害者に要請しながらプログラムを運営することになる。冒頭に紹介したような保護命令の申し立てのちゅうちょの背景は複雑である。発出までの時間短縮とともに、保護命令期間中はもとより、発出前後における被害者の安全確保ための制度としても加害者プログラム実施が必要となる。

5） 被害者が配偶者からの暴力（ＤＶ）を受けた場合に、加害者から逃げることを前提としていることが、ＤＶの被害を更に深刻化・長期化させている場合があることに鑑み、被害者とその子が引き続き同じ住居に居住できるよう必要な対応を検討すること。

加害者が自ら住居を移すプログラム参加者が多い。たとえば、加害男性が実家で生活をする、マンスリールームで暮らすなどの選択が多い。さらにその間、加害男性自らの拡大家族が活用されていることもある。拡大家族による暴力抑制は、家父長制による抑止という面もあるが、短期的には奏功してする。子どもがいる場合、直接の虐待がなくとも悪影響はあるので、加害男性が家を出る機能が選択される事案が多い。加害者の拡大家族の活用による暴力抑制について、子ども虐待と重なる場合は児童相談所の指導という事案もある。

6） 保護命令について同性カップルも対象となった例がある旨を周知徹底すること。併せて、通報の努力義務を含め、同性カップル間の暴力への対応にも遺漏なきを期すこと。

男性の同性カップルが暴力加害を主訴に相談にくることがある。彼は DV 加害男性問題相談の枠のなかでたどり着く。男性性ジェンダー力動の把握が必要なので、加害者相談員の研修課題にしている。公的な配偶者暴力相談においては男女間暴力を前提にした被害者支援と加害者更生の枠になっていることが主流である。LGBTQ の当事者団体と連携しつつ男性相談は被害と加害の双方に対応することも必要だろう。

7） DV の防止に資するため、DV を受けている者を発見した者がその旨を通報する努力義務につ

いて十分に周知すること。

暴力に不寛容になる市民社会の意識と行動を高め、通報を可能にすることが前提である。特に多くの家庭で散見される精神的暴力は日常的だともいえ、それを軽視せずに、かつ的確に見極める力のある地域社会にするには、ハラスメント、体罰、いじめなどあらゆる暴力に敏感であるべきだ。精神的暴力が日常に存在している場合、暴力離脱について、友人・同僚・隣人としての役割が大きくなる。良識ある友人として適切にアドバイスできるように、特に精神的心理的暴力についても理解を促し、相談制度につなげていくことのできる力を身につける社会啓発を学校教育、家庭教育、社会教育のあらゆる場面ですべきだろう。

8） 被害者の権利擁護及び被害者の子に対する支援について更なる取組の強化に努めること。

9） 被害者からの行政機関への苦情に関する適切な対応について周知徹底を図ること。

10） 保護命令の申し立てに関する手続きの IT 化に向け、被害者の負担軽減を含め必要な対応を推進すること。

＊これらの諸項目には加害者対策としてのコメントが間に合っていない。

11） DV の被害を受けた女性の約四割、男性の約六割は誰にも相談しなかったとの調査結果も踏まえ、被害者が女性の場合のみならず、被害者が男性の場合や同性カップル間の暴力も含め、DV 被害者が相談しやすい体制を整備すること。

現在、男性性ジェンダー問題の視点を踏まえた男性相談体制を実施している自治体がある。男性性ジェンダー作用は男性が援助要請行動をしにくいように作用することがあり、男性の被害相談は敷居が高い。被害体験（被虐体験）は不可視化され、潜在化され、男らしさを強調する克己の契機としても意味づけられることも多く、さらに加害へと転じていく回路もあることの理解が不可欠である。いきなり専門的な部署へと相談はしないので、まずは身近に相談できる友人・同僚・隣人の暴力への理解を促進することとする。相談者の心理的安全を確保する研修・啓発を実施する。男性相談体制の機能強化と再編が求められる。アウトリーチやコミュニティ・企業・組織に働きかけるソーシャルセラピー、ソーシャルワーク的な相談を強化すべきである。

12） 被害者の相談対応や安全確保のための支援、生活再建や心身の回復に向けた支援等を担う婦人相談員の適正な配置や専門職としての位置付け等、公的相談窓口の体制を強化すること。併せて、被害者支援において重要な役割を果たしている民間支援団体への財政支援の一層の充実を含めた更なる支援の実施について検討すること。

女性相談の専門性の資質向上のためにも、被害者相談員は加害者プログラムの内容を理解する必要性がある。被害者支援の一環としての位置づけのもとにあることの理解はもとより、被害者が過剰な期待を加害者プログラムにもつことのないようにするためにも被害者支援相談と加害者更生は連携しあう必要がある。

また、加害者プログラムに携わる相談員が、被害者支援団体での研修を行うなどの工夫をすでにしている。

13） ＤＶの被害が被害者本人のみならず、その成年の子にも及ぶ事案等に対しては、親族等への接

近禁止命令により保護が可能なことについて、一層の周知徹底に努めること。

暴力から離脱のための取り組み全般にかかわり、述べてきたように加害者の拡大家族と友人・同僚は重要な社会資源となる。脱暴力のためのエコマップに組み込むことが可能である。この項目は被害者についての記述なので、加害者の拡大家族、友人・同僚は、暴力離脱に果たす役割があることや、場合によっては被害者の拡大家族や友人も暴力離脱に役立つ事例もある。また、保護命令にまで至らない事案では、成年の子による、「娘命令・息子命令」で加害者プログラムに参加する人が少なからず存在している。保護命令以前の加害者の行動特性を理解するという複眼的な視点が必要である。

14)　ＤＶと児童虐待が同一家庭内で同時に発生している実態及びＤＶが子供の成長や心理に与える影響について情報を収集し、その知見を踏まえた研修を関係機関の職員に対して行うこと。

主たる虐待親が父親である場合、母子への支援が子どもの成長には必要となる。DV がなくても母親にとっては親子分離そのものが暴力性をもつ。子どもだけが分離され、場合によっては母親もコントロールされており、何もできない無力感をもつことがある。子どもの発達のためにも母子の家族再統合実践、男性からの脱コントロール化をすすめること、父親を住んでいるところから実家など別のところに離すこともありうる。被害者が逃げなくてもよいようにし、母子関係の回復を図ることも DV 加害者対策や子ども虐待による分離後の成長保障となる事案がある。特に男親対策プログラムと DV 加害者プログラムを交差させると役立つ事案がある。

15)　国が定める基本方針及び都道府県が定める都道府県基本計画の改正に当たっては、加害者プログラムや子供に対するＤＶ防止のための教育について記載するよう努めること。

これについては立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクトが自治体と協力してすでに取り組んでいるところである。以下のスライドで紹介した。下図の２と３を参照のこと。

６．DV グループワークに参加する男性たちと重ねて

DV グループワークでは男性性ジェンダーに由来する暴力の理解を主に、家族システムの特性を強調している。最近の特徴は、最初に掲げた日本の事情を踏まえるべきことを痛感する。それは、保護命令の少なさ、精神的暴力の相談が多いこと、離婚せずに家族システムを維持しつつ解決を図ること、子どもへの配慮、女性の経済的脆弱性、加害者対策が欠落していることなどである。こうしたことも踏まえて、公的な保護命令ではなく、妻命令、娘命令、息子命令があり、加害者プログラムに参加してくる。このなかでは、とりわけ子どもへの影響も指摘し、責任を取るべきことを強調するとグループワークでの参加が持続することが多い。

そして、逃げない被害者も存在している。この場合は、離婚にまで至らないが、男性が別居する。いつまでという約束もできずに二重生活が続く。その期間に加害者プログラムがあると有益だ。

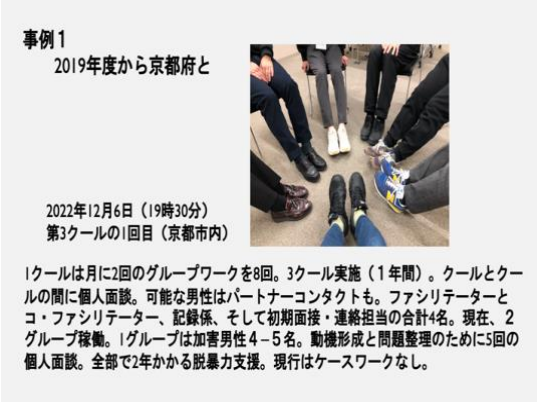
さらに特徴がある。暴力加害の相談にやってくる男性たちには暴力の連鎖がほとんどある。そこで、自らの世代で断ち切る責

任を強調するとささる。

こうして DV 防止法の 20 年を超える経験から、第１次防止としての男性相談体制をとれば変化したいと思う男性は必ずやってくる。そこに作用しているのは、ゼロ次防止としての地域社会の力である。変化を指示する同僚、友人・知人、家族、隣人の存在がかなり大きい。脱暴力に向かうことを希望する男性は確実に増えている。被害者支援が強化されればされるほど、加害者対策が要請される。そのために男性相談をとおして第１次と第２次の防止のシステムが開発され、接続されるべきである。それを窓口にして、男性相談と脱暴力グループワークへの参加の推奨できる。

筆者らの取り組みである京都グループワークはこの連載でも特徴を紹介したようにゼミナール方式である。ボトムアップでエピソードを語りながら抽象的な加害と自己を語る語彙を豊かにしていく。

なかでも「関係の非対称性」について気づいていくことを重視している。これは被害者理解の基礎になる。こうして、男性相談体制を軸として暴力から離脱するシステム構築をめざして防止の体系を編成していくことを提案してきた。加害者更生相談の理論化もできる。男性相談は多様な主訴を含むからである。先述したように、沈黙させられがちな男性被害者の背後にあるジェンダー作用や家族システム、自分も被害者だという加害者も含む。加害者プログラムだけが単体であるのではなく、いずれは脱暴力にむけて伴走できるケースワーク機能も構築しながら、ゼロ次から第３次まで体系化された暴力からの離脱システムを展望したい。すでに京都と大阪での経験があるので、これを汎化したい。



＊これは京都府の委託で立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクトが実施しているグループワークの様子である。

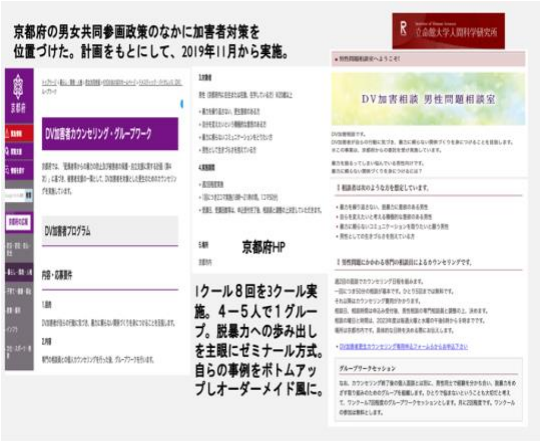


図２　左側は京都府の HP。右側はそこにリンクしてある連携先の立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクトの HP である。

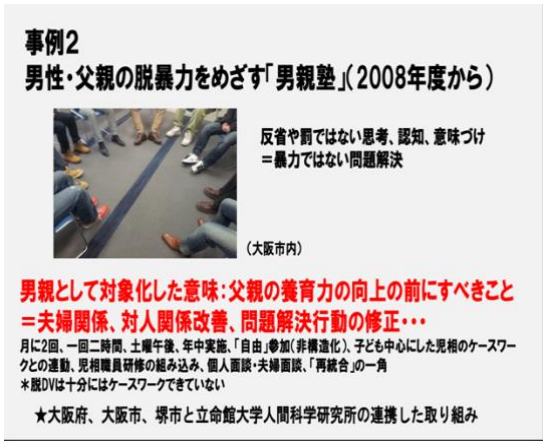


図３　大阪で実施している虐待する父親へのグループワーク「男親塾」の様子

立命館大学
中村正（社会病理学・臨床社会学）
2023 年 5 月 30 日受理

団遊の脱線的経営言論
給与（報酬）編　２

報酬宣言制度を取り入れたことで起きた変化

＜１よりつづく＞

給与を自己決定する際にネックになるのは、いくらくらいが妥当か分からないことです。それは私がメンバーの給与を決めていたときに感じたことと同じです。その結果、例え給与の決定権者を社員自身にしたところで、業界平均や友人・知人の金額を参考に、なんとなく決めてしまうことが濃厚でした。それでは、報酬の自己決定制度と言っても、私の悩みごとを社員にスライドするだけで、自己決定の醍醐味を創出することはできません。

例えば進学先を決める際、多くの人は自分の偏差値的なものと、学びたい分野、通学したいエリアなど、複数の要素を掛け合わせ志望校を絞り、ある程度納得して受験をします。本当は違う学校に行きたかった、という人もいるだろうけれど、学力なのか、経済力なのか、何かしらのハードルがあり叶わないという、その事実とも向き合うことができます。

この決断プロセスがもたらすある程度の納得感、これを「会社の給与テーブルがそうだから」ではなく、自己決定の末に持ってもらうには、と考えた際に、圧倒的に足りていないのは情報提供だと思いました。つまり、会社が会社であるために、何にいくらかかっていて、総体としてどれくらいのお金が必要なのか、そのお金の一部が自分の報酬である、と言う風に現状を見られていないことが問題だと考えたのです。

そこで、会社の維持・運営にかかっている費用を 1 円単位までつまびらかにすることに決めました。もちろん、社長である私自身の報酬も含めてです。経費だけでなく、同僚の給与もすべて丸見えになるため、抵抗を感じる人も、振り返ればいなくはなかったと思いますが、慣れの問題でした。そもそも、日本人はお金の話をするのが苦手なので、その延

長で植え付けられたものが抵抗感となって顕在化しているだけのように、私には感じられました。

＊＊＊

会社の数字のすべてが分かれば、労働分配率などと言わなくても、自ずと報酬に回せる額が見えてきます。例えば、全体が見えない中だと、食べたいケーキの大きさを自分で決めることは難しいですが（もしかしたら取り過ぎかもしれない、という遠慮も働く）、ホールケーキの大きさと、食べる人数が分かれば、ケーキが出来上がる過程への貢献度を自分なりに評価し、食べたい大きさを宣言することは容易になります。全体が見えないが故の発言が「給料は、もらえるならもらえるだけ欲しい」だと考えたのです。

実際に運用を始めてみると、メンバーそれぞれの宣言額を聞きながら「あいつ、あれだけやってるのに、そんなに小さめに宣言するんだ」と感じる人もいれば、「結構思い切ったな」と感じる人も出てきます。ただ、全体が見えているから、無いものを奪い合うようなことにはなりません。また、宣言額の合算の結果、会社全体の数字がどうなるかも見えてきます。そのため、「このまま全員に宣言額通りに支払うと、会社がまずい」という意識も働き、私が言わなくても、社員同士で話し合いが始まったりもします。「下げる」話だけでなく、「もっと上げろ」という声も飛び交います。「もらえるならもらえるだけ欲しい」という発想はみごとになくなりました。

宣言通りに支払うことを前提としたので、導入前は「もしも 2,000 万円と言い出す人が出たらどうするのだ」と心配してくれる経営者仲間もいましたが、結論そのような独りよがりな人はいませんでした。

＊＊＊

「報酬の自己決定制度」は、会社にいくつものポジティブな変化をもたらしました。まずは、事業の収益性に関心を持つメンバーが増えました。報酬宣言制度導入以前から、もちろん全員が一生懸命働いていましたが、どのような仕事をしていても、かかる経費はそれほど変わらないということが数字を全公開することで身に沁みますから、宣言額を大きくするには、より大きな利益が出るように、事業を作っていくことが必要だと分かります。そのため、事業の構造に考えを向けるメンバーが圧倒的に増えたのです。

コスト意識も高まりました。何せ１円単位で毎月数字が公開されますから、「今月、クロネコヤマトが高いんじゃないか？」「どうしてだ？」というようなことを必然的に思います。

その結果、本当にそれは必要なのかという検証や、エコ配にしてはどうかといった削減案の検討などが、日常的に社員同士で行われるようになりました。何せ、利益が増えればケーキは大きくなるのですから。

バックオフィスの仕事について、改めて考える機会にもなりました。「報酬の自己決定制度」においては、どうしても生産部門の方が宣言額を大胆に発表できがちです。例えば経理や総務を担当しているメンバーは、利益貢献度を自己査定しにくい面があるため、控え目になるというか、戸惑いがちでした。しかし、彼らがいなければ、会社が回らないことも事実であり、そこについては、生産部門のメンバーが非生産部門の仕事の価値を言語化するというような流れができました。

時に、生産部門が非生産部門に対して「誰の稼ぎで食えてると思っているんだ」というようなことを口走ってしまうことがあるように聞きますが、報酬の自己決定制度を採用すれば、そのようなことは無くなるのだと思います。

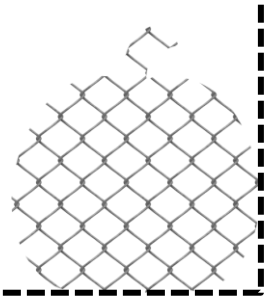
＜３につづく＞

文／だん・あそぶ（団遊ヨノナカ編集舎　主宰）　https://www.danasobu.net/
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な会社や組織の経営・運営に携わる。自ら創業したアソブロック株式会社の社長職は 21 年 9 月に次世代への委譲を目的に退いたが、終始貫いた独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演を行っている。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

解放の心理学へ

（2）

藤　信子



数日前の新聞記事で、保育所における「不適切な保育」の状況に関する記事があった。こども家庭庁の初めての全国調査のようだ。「不適切保育」とは、「虐待などが疑われる事案」とこども家庭庁は定めることにしたようだ。記事の掲載されたものをもう見ることが出来ないので、インターネットで検索すると（NHK＞首都圏ナビ＞もっとニュース）「園児の両足をつかんで体を引きずるなどの暴行をした疑い」や「園児の下着姿のまま食事をさせたり」「体をさかさまにして持ち上げたり」するなどの行為が挙げられていた。そしてある保育園の園長の話として「子どもは１対１で対応する時はどうしても気が高ぶってしまうことがある。その時、保育士一人に任せるのではなく、周りの保育士とお互いにフォローし合えるような関係性があれば不適切な対応になるのを未然に防げると思う。そのためにも今の保育士の人数の基準では１人１人の子どもの主体性を大切にした保育を行うことが難しいのではないか。保育士たちがお互いに助け合えるように余裕のある人員の配置がたいせつだ」とある。また保育の専門家の話でも、忙しさのあまり保育士の会が不足していること、研修に出かけることさえできない、ことなどが挙げられている。そして取材した記者のまとめは「・・不適切保育が起きる背景には、保育士の過度な働き方や処遇の問題があります。こうした保育所が抱える根本的な問題にもしっかり目を向ける必要があると、改めて感じます。」ものだった。このあたりで私は、今更何をいっているんだろう、保育の基準の問題、過酷な職場であるという問題は前から言われていることなのに、いつまでも同じことをいうんだろうと怒りが込み上げてきた。

対人援助職の現場は常に、厳しい労働条件、それに対し低賃金などのために、働く人が定着しない問題なども、繰り返し言われてきている。これは対人援助職が、従来女性の役割であったケアを主とすることもあり、女

性が家庭内でしていた仕事に賃金を払うことを。社会の中の仕事として十分に位置づけてこなかったという面が大きいのだということも随分言われてきているが、一向に解決しない。国の将来を考えるなら、子どもの成長を育むことは大事なのだから、そのぶん防衛費の増額など、アメリカの軍需産業に押されるままにお金を使わずに、保育、介護、教育などに。お金を回して欲しいと思うけれど、こども家庭庁というのは、「子どもは家庭で育てるべし」というような人達の発想でできているらしいから、無理かと気を落としそうになるけれど、そんなことを言ってはいられない。

賃金や人員増に関しては、要求するのはいろんな人たちがするのが良いと思うけれど、新聞記事等になかなか出てこないのは、労働組合の活動である。現在の労働組合の組織率は20%を切っているらしい。でも労働者が待遇に不満を持つ場合、組合に入って雇用者と交渉するしか方法を思いつかないけれど、他にあるのだろうか？海外ニュースを見ていても、日本ではストライキが少なくなったな、と思う。40年近く前までは春闘の時期は、電車が止まったりすることがよくあった。組合の組織率が低いというのは、組合に加入するメリットを感じられないということだろうか？組合費は決して安いとは言えないから、それももったいないということはあるかもしれない。大きな労働組合ならまだしも、小規模なところなら、活動を専従の人に任せることもできないこともあるかもしれない。そのような場合、仕事で疲れているの、それ以上の時間を割けないという気持ちにもなるだろう。時代による産業構造、雇用形態の変化の中で、みずからの労働の位置づけも以前のようにはできにくいのかもしれない。しかし、福祉や教育の現場では、それほど仕事（労働）の内容が変化しているとも思えない。

福祉職は奉仕の精神で働いているのだから、労働条件などということは言わない、と思っている人たち（雇用者側）が多いよ、というのは、病院で働いていた時に、ソーシャルワーカーから聞かされた言葉で、驚いたことがある。福祉施設を作った経営者が、奉仕の精神で作ったとしても、働く側はそんなことを必ずしもそう思っているわけでないだろう。なんか思い違いがあるようだなとその時は思っていたけれど、案外外れていないかもしれない。自分と雇用している人が別の考えを持っているということに思い至らないらしいということにも驚いた。それは経営（というか運営）が家族主義的な考えに基づいているからかもしれない。以前、病院で働いていた時に、後輩が１週間の休みに、ある技法の合宿に参加した、ということを聞いた院長が「どうして参加することを言ってくれなかったんですか？」と私に（後輩ではなくというところがまた変なのだけれど）聞くので、びっくりして「休暇を取っているのですから、ハワイに行こうが合宿に参加しようが、いちいち報告することはないんじゃないですか」と答えたのだけれど、言ってほしかった、というのみでなぜかは分からなかった。この院長には精神医療については多くのことを教えてもらったし、精神医療改革に関することについても、いろいろ学ばせてもらったので、その時の経営者パターナリズムみたいなものに接して驚いた印象を覚えている。今思えば、あれは日本の企業（？）の家族主義的な面が出ていたのかもしれない。そう思うと、私たちが働いている場面で、気が付かないうちに、家族主義に覆われているのかもしれないと思った。この気が付かないうちに取り巻かれていることについて、次回も考えてみたいと思う。

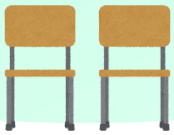
カウンセリングのお作法　第 35 回

CON

Counseling Office Nakajima

CON カウンセリングオフィス中島　中島(水鳥)弘美

～　面接の空間　(2)　～



前回に続いて、面接がおこなわれる空間について話します。

椅子

面接室内にある椅子は、相談に来られる方とカウンセラーは、同じ形で同じ高さ大きさです。もしも、クライエントさん用の椅子が、カウンセラーと異なれば、初めて来所した人はどこに着席すれば良いのかの見分けがすぐにつき、わかりやすいのかもしれません。全く同じ椅子にすることは、ともに歩ませていただきますと、同志のような雰囲気を伝えたいと思いも込められています。

椅子は、特別に高級なものではありません、ダイニングテーブル用の椅子で、ソファのように柔らかいものではなく、長時間でも同じ姿勢で座り続けられるものを選びました。

ダイニングテーブルと椅子に座って面接が行われますので、クライエントさんがノート等を広げてメモをとることもできます。

ご家族で来所される場合は、椅子と椅子との間は必ず等間隔に並べます。椅子同士がひっつきすぎないよう離れすぎないようにします。

初めて来所されたクライエントさんに対しては、

「どうぞ手前側の椅子におかけください」

などといって、おすすめし、その座り心地をどのように感じておられるのか、など様子をみせていただきます。また、

「トイレはこちらです、ご利用ください」

と、位置関係をお知らせして、少しずつ面接室の場に馴染んでいただくようにお声がけをします。

室内の温度

「いま、この部屋の気温は 25 度に設定しています、寒くないですか、熱くないですか？」

などと、必ずたずね、微調整が必要な場合は、すぐに行います。

最寄の駅から徒歩で面接室まで来られた場合、来室直後は外気との差により暑く感じます。また、それぞれの体調具合によって、ときに部屋を寒く感じたりされることから、現在の室温について、お知らせしています。すると、何回かお会いしているうちに、比較的薄着の傾向とか、おなかを下すことが多いなどその方の適温のようなものを知ることができます。

冬場は、乾燥していることが多いため、室内に加湿器を取り入れたこともありましたが、繰り返されるわずかな機械音等による影響もあり、結局、取りやめました。

面接室の快適さを考える中で見えてきたことは、引き算することでした。つまり、最低限、必要なものをセッティングする、シンプルにということです。

ニオイ

面接でクライエントさんとお会いするときは、匂いに関しても備えます。

カウンセラーは、面接前の食事では、匂いの残るようなものは口にしないようにします。

また、食べ物のにおいだけではなく、シャンプーや化粧品などできるだけ無香料にして身支度を整えます。きっと医療関係者もこのような対応をしていると考えています。

クライエントさんの中には、

「自分のにおいが人を不快にさせるかもしれない」

と、面接中はつねに口臭予防ガムを噛んでお話される方もおられます。

気にする気にしないはとても個人差があると考えます。ニオイについて、できる限りのことは準備したとしても、どうしても無臭にはならないので、室内スプレーなどで除菌をします。面接が終了するとアルコール消毒でテーブルを拭くことで、少なくとも室内の強烈なにおいはなくすことができます。

部屋の変化

「この部屋なんか、変わりましたか？」

間隔を空けて、来所されたクライエントさんからそのようにたずねられることがあります。こんな天井や壁だったかな？と周りを見渡しながら、着席されます。

「ここの何かが変わったりすると落ち着かないんですよね～」

面接室の変化チェックは、自分の話をするまえに、これまでの記憶を確かめる儀式のような印象です。

何かの小さな変化に気がつき、すぐにカウンセラーに質問をして確かめる人もいれば、気がついたとしても口にせず、じーっとそれを見つめるの人、あるいは、室内の変化よりもただ個人の内面について集中して、そのことをお話される方などそれぞれのスタイルがあります。

コロナ禍により、二酸炭素排出測定器を室内に置きました。すると、

「これは何ですか？いろんなところで見るけれど何ですか？」

数値がクライエントさんに見えないように、目立たない場所に設置したにもかかわらず、質問攻めにあうこともありました。

説明を済ませてから、本題のカウンセリングに入ります。気になることをそのままにしておけないのだと、受けとめました。

空間については、クライエントさんが何かに気を取られることなく、安心して話ができるように、事前の室内の準備、そして説明することが必要であると考えます。

晩年

D・A・N 通信

No.4

2023.2.21～2023.5.20

団　士郎

誰もが歳をとり、それに伴う変化を受け入れて暮らしているように、私もそのつもりだが、元気であるのは事実のようだ。過度な若作りや、時代の波を受け入れようとし過ぎるのはちょっとなぁと思っていて、自分の関心のままに過ごせたらいいと思いながら76歳になった。団塊世代、たくさんいる世代の爺様の一人である。

近しい友人、知人にも亡くなる人がでてきて、当然その仲間である自分も、巡り合わせのどこかにいるのだろう。だからかどうかは分からないが、興味関心のバランスが変化してきたのかなと思うこの頃だ。

新聞を配達してもらうことがなくなって一年程たった。溜まる新聞紙の処理に困ったのが原因だ。配達して、後日引き取ってくれるまでのサービスだったら続けていた。新聞、雑誌、書籍、TV ニュース、youtube、etc.　いろいろある中から紙媒体の新聞を削除した。現在、二紙のデジタル契約に切り替えてスマホで見ている。

しかしいわゆる「新聞を読む」一連の動作も含めた時間の過ごし方が生活の中からなくなった。生まれてからずっと、日常生活にあった新聞がある生活を変えてしまったのだ。その影響を確定することはできないが、自分の社会への関心の向き方に影響はあった気がする。

良い変化なのか、悪い変化なのか、どちらでもない別の変化なのか、なんとも言えないが、「変化」が起きていることは違いない気がする。だから今の生活を変えたいと思ったら、いつも言っているように、決意や判断、解釈より、具体的な生活上の変化が大切だ。

2月●日

Twitter 社から 12 周年記念日だと知らせてきた。 そうか、2011 年東日本大震災の数週間前、よくわからないままやり始めた Twitter。それが今では 8000 ツイートを超えた。飽きもせず、日録を書き続けるのは趣味だ。

それ以前、郵送版 DAN 通信で書いて送っていた時より、ほんと楽で簡単だ。何の意味があるのかなんて考えないタイプだから続くのだろうし、日を置いて読み返して自分が楽しめるのだからツイッター、フェイスブックは楽しい。ちょっとしたコメントや「いいね」も嬉しい。でも侵入的な反応はうざかったりするのだから勝手なものである。



2月●日

三月の奈良/広陵町とホノルル漫画展の準備を朝から。作品を取りに奈良からNさん夫妻が来てくれ、展示関連を引き受けてくれているＨさんも来訪。

一緒にハワイ展の準備、作品選択と国際小包パッケージも無事完了。こちらは明日、集荷に来てもらったらフィニッシュ。（しかし実際は、国際小包の伝票作りにミスったり、コロナ禍で、輸送に遅延が起きているとかで、到着日を確約できないとか、いろいろ面倒があった）

この大量のパネル、掛け軸はずっと立命館大学に保管して貰っていた。それを過日、自宅に搬送した。今後はここから発送で、いろんな場所でマンガ展を開催したい。そう思っていたら、早速複数の企画が進行中になった。



2月●日

石川家族面接を学ぶ会で一日 WS。ここもずいぶん長期継続開催になっている。しかし初参加も多く、若い世代も沢山いての開催。 午前中、二時間の話が好評である。この頃は喋りすぎだと言われることも多かったから意外。初めて使う会場は金沢港のターミナルビル。海が見える。中型船舶が方向転換中。



●月●日

パリ在住の安發明子さんのクラウドファンディングを応援している。この漫画を日本語で読みたいと思ったからだ。

「日本でワーカーをしていた頃のことと、どうしてこの漫画を日本に紹介したいと思うに至ったかについて書きました。是非読んでください。できたらシェアもお願いいたします。」

こうスタートしたクラファンは締め切りの４月１１日、113%で達成。今年の年末には出版の予定だ。フランスの「エデュケーター」という仕事のことに興味が湧く。



2月●日



一日中自宅であれこれ雑多な準備作業。郵便受けに届いていた普段なら読まない印刷物、高校の同窓会誌。春日丘高校同級生の記事に目がとまった。俣野が「神田川」の作詞家喜多条忠の事を書いている。二人とも余りロにしないような記憶がある思春期の同級生知人だ。あの頃、いろんなことがあった。

3月●日

仕事場にこもりきりで、3 月末の恒例「ぼむ」漫画展のカラー版掛け軸制作をしていたら、月が変わっていた。

同時に雑誌連載新作の差替え一作も描いていたので、昼夜漫画家生活だった。 やれば片付いていくところは職人風で気持ちよかった。気に入ったものや、ちょっと・・・な仕上がりになるのは仕方ない。





3月●日

さて週末、昨日は広陵町で少人数の家族理解半日 WS。参加者が楽しげなのがなにより。 本日は漫画展会場の広陵町図書館で講演会。毎年、町長がはじめの挨拶だけでなく、最後まで聞いてくれている。

マンガ展示は何年も継続しているものなので、綺麗に収まっていて安心感。図書館入り口だから、たまたま目についてみてくれる人も多い好条件。来週末、英語版掛軸展示をする予定のホノルル展が、展示状況が全く見えないので心配。



3月●日

ハワイに来ている。ホノルル コンベンションセンターにはたくさんの人が訪れていて、あちこちの催しが活発である。 その中では比較的静かな展示だが、英語版を選択したことで読んでくれる人がいつもとちがう。 巻物を一コマずつスマホに撮っている男性もあり。 朝は通訳さん付の漫画トークも開催。

勝手のわからない私に、ハワイ在住のNさん他、多くの人々の貢献を頂いて週末公開。翌月曜にはパロロ本願寺でも１日展。



ワイキキビーチ近くのホテルの裏にある屋台店 ebinomi のガーリックシュリンプライスが美味しい。tsurutontan の肉うどん。美味しかったけど、通りの向かい側の丸亀製麺の三倍、チップ込み 22.45 ドル。高い！

初日に連れて行ってもらったレストランは、どれも美味しかった。ご馳走様です。

3月●日

ハワイ滞在中、深夜はマガジンの編集最後の仕上げをしていた。小さなミスはあるだろうが、おおむね完了と思っていた。

ところが帰国早々のニュース！「マガジンの表紙絵が42号とかぶっている！」。なんてことだ、実はこの前に制作しかけたものもダブっていた。

記憶力の限界を超えているのだろう。まぁこんなニュースでよかったかと、無事帰国を一安心している羽田空港。



3月●日

305ページのマガジンをプリントして製本。ところが勘違いでホッチキを左右反対に綴じてしまった。 読めるからこのままでいいけど違和感。でもそのせいで、いつもより読んでいる。 ページナンバーの入れ間違い(私担当部分)を

発見したり、面白い記述を見つけたり。読者が増えてきている気配も。



3月●日

Hさんの依頼で、秋の近畿エリア児童養護施設職員大会で講演と漫画展をさせてもらうことになった。 朝、仕事場から京都御苑を抜けて、展示予定スペースの下見に久々に母校同志社大学今出川キャンパスに。見違えるような変化も随所に。↓ここに展示する。



昨日、来訪者にいただいた百合が強烈に香る仕事場に夕刻、立命館大法学部同窓会大会での講演打ち合わせに三名来訪。当日の参加者に配りたいと、「家族の練習問題第九巻」を 100 冊お買い上げ。

夜、クラファン出版準備中のパリ在住の世話人Aさんから電話。 朝から色んなことのある一日だった。

3月●日

今年も白木蓮は綺麗だが、数日で路上のゴミと化するだろう。この花弁は放置するのをためらうほどに汚くなるので掃除必須だ。

黄色いのはニオイトサミズキだとアプリはいう。こんなのウチにあったかな？そして椿。 それらを眺めながら、返却されてくるパネルマンガ作品を待つ。広陵町漫画展、N さんご夫妻、ありがとうございました。



3月●日

只今併読中の四冊。「黄色い家」、さほど興味があるわけでもなかったのに、読み始めると一章くらいググッとすすむ、不思議だ。 矢崎泰久さんも和田誠さんも亡くなった。そして掲載されている向田邦子さんとの長い対談が面白い。バリバリの現役時代を楽しませて頂いた方々がみんな故人だ。



3月●日

さぁ、搬入、展示完了。 明日から恒例の「ぼむ」漫画展。毎日、午後2時以降は在廊予定です。 ご都合付けばお知らせください。おいでの節は、お声かけください。



3月●日

「ぼむ」展も明日まで。連日、いろんな方が来てくださるのはありがたい。「家族の練習問題１－９」もたくさんの方に買って頂いて嬉しい限りだが、中国語のはないのかとリクエストされて驚いた。一昨年出た四冊シリーズを仕事場まで取りに戻った。 連載の新作も完成させたし、多忙の三月をようやく乗り切った。



4月●日

娘母子が昨日から来ている。しばしお爺さん DAYS。夕飯の買い物に三人で出て、 桜満開の公園に。 スケジュールがない日々は、こんな過ごし方もある。



いきつけの中華屋で、夕刻早めの食事。快調に元気にお喋りしている孫の声がうるさいと言った客があったらしく、音量を小さめにと店員が告げにくる。 二歳児の声の調節は無理だろう。泣き叫んでいるのでも、ぐずっているのでもない。こんなことを言ってくる世間では、子連れの人たちは動き辛かろう。

「子どもの声」をうるさいとクレームする空気が世の中に蔓延している。「うるさいなぁ」と思う気持ちは個人差でしょうがないと思うが、「何とかしろ！」と文句言うのは違うだろう。「お前だって、子どもの頃はうるさかったのを忘れたのか！」と批判されても仕方ない。

お客なら、何にでもクレーム付けていいと思うような大人を育てた世の中がまったく馬鹿げている。これじゃ少子化対策なんて、口先のニュースだけになってしまう。



4月●日

新年度、長く継続の草津プログラムに。 最近、家族療法って私はあまり言わなくなっているが、25 年近く前にスタートした会だからなぁ。



4月●日

明日、三重県で仕事を引き受けている。日帰りは可能だが、めったに出向かない方面なので前乗り。 近鉄特急の京都から直通列車をネット予約しておいたら、えらく豪華なこんなのだった。二時間程楽しむことに。



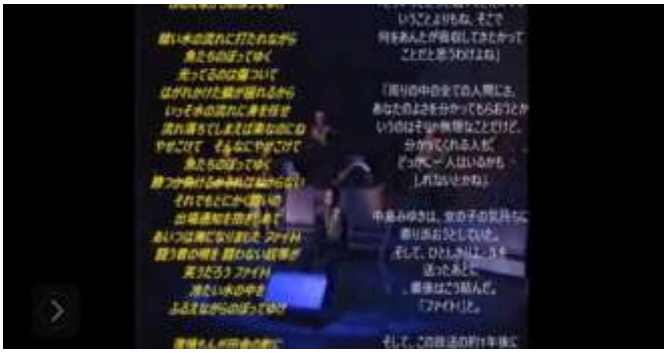
お伊勢さんに来たのはいつだったろう。 初めては小学校の修学旅行、64年前。その後、伊勢湾台風の後、大きな木がたくさん倒れていたお正月の初詣。そして今かな。鳥羽や志摩半島には来たけど。

いやいや、職場のバス旅行で立ち寄ったのかな？ おかげ横丁とやらの賑やかな様変わり感は、高山、錦市場、湯布院等と似ている。



4月●日

帰路の近鉄特急でYouTubeを見ていた。拓郎が歌う中島みゆきの「ファイト」を聞いていたら、夕景の車窓がこんな気分を醸し出した。 ワクワクでもドキドキでもないけど、何ともいえない嫌じゃない気分が湧き上がってきた。あれは何だろうなぁ。



4月●日

勘違いやミスが嫌いだ。誰でもだと言われそうだが、そのレベルではないのを、他の人のエピソードを耳にすると感じる。それでも実際はダブルブッキングのようなことが起きてしまう。諦めて次善の対応をするのだが、結果的にいろんな人に迷惑をかけてしまい、少し謙虚になる。それも良いのかもしれんな。

4月●日

どこかで記事を目にした記憶のあった本が、通りすがりの書店で目に飛び込んできた。 風呂で読み始めたら止まらない。明日の朝は早めに約束があるのに。 こういう出だし、好きだなぁ。



4月●日

横尾忠則を巡ってきた。西脇市の岡之山美術館。ゆかりの地だが常設展示はなかった。興味深い古い図録2冊をゲット。神戸市に回って横尾忠則現代美術館開館10周年記念開催の「満満腹腹満腹」展を観る。いや一ぁ堪能した。こういう企画、展示があるかぁと感心。エネルギー満々だ。



4月●日

大盛りアサリうどん、丸亀製麺。ここ数年、この季節メニューがとにかく好きなのである。しかし、コロナ禍中はメニューになかった。それが復活。勇んで近くの店に行ったが、取り扱っておりませんと書いてある。

今日は同意見のNと別店舗に。ところがここにもない！店で尋ねると、調理設備が路面店でないと準備できないのだという。そしてやっと三店舗目で遭遇。やっぱり美味

しい。海の香りだ。



4月●日

地元大津、徒歩生活圏の膳所が舞台の小説なんて、なんということ。 面白いけど、変な面白さの第一話。



4月●日

こんなタイトルの雑誌を見ると手にしてしまう。とは言え、コロナが明けて内外の観光客の多さは京都にいると実感する。 年間スケジュール帳眺めながら10日位空けられるところを探して、海外一人旅もネット検索してみるが、もうしんどいかなぁとも思ったり。GW 前に、突然の思いつき一人旅とか？



5月●日

GW 期間中は一人で暇している。そこで去年一年 HP で連載していた映画についてのコラムをフォトブックにまとめている。

何か作っているのは本当に楽しい。並行して一昨年の連載コラムも一冊にし始めたが、こちらは手間がかかりそうだ。ゲラのつもりで 100 頁程の一冊目はしまうまプリントに注文した。



（この表紙は変更することにした）

5月●日

能登半島で地震。知人も多いエリア、ニュースが気になるGW。こもりきり生活の中、録画してあった映画を見たり、分厚い新しい小説を読み始めたり。

「あちこちオードリー」、オリラジ出演回を YouTube で見た流れで、「作久間宣行のオールナイトニッポン」に飛んで関連話を聴く。面白い。





5月●日

昼前に集合の漫画同人「ぼむ」の月例会。今日は六人。

和食ランチの後、タルト・タタンの店で久々パーテーション抜きでワイワイ。その後、分かれた三人がコーヒー店で続きを延々と六時前まで。

仕事場に戻る道すがら、余花庵でグループ展開催中の篠原を覗くと、まだ一人居残っていたので、そこでまた一時間半立ち話。よく喋るものだ。

いまスイスイ読んでいる短編集はこれ。出れば必ず読む著者、砂原浩太朗。明日の東京 WS、準備は万全。



5月●日

東京家族理解ワークショップを品川で開催中。十八人参加で雨模様の中、無事スタート。開口一番は、個人システム、家族システム、社会システムの話題。この話にしようと考え始めて、気づいたことがあった。時代の関心はなぜ家族システムに向かえなかったのか。面白い。



5月●日

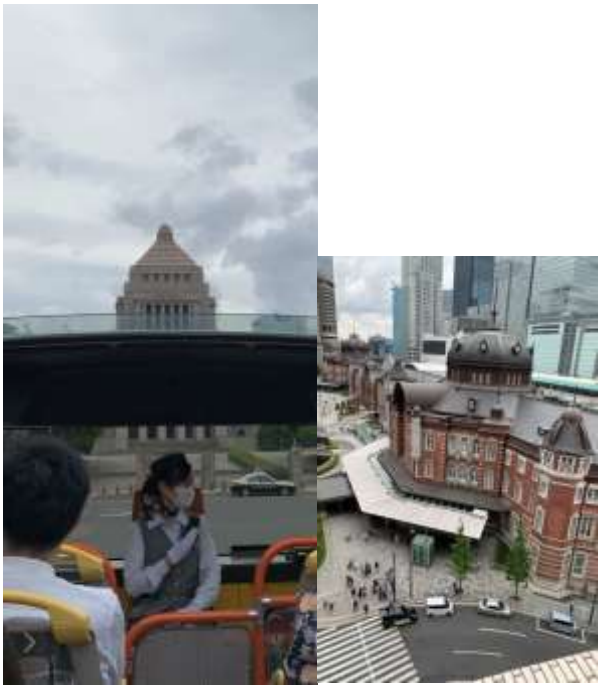
上野でマティス展をと前から予約してあった。早めにJR上野公園口を出てすぐの国立西洋美術館前を通ると、オヤ、常設展無料の日。MOMA でもそんな日があったなぁなどと思い出しながら入場。良いなぁと思うものに会う。続きでマティス展に。しかし懸念通りあまり好みではなかったので、さっさと終了。



予定より早く東京駅に戻ってきてしまった。書店を覗いて飯食って帰路の新幹線の予定には少し時間が余る。

駅横のはとバス乗り場を見たら、一時間のノンストップ・パノラマバス観光が１４時発。東京で観光バスなんて久々。

戻って駅前ビル KITTE の博物館に(二度目)。丸善で未知の本一冊買ってつばめグリルで早目の夕食。そして帰路車中は読書。



昔、よくこういうのあった。ツアーに参加すると、全く知らない人との集合写真。後で希望者に販売。誰が買う

の？ スマホの時代になって、もう考えもしなかったが、この趣向。 走行中の二階建てバスを、歩道橋の上からカメラマンが通過の一瞬を写す。HP上で翌日だけ見られる。



5月●日

家族応援プロジェクトの月例会に、茨木の立命館大学へ。道中、これを読み耽っていて、気づいたら茨木駅を発車していた。 新大阪駅まで乗って、Uターン。約束の時刻には 15 分遅刻。 滅多にないことだから、熱中していた読書が嬉しい。



5月●日

昨夜はこの企画の 2 年目。zoom 企画なのに拘束が強いかな。

朝からストレッチを済ませてランチ。この後、週末のWS のレジュメ準備。対人援助学マガジン53号用の自分の原稿作り。フォトブック企画は三冊中の一冊が完了。二冊目にかかっている。しておきたいことで忙しい。



5月●日

ちょっと久しぶりに伊丹空港。ご依頼のある間は、出来ることをさせて頂きます。遠出は苦にならないので、道中旅も楽しみです。 似た名の方が76歳で亡くなったニュースでいっぱいの日に、団士郎は76歳になりました。

これからもどうぞよろしく遊んでやってください。



53・リスクと安全（園庭編）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

衝撃だった事故

マガジン50号から３回連続で**「子どもが育つ園庭」**というレポートを書いてきた。それだけに、この事故のニュースは人事とは思えなかった。

ゴールデンウイーク前の2023年５月２日、埼玉県のなずなの森保育園で３歳児の首にロープが巻き付き意識不明で発見されたという事故があったと報道され、衝撃を受けながらネットニュースを検索した。（この原稿を書いている5月末現在、男の子の意識が回復したというニュースがあり、心底ホッとした。･･･ただ詳細はまだ報道されていない。）



男児が負傷した土山＝2日午後5時半ごろ、埼玉県久喜市栗橋東

埼玉新聞WEB版　5/3掲載より

事故発生時の報道によると、土を盛られたつき山でロープが首に絡まってぐったりしている３歳男児を一緒に遊んでいた園児が発見したということだ。

事故原因についてはまだ詳しい報道がないので、**ここからは僕の推測**になる。

報道の内容と写真から推測するに、事故前からつき山にはブルーシートが掛けられていて端がアンカーで留められていたので、子どもたちは山から滑り降りるのを楽しんでいたのだろうか。ロープは頂上にあったデッキに**当日結び付けられた**ということで、頂上まで登る補助具として誰かが結んだ。年少の子どもでもこのロープを伝って山を滑り降りて遊ぶことができるように、良かれと思って設置したのだろう。子どもたちのキャーキャー楽しんでいる声が聞こえてくる楽しい遊び場だったんだろうなあ、と想像する。

男児が何かの拍子で滑って、ロープが首に巻き付いてしまった。なぜ自分で取れなかったのか･･･ブルーシートが滑って身動き取れなくなったか、滑り落ちる衝撃で首が締まってしまってパニックを起こしたか気絶したか･･･。（あくまでも推測です）

直後になずなの森保育園のホームページを見ると、自然豊かな環境の中で子どもを遊ばせ、豊富な樹木や手作り遊具も園庭にあったりしてウチと同じような方針の園で、保護者からの支持も厚い様子がうかがえた。（現在は公開されていません）



すぐに頭をよぎったのは、この事故を知って**「ウチの園は大丈夫か？」**と思う自園の保護者もいて当然だということだ。なずなの森ほど豊かな自然は無いが、園庭の木登りや手作り遊具、無造作に転がっている丸太や、ぶら下がっているロープなどを思い浮かべると、ふつうそう思うだろう。僕自身も同じ思いだ。

事故を受けて行政からは「安全管理を徹底してください！」と文書が届く。

「リスクから学び取る」育ちのために、**楽しくチャレンジできる環境を保障したい！という思いと、安全管理のせめぎ合い**は常に僕の中で戦っている。

新たな木登り場をつくった



木の上でご満悦の3人

まさに事故報道の前日には、園庭の白樫の木が「ちょうどいい具合に登れるような状況になってきたので」登るためのルートを思案していた。

僕が園庭で何か考え事してると、勘のいい年長児がやってきて「こんどはナニつくるの？」と聞いてくる。今回は、難易度の高い木だから、どうやったら子どもたちが登れるのか思案していた。さじ加減は**『自分の力で身体を引き上げられる子どもが、ある程度の緊張感を持って考えながら登って、何度かは失敗し、ついに達成感を味わえる！』**というところを狙う。

ありがたいことに、園長が何かやってるぞ！オモシロいことが始まるのか？と群がってくる子どもたちは身体能力の高い子が多い。さっそく試作したロープをつかんで登ってみてくれる。

子どもが登るルートをさがす様子を見て、どこらへんが難しくて危ない箇所か、つかむ枝の滑りやすさや引っかかる小枝の状況などもつぶさに観察する。落ちたときはどこに落ちたらダメージが少ないか･･･そんなこともあれこれ推測しながらしばらく観察を続けた。そしてロープの長さや位置、結び目を調整し、落下したときに衝突しないように余計なものをどけ、枝を切ったりした。

余談だが、一人の女の子が木から飛び降りるときに、細い枝にズボンが引っかかって派手に破れてしまった(^_^;)。本人は気がついてなかったが、その事をいうとサーッと顔色が曇ってしまった。「お母さんには一緒にごめんねするね」と言って、お迎えの際にお母さんにお詫びしたが笑って「いいですよ」と言ってくれた。ありがたい！こんな保護者の皆さんがいるから、冒険もできるのだ。



年中さんも登れたよ

ある程度完成した木登りロープ。しばらくは子どもたちの様子を観察して、側についていなくても大丈夫と思えたら解禁となるんだけど、今回はちょっと難易度が高いので、自分がその場を離れるときはロープの位置を登りにくく設置し直した。力のある身の軽い子どもしか登れなくなる。**「木登りしたいから！ロープを結びかえて！」**と訴えに来る子が何人もいたが、僕がずっと木の側についているわけにもいかないので「がんばってチャレンジしてみて！」と言って他の仕事に勤しむ。他の保育者にも安易にロープの設定を変えないように言っておく。**力のない子どもが簡単に登れると事故の確率が高まる**ことは園の保育者は共通理解していて、安易に手伝ったりはしない。登れるように力をつけろよ！とエールを送りながら励まし、見守るのだ(^o^)/

園の考えを伝える

ニュースを見て「ウチの園は大丈夫か？」と不安をお持ちの保護者もいるだろうから、５月の連休明けに発行された園便り「はらっぱ」（マガジン28号参照）のコラムに、「原町幼稚園の園庭の手作り遊具や木登りはできる限り検証していますよー、決してイケイケでやってるわけではありませんよー」というアナウンスをした。そして、入園前から説明してあることだけど、リスクに対する園の方針を再度記載した。その後保護者から不安な声が上がることも無く、子どもたちは今まで通りの園庭で毎日遊んでいる。機会をとらえて発信していくことは、表面的な安全だけを追い求めないようにする姿勢を維持する上で大切なことだと考える。

付け足しておくと、**皆がルールを理解して遊ぶことで安全が担保**されている。たとえば、

・すべり台の下から登ってもいいけど上から滑る人がいたらそちらが優先。
・ブランコはどんな乗り方をしてもいいけど、前から人が来たらぶつからないように止める。
・木登りのとき、下に台を置いても手伝ってもらってもいけない。
・かばんを持ったまま園庭で遊ばない。遊具の上に縄跳びやおもちゃは持って上がらない。･･･

など様々なルールがあり、どこにも書いて貼っていないけど、その都度保育者が声を掛けて子どもたちに浸透していくようにしている。**ルールが無ければ安全は担保されない**のだ。

想像力と推測力が予防の要

それでも事故は「まさか」というところで起こる。絶対に起こしてはいけないという意識は常に持っている。そのためには、起こってしまった事故から学び、隠れているハザードを潰していく作業が必要なのは言うまでもない。その作業なしでは、どんなに危険箇所を取り除いて安全と思われる環境を造ったところで「まさか！」の起きる確率を下げることはできないだろう。

埼玉の事故から推測できる落ち度は３つ。（自分達の教訓のために）
一つ目はトラロープを使ったこと。固くて滑るので遊具としては適さないし使わない。

二つ目はブルーシートで滑る環境なのにロープが取り付けてあったこと。**ロープの設置自体が問題なのでは無くその扱いがマズかったと思う。**滑るというのは不測の動きが予想される場所だから、そこにロープを持ち込んだら、必ず大人がついていなければダメだ。そして大人がその場を離れるときはロープも取り外すぐらいの危機管理能力が必要だったのだ。

三つ目は、職員の配置だ。当時は園児34人に保育士６人が園庭に出ていたという。幼児だったら人数的には十分だったと思うが、何人の保育者が危機管理という意識を持っていたのか。意識が低い保育者が何人いても安全は保てない。通常なら危険と思われる箇所に人を配置するのだが、この場合乳児が混じっていたかや園庭の広さなど詳しいことがわからないのでなんとも言えない。
自園でも、日々園庭の危険箇所や配置箇所をチェックすることが必要だ。
とにかく、危機管理能力は、想像力と推測が要になる。

リスクを経験しないリスク

なずなの森は、子どもたちが豊かな自然の中でイキイキと遊んでいるんだろうなと想像できる園だけにほんとうに残念な事故だった。
このような事故が起こると、過剰に対応してしまい、とにかく安全な環境をつくることが目的となってしまうのが昨今の傾向だと感じている。

しかし**子どもたちがリスクに対応する力を身につけるためには、どんな状況が危なくて、そこではどこに注意し、どう行動しなければならないか･･･という経験を重ねることが必須**であり、頭で知るだけでは不十分なのだ。

幸い大事には至らなかったが、先日年長児が「オレ、ブランコで両手離せるぜ！」といって実演しようとして落下して痛い思いをした。やってみたけど無理だった･･･もうしない。単純にこの積み重ねが必要なんだと思う。（その子はまたチャレンジするかもしれないけど(^_^;)）

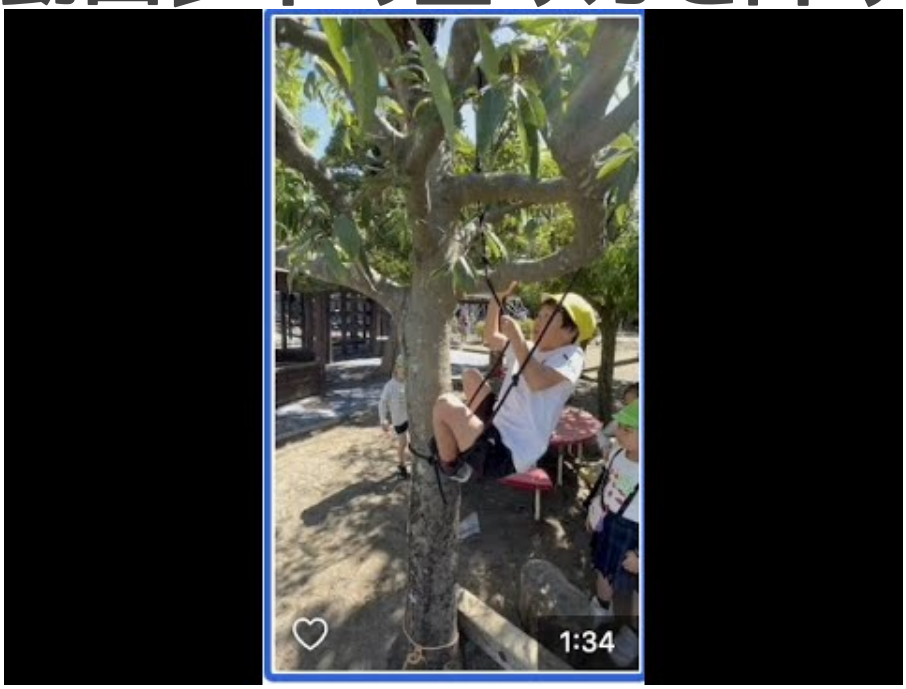
生活の中で小さいリスクに出会わなければ、子どもたちは「知る」ことも無いまま成長して、園や学校という安全な囲いの中から出たときに思わぬ事故に巻き込まれることもあるだろう。夏になると川や海で子どもの溺死事故が毎年報道されるが、そのニュースを聞く度に、子どものときに水遊びで水に注意する経験がなかったのかなあ、と思わずにはいられない。

子どもを育てる我々は**『リスクを経験しないリスク』**があることを認識し、保育者の管理下で子どもたちに必要な経験（危険への小さなチャレンジ）をさせていくことが教育の一つの意味だと考えるけど、この考えが今の世の中に受け入れられるかどうか、確信が持てなくなってきている。

NANA ちゃんの登り方



〔動画〕木の登り方と降り方



動画が再生されないときはURLをブラウザーにコピーして下さい→https://youtu.be/pclpVq12q4s

原町幼稚園　園長　鶴谷主一（62歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育
（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育
（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）
第49号　うんちでたー！（2022.06）
第50号　子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ
（2022.09）
第51号　子どもが育つ園庭・その2 砂場（2022.12）
第52号　子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと
Tonka（2023.03）
第53号　リスクと安全・園庭編（2023.06）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

福祉系対人援助職養成の現場から 53

西川 友理

『実習マニュアル』について

社会福祉士、介護福祉士、保育士など、いくつかの福祉系対人援助職養成校で勤務をしてきました。そのほとんどの学校には、「実習マニュアル」がありました。

これは、学生が実習に行く前に渡し、実習に関する教育指導をする手引きとなるものです。実習のスケジュールや必要な手続きから、注意点、守るべきルール、心構えなどをまとめた冊子です。

養成校によって『実習マニュアル』『実習の手引き』『実習に向けて』など様々なタイトルで編纂されます。それぞれの養成校ごと、資格の種類ごとに、様々な工夫が施され、これを見るだけで各養成校の先生方の熱い思いが感じられるものも少なくありません。

私も実習を担当することが多かったため、「実習マニュアル」の作成によく関わってきました。時には責任者としていちから全て作り上げることもありま

した。苦労して作りあげたものは、1年ごとにすべて見直し、改訂を繰り返します。

「養成システムが変わっていないなら、前年と同じものでいいじゃないか」とも思われるかもしれませんが、この連載で何度も書いているように、専門職養成はまったくもって社会情勢の影響を大きく受けるものなのです。時代に合わせて福祉現場の状況も変化し、学生の状況も変わるため、毎年、改訂が必要になるのです。

時代に合わせたマニュアル改訂

例えば15年ほど前、SNSが普及し始めた頃には、情報管理についての注意喚起を新たに書き入れました。対人援助職の守秘義務については、どの資格の法律でもかなり厳しく規定されています。ですから、それまでも守秘義務については「公共の場所で実習記録を広げない、実習先であったことは、家族にも話さない、電車やカフェで話すなんてもってのほか」といったことを伝えていたのですが、SNSにおける情報管理は新たなトピックとして取り上げなければならないくらい、大きな出来事でした。

また御存じの通り、SNSにも流行りすたりがあります。2000年代中頃にはmixiが流行っていましたが、やがて衰退しました。（ただし、最近またじわじわと注目を浴び始めています。）

Facebookも一時期は流行っていましたが、数年前に実習での出来事をFacebookとかに書き込まないでね！と伝えると、

「そんなんやってる学生なんかほとんどおらんのに‥‥今Facebookやってる人は、ビジネスか、おっちゃんかおばちゃんばっかりですよ。」

と学生から指摘されました。

2023年5月現在はInstagram、Twitter、Snapchat、LINEあたりの使用についての注意が中心です。Twitterは閲覧者が特定されたアカウント（いわゆる鍵アカ）でも書いちゃダメ、LINEも特定個人とのやり取りだけどダメ…等、アプリごとに注意する点を話します。どんなアプリかを把握しないと、十分な対応が出来ません。

3年前、新型コロナ感染症が始まった頃の実習指導の混乱は、こちらの連載で何度か紹介させていただきました。この時、実習マニュアルも当然大きく書き換えました。体調不良や発熱の際の対応、通院の報告、実習復帰に向けた手続きなどについて、また、感染予防行動の喚起とその方法、実習前の行動制限のありかた、実習前の行動記録のつけ方など、様々に書き足す部分がありました。

コロナ感染症の影響が少なくなってきた今年度は、どの部分をもとに戻すか、どの部分をコロナ禍と同じにしておくか、という検討を加えました。

学生の状況に合わせた改訂

それから、実習期間中のアルバイトに

ついても、ある時期から書き方をかえたことがありました。

実習期間中という心身ともに負担の大きい時期に、学生のアルバイトを禁止している養成校は少なくありません。私が関わった養成校でも、実習を禁止しているところがほとんどでした。

しかし、ある時期から「実習中のアルバイトは絶対に禁止」という書き方を控えるようになりました。

当該学生のアルバイトの収入がなければ、経済的に成り立たない家庭が散見されるようになったためです。

「実習中にアルバイトに入れないと、生活していけないんです。」

「せめて実習が休みになる週末だけでも、アルバイトに入らせていただけませんか。」

と、親御さんともども、実習中のアルバイトを許可してほしいと依頼されたこともありました。

ここ数年は特に新型コロナウィルス感染症対策という事もあり、「実習の一定期間前から実習が終わるまでは絶対に接客のアルバイトはしないでほしい」という要望を出してくる実習先もありました。赤ちゃんのいる乳児院、免疫力の弱い利用者がいる障害者施設など、様々な事情にある利用者がいる実習先があります。実習先施設がおっしゃることは、確かに道理が通っています。とはいえ、家庭に事情があるお家があるのも、わかります。

そこで近年は、入学してすぐの頃に「実習中はアルバイトが出来ない」ということ、さらには、「実習中は交通費や給食費、宿泊の場合はリネン代なども必要」ということを伝え、実習期間に向けて計画的に貯金するように指導しています。

マニュアルに現れる

学生指導の姿勢

また、こんなこともありました。

10 年程前、ある児童養護施設に、実習指導に行った時のことです。玄関先にいた子ども達に「こんにちは」とあいさつすると、「だれー？」という質問。

「〇〇大学の実習のお姉ちゃんの先生ですよ。」

と答えました。するとその子どもは、

「ああ、〇〇大学！」

と、笑顔になり、大声で言いました。

「2 年前にチーズ捨てて叱られてたお兄ちゃんがいた大学やんな？」

は？！と驚いた私。うろたえて思わず聞き返しました。

「そ、そそ、そうなの？！いやぁ、知らんかった、そんなことあったんやね！？」

「そうそう、こっそり隠してたみたいでな、でもゴミ箱に入れる時に見つかって…」

楽しそうに全て説明してくれた彼女です。

なんと恥ずかしい！！2 年も前の事なのに、子どもって覚えてるもんやなぁ…。

これに対して、

「あー、あったなぁ、そんなこと！あの

お兄ちゃんそういや〇〇大学やったなぁ。」
と、その子どもに話しかける実習担当の職員の方。子どもが覚えているんだもの、そりゃ実習担当の職員も覚えているよね、そうだよね‥‥と顔から火が出る思いでした。

その時の印象が強かった私は、授業でも「好き嫌いは子どももしっかり見てるからね！」とよく言うようになりました。
そしてある年の実習の手引き改訂時、「子どもと一緒に食事をする機会も多いです。アレルギーでない限り、食べ物の好き嫌いは頑張って克服してから実習にいきましょう」と書き加えました。

それを見た同僚の先生が、「うーん‥‥？」と首をかしげました。
「先生、この一文は、消した方が良いんじゃないかなぁと、私思うんですけど‥‥」
「え、そうですか？だって子どもと一緒にご飯を食べることも多いでしょう」
「だって、嫌いな食べ物って、そんなに食べなきゃダメでしょうか…。西川先生、嫌いな食べ物、ないですか？」
「ないですっ！なんでも食べますよ！」と自慢げに答えた私。食い意地だけは自信があるのです。するとその先生は言いました。
「私、あるんです。私が実習生で、子どもと一緒にいる時にそれを出されたら、たぶん絶望的な気分になるくらい嫌いで…それでね、それ食べるのって、実習でそんなに大事でしょうか。」
‥‥大事かどうか、と言われると‥‥。
「…あんまり実習の本筋と関係ない…かな…。」
「でしょ。」
「うーん‥‥。一緒に食べる時に、平気な顔して食べなさいって言ってるんじゃないんですよ。苦手だけどお姉ちゃんも頑張ってるんだよーとか、そういう意味で頑張れっていうことで…」
「じゃあなおさら“克服していけ”なんて文章で書いたら、それが重荷になる学生もいるんじゃないでしょうか。」
「あー…確かに、そうですね…」

さっき、「なんでも食べますよ！」なんて、自信満々に答えた自分が恥ずかしくなりました。それはつまり、自分の鈍感さに気付かなかったという事です。食べ物の好き嫌いがないからこそ、無自覚に学生に強いていたのではないか。嫌いな食べ物があるという事が、実習の学びに支障をきたすなら、それは何だか本末転倒ではないか‥‥。
私はこの一文を、実習の手引きから消しました。

そして最近、ある認定こども園で、「子どもが給食を食べきるまで 4 時間も子どもを座らせて、失禁させる」といった事例が、虐待事案として報道されました。（そうか、「好き嫌いなく何でも食べる」に価値を置きすぎていると、こういうことを無意識に強要する保育士になる可能性もあるのか…）と、いたく感じ入りました。
そしてその価値観はそれまで私が無意識に、というか無批判に、良いと考えて、学生に強要していたものでもあると

気づかされたのでした。

このような機会を得て、自分自身の養成教育の在り方も変化していきます。

マニュアルを見直す

養成教育を見直す

実習マニュアルの作成は、自分たち養成校の実習教育の在り方を見直すチャンスとなります。保育士、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士など、これらはみな、国から要請のあり方が規定されており、実習についても最低限の基準が記されています。しかし、それはミニマムな規定であり、それらをふまえて、「では、本学はどのような養成をしていこうか」「どんな風に学生に伝えようか」と考える必要があります

実際の作成は、現状の学生の様子と、実習先現場の様子をアセスメントすることから始まります。今の学生の状況に合わせてどんなものを作るのか。そして、実習現場の状況を鑑みると、何に対してどんなふうに気を付けなければならないのか、そしてそれらをどう伝えるか

そしてなにより、自分の養成教育の在り方を見直す機会にもなります。実習マニュアルを作成する段階で、皆でチェックをすることで、前述したようなちょっとした文章表現ひとつに、自らを振り返る機会を得ることが出来ます。

実習マニュアルがあるから、全ての実習がうまくいくというものではありません。あくまでもマニュアルはマニュアル、個々の学生の事情にすべて対応できるとはいえません。

しかし、学生本人が、そしてかかわった教員が、困った時に見直して、何か考える指針、拠り所になるようなものにしたいと考えています。

というわけで例年、実習マニュアル作成時には、

「よぉし、また今年もこの季節が来ましたな…！」

と腕まくりして取り組むのです。

参考）「三重のこども園、給食を４時間強要し失禁させる…虐待疑いで立ち入り調査」読売新聞 2023 年 5 月 9 日

ああ、相談業務

～ 緑さんの話 ～

13

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

子育ての相談を受けていると度々聞くのが、我が子をかわいいと思えないという話である。生まれてすぐの赤ちゃんは確かに、小さくて弱弱しくて、赤黒い感じで、あまりかわいいというイメージではないが、ちょっと時間がたつとかわいらしくなってくる。初めての子育ては必死で、かわいいと思う間もないかもしれない。そんな新米母親に、「かわいいでしょう？」などという言葉は、そう思えないためにダメな母親だと責められているように感じてしまう。

今回は、我が子をかわいいと思えない母親の話である。

家族

緑さんは２４歳。スナックで働いていた時に、今の夫、卓也さん３６歳と知り合い結婚した。卓也さんは、若いが会社経営をしていて、かなり金銭的にはゆとりのある人である。結婚してすぐ妊娠。真帆ちゃんを出産。真帆ちゃんは今２歳である。

緑さんの実家は、母親４０歳、弟１６歳（高校２年）、妹１２歳（中学１年）の母子家庭で、母親はスナックの雇われママをしている。母方祖母（６０歳）は母方叔父（３８歳）とともに近くに住んでいて、パートでスーパーに努めている。祖母も母親も母子家庭で、祖母と祖父は離婚、母親と父親とは未入籍で、緑さんは父親に会ったこともない。母方曾祖母（８５歳）もまだ健在で、祖母の兄（６５歳）一家と東北で暮らしている。曾祖母にとって真帆ちゃんは第一号の玄孫である。若くして子を産んでいるため、玄孫までも見られるのは幸せな曾祖母だろう。曾祖父は１０年位前に亡くなっている。

相談の始まり

緑さん（以下彼女）とは、１歳半健診事後の発達相談で出会った。１歳半健診で、言語発達が気になったため、保健師が半年後の確認としたのである。言語発達が気になるケースとは、健診場面ではっきりとした言葉が聞かれない、「〇〇はどれ？」などに対しての指差しが無いか曖昧など、言語理解や発語などに問題がある場合、或いは、かなり遅れが顕著だが、保護者が「家では話す、指差しも間違いない」などと言って、遅れを認めるのが難しそうな場合に半年後の様子確認で引っ張っていく場合とがある。それ以外に半年後の再検査とするケースは、母子関係が気になる場合である。母子関係が気になっても、母親の問題として再検査につなぐとは言えないので、保健師や我々発達相談に関わる者は、何とか別の理由をこじつけて再検査に引っ張ることもある。この母親の場合は、後者が主であったが、言語発達にも少々気になるところがあり、発達相談となった。

発達相談の日、母子で来室した。彼女は髪は金髪できれいに化粧をし、ほっそりとした体形が良くわかる、ミニスカートに胸の大きく開いたシャツで、見た目に水商売かなと思わせるような、やや派手目の服装であった。一方真帆ちゃん（以下本児）は、女の子だが、彼女とは対照的に地味な紺とグレーの上下で、一瞬男の子かと思うような服装。髪型は短髪で表情も少ない子だった。

相談経過

発達相談では、児の発達検査をする一方で、保護者に、家族のことをはじめ、児の家での様子、遊びや関わり方、食生活や睡眠などについて聞いていく。特に、筆者は家族療法を学んでいる関係で、家族については初回に念入りに聴いている。母子家系というか、代々母子という家族は度々見かけるし、若くして母親になるのも、代々ということがある。

彼女は、弟や妹とは父親が異なるそうで、実母は１６歳の時に、同じ高校の同級生との間に彼女を設け、弟は別の男性との間で生まれ、更に妹もまた別の男性との間に生まれたという。弟が生まれた時、彼女は８歳である。小学校３年生になったところだったそうだ。赤ちゃんは可愛かったが、実母が付き合っていた男性は嫌いだった。実母はいつもきれいに着飾っていたが、子どもたちにはあまり目を向けていなかった。８歳の子が弟の面倒を見ていた。実母は、夜の仕事をしていたので、近くに住んでいる母方祖母がご飯など家事をこなし、夜は寝るまでいてくれたが、実母がまだ帰らない夜中に赤ちゃんが起きると、仕方なくおむつを替えたり、ミルクを与えたりしていた。それが日課で、彼女は仕方がないと思っていたそうだ。今でいえばヤングケアラーである。

実母は男性関係が長続きせず、弟が生まれてすぐその男性とは別れた。というか逃げられた。これで男性には懲りたのかと思ったものの、また数年後に違う男性と付き合いをはじめ、妹が生まれることになった。妹が生まれた時、彼女はもう小学校卒業の時で、小学校の卒業式と中学校の入学式の日は、実母も祖母も来てくれたのがうれしかったと話していた。

中学に入ってからは、部活に入りたかったものの、弟や妹の面倒を見なければならないため、帰宅部となった。日中は保育園に行っていたので、実母が起きない時は、朝弟を保育園に送っていき、その足で学校へ。帰りは実母が迎えに行くことが多かったが時折彼女が迎えに行っていたそうだ。

１年ほど、まだ保育園に入れなかった妹だけは祖母宅で預かってもらっていた。学校が終わると祖母宅に行って妹を引き取り、家に帰って家事をするような生活になった。１年後には、

妹も保育園に入った。祖母は実母に対し、だらしがないとか、次々子どもを産むなとか、注意をするものの、実母は聞く耳を持たず、嫌なことを言われた腹いせを、彼女にするようになった。

家事はほとんど彼女がやることになっていて、学校から帰ると晩御飯の支度、洗濯や掃除、片付けが待っている。その間、実母は買い物と保育園に弟を迎えに行き、帰宅すると仕事に出る準備に入る。実母が買ってきたものを使って、晩御飯のメニューを考え、適当に料理をする。おかげで料理はある程度なんでもできるようになったと笑っていた。

実母が出かけた後は、弟妹の面倒を見ながら、宿題をやったり、勉強をしたりしたが、だんだんそれも面倒になり、宿題を忘れた時は学校を休むという形から、学校に行きにくくなっていった。中学校は１年だけ半分くらい行ったが、その後不登校になり、２、３年も修学旅行も行かなかったそうだ。家で家事、育児をすることで、実母からは学校に行けとは言われないものの、家事・育児については実母から叱責されることが多くなった。口答えをすれば叩かれることもあった。

そんな実母を嫌いつつも　弟妹が寝てからの夜中は、一人の時間を楽しむことが出来たそうで、見たいテレビの録画を観たり、ゲームをしたり、漫画を読んだりしていた。

中学３年の時に、実母がまた別の男性と付き合い始め、その男性からいやらしい目で見られるようになり、ある時酔っぱらって抱きついてきたのに、実母が笑って止めもしなかったことをきっかけに、家を早く出たいと思うようになったそうだ。中学卒業と同時に家を飛び出し、年齢を偽って、水商売に入って自立したという。弟妹と離れるのは寂しかったが、あんな家にはいたくないという思いの方が強かった。祖母宅に行くことも考えたが、連れ戻されるだろうと思い、最初は友達の家に泊まらせてもらったが、その後寮のある水商売の店に勤めるようになった。給料が高いところを目指したら、こうなってしまったという。

実母から離れることが出来たが、あれほど嫌っていた実母と同じような仕事に就いた自分が、大嫌いだったという。

夫である父親とは、水商売をしているお店で知り合ったそうだ。それまでに、他の男性たちとの間で妊娠・堕胎を三回ほどしたという。夫と知り合って、結婚となったときに、子どもは欲しくないと思っていたが、夫がどうしても欲しいというので仕方なく本児を産んだそうだ。夫はもう一人ほしいというが、本児のことがかわいいと思えないのでもう一人など無理だという。そして、母親として、本児を可愛いとは思えない自分を責めていた。夫が本児をかわいがるのを見ていると、無性に腹が立ち、あとで本児をつねったりして泣かすことがあった。嫉妬である。頭では、「自分が生んだ赤ん坊に嫉妬しているなんておかしい」とわかっていても、止められなかった。

この長い話を、相談で聞きながら、彼女自身の育ちに問題があることは明白であったので、まずは、よく頑張って生き抜いてきたことをほめることから始めた。

祖母が手伝ってくれたとはいえ、わずか８歳から、下の子の面倒を見て、そうしないと認められない家で育った彼女は、実母から可愛がられた記憶がほとんどなく、唯一の記憶が小学校の卒業式と中学校の入学式に実母が来てくれたことである。実母との愛着関係がしっかり築けていないのだ。実母は子どものことより、男性に走り、家のことは祖母と彼女に任せっきり。加えて、実母の彼氏が抱きついたりすることを止めることもできない。実際に強制的に性的関係を持たされたのかどうかについては、言葉を濁したので、おそらくそういうこともあったのだろうと思われた。

家から出て、自立してきたことを認め、何度も辛い気持ちを乗り越えてきたことを褒めていると、彼女は大粒の涙を流し、最後は大泣き

になった。慌ててティッシュボックスを渡すと、次々と鼻をかみ、１ボックス使い切るほどであった。

夫には全部話したのかと聞いてみると、実母を嫌っていることは伝えているが、どんなことがあったかまでは話していないという。彼女が優しい夫に出会ったことは、今まで頑張って来たことへの、最大のご褒美なのではないか、本児も、言葉の発達は心配するほどではないし、ちゃんと育っていると思うと伝えていくと、少しほっとした様子になった。今までここまで泣いたことはないとも話していた。大泣きすることもできないほど、我慢に我慢を繰り返してきた彼女への労いを繰り返した。そして、過去のトラウマの処理をし、過去ではなく、未来に向かってどう生きていきたいか、という話になっていった。

本児については、母親への愛着がやや弱いものの、困ったときの安全基地としての役割が果たせていると伝えると、母親もほっとしたようで、本児をしっかり抱きしめて、「ごめんね」と言っていた。

発達相談に来てもらったのが、本児が２歳になったときで、その半年後に私設事務所のかかしの方に来てもらった。勿論無料相談である。１年後、母親は、化粧も自然な感じになり、服もごく一般的な、若いお母さんらしい格好になっていて、本児は髪を伸ばし、可愛く結って、服もかわいらしいピンク基調の花柄のスカートとシャツであった。

母子ともに表情もよく、本児の言語面も格段に伸び、順調であったので、終了となった。

まとめ

実母との関係が悪いケースが結構多い。子どもを産むとき、産後の扱いを実母に頼むことが出来ると良いのだが、実母とは一切関わりたくないと言うのだ。義理の父母にお願いできる関係性がある場合は良いが、それも難しいとなると、初めての子育てへの支援は、行政が行っているサポートのように、子育て支援センターの活用や、母子あるいは母子分離で一泊泊まったり、家庭にサポーターが行って手伝ったり等が考えられる。今でこそ、こういったサービスが出来てきたが、以前はこんなものもない。

初めて母親となったとき、自分自身がどのように育てられたかが、子育てに潜在的に影響を及ぼす。母子関係に亀裂があると、母親として我が子に関わるときに、またそこに亀裂が生じることがある。本ケースはその一例である。

だれにも自分の辛さを話せず、ひたすら耐えていた時代を振り返り、労い、収めてあげることが、母親として前を向いて生きていくうえでとても重要になる。

昨今ヤングケアラーの問題が大きく取り上げられるようになった。子どもたちが当たり前のように、弟妹の世話をし、精神や身体に障害を抱えた保護者の世話をし、貧困にあえぎ、学業や部活動、やりたいことを頑張ることが出来ないのは悲しいことである。しかし、日本の文化というか、家族で支え合うのは当たり前という考えのもと、ヤングケアラーであることの問題性はあまり認識されていない。そんなことはずっと前から言われていたことで、今に始まったことではない。

本ケースは、実母自体、離婚家庭で育ち、弟の面倒を見て育ったのではないかと思われ、長女であるだけで、家事・育児といったことを担わされてきたのだろう。だから、緑さんが家事・育児に時間を取られても、当たり前だったのだ。

次々と男を変えていく実母も、また寂しい人だと思う。どこでこの愛着形成不全の連鎖を断つか。目の前の母子を救うことから始めなければならないだろう。

父母の離婚に巻き込まれて辛い時間を過ごす子どもたちがいる。父子家庭では長子が家事・育児をするのは当たり前になっている。最近では子を置いて出ていく母親も増えている。

子どもたちは何のために生まれてきたのか、自分の存在価値は何なのだろう、そんな悩みを抱えながら思春期を送る。十代の自殺者が、年間５００人を超える今の時代、こども家庭庁は何をしてくれるのだろうか？母親たちが無料でカウンセリングを受けられるようにするとか、教育の無料化はもちろん、保育園の充実、ヘルパー活用の充実、レスパイト・ケア（注）の充実など、やるべきことは沢山ある。そしてそうした支援に携わる人たちへの支援も大事である。限られた予算の中で、お金をばらまくのではなく、もっともっと現実に則した支援を政府主導で行ってもらわねば、子どもたちを救えないし、子どもは増えないだろう。

本ケースは、母親が抱え込んでいた闇を吐き出すことで、そして認められることで回復し、母子関係が改善された、いわばうまくいった例である。虐待にあった人は、人を信じることに抵抗がある。自分の闇を吐き出すことにも抵抗がある。本当の物語を聞き取ることが出来るか否か、そこには、他人に対し拒否感を持つ人とどう関係性を築き、心を開かせるかという支援者側の問題がある。どんなことでも受け止められる器の大きさと、共感力、相談者にとっての安心・安全感の提供がキーになるだろう。受け止め、認め、褒めること、これが基本なのだ。

注：レスパイト・ケア・・・レスパイトとは一時的中断、延期、小休止などを意味する。レスパイト・ケアは乳幼児や障害者（児）、高齢者などを介護（育児）している家族に支援者が一時的に介護（育児）を代替し、リフレッシュしてもらうサービスのこと。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第50話

水野　スウ

小さな上映会@紅茶の時間

5月の「紅茶の時間」で2回、小さな上映会をしました。映画監督・三上智恵さんがいま製作中のドキュメンタリー映画「沖縄、再び戦場（いくさば）へ」（仮）、その番外編のスピンオフ映像を、集まってくれた人たちと一緒に家のテレビで見たのです。

小さな見る会をしようと思ったわけは、三上智恵さんのこの文章を読んだから。

ウェブマガジン「マガジン9」（2023/3/22）
「三上智恵の沖縄撮影日記・第117回　敗北を撮るということ〜石垣島に陸自ミサイル基地完成」
https://maga9.jp/20230322-1/

沖縄本島の先にある宮古島、与那国島に自衛隊の基地がつくられ、この3月には石垣島にも。この島にミサイル基地ができたことを、「これで防衛の空白が解消され抑止力が高まる」と述べた陸上自衛隊トップ、その言葉をなぞるように「南西シフトの空白解消」と報じる本土のメディア。

中国が台湾に攻め込む「台湾有事」に備えての抑止力、と説明しているけど、防衛費倍増といい敵基地攻撃能力を持つことといい、軍拡レースにがっつり参加している今の日本は、戦争抑止というよりも戦争準備に邁進しているかのように私には思えます。

島で暮らす人たちが、ミサイル基地ができることをどう感じているか、マスメディアから詳しく知らされることはまず、ありません。だから知らない、知らされていない人がほとんど、もちろんこの私も含めて。

砂を噛む思い

三上さんはマガジン9の文章の中でこんなふうに書いています。

南西諸島の島々は長い間、「国防上の空白」などと位置付けられてこなかった。誰でもウェルカムな南の島々、日本中から世界中から愛される海と空が美しい島。それをむさぼり楽しんできた側の人間が、一方で「無防備な島」「ちゃんとして

くれないと私たちにも被害が及ぶ」と評するのは、あまりにご都合主義ではないのか。裸で泳ぎ、トライアスロンで島を一周して満喫し、帰りに「でもミサイルの一つは置いておいた方がいいよ」と言い残して帰る。そんな国民から「国防上の空白地帯」と名指しされるのは、まさに砂を噛む思いがする。

このくだりを読んだ時、私の中でほんとにジャリジャリと音がしました。沖縄の美ら海を消費するだけして帰る、そして、沖縄がある程度犠牲になるのもしかたないことだ、そんな気持ちがひょっとして自分の中にもありはしないか、そう問うてゾッとしました。

映画の完成は来年だけど、三上さんはとてもそこまで待てない。何よりいま沖縄で起きていることを知ってほしい。戦争では基地や武器がある場所が最初に攻撃される。つまり島にミサイル基地ができるということは、台湾有事の際、真っ先に島が攻撃目標になる、島が戦場の最前線になる、ということを意味してしまうのです。前の戦争のときのように。

危機感を共有して、なんとか沖縄を戦場にさせないために、できたら自分と一緒に走ってほしい。そう願う三上さんは大胆な企画を立てました。この5年間に撮りためた映像の一部を新作映画のスピンオフとして45分動画にし、それを「見る会」をしたい人に無料で貸し出します、とアナウンスしたのです。

映画のようにわかりやすく整理されていない映像を公開することに、配給会社は難色を示したけど、三上さんはそれを説得。むしろこのやり方こそが肝だと。映像が素材だとしたら、会をよびかけた主催者は、自分でお皿を用意して、自分で塩胡椒なり味づけする必要がある。この映像が伝えたいことが、どうやったらきた人に伝わるのか、自分で考えざるを得なくなる。それってつまり、この映像によって、主体的にアクションする人が増えていくということ。

「映画監督として賞賛されるために撮影してきたのではなくて、次の戦争を止めたいという思いだけで続けてきた仕事」という三上さんが、この企画にこめた祈り。よしっ、紅茶でもしよう、ごくこじんまりサイズだろうけど、5人でも、というのなら私にもできる、とすぐに三上さんの文章の最後にある作品サイトから申し込みをしたのでした。

スピちゃん

紅茶の時間で小さな見る会します、とお伝えすると三上さんからメッセージ。

ちっちゃくて、スウさんの言葉が届く人数がいいと思います。このままの日本ではダメなんじゃ……と思いつつ、今ある団体のどこにも違和感を持ってるけど、じゃあどうしたら？と思ってる人、いま多いと思うんですよね。この動画には，すごく頑張ってきたけど、もう頑張れなくなってる人が出てきます。それを見た人の中から、それなら私もう少し頑張れるかも！と立ち上がってくれる場面をいくつか見ました。絶望の映像が希望を連れてくる……みたいな奇跡をこのスピちゃんが起こしてくれる。それに私はめちゃ期待しています。

「沖縄、再び戦場へ」のスピンオフと聞いて、見る前から重い内容を覚悟しているけど、その映像を三上さんは、スピちゃん、って呼ぶんだ！　そうか、三上さんにとってこの生映像は自らの分身。三上さんの代わりに全国へ出かけ、沖縄の今を知らせる伝令役。だからきっと、頼んだからね、という願いを込めて、三上さんは「スピちゃん」って大切そうに呼ぶんだ。

見た人たちとスピちゃんの間にどんな化学反応が起きるのか、絶望からどんな希望を見いだせるのか、私もその現場に立ち会いたくなりました。

1回目の見る会

申し込みをしてから2週間あまり、5月の連休中にスピちゃん、こと、スピンオフ作品見る会1回目を。ちっちゃい会と予想してたら意外や、16人も足を運んでくれました。うちわけは、小学生1人、中学生2人、20代2人——いずれも親子で参加の3

組。それに50代〜70代までと年齢層も幅ひろく。

見る前に私から少しだけ注意点を話しました。今から見るのは映画じゃなくて、映画になる前の生素材。それを無料で見せちゃう、っていうくらい三上さんは沖縄の今を知ってほしいんです。映像の中に出てくるのは、宮古島と与那国島と那覇。基地に反対する人たちと自衛隊。那覇での避難訓練や集会の様子。ミサイル基地ができたばかりの石垣島は登場しません。映像にはナレーションもBGMも解説もないけど、テロップはついてるから、誰がいつ、どこで、話してるかはわかる。それでもわかんないとこあったら、見た後で話しあいの時間を持つのでどうか質問してくださいね。それじゃあ見ましょう。

45分映像の中には——宮古島にできたミサイル弾薬庫と、そこから数分の所に住む人の言葉。去年11月の日米合同軍事演習で、小さな与那国島の公道をはじめて走る戦車の映像。ずっと基地に反対してきたけど、必ず止められる、という確信がもう持てない、という人。自分が署名活動をしたことで、署名した人に圧力がかかったのを知って心苦しく、もう運動にはかかわらない、という人。基地の前で自衛隊と対峙する人、弾薬が運びこまれる港（それは今まで当たり前に乗り降りしてきた民間の港）で声をあげる人たち、すわりこんで警察に排除される人たちの中には、沖縄の平和運動のリーダー的な存在である山城博治さんの姿も。

感じたことを言葉にする

見終わって、私がお茶をいれようと台所に立っている間、誰も言葉を発しない。しい〜ん。あれ？とカウンター越しに見ると、みながみな、アンケート用紙（DVDと一緒に映画配給会社の東風さんが送ってくれた）に熱心に何か書きこんでる最中でした。お茶が行き渡ってから、1時間あまりフリートーク。

・辺野古は気にしてたけど、宮古島がこんなになってるの全く知らなかった。家からたった200メートル、目の前に弾薬庫！
・三上監督の「標的の島」を見た時、三上さんが、「標的」は沖縄のこととみなさん思ってるけど、標的は日本ですよ、と言ってたの思い出した。
・具志堅隆松さんの言葉が刺さった。「99%戦争させないことに力そそぐのが政治家の仕事。残り1%がシェルターというならわかるが、まずシェルターありき、は順序が違う。シェルターは戦争を前提にしてる」って。
・シェルターに全員は入れないのが現実。だからシェルターに疑問持たないままでいるって、知らず知らず戦争に加担することかも。
・戦争がいつのまにかしのびよってる、って表現あるけど、全然違う。これ見れば、ずかずか、どしどし、だ。
・この前、金沢駅前のファッションビルの前に自衛隊の車と、いろんなサイズの自衛隊の迷彩服が置かれてたのを思い出した。子どもがそれを着て車に乗ってるとこ、親もよろこんで写真を撮る。慣らされていく空気みたいな。
・分断のタネはそこら中に。署名集めも、シェルターも、避難訓練に参加する人とデモする人の間にも。
・「戦争できる国をつくる空気」「恐怖にあおられてはいけない」って言葉があった。あおられてるかどうか、誰がつくってる空気か、見わける力が必要。
・自分でも小さいスピちゃん3回くらいできるかも。これ、私のことだと思うから。

小学生と中学生の参加があったのは、この子たちが春休みに家族で沖縄に行ったことがきっかけ。スピンオフ作品を見たいと思ったお母さんが全国上映スケジュールを調べて、一番近い会場が紅茶だったのです。子どもたちは見知らぬ大人の中で恥ずかしかったのか、トークタイムで発言はしなかったけれど、アンケート用紙にこんな言葉を残していってくれました。

親子でマイクを持って抗議している場面が印象に残りました。自分と同じ10代の人が、親と一緒に抗議しているのを見て、この問題が身近に感じたからです。最近、家族で沖縄にいったので、もっと身近に感じました。もし自分たちの町で戦争が起こるかもしれないと考えると怖くて、沖縄

の子どもたちが今その気持ちでいると考えると心が痛くなったからです。

すごい早いペースで戦争の準備がされていることが伝わりました。自然豊かできれいな沖縄に基地がどんどんつくられて、きれいな沖縄がどんどん消えていると考えると悲しくなりました。他人事にしてはいけないと思いました。

印象に残ったのはミサイルがきた時のためのひなんくんれんをしてる場面。見る前は、ひなんするためにはくんれんをすることが必要だとおもっていたけれど、動画でそれは戦争のふんいきをつくることだといってて、たしかにそうだな、と思いました。知らないうちに、沖縄の人々の反対の声も聞かずに戦争への準備が進められているということを初めて知り、そのことに危機感を持ちました。

2回目の見る会

その4日後、今度は9人でテレビを囲みました。見終わった後のトークタイムにはこんな言葉が。

・軍隊は戦争を連れてくる、と親からずっと聞いてた。まさにそれを見る思い。
・どうしようもない絶望感しかない。
・ウクライナや「台湾有事」への不安で、強い軍備で守ってもらわないと、って意識にさせられてる。
・娘が、私から孫たちにもっと沖縄のこと話してと言ってくれたのを思い出した。
・三上さんの「標的の島」を見た時、仲間たちとすぐ沖縄に行ったけど、その後は……。あの仲間たちとまたこれを共有したい。

一人の人が言った、どうしようもない絶望感。そうだよね。でも、そのきもち、一人で胸に押し込めたまま黙って持ち帰るより、言葉に出せてよかった。一人ひとりの声を聴き、私も感じたことを言葉にしながら、ああ、こういう時間こそ貴重だと感じました。

同じものを見て、見たあと話しあう。「意見」じゃなくていい。他の人と考え違ってていい。知らなかったって正直に言っていい。知らなくても恥ずかしくない。だってあの手この手の知らせない構造ができあがっていて、そのわずかな隙間をかいくぐる作業がこのスピちゃんだと思うから。

そのためにもミニサイズの見る会があるっていい。大会場で大人数の時よりは、たぶんハードルが低く、思ったこと自由に言葉にしやすいんじゃないかな。どんな会場でも、平らにものを言いあえる空気は、スピちゃんをする時の必須要素だと思います。

分断のタネ

埼玉で開かれたスピンオフを見る会に行った娘は、台湾企業で働いているという人からそこでこんな言葉を聞いたそうです。

「台湾の同僚たちに、大変なことになってるね、と話題を振っても、え、なんのこと？という反応が返ってくる。中国とすぐ戦争になるとかそんな危機感持っている人はほとんどいない。台湾には技術力があるから、そうそう簡単に中国は手を出せないというのが多くの人の認識。日本の今の状況は、なんだか意図的にあおられているような気がする」と。

そうですね、一部メディアで台湾有事が声高にいわれたり、戦闘のシミュレーションが発表されたりしているけど、そもそも台湾は無理にでも中国から独立しようとしてるだろうか。いや、それより現状維持を望んでいるはずで、騒ぎ立てているのは当事者でない日本の一部の人たちの方かも、と私は訝(いぶか)しむ。有事をあおるその出どころは一体どこで、それはなんのためだろう。

映像から見えてくるいくつもの分断。攻めてこられたら怖い、不安だから軍備を、なのか、そもそも争うこと自体をなんとしても避けたい、から出発するのか。そして、国や自衛隊をどうとらえているか。自衛隊やシェルターは自分たちを守ってくれるものと思う人と、そう思わない人と。自分がどこに立っているか、どんな情報を持っているかで、考えること見えることがまったく違うのです。

軍隊は住民を守らなかった、沖縄は日本のために差し出された——先の戦争でそのことを骨身にしみ

て感じている沖縄の人たち、それを聞いて育った人たちの目の前に、ミサイル基地がつくられていく。あの時と同じことがまた繰り返されようとしているんじゃないか——そう感じるのはどんなに怖いことだろう。

軍がスパイ視した住民を殺したこと。集団自決を迫ったこと。人々をマラリアの蔓延する島に強制移住させたこと。三上さんが「沖縄スパイ戦史」で描いたのは、まさにその一部でした。

そうはいっても、それは80年以上も前の戦争中の話、と思うでしょうか。たしかに今の自衛隊は軍隊ではないし、災害救助の時は人々の命を助ける仕事を懸命にしてくれています。でもそれが、こと「有事」となったらまた話は違ってくるのじゃないだろうか。だって自衛隊法3条に書いてある自衛隊の主たる任務は「我が国を防衛すること」であって、国民を防衛すること、とは書かれていないのだもの。

糸口はどこに

教師時代からフォークソングをつくって仲間と歌い、定年後の今も農業しつつ歌づくりを続けている人が、2回目の上映会のあと、こんなふうに。

> ほんとにどこに希望あるんだろうか、見て伝えていくことに希望あるのかもしれんけど……。選挙も教育もマスコミも、誰かがなにかしてくれると思わないことだね。要は、私は、どうするべきか、だ。友人隣人にどう話せるか、だと思う。
>
> 軍事費倍増当たり前、になってるけど、ほんとにそうかな？と語りかける。もしそうなら、予算の半分くらい防衛費にしたらいいんじゃない？と話しかけてみる。核兵器もったら平和で安全なの？なら、みんなが核兵器もてば平和なのかなあ？と問いかける。
>
> どこかに糸口を見いだしたい。関心ない人に何をいっていくのか、それ考えていかないとなあ。なんでも反対反対というより、ふつうの人たちに問いかけるような歌をつくれればなあ。

どこかに糸口、自分ごとになってくスイッチ。うんうん、私もほんとにそれを知りたい。一つ二つで簡単にそうなるわけないけど、私の場合はどうだったろう。思い返せば、いろんな人がいろんな場面でいろんな時に、社会のこと考えるタネを私に蒔いてくれたなあ。

たとえば原発のこと。自分の中にまだ関心がない時は、この人、どうしてこんなに一生懸命なんだろう、この人は何が気になって私にこれを伝えようとしてるんだろう、って疑問符付きで距離をとっていた。まだ全然、自分ごとじゃなかった。だけどその後、何度も、どうして？に遭遇するうち、だんだん私もその理由が気になってきて、本を読んでみようか、講演会に行ってみようか、勉強会してみようか、と。やがてバラバラだったものがつながり、うわわ、これって大変！とスイッチが入ったんだと思う。

タネを蒔いてもらっていた受け身の時から、自分ごとになっていく過程で、私は国に対しての幻想を持たなくなりました。こちらが黙っていても、国が国民のために何かいいことしてくれる、国民を守ってくれる、そんなわけないと思えたから、言い続ける、伝え続ける、書き続ける、そういう私が今いるのだ、と思います。

争うよりも愛しなさい

映像の最後に出てきた、那覇の街なかをデモする人々の長い列。その列の先頭に掲げられたスローガンは「争うよりも愛しなさい」。この言葉は若者からの提案でした。基地の反対運動をずっとしてきた人たちと新たに加わった若者たちとが、集会とデモをつくる会議の中で話しあいを重ね、その結果、この言葉に決まったのだそうです。

2023年5月19日の沖縄タイムズに、映像の中の集会で司会をしていた平良友里奈さんが寄せた文章が載っていました。

彼女は修学旅行生などにガマをガイドする30代。沖縄でミサイル配備が進んでいることを知らない人も多く、平和学習をしても戦争が確実に風化していることを感じてきました。その平良さんも、1年前までは基地のことをどう考えていいのかわからず「難しい問題」と片付けていたといいます。反対運動を

している人たちを見て、あんなことしなきゃいいのに、とも思っていたという彼女が、記事ではこんなふうに書いていました。

SNSでは辺野古ゲート前で大声をあげて反対し争う姿だけがピックアップされた画像や動画が、沖縄の子どもたちに拡散されている。真意が伝わらず怖い姿だけが映ってしまい、それを見ただけの子どもたちは怖い、近づきたくないと思う、これが事実なのだ。

本当の想いは、子や孫に平和な沖縄を残したいと真剣に考えて行動しているのに。どんなに正しい事をしていても、次の世代に伝わらなければ、そこで終わってしまう。いかに学びやすい空気をつくるのかはとても大切だ。

世代によって発信の仕方や心に響く言葉も違う。だけどどうか信じてほしい。若者の力を！　若者の心に届けばどれだけ大きな力になる事か。

「争うよりも愛しなさい」は、若者たちに人気のラッパーが歌う曲の中に出てくる言葉。この言葉がスローガンに決まるまで、昔から反対運動をしてきた世代と若者たちとの間でどれだけの対話と試行錯誤があったことだろう。デモの映像にかぶって「♪争うよりも愛しなさい、と忘れはしない、おばあの涙」の歌詞とメロディが流れていく場面、ずっと心に残っています。

絶望の映像がつれてくる希望

スピンオフ映像を見て、沖縄に押しつけられているのは基地だけじゃなかったことを痛感しました。「戦争」が、沖縄だけの問題にさせられている、本当は全くそうじゃないのに。戦争が始まってしまった時は、米軍基地のある横田基地だって日本国内にある他の基地だって当然、標的にはいっているのに。ああ、だから「標的」は島に限ったことじゃなかった、日本全体のことなんだ。それを三上さんはずっと前からしつこく伝えようとしていたのだった。

ここ10年ほどの日本の中で、社会や国の役に立つ自分でいなくちゃ、という空気、どんどん強くなっているのを感じてきました。それは今沖縄で起こっていることと、きっと無関係じゃない。戦争に向かおうとするどんな国も、そのスピードに差こそあれ、それまでの公共の意味をかえようとしたり、人々の意識を管理しようとしたりするからです。そのことを歴史が教えてくれています。

80数年前と今を比べてみる。あの頃の国民は何が起こっているのかわからないまま、どんどん後戻りできない状況に巻き込まれていったんじゃないだろうか。だけど今は、何が起こっているかを知らせてくれる人がいて、この国がこんな戦争の準備をしていることにリアルタイムで気づける。それは、先の戦争の時代にはありえなかったことです。

旧ローマ時代から続く警句「あなたが平和を望むのなら、準備せよ、戦争を」がまさに進行中のこの国。その空気に違和感を抱いても、どうしたら良いかわからないし、考えれば考えるほど逆に無力感でいっぱいになってしまうかもしれない。私が何したって無駄さ、私なんかが何言ったって何ひとつ変わらない、と。でも多くの人がそう思うことは、一体誰を喜ばすことだろう、誰にとって都合がいいことだろう。

スピちゃんが見せてくれるのは、これまでずっとあらがい続け、選挙でも県民投票でも意思表示をし続け、それがいっさい聞き入れられることなく、それでも諦めなかった人たちが、今諦めそうになっている。「不屈」と呼ばれた火が消えそうになっている。その姿です。

それを目の当たりにしたときに、自分はこれまでいったい何をしてきたのか、と思う。こんなに抗ってきた人たちの痛みを、恐怖や怒りや絶望や悲しみを、私はちゃんと感じてきていたのだろうか。何もしてこなかった私が簡単に諦めちゃっていいのか、簡単に絶望していいのか。

映像を見終わったあと、感想を言おうとしても、どうしたらいいんだろう、なんて言ったらいいんだろう、わからない、という思いでいっぱいになる。人に伝えるために言葉にしようとすると、自分がいかにわかっていなかったのかがよくわかる。それが、

スピちゃんなんだ。上映会しました、まる。見ました、まる。で終わらない。だけどそのわからなさを、ぽつり、ぽつりと言葉にしていく。わからなさを共有していく。

いろんな人の思いを想像してみる。どんなに意思表示をしても、次々基地をつくられていく、黙っていれば島が戦場にさせられていく、と絶望する人たちのきもち。その一方で、少しでも安心したくて避難訓練に参加する人のきもち。

戦争はいやだ。平和でいたい。そこは共通しているのに、どうしてこんなにもすれ違う？いったいどういう言葉でなら対話ができるんだろう。45分映像を見た後、手探りしながら少しずつ言葉にしていく中で、真っ暗闇の中に、あっ、と何かかすかに見えてくるような瞬間。それを生む場がこのスピちゃんなのかもしれません。

たった2回だけども見る会をしてみて、私は、一人ひとりの力をもっと信じたい、と思いました。そう考える時、私は「個人」という言葉がはじめて書き込まれた憲法13条を思い出します。

ミサイル基地、アラート、避難訓練、とどんどん既成事実がつくられて、平和のためには戦争も仕方ない、という空気に呑まれそうになります。だけどその空気には加担しないぞ。ぐっとおへその下に力をこめて、流されないよう踏みとどまる。それが、国のために命を投げ出す「臣民」から、私を生きる「個人」へと変わったことの意味なのだと思うのです。

スピちゃん増殖中

三上さんが3月に呼びかけた「スピンオフ見る会をしませんか」は、その後、全国で増殖中。これまででどのくらいの数の見る会があったか三上さんにお聞きすると、5月末までに350ほどの申し込み、それぞれ複数回見ることが多いので、正確には言えないけどだいたい1000回くらいかしら、とのこと。

それは、映画完成前の映像作品を無料で貸し出す、と決意した三上さんの祈りを受け止める／受け止めた人たちが、日本中にいるということ。こういった草の根ムーブメントのひろがりには、タネ蒔く人、タネ運ぶ人、見る会をする畑を用意する人、見る会を育てる人、宣伝する人、見た感想をSNSにあげる人、つぶやく人、それこそ多様な人たちのいろいろなはたらきが必要。

見る会を主催した人や見た人たちが、何度もスピ、スピ、と会話のはしばしに口にする、SNSで話題にする。そうすることで、最近あっちこっちでよく聞くスピちゃんって何のこと？何なの？と気になってくる人がふえるかもと想像します。

映像からは言葉以上に、島の人たちの悲しみやあきらめやいきどおりが伝わってきてひりひりするかもしれないけど、全国にちっちゃなスピちゃんがアメーバみたいにひろがってくれることを願っています。

スピンオフを見る会は、有料にしてもいいし、しなくてもいいのです。紅茶でした時は参加費はいただかずに、「沖縄、再び戦場へ」（仮）の製作費応援のためのカンパを募って、その全額を「沖縄記録映画製作を応援する会　事務局」（配給会社東風内）に送金しました。主催してかかった費用は、DVDを返却する時のレターパック代370円なり。

なお、2024年春に公開予定の新作映画には、スピンオフ作品で使われた映像は一部しかはいらず、だいぶ違うテイストの映画になります、と、三上さん。スピちゃんを全国で広げながら、危機感を共有しつつ、映画の完成を待つ人たちの裾野がどうかさらに広がっていきますように。

2023/5/31

▼見る会の申し込みはこちらから
『沖縄、再び戦場いくさばへ（仮）』スピンオフ作品〈45分〉上映会のご案内
https://okinawakiroku.com

路上生活者の個人史

第８回

竹中尚文

長野　昭彦　氏(仮名)

1960 年 11 月生まれ。

出生は高知県です。5 人兄弟と両親の 7 人家族ですが、兄弟は 5 人兄弟として育ちました。私と姉の 2 人はお母さんが違います。お母さんが違うというのは、成人する頃まで知りませんでしたし、どんな事情があったのかも知りません。私たちは、特にお母さんが違うという意識をするようなことはなく育ちました。

中学校を卒業して職業訓練校に行きました。経済的な理由で高校に行かなかった訳ではありません。お父さんはしっかり働いていたので、経済的に苦しいということはありませんでした。職業訓練校では、配管工の勉強をしたのですが、途中で辞めてしまいました。そして、地元で土木や建築の仕事をしていました。二十歳の頃に闇手配師によって中京圏で働くようになりました。給料はありませんでした。時々、5 千円とか 1 万円程度を貰うだけで、残りは「預かっておいてやる」といわれていました。給料を貰えないので、逃げ出すと捕まって殴られることが続きました。このままではダメだと思って、少しずつお金を貯めました。二〇代半ばの頃、故郷に逃げて帰りました。

しばらく、故郷にいてから、関西にやって来ました。阪神や大阪で土木や建設の仕事をしました。前と違

って給料は貰えました。といっても、いつも全部貰えた訳ではありません。何かおかしいと思うこともありました。変だというと喧嘩とかになって、給料を貰わないままになったこともありました。給料を貰わないまま仕事を辞めてしまうこともありました。そんなに給料は多くなかったですよ､バブルの時でも月に 20 万円ほどでしたから。

給料を貰って余裕ができると、ボートや競輪、競馬、パチンコなどをしました。お金がなくなると、また働くという生活でした。結婚とかは考えたこともありません。そんな出会いもありませんでしたし、こんな生活を 55 歳くらいまで続けました。

それからは、今の生活になりました。友だちの住まいや知り合いの所に泊まらしてもらっています。いろんな人の世話になっていますし、こんな炊き出しなんかもたくさんあるのでなんとか暮らしています。

将来の夢や希望ですか？　そんなものはありません。ただ、死んだときに何もなく処理されるのはいやだと思う。お経のひとつもあげてほしいです。

今回、聞き取りに応じてくれたのは長野昭彦氏(仮名)である。長野氏が社会に出てから、関わってきた人の多くが彼を利用してきたように思った。ほんの少し彼のために知恵をくれたり、ほんの少し骨を折ってくれたりする人がいたら、長野氏の人生は違ったかも知れない。また一方で、仕事をリタイヤした現況に手を貸してくれる仲間の存在は、彼の人柄に起因しているようにも思う。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第47回

『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』

1. 人生を3分の2終えて、、、

2月27日で59歳になった。いよいよ還暦イブである。

この歳になって、人生を振り返って思うことは、人生は長いようで短いということだ。俺は40代から50代にかけて何をしていたのか、ほとんど記憶にないのだ。時間は確実に過ぎていって、その時その時はつらかったこと、嬉しかったこともたくさんあったはずなのだが、記憶に蘇らなくなってしまっている。

その一方で、つまらない経験で、いつまでも昨日のことのように覚えていることはいくつかあるのだ。俺の場合は、つまらないことや嫌なことを昨日のことのように毎日思い出すのに、嬉しいこと楽しかったことはそうそう思い出せない。

これは俺の性格が悪いからなのか。

俺は 30 の時についたカウンセラーから言われたことがある。

「國友さんと話していると、自分の人生を物語にしているように感じることがあるんです。もう一度物語を書き換えることはできないですかね？」

確かに、何かのきっかけがあれば、物語を書き換えることもできるのかもしれない。しかし、俺は、書き換えようとしても、また昔のトラウマへと引き寄せられて、書き換えることができない悪循環に陥っている。

書き換えるのではなく、それを少しずつ変えていって、自分の中で折り合いをつけていくしかないのだ。

俺はもうアラ還。逆算の年齢になってきている。死ぬまでに何ができるか。常に死を意識しながら、生きる年齢になってしまっているのだ。こうなったのはいつからなのか。おそらくコロナの渦中にいつしか、そうなっていったのだと思う。

もはや、今となっては1日に一度は死ぬ時のことを考える。健康年齢は70代前半までだと言われるし、そのあとは体は大丈夫でもボケる可能性があるから、そうそう生産的なことはできないだろ

う。

さあ、あと 10 数年、何を目標にして生きたらいいのか。

2. 財布をなくす。

3 月の下旬のことである。自転車で映画館に向かおうとすると財布がないことに気づいた。家に帰って、あちこち探すのだが、どこにもないのだ。

おそらく、その１時間くらい前に近くの肉屋さんに買い物に行った時に落としてしまったのか。これは一つには長財布のせいである。俺は長いこと、お尻のポケットに入る折りたたみ式の財布を使っていた。10 代の頃から、財布を買うときは必ず折りたたみ式だったのだ。

母からは、「そんなところに入れていたら、誰かにすられるんじゃないの」と言われていたが、財布をお尻のポケットに入れておくと、お尻に感触があるため、確実に無くしていないことがわかるので、むしろその方がいいと思っていた。

しかし、この頃は長財布が流行っているとのことだったので、今年の誕生日に弟に長財布をリクエストしていた。弟から送られてきたのは、一万５千円くらいする紺色の長財布だった。

長財布は流石にお尻のポケットには入らない。それでジャケットのポケットやカバンにいれることになった。しかし、それまで半世紀にもわたって、お尻ポケットの財布を使ってきた俺が、急にそういう状況に慣れるわけがない。おそらく、ジャケットのポケットからずれ落ちてしまったのだろう。

お金を下ろしたばかりだったので、現金も相当な額入っていたし、カードもたくさん入っていた。財布も新品。総額 6 万円くらいの失費である。痛い！！！

その後１週間くらいは大変だった。クレジットカードの会社に電話して、新しいカードの手続きがいくつも続いた。この頃はどのカードにもクレジット機能が付いているケースが多いので、無くしたらえらいことである。

次に運転免許証の再交付。これに関しては、距離的には大したことなかった。昔は長岡天神まで行かなきゃいけなくて、紛失の場合であっても実習を聞かされて、時間がかかっていたという記憶がある。しかし、今は手続きをとればいいだけのことなので、あっという間に終わった。場所も京都駅近くなので、至って便利。

次はマイナンバーカード。一番時間がかかるのはこれで、まだ俺の手元に届いていない。２ヶ月くらいはかかると言われている。

銀行のカードも１つ１つ再発行してもらっているとその都度、手数料がかかり、手数料代だけでも馬鹿にはならない。

この頃はカードがどんどんスマホのアプリに変わっているので、そのうちカードはなくなり、全てアプリで OK ということになっていくだろう。もう長財布は買わない方がいいと思ったのだった。

幸い、春休み中だったので、時間のゆとりはあったが、一つこんなことがあると大パニックで凹む。しかし、これだけ探してないんだからもう誰かが拾ってお金も使ってしまったのだろうと諦め、１ヶ月が過ぎた。

ところが、5 月の頭に、突然マンションの管理会社から電話が来た。ひょっとして、近所からクレームが来たのか。今のマンションに移ってからはクレームが来たことはないが、前のマンションは壁が薄かったせいで、しょっちゅうクレームが来ていた。

恐る恐る電話に出てみると、「今ちょっとお時間いいですか？財布、落とされましたかね。マンションの管理のところに届いていたみたいなんですよ」

おー、無くして１ヶ月以上も経って見つかるなんて！！！

お金も抜かれていなかった。財布も新しいのはまだ買っていなかったので、幸いだった。カードの再発行代がかかっただけで、あとは戻った。弟がせっかくくれた財布なのだから大事に使わなく

ては！

世の中捨てたもんじゃないなあと思ったものだった。

このことを FB に書いたら、アメリカ人の女性から、Only in Japan！(日本だけよ！)というコメントが来た。日本は平和な国なのだ。誰も人のものなんて盗まない。

3. ニューエラを無くす！！！

次にものを無くしたのは、4 月下旬だった。無くしたのはニューエラの帽子である。俺はニューエラを気に入っていた。

俺は子供の頃から頭がデカかくて帽子は似合わない。入るサイズがないし、頭がでかいので、被っても上の方に乗っかっているだけとなるので、不格好である。

しかし、ニューエラのやつは帽子が深いためすっぽり頭に入る。インスタで写真をあげても好評である。これはいい！これまで子供の頃からのコンプレックスを一つまた解消できる！！！

去年１つ目を買い、２つ目は去年の冬休み。里帰り中に買ったのだった。

ところが、ある金曜日、知らぬ間に無くしてしまっていたことに気づいた。

おそらく、教室か、その後のカフェか、バスの中である。市バスの事務所に電話すると届いていない。カフェに電話しても届いていない。大学に電話すると、忘れ物を集めている学生課には届いていないけど、「教室に置かれたままの可能性はあります」というメールの返事が来た。

その可能性は高いだろうなあと思った。

俺は教室に忘れ物があると律儀に届けてしまうのだが、届けずに教室に置いたままにしている先生が多い。どっちみち盗まれないだろうし、掃除の人も置いたままである。

とは言うものの、せっかくお気に入りのニューエラがなくなるのは悲しい。早速俺は通信販売で、新しいニューエラを買った。出てくるかもしれないから、前のやつとは違った色のものである。

案の定、翌週行ってみると、教卓の中に入っていた。一瞬教卓にあるように見えなかったのだが、ビニールの影に隠れていたのだ。

おー、嬉しい！！！

このことがあったことで、その日は楽しい気持ちで過ごした。結局、このことがあったことで、俺はニューエラの帽子を三つ持つことになった。これからはニューエラが俺のトレードマークである。

4. DVD を無くした！！！

数日後、今度は授業で使うための DVD を無くしていることに気づいた。俺は神経質なので、授業で使うものをなくすなんてことはまずない。非常勤の身なので、ちょっとでも、周りに迷惑をかけるようなことをすると雇い止めになるという心配を常に抱えているため、むしろ神経質になり過ぎるくらい神経質になっていて、必ず、教室を出る前に一度は確認するのである。一時期はそれが高じて、強迫観念症になることもあった。

大学に電話したが、まだ届いていないみたいだった。おそらく教室のデッキの中に入っているのだろう。幸い、その DVD は予備があったので、無くしても大丈夫であるが、俺は潔癖症なので、こういうのがあると気に掛かってどうしようもなくなってしまう。

帽子の時もそうだったが、普通の人は忘れ物に気づいても、律儀に控室に届けたりはしない。だから、また教室に置いたままなのだろうと思っていたら、案の定、そうだった。

しかも、教室のデッキの中に入れられたままだった。すなわち、その１週間の間、デッキをいじった先生がいなかったのである。DVD なんか使わない先生が多いから、そのままになっていたのだろう。

そうそう、盗まれるということはないのである。

この忘れ物の事件が、ここ数ヶ月の最大の大き

な事件だった。他には大して何も起きていない。

5. 時間が潰れない。

最近の悩みは時間が潰れないことである。ゴールデンウィークはむしろ俺には地獄だ。何をしていいかもわからない。睡眠導入剤を飲んでも眠れないため、してはならないと知りつつ、多めに飲んでしまう。いつの間にか俺は仕事人間になってしまっている。したがって、仕事以外のことをすることができなくなっているのである。

俺は 20 代の頃はほとんど仕事をしていない。30 代になって、どうにか一人生活できる程度には仕事を始めたが、あの頃はまだ親にも頼っていたし、若かったし、仕事をたくさんしていなかったせいもあって、映画や水泳など趣味がメインのような生活だった。社会運動に参加したのも 30 代だった。

40 代になって、仕事が増え、一気に忙しくなったが、経済的なゆとりが出てきたので精神的には楽になった。40 代は俺にとっては学会と研究の 10 年間で、待望の単著も出し、それなりに充実していた。

50 代になると人生はあっという間に過ぎ去っていった。仕事の量が 40 代の頃に比べて多くなったわけではないが、やはり歳のせいなのか、疲れが残るようになっていって、社会運動もしなくなり、大阪に行く機会もめっきり減っていった。

今でも、その時その時で楽しいことはあるのだ。

2 月の誕生日にはドイツ人の先生と温泉にいった。その先生はまだ 31 歳で、息子くらいの歳である。しかし、すでに奥さんも子供もいる。マイホームも買って、これからローンが大変みたいだった。子供がいると 40 代くらいになったような気持ちになるのだとおっしゃっていた。

また教え子と何度か食事にもいった。

まずはかつての教え子で最近になって結婚した体育会の男子。彼はもう 32 歳だと言っていた。月日の経つのは早いものだ。今は彼の実家の京都のお菓子屋さんで働いているみたいだった。「奥さんの方が収入多いんです」と話していた。彼とは俺の行きつけの近所のイタリアンで話そうかと思っていたのだが、彼はもっと大衆的な店の方がいいというので、タイ料理の店に行った。まだ 30 代くらいまではオシャレ系の店よりも、がっつり食べられる店の方がいいのだろう。

奈良で仕事をしているかつての教え子は、まだ卒業したばかりで 23 歳くらいだと思うが、俺のことを結構慕ってくれていて、卒業してから会うのは 2 回目である。京都駅の東洋亭で洋食を食べた。1 時間くらい並ぶことになったが、二人で話していれば時間は過ぎていく。その後、船岡温泉に行った。息子と一緒に風呂に入った気分だった。そのことをラインしたところ、「僕は信頼できる上司と風呂に行った気分でした」と返事が来た。

また男子学生たち二人と大学近くの二郎系ラーメンにも行った。そこは純粋に二郎系なのかはどうかはわからないが、とりあえず、二郎系らしきラーメンを初体験した。もやしがたっぷりのっているやつだ。

それからボクシングジムではバーベキューだった。若くてマッチョな連中ばかりなので、俺が最年長である。俺と同年代の男性も、2 人ほど、ジムにいるのだが、たまたまその日はお休み。なんとなく居場所がなかった。1 時間半くらいで帰った。でも、ひとときマッチョ気分に浸った。

ジムには中学生くらいの男の子も来るのだが、みんな人懐こくて、俺にも話しかけてくる。俺はそういう子じゃなかったから、また少年時代を思い出して、悲しくなるのだった。

しかし、ゴールデンウィークは潰すのに難儀した。結果、毎日のようにマッサージに行くことになった。とりわけ 5 月 3 日から 5 日の三連休は地獄だった。1 日目はひたすら眠った。実はゴールデンウィークの直前にかつての教え子から、2 つほどメッセージが来ていて、またかつての教え子たちと遊ぶことになるのかと思っていたら、両方ともキャンセルになった。若い子はそんなものだ。別に悪意があるわけでもないし、またそのうち付

き合ってくれるだろう。

もう俺は 60 だから、そろそろひとり遊びを覚えなきゃいけない。

これから、かつての友人は一人一人、仕事を辞めていき、いつのまにか亡くなっていくだろう。かつての教え子もだんだんと俺から離れていくだろう。そうであっても、それなりに幸せに生きるすべを探さなくてはならないのだ。悲しいけれど、人間は結局、孤独なのだ。

俺は常に気を張り詰めて生きている。緊張して生きている。仕事の時はそれがプラスに働くこともあるのだが、プライベートでもその緊張感が抜けないため、レジャーをしていても、心からリラックスすることができない。

それが俺の悪いところである。

6.『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(金子由里奈監督、2023)

この映画、京都が舞台である。

原作者の大前粟生さんは同志社大学の卒業の人で原作の方は同志社が舞台になっているのだが、映画は立命館で撮影されている。大学名は具体的には出てこないが、俺の住んでいるところから近所の三条会商店街が撮影の現場に使われたみたいだ。

この映画に出てくるのは「ぬいサー」である。ぬいぐるみサークル。部員たちは、引きこもり系の優しい子達で、誰とも傷つけ合いたくないため、ぬいぐるみと話すことで自分の心のモヤモヤを消化しようとする。

この気持ちはとてもよくわかる。俺も長年 1 人で暮らしているとどうしても独り言を言ってしまう。誰かが部屋の中にいるかのように誰かと話してしまう。誰もいないのに。

一時期はそれが高じて、大変なことになったことがあった。ちょうど 30 歳の頃、さまざまなことで悩んで凹んで、夜中まで独り言を言ってしまい、マンションの近所の人からクレームが来てしまったのだ。

俺が心療内科に通うようになったのは、その時からである。

最初に行ったのはうちの近所の小さな神経科。その時の先生は当時もう 60 くらいの人だったからもう引退なさっているか、なくなっているかどっちかだろう。大変なヘビースモーカーだった。人の悩みを聞く職業だとこうなるのかと悲しくなったものだ。

閑話休題。

この映画では、主人公の男の子が本当にフェミニンな女の子のような男の子として描かれている。ゲイや同一性障害というのではないのだろうが、話し方もしぐさも全然男っぽい要素が全くない子である。

女の子の部屋に泊まる場面でも、二人がセックスをしたような形跡はなく、ただ服を着たまま添い寝。

彼が、「まだ童貞なの？」と友達から揶揄われる場面が出てくるので、まだまだ彼の周りにはセックスしたり、恋バナしたりがまともな大学生と思っている学生もいることは見てとれるのだが、その一方で、恋愛やセックスをしない人もいて、構わないのだという部分を提示しているところがこの映画の進歩した部分である。

実際、今の学生を見ていて思うことは、恋愛の相手がいる子の場合は昔よりもオープンであり、大っぴらに彼氏や彼女の話をする子は増えているように思える。おそらく、恋愛がコスパ化していて、そこそこのエネルギーで、そこそこに好きな人と付き合って、うまくいかなくなったら別れるというノリの子が多いのだろう。したがって、恋愛やセックスをそれほど真剣なものとは捉えていないのである。したがって、恋人のことを隠そうともしないし、別れてもあっけらかんとしている。

その一方で、全然恋愛や異性交際に縁がない子もいる。この映画でも、「恋愛なんかしなくてもいいんだよ」というセリフが出てくる。

俺たちが大学の頃に山田太一脚本の『真夜中の

匂い』というドラマがあって、これは女子大生 3 人組を描いたドラマなのだが、そのうちの 1 人が、大学の 4 年生になって、処女だということをまるで恥のように思って、悩む。そういう話だった。1980 年代は恋愛が強迫観念化していて、恋愛しない奴はできそこないという風潮があったのである。

今は多様性の時代。恋愛なんかしてもしなくてもかまわない。したいやつはすればいいし、したくないやつはしなくていいという時代になったのだとしたら、これは社会の成熟である。

この映画に出てくる若い子たちは、他人がセクハラされているのを見ても、自分のことのように心を痛めてしまう。そういう子が増えたのも好ましいと思うのだが、あまりにも優しすぎて、生きづらくなってしまっているのが現状なのだろう。

映画の終盤で、「僕は男だからそれだけで人を傷つけている」と主人公が泣く場面が出てくる。このセリフはちょっと女性に与しすぎているという感はしなくもなかった。

男性が、男性性が内包する暴力性を自覚し、女性に気を使うようになったのは成長だろうが、これは 1990 年代から男性運動の人たちは言っていたことだった。

女性から傷つけられたルサンチマンの俺からすれば、もう一歩踏み込んで、女性が内包している暴力性を訴えてもよかったような気がするのだが、まだまだそこまで行くには道は遠いのだろうか。

しかし、最後に「優しさからの解放」というセリフがでてくる。これは我が意を得たりの思いだった。

俺の人生で、フェミニズムやジェンダー問題と出会ったことは両刃の剣だった。

若い時にこの問題に目覚めた俺は、女性に気を遣い過ぎて、怒って当然のことをされても怒ることができなかったのである。女性に優しくし過ぎて、自分を傷つけてしまっていた。そのことが女性への憎しみを増幅させていった。

俺が学校の先生をしていて、いつだって思ってきたことは、男性と女性の関係は、先生と学生の関係に似ているということである。

俺たちが若い頃は、先生が絶対的な権力を握っていたため、不当なことをされても生徒は文句を言うことすらできなかった。俺たちが学生の頃の先生たちは今だったら懲戒免職になっても仕方がないことを平気でしていたのである。

ところが、今の時代は、先生の方は学生を傷つけるようなことを言ってはならないのに、学生のほうは平気で文句を言ってくる。ひどいことをアンケートに書かれることもしばしばある。「先生だって人間なんだよ、俺たちをなんだと思っているんだ！」と怒りたくもなる。とりわけ、専門学校で教えていた頃などは学生がお客さんなので、理不尽な思いをたくさんさせられたものだった。

俺は俺自身が繊細くんだったので、学生たちには人一倍気を使ってきたと思う。一時期はあまりにも学生のことを気遣い過ぎて強迫症になっていた。そのことをあるフェミニストカウンセラーに打ち明けたところ、「私らカウンセラーだって、相手をまったく傷つけないで仕事するなんてできないですよ。まして学校の先生なんかが誰も傷つけずにやっていくなんて絶対にできないです」と言われたことがあった。

もちろん、故意に傷つけることをしてはならないのだけども、ある程度は割り切らないと先生もやっていかれない。

女性との関係もまさしくそうで、いくらフェミニズムやジェンダーを勉強しているからと言って、何もかも女性の要求を聞くことはできない。時として、女性に厳しくならなくては、むしろ女性と付き合えなくなってしまうのである。

自分を優しさから解放しなくては！　これが俺のこれからの人生目標である。

役場の対人援助論

（４５）

岡崎　正明

（広島市）

たいせつなことは飲み会で教わった

復活！

昔誰かに「役人と警察の飲み会はタチが悪い」と教わったことがある。理由は、普段厳しいルールの下で働く仕事のため、タガが外れるとひどいことになるとの説だった。

本当かどうかは知らないが、確かに入庁したての頃、初めて参加した職場旅行で集合時間の朝８時にマイクロバスに乗り込むや否や、いきなり缶ビールを渡され「カンパーイ！」と始まった時には、正直酒を飲むことにこんなにもすべてを捧げる人たちがいるのだと、感心したような軽く引いたような。そんな思い出がある。

コロナ禍前には毎年、歓送迎会だの納涼会だの忘年会だの新年会だの送別会だの…と、オフィシャルな扱いの職場ごとの飲み会があり、それ以外にも係や仲間内での飲み会を合わせると、たしかに結構な回数の飲む機会があった。

また噂では「あそこの部署はこの時期ヒマだから、毎週金曜は決まってアルコール半額タイムサービスに間に合うように入店するんだってー」みたいな話を聞いたこともある（そんな部署に行けたことないけど）。他の業種で働いたことがないので分からないが、役人の世界というのは比較的飲み会が好きな文化なのだろうと思う。

この原稿を書いている 2023 年春。コロナでの様々な制限が見直されはじめ、世の中の雰囲気も随分と変わってきた。

そのひとつとして感じるのが職場の飲み会の復活である。

私自身、この年度末始めは本当に数年ぶりに、送別会だとか歓送迎会といったものに参加する機会が多くあり、お店に行くと同じような集まりの人たちをたくさん見た。

それはコロナ以前はどこにでもあるなんてことない風景だったが、久々に出会うとなんだか懐かしいような嬉しいような。でもちょっぴり呆れるというか、愛おしくも切な

くなるような感じで…。
　これに似た感覚って、昔どこかであったなあーと考えていたら、幼い頃にアリの巣に砂や水をかけてイタズラしたときのことを思い出した。ワラワラと逃げ惑うアリたちが、しばらくするとまた何事もなかったかのようにエサをせっせと運び込む様子を見てホッとするような、ちょっと「アホやな」と思ってしまうような。でも半面そのひたむきさを、いじらしく感じる感覚。それに近い気がする。

　職場の飲み会の復活を喜ぶ人もいれば、あまり歓迎したくない人もいるだろう。「お酒が飲めない（実は私もそうだが）」「プライベートの時間を優先したい」「大人数での会食自体が苦手」など、理由はいろいろだ。私が 20 代の頃には「飲みにケーション」などという、今はあまり使われない言葉が存在し、先輩や上司からの強制性をもった飲み会への招集という事例もよく聞いたが（幸い私自身はあまり経験ないが）、多様性への配慮が大事にされる現代では、参加したくない人への想像力を深める必要があるだろう。不本意な参加や不参加による不利益が発生するのでは、職場のためにも個人のためにもならない。
　だからあくまで自由意志での参加が保障されることを前提として言わせてもらうのだが、適度な職場の飲み会はあった方がいいと思うし、それがもたらすプラスの効用というものは結構大きいと個人的には思っている。
　まあ単純にワイワイガヤガヤやるのが好きということもあるが、お酒の弱い私が、なぜそんなに飲み会を好ましく感じたり、仕事面でもプラスを感じるのかというと、やはり相手のことをよく知り、自分のこともより知ってもらうことができる場と感じていることが大きい。飲み会は、普段の職場では聞かれないような「自己開示」ができる貴重な機会だと思う。

　先日、同じ職場の同世代男性たちと初めて飲み会をした。
　普段はなかなかじっくり話すことがないのだが、飲み会の場では部下のことや仕事のことのみならず、家族のことや休日の過ごし方までアレコレ話ができて。やはりパソコンと書類がある環境ではできない話しがあるなあと思った。
　私が若い人たちの仕事の仕方につい愚痴のようなことをぼやくと、一番年配の方が「岡崎さんの理想はよく分かるけど、でも今の若い子たちは本当によくやっていますよ」「毎回 100 点を目指すのはしんどい。70 点以上なら良しとすることも必要じゃないですか」と、優しくたしなめてくれて。自分が部下の出来ている点にちゃんと目を向けることができていなかったことに気づかせてくれた。
　また別の人からは、思わぬことで感謝されたり、同じタイプの人間が苦手だったりで意気投合し(笑)。その人が今の職場を希望した経緯やいきさつも聞かせてもらった。それぞれの人に、その人なりの歴史や理由があるのだな～と感じる話だった。

　同じ職場で働く相手をより深く理解する。それが組織で働く人間にとって役に立たないはずがない。飲み会は、そうした相互理解を深める機会の 1 つとして、結構重要だと思う。
　私自身、これまで飲み会の席でいろんな自己開示を聞かせてもらった。その中には大先輩の若かりし日の失敗談や、思い出深い苦労したケースの話、自分が仕事で大切にしていることといった、直接仕事の参考になる話もあれば、今の配偶者との馴れ初めや、自分と親との関係、趣味や志向など、その人を知るのに役立つ話。また、時にはバカバカしい話や下世話な噂話など、話半分で聞いた方がいいことまであって。

百花繚乱。十人十色。玉石混合？どう表現していいか分からないが、役に立つ話もそうでない話もひっくるめて、私が人間や社会を理解することにつながったように思う。

自己開示と面接

相互の適切な自己開示が、コミュニケーションの場において人々の心理的安全性を高め、理解や共感を深める作用があるということは、大抵の人が了解してくれる事実だろう。

だから面接でのジョイニングの１つとして、「適切な自己開示が相手との信頼関係を高め、円滑な支援関係の構築に有効」と言われているのも、当然と言えば当然のことだ。

もちろん対人援助の面接は飲み会の世間話や友人との雑談ではないので、クライアントの話になんでも食い気味に「それ分かります！私も実は同じようなことがあって～」「うちの場合は逆にこうなんですよ」とかぶせていき、最終的には自分の自己開示トークにしてしまう…なんてのは論外だが（たまにそれっぽい人がいたりするが）。それでも支援者側が適度に適切な自己開示を行うことは、面接を豊かに、抑揚のあるものにするように思う。

逆に自分の個人的な語りを徹底してしない支援者の面接を見ていると、なんだか間違ってはいないんだけど血が通っていないというか。表面的で相手に寄り添っていない印象を受けてしまう。

ちなみにここで述べている「自己開示」というのは、何もプライバシーに関する情報を出さないといけない、ということではない。

例えば職種や組織としての意見ではなく、個人として率直に感じた想いや、個人的な体験で学んだことを語るのも立派な自己開示である。今注目されているオープンダイアローグなどはまさしくそれが重要視されていて、医師やソーシャルワーカーといった立場で語るのではなく、一個の人間として「そんなことがあったら薬が飲みたくないのも理解できます」などと、個人の感想を述べる姿勢を重視する。

もちろん差し障りのない範囲で個人の事情を語ることも、私はあっていいと思っている。

「うちにも小さい子がいましてね」「私の母も早くに亡くなったんです」「以前こんな仕事してたんですけど」。そんな風に支援者側の事情を語る時。大抵のクライアントはそれまでとちょっと違い、身を乗り出すようにしてこちらの話を聞く姿勢になる。それはおそらく、セオリー通りの役所の支援者とクライアントの会話にはあまりない、意外な展開だからではないだろうか。

お役所における面接でよくあるのは、正しくて、専門的で、手続き的な話がされる場面だろう。

「要介護認定を取るためには、〇〇書類が必要です」
「子どもさんに暴言暴力を見せるのは虐待になります」
「そうした症状にお悩みなら、医療機関に相談されるのが良いと思います」

正しいことを知りたいならそれで十分だ。クライアントも大満足である。

ただ正しいことが分かっていても、いろんな事情で『分かっちゃいるけどやめられな

い』状態でこんがらがっている人にとっては、そうした説明だけでは、ときに空虚なものになってしまう。

　そんなタイミングで、
「うちの祖母もヘルパー勧めるんですけど、『人様に迷惑かけたくない』とか言って納得しないんですよ」
「私もついイライラして家族に酷いことを言ってしまったことがありますよ」
　などと語られると相手の予想は裏切られ、注目度が増す。そしてその場が一瞬『説明を話す・受ける』といった性質のものから『個人として同じテーマで語り合う』というものに変化する。その落差が、人の心を動かすことがあるように思う。
　ネット隆盛の時代だけに、個人情報の扱いには注意が必要なのも分かるが、支援者側がどんな立派な看板を背負っていても、最終的に面接とは個人と個人のコミュニケーションだ。こちらが個人の部分を開いて向き合えば、おのずと相手が心を開きやすくなるというのは、道理ではないだろうか。

私を育てたあの語り

　20 代で初めて児童相談所勤務になった時、A さんという 30 代の先輩職員に大変お世話になった。
　ある飲み会の帰り。酔いつぶれた私を A さんが自宅に泊めてくれたことがあった。翌日 A さんの奥さんが作った朝食をいただいていた時、人懐っこく挨拶に来てくれたのが、笑顔の素敵な 5 才くらいの A さんの息子さんだった。
　息子さんは原因不明の難病で、入退院を繰り返していると A さんが教えてくれた。A さんは面接でも時々、息子さんのことを語ることがあった。それは別に同情をひこうとかではなく「子育てにはいろんな種類の大変さがあるよね」という趣旨の話だった。
　しばらくして A さんの息子さんが亡くなったとの報せを聞いた。普段弱いところを見せない A さんが、葬儀で見せた泣き顔。私はかける言葉も出てこず、ただただ深く頭を下げることしかできなかった。
　あの頃 A さんは難病の子を抱えながら、子どもを愛せない親や虐待してしまう親と、一体どんな気持ちで向き合っていたのだろう。自分の事情を抱えながら、それでも人を支援することってどういうことなんだろう。今でもそんなことを、A さんと息子さんから考えさせてもらう。

　B さんとは 10 代で出産した高校生の所へ同行訪問した帰り、少し遅めのランチで初めてじっくり話をした。その時 B さんがおもむろに、若い頃切迫早産の危険で数カ月入院した経験を聞かせてくれた。
　当時 B さんは仕事が軌道に乗りかけていた頃で、長期入院で仕事に穴を開けるのがとても辛く、正直子どものことよりも、目の前の仕事の事を考えてしまう葛藤があったと語ってくれた。
　「だから若くして妊娠した女の子が、お腹の子のことを一番に考えられないのも分からないでもないんですよ」と率直に語るＢさんは、いつも女性や子どもなど、弱い立場の人のことを一番に考えてアドバイスをくれる人だ。
　月経も妊娠も経験しない自分は、どれだけその痛みや葛藤に寄り添えるんだろう。B

さんの話は、そんなことを考えるきっかけをくれた。

　ＡさんともＢさんとも、職場で出会わなければ知り合えなかったのは当然だが、あの話は職場で仕事の話をしていただけでは、教われなかった話だと思う。
　だから飲み会の好き嫌いはともかく、機会があれば身近な職場の人と、気分が向いた時でいい、些細な個人的事情で構わないので、チョットした自己開示をしてもらえたら…なんて思う。
　いきなり重たいテーマに踏み込む話でなくていい。自分から語れそうなことをオープンにし、相手にも興味を持って、一歩踏み込んで質問してみることをお勧めする。
　そんな些細なやり取りが自分や周りに大切な気づきをもたらしたり、人への理解を豊かにしたり。巡り巡って、自らの幸福度を上げることにもつながるんじゃないかと思っている。

　もちろん自己開示には不安もつきものだし、ときには失敗だってあるだろう。それでも私は「同僚だろうがお客さんだろうが、大抵の人とはよくよく話し合えば、どこか 1 つくらい共感できたり、一致点が見いだせるのでは？」という楽観的な期待を持っている。
　それはもしかしたら私自身が身体障害を持ち、ある意味自分のコンプレックスを常に自己開示しながら暮らしていることと、関係あるのかもしれない。もちろん嫌な思いをすることもあるが、それ以上に人の善意や優しさに出会う場面が多いことを、私は体験的に知っている。
　曲がりなりにも２０年以上対人援助の仕事を健康的に続けられているのは、そんな楽観的な期待のおかげかもしれないと思っている。

臨床のきれはし

Sheet21

浅田 英輔

Control my Emotions

我々心理職の仕事で大きなものの一つが、カウンセリングだ。カウンセリングとはよく聞くが、何をすることなのかわからない人も多いのではないだろうか。

話を聞くだけなのか？問題を解決するのか？どっちも間違いではないけれど、本質ではないと思う。「問題を解決するためにカウンセリングをする」という言い方は基本的にしない。週１回や月１回、１時間程度話をするだけで解決できる問題なのであれば、自分でできるだろう。もちろん、結果として問題が解決することはたくさんある。「問題を解決する手助けをする」というのがよいが、なんとなく当事者性に欠けるというか、自分は外にいるというか、他人事というか、そういう感じを受けるかもしれない。

でも、実際にカウンセリングをして「うまくいったかな」と思える事例は、本当にそんな感じになるのだ。ちょっといい感じの発言をしたかなーと思うことはあるけど、結果としては本当に「クライエントの力だよなあ」と感じるのである。それも、問題が解決するというよりは、問題の大きさが変わったり、問題の見方が変わったりして「まあ、あとは自分たちでなんとかできると思う」となることも多い。だから、気持ちや状況の整理をすることを手伝っているのかなと思う。

クライエントの状況を冷静に見つめ、適切に支持していくためには、ある程度のバランスが必要になる。フラットさというべきか、中立性というべきか。クライエントに生じる感情を感じつつも、そこに入ってしまわず、自分のことをも見つめる必要がある。

クライエントの感情に巻き込まれないカウンセラーとなるために、「自分の問題を整理する」ことを求められる。自分の中に大きな課題があると、それと似た課題を持つクライエントに向かったときに、余計な感情や反応が出てきてしまうからだ。だから、カウンセラー自身もカウンセリングや教育分析といった、自分の問題を整理することを求められる。

これらのことはわかっていたし、「自分の問題」についてもある程度みてきたつもりではある。ただ、「自分の問題」って、なくすることはできるのか？「自分の問題がない状態」ってあるのか？とも思う。当然、カウンセラーが受けるカウンセリングやスーパーバイズ（多くの場合は、かかわっている事例について、ベテランの人から助言をもらったりすること）は、一回だけではなく継続的にやる必要もある。

でも、それをやっていたら問題はなくなるのかといったら、なくならないだろう。最初に言ったように、カウンセリングは問題を解決するためのものではないということもあるし。じゃあ、どういう状態が「自分の問題を整理した状態」なのだろうか。

逆に「自分の問題が整理されていない状態」とはなんだろうか。おそらく、感情の整理ができていない状態であろう。感情の整理ができていない状態とはなんぞや。たぶん、「ある場面で自分の感情をコントロールしがたくなる状態」ということもできるだろう。

感情のコントロールができなくなる状態というのは、トラウマティックな反応を考えるとわかりやすい。トラウマとなる場面に似た状況に置かれると、なぜか不安になったり、泣きたくなったり、いわゆる「フラッシュバック」が起きたりする。突然怒り出す人もいるだろう。たぶん機序はそれと同じで、「課題となっている人、モノ、場所、状況」などに関連したときに、感情のコントロールがしにくくなる。それが「自分の課題が整理されていない状態」といえるだろう。

例えば、父親とうまくいっていなくて、腹の底のほうに怒りがある場合、父と近い年齢の男性がしゃべることは、大したことでなくとも腹が立つかもしれない。その男性のせいではなく、自分の中の父との関係性の問題であることも多い。そしてその感情はコントロールしがたく、カウンセリングに支障を来すことが多い。

そういったわかりやすいものだけでなく、不安を抱えるのが不得手な人もいる。不安が惹起されると、すぐに何かしら行動を起こしてしまうのだ。カウンセリングにおいては、「待つ」ということがとても大事な役割を果たすことが多いので、待てない人はかなり分が悪い。その不安の根底にある課題は様々であり、父母との関係もあるだろうし、これまでの物事への対処法の積み重ねなどが関係していることも多い。そこを何とかして、待つことを身につけなければならない。

こう考えると、「自分の問題が整理されていない状態」というのは少し理解できる気がする。では、そこからどうなるとよいのだろうか。

つまり、特定の場面においても、感情がコントロールできればよいのだ。上の例でいうと、「このおじさんが言っていることはそれほどおかしなことではない。私が父との関係を原因にイラついてるだけだ」と理解できるとよいのだ。何も、父と関係修復する必要はない（もちろん、できるのならしたほうがよい）。理解できると、その感情が発動しなくて済むか、発動したとしてもコントロールが効くようになる。「イラつくけど、これはこっちの話だからちょっと置いといて」とかができるようになるのだ。コントロールが効くようになると、そのクライエントのことをきちんとみることができるようになる。または担当が複数いる場合は「このタイプの人は私うまくできないから」と替わってもらうことも選択肢になる。

そして、カウンセラー側の話として書いてきたが、これはカウンセリングで目指すところと全く同じである。相談にくるクライエントだって、いらないところでイライラしたくないし、感情に支配されたくないはずだ。

カウンセリングの役割のひとつは、感情が引き起こされる理由を自覚できるように整理することと言えるだろう。理解できると、人は少し客観的になることができるのだ。

自分の感情を自覚する過程では、「自分に嘘をつく」とうまく進まないので、結構しっかり自分の考えや感情に向き合う必要がある。言葉にすると簡単だが、結構難しい。というかキツい。そういう気持ちに向き合うことを回避することも当たり前に起きる。「こんなことを思っちゃいけない」とか、「一般的にはこうだ」とか、「こんなこと考える自分がいやだ」とかいろんな気持ちが邪魔をする。でもそこを乗り越えると、「なんでこんなことにこだわってたんだろう」と思えたり、感情に翻弄されないで済むようになる。余計に泣き出したり、怒り出したりしなくて済む。

事実は事実として認めて、事実と自分の気持ちを穏やかにみることができるようになるのだ。たぶん。おそらくこれが、客観性というヤツなのだろう。

カウンセリング、カウンセラーの話として書いてきたが、おそらくこれらは今後いろんな職種のスタンダードになっていくのではないだろうか。医療介護系の職種は、誰もがカウンセリング技術を求められるようになってきている。単に「寄り添って」いればいいってもんではない。傾聴ってそんな簡単ではない。自分をとらえて、相手の話をフラットに聞くことができる技術が求められるようになる。

たぶん。

発達検査と対人援助学

⑫ 発達検査でわかること Ver2.0

大谷多加志

「先生、その話、1 年生の時の授業でも聞きました」

大学での授業も 3 年目に突入すると、こういうことも起きてくる。どの授業でどの話をしたのかを把握しきれなくなってネタバレを起こしてしまい（特に 1 年目は授業準備に必死で、とにかく手あたり次第にネタを出していたので）、そのネタをフックにして続けるはずだった後の話が全然弾まなくなり、落ち込みます。

振り返ってみると、マガジンの連載も 10 年を超えました。ネタ切れ、というわけではないですが、マガジンには書けないネタがあるという事情もあって、何を書くかを思案することが増えてきたのも事実です。さてどうしたものか…と考えていた時に、1 冊の本と出会いました。

奈良女子大学名誉教授の浜田寿美男先生の本で「発達を問う」（2023 年ミネルヴァ書房）という、「発達障害ブーム」と言われる今の時勢の中、原点を問い直すストイックなタイトルです。内容は、浜田先生が過去に執筆された内容をベースに大幅な加筆修正とそれに対する補記が記されたものとなっており、著者自身が現在の自分と過去の自分で対話することによって、タイトルである「発達を問う」を具現化しようと試みたものです。一読して、数十年前に書かれた書籍をもとにしているにも関わらず、現代にも通じる（むしろ現代だからこそより意義を持つ）普遍的な内容であることに驚かされます。

さて、本の紹介はこのくらいにして、ようやく本題です。身もふたもなくシンプルに言えば、「これを真似よう」と思ったということなのですが、過去の自分の連載を取り上げ、今の自分がどう考えるかという形で書いてみることにトライしてみようと思います。今回取り上げるのは、自身の最初の連載である「発達検査でわかること」（対人援助学マガジン 10 号）です。

発達検査の今

連載を開始したのは今から約 10 年前の、2012 年。2007 年に始まった特別支援教育と、それに併せて起こったアセスメント・ブームが、ひと段落ついた頃でした。特別支援教育がスタートした頃は、発達障害の支援や特別支援教育に関する研修も数多く行われ、知能検査や発達検査によって個人内差を明らかにし、長所活用型支援（得意を活かし、苦手を補う）を行うことで、支援や教育は劇的に改善する！と謳われていました（喧伝されているように感じた、というこ

とですが)。この時期に発達検査講習会の参加者からは「学齢なら WISC だけど、幼児にはできないので K 式も学びにきました」「学齢だけど発達的に WISC は難しい場合もあるので、K 式を学びにきました」などの言葉が、講習会受講の動機としてよく語られていました。何となく“発達検査は知能検査の2軍と思われてるのかな…？”と感じるような空気もありました。

あれから 10 年。検査がまるで魔法のように、子どもに対して必要な支援を導き出してくれるという空気は薄れたように感じます。一方で、障害福祉サービスの再編に伴い、発達支援事業所や放課後等デイサービス事業所などの、いわゆる療育事業所が非常に身近なものになったことから、知能検査・発達検査の社会的認知度も急激に高まったように思います。2012 年の連載では**『発達という目に見えないものを数量化しようとする発達検査は、ともすれば懐疑的にも見られがちです』**と書いていましたが、現在では発達検査はよくも悪くも以前よりも身近で気軽に受けるものになった気がしますし、数値の受け止めも少なくとも“怪しいもの”と見られることは、減ったように思います。

「こんなもんで何がわかるの？」とは言われなくなった一方で、やや検査を過大視する傾向もみられるかもしれません。そういう意味では、**「検査の限界」**について述べておくことが、現在ではより意味を増しているのかもしれないと思います。2012 年の原稿では検査の限界については十分触れていなかったようなので、今回はここを掘り下げて書いてみます。

検査の限界

乳幼児健診などでは、問診やスクリーニング検査を経て、いよいよ発達状態を詳細に把握する必要があると判断されたタイミングで、発達検査が導入されます。だからかもしれませんが、何となく検査を用いないインフォーマルな観察は『主観的情報』であり、標準化された検査の結果は『客観的情報』である、と考え、検査結果の方に信頼を置く傾向があるように感じます。

実際にはどちらも重要な情報であり、ここに優劣はないと考えています。例えば、『家庭で保護者が観察した情報』や『保育園での保育士さんが観察した情報』というインフォーマルな情報と、『検査場面で検査者が観察した情報』である検査結果には優劣はありません。

検査場面は、検査者と 1 対 1 で、検査者が子どもの関心や心理状態に目を配りながら検査の実施順序を考えて課題を進めていくという、ある意味で非常に**特殊な環境**です。この特殊な環境が子どもにとってはプラスに働く場合もあります。集団場面では自分の関心優先で集団活動に適応することが難しい子どもが、自分の関心やペースに合わせて個別的に課題を提示してもらうことで、生き生きと検査に取り組めるというケースもあります。一方でマイナスに働く場合もあって、個別的に“できる－できない”を評価されている、という感覚を持ち、口数が少なくなったり、過度に緊張してしまったりする子どももいます。注意が必要なのは、検査場面が子どもにとってプラスに働いていたとしても、それはただの事実であって、別に“その方が良い”というわけではないということです。検査場面という特殊な環境で

は適応が良かったとしても、“でもそれって一般的な環境では、なかなかないよね”という視点も必要です。検査場面では適応しやすく、保育園などの集団場面では適応が難しい…というケースであれば、検査場面のどのようなエッセンスが子どもの適応を挙げているのか、一部分でも日常の生活場面に導入できそうな要素はあるか…というあたりから、保育士さんや保護者の方と一緒に考えていくことになります。

もう一つの限界については、これまでの連載の中でも何度か取り上げていますが、やはり「測定誤差」の問題です。検査を実施すると、“発達年齢は○歳○か月”、“発達指数は○○”とはっきりとした結果が示されますが、これには測定誤差が含まれています。検査の標準化はとても大変な作業ですが、0歳から70歳まで含めても基準作成の元になったデータは3000件ほどで、これはのちに現場で実施されることになる検査実施数の 1%にも満たないでしょう。もちろん、統計的な分析をかけ、十分に妥当性と信頼性が得られるようにしてありますが、とはいえ唯一の“真の値”を算出できているということでもありません。検査を実施する人はこの「測定誤差」の問題も当然理解しているわけですが、検査結果を受け取った人が必ずしもそう認識するわけではないことから、検査に対する「過大視」が生じているのかもしれません。

改めて取り上げて感じたこと

久しぶりに、過去と同じテーマで書いてみましたが、自分自身が考えていることには大きな違いはないように感じました。検査の本質が変わるわけではないので当たり前なのかもしれませんが、一方で社会の中での認知度やその扱われ方は徐々に変化してきているようにも思います。検査のように、「数値化して」、「わかりやすく」情報を示してくれるものは、確かに有用であることは間違いありません。一方で、世の中には「曖昧なもの」、「わかりにくいもの」も実際はあふれていますし、子どもなんてその最たるものかもしれません。“発達検査でわかること”の限界を見定め、“わかりやすい”ことだけでなく、“曖昧で、わかりにくいもの”を、解釈せずそのまま受け止め、理解しようとする姿勢や視点もまた、今だからこそ求められているのかもしれません。

対人支援点描（31）

「スピリチュアルケアと公共性（2）」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

3.公共空間における宗教者のケアの限界

宗教者が相手の立場を思い、自ら信じる価値観、この場合、その宗教者の宗教的価値観や信仰がしっかりとしていればいるほど提供される宗教的ケアには良いものとして捉えられる。そのため、宗教者がケアに携わる際に、相手が信じるものや頼りたいものに頼れるよう働きかけるというスピリチュアルケアの姿勢は、もしかしたら本気で困っている人のことを思いやっていないか、自他ともに距離を置いた綺麗ごとの関わりと目に映るのかもしれない。それだけではなく、ケアを提供する宗教者自身の信仰や信念がなっておらず、ここぞという時にこそ自分の信じている信仰を伝えないで何が宗教者であるのか、という叱責にも近い苦言が呈されることもありうる。現に、スピリチュアルケアを提供する臨床宗教師の活動において、ある系統の宗教の横断的な宗教者の集まりに取り組む先生から、（その宗教者が）信じる宗教にこそ救いがあるのだから、それを伝えない活動は間違っているという指摘されたという出来事があった。

だがしかし、宗教者自身が活動する寺院や教会、宗教教団立や創設者に由来する病院や学校や福祉事業所などの宗教関係施設ではない一般の病院や公民館などといった公共空間の場合は、それで通るのかというと問題が残る。臨床宗教師の活動となった契機や理由の一つに東日本大震災があった。震災後の混乱の最中、遺体が安置された公共空間で宗教者が弔いをあげる行為が制限された出来事があったという逸話がある。この時、その宗教者は弔われずに安置されたご遺体を不憫に思い、その宗教的信念に基づいて善意で宗教的行為を行おうとしたのは語るまでもない。相手が死者であるだけに、相手の求めや合意といったものとは関係なく、宗教者側の判断による行為であっただろう。この時、宗教者は自身の宗教的価値観をもって、この世を思い、亡くなられた人びとを思い、遺族を思って祈ろうとしたのではないか。個々の死者を思っての動機であったかもしれないが、もっと普遍的な宗教的世界観のなかで祈りを捧げようとしたと考えられる。しかし、より現代の日本社会の現実に事柄の枠組みを置き換えてみたら、この行為はどのように解釈できるだろうか。遺体が安置されていた公民館や体育館で、特定の宗教の人物が、故人や遺族の求めに寄らず、故人の宗教的宗旨とは関係なく、一方的にある宗教者の宗教的価値観を強いられるという話になるのでは

ないか。つまり、公共空間における諸宗教や思想に対する公平性の逸脱、相手の人権の無視した行い、という見解が成り立つ。こうなってしまうと、宗教者の信仰にもとづく純粋で他者に対する思いやりや行為、素朴な憐みの気持ちが、その意図や想いに反して好ましくないものとなってしまうのである。もしかしたら宗教アレルギーや批判的な人からすれば、こうした言動自体が宗教の傲慢さとして目に映るかもしれない。もしくは、故人や遺族が属する他の宗教に対する侵害行為として非難される可能性もある。こうなってくると、もはや当初にその宗教者が願っていた願いからは完全に道が逸れたものとなるのではないか。

また宗教的行為とは異なり、ケアという観点からとらえてみたら、どうであろうか。ケアを受ける人がケアの提供者である宗教者の宗教的価値観に合致や受容がないと、良かれと思ってしたことがありがた迷惑のような負担を与えることになりかねない。一方的な押し付けであれば布教や伝道という話であれば通るのだろうが、ケアということではケアにはならない。現代のケア学の観点からしても、ケア提供者が良いと思うものを与えるケアは、パターナリズム的ケアという点で否定されるか、否定されないまでもケア弱者の役割を固定化させてしまうような危険性があるのではないだろうか。強いては、依存やマインドコントロールといった宗教に伴う人を盲目にさせる危険性が潜んでいるといえるだろう。

宗教者が現代社会の公共空間でケアを行うには、これまで述べたような限界があると考えられる。そこで、宗教者が公共空間でケアを行うには、どうすれば良いのかを続けて考えてみる必要がある。

（つづく）

立場が変わると何が見える



～その5　家族が本気で語らうと　～

坂口　伊都

はじめに

5 月だというのに暑日が続き、季節の移り変わりの速さを感じます。寒暖差が激しくて、何を着たらいいか迷い、体調を崩しやすい時期ですが、皆さまお元気でしょうか。

人が繰り出すゴールデンウィークが戻ってきて、懐かしいような、慣れないような不思議な感覚になりました。5月4日に友人と二人で動物園に何十年かぶりで出かけました。20歳年上の友人がカメラを始め、ゴリラを撮りたいから一緒に京都市動物園に行こうと誘われました。友人によるとゴリラがいる動物園は、千葉、東京、静岡、愛知、京都の動物園にしかいないそうです。子どもの頃は、どこの動物園にもゴリラがいたように記憶しているのですが、絶滅寸前になっている種がいたり、繁殖や飼育が難しいことが理由だと知りました。

私は、スマホカメラになりますが、動物を撮ってみたいと思っていたので楽しみにしていました。何も好き好んでゴールデンウィークに行かなくてもいいのですが、GW だからと言って息子から連絡があるわけでもなく、娘はバイトに忙しそうで、夫はいつも通り仕事。私には自由に使える時間がたっぷりあったので、予定大歓迎でした。子育て中は、子どもが喜ぶと期待して動物園に行きましたが、子ども抜きで好きに動物園を見て回れる日が来るとは。子どもの手が離れたことを改めて実感します。

ゴリラは、動物園の真ん中にいて、目玉になっているとわかりました。ゴリラの親子でしょうか、気持ちよさそうに昼寝をしていました。できれば、静かなところで眠りたいよね、ごめんね。



子どもと行った時は、多くの動物が檻に入れられて、覇気がないように見えましたが、何十年かぶりに訪れたら、動物への負荷が軽減するようにいろいろ工夫が凝らされていました。動物園で泣いている小さな子を見て、我が家でも同じような事があったなぁと思い出

します。バギーに乗って連れられている赤ちゃんは、今日の事を全く覚えていないものですが、赤ちゃんを連れて出かけたくなる気持ちはよくわかります。私も、子どもの世話に明け暮れる毎日から解放されたくて、たまには外に出て息抜きをしたいと切望していた頃があります。動物園で動物を見ながら、半分は人間観察を楽しんでいました。

翌日の5日には、石川県で大きな地震がありました。その後も各地で比較的大きな揺れが続き、地震が起きやすい時期に生きているのだろうなと改めて感じます。家族旅行にコロナで外出を控えていた3年が終わり、人が動き出し、自然界も動き始めているようです。戦争、物価の上昇と不安定な時代を私たちは生きているのですね。

今回は、前号の短信で紹介した、立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門講座で、里親家庭の体験を話したことを書きたいと思います。私が、里親をしたいと言い出し、そこに巻き込まれていった家族の話です。講座という舞台で家族が話すと何が起きたのかを書いていきます。どうぞ、最後までお付き合いください。

打ち合わせが始まらない

娘と二人で里親家庭の経験を話す機会は何度かあり、その時はいつも打ち合わせをしてきました。今回も私が事前に資料を作り、娘は打ち合わせをする気満々ですが、夫は気が進まないのか、いつまで経っても打ち合わせをしようとしません。作った資料も直前になるまで、見ていないことが判明しました。夫の仕事も忙しそうでしたし、慣れないことなので、腰が引けるのも仕方がないかと半ばあきらめていました。

それでも、前日になるとさすがに焦ってきます。もう打ち合わせを始めてしまおうと、資料を広げ、この部分は娘が前にはこう話していたけど、今回はどうする？と娘に確かめ、それを夫にも聞いてもらいました。夫には、その当時を思い出して話したらいいからと伝えましたが、夫は「思い出せない、どうだったかなぁ」の連発で、腰の引けが続きます。とりあえず、「妻が言い出したから」と答えるのは禁止しました。始まりがそうであれ、自身の考えは誰にでもあるので、自分の事として話すことに徹してもらいました。

話す内容は、自己紹介をしてから里親の経緯を説明し、家族の転機として次の4つです。

その1　母親が里親をしたいと言い出した時
その2　里子がやってきた時
その3　トラブルが止まらない時
その4　再会した時

原稿を作ることは一切せず、その時に感じたことを語っているのですが、あまりにもざっくりとした確認だけで打ち合わせが終わり、どうなることか不安が残りながら会場に向かいました。

講座本番

講座を受けているのは、里親支援をされている方だったので、里親をしたいと言い出した私の話より、それに巻き込まれた家族の声を聞いていただく方がいいだろうと私がインタビュアーになり、夫と娘にその時の気持ちを語ってもらう形にしました。

夫は不慣れなので、何度か経験ある娘に先に振り、それを受けて夫が思い出しながら話します。娘の話は、忖度がなく、率直な物言いで剛速球ストレートを投げつけてくるので、毎回何を言われるのかハラハラします。

まず私の方から、

家族として暮らしている中に里親をしていと話したことで、家族を巻き込んでしまったと今は感じていると話しました。

里親制度は、善悪で言えば「善」です。夫は、高齢者施設で働いている人間で、妻からそんな申し出があれば、「嫌」とは言えない。そして、私が里親制度を説明すればするほど、子どもたちも「No」とは言えなくなります。その当時はそのことをわかりませんでしたが、振り返ると答えが決まっている提案をしたのだと気づきました。

その流れを受けて夫は、「妻は言い出すときかないので」と言い、

それに私がカチンとなりました。

「夫は何でもいいと答える人なので、私が持ちかければ深く考えずにやればいいと言うだろうから、なかなか言い出せなかったところがあったのです」

と反撃。公開夫婦喧嘩のようになり、会場が苦笑いに包まれてしまいました。



この会話は、日常の中で出てくることはなく、夫も私も相手がそんな風に捉えていたのかと知りました。夫にそこまで頑固だと思われるきっかけがよくわかりませんが、きっと頑固なのでしょう。

夫は、本番中に里子との生活を徐々に思い出していったそうです。それまで、なかなか思い出せなかったものが、本番の中で鮮明に思い出していったと後で教えてくれました。

里子のトラブルでは、自分が子育てをしていく中で良かれと思ってやっていたことが、里子にとっては、どうだったのかと講座で話しながら内省をしていったようです。

例えば、里父と一緒に出かける。里父の好きな場所に里子を連れていく。
それが、里子にとって刺激になって、一人で黙って電車に乗って行ってしまうことがあった。

自分が良かれと思ってしていることに妻から苦情を言われると、反発心が起きます。
関係が近いなら、なおさらです。夫は、
「あの時は自分がしていることが里子を刺激していたと気づけなかった」
と話していました。

人のバランスは面白いもので、娘と二人で話す時と夫が加わって話す時では、雰囲気も変わります。そこに触発されたのか、娘から初告白が飛び出しました。
小学6年生の時にファミリホームに1週間ほどお泊りに行く機会があったのですが、そこに暮らしていた年上の女の子と喧嘩をして、泣かせてしまったそうです。

私の頭の中は混乱しました。その当時は楽しかったと言って帰ってきて、その後高校生になってから、あの時はしんどかったと知らされ、実は年上の子を泣かせてしまったんだと話しています。

「うん？泣かされたのではなくて、泣かせたの？」
「そう、何か文句あるならはっきり言えって言われたら、じゃあ言わせてもらうけどと、お兄ちゃんに言うように言い返したら泣いちゃった」

子どもの心は複雑です。
楽しかったと言ってニコニコ顔で帰ってきた小学6年生、
あの時はしんどかったと泣かれたのは高校1年生、
実は年上の女の子を泣かせてしまったと告白されたのが、大学3回生。

どれも娘には真実なのでしょう。
娘の前で、父も母も正直な気持ちを語っているのを聞いて、感化されたようです。

里父、里母、里姉が揃うことで、より家族の姿が立体的に浮かび上がりました。家族同士でも、相手の気持ちを理解しているようで理解できていなかったことがわかります。
講座の中で、夫の気持ちが伝わってくる場面がありました。夫は里父として、里子と離れる際、児童相談所まで連れて行きました。

話しているうちに、その場面が蘇ってきたようで、夫が言葉を詰まらせて涙ぐみました。この時のこと

を思い出さないようにこの時まで、複雑な感情に蓋をしていたのでしょう。涙をこらえながら、何回も話そうとして声を詰まらせ、「すいません」と言っている姿が印象的でした。

この姿を目の当たりにして、娘も私も驚きました。
父にこんな一面があったとは。
この場がなければ、一生知らずに過ごしていたと思います。

里子との別れは、私たちにとって大きな穴が開いたような経験でした。
私は、身を切られるような思いでした。
里子と離れてみると、家族3人揃って話すのは里子との思い出ばかりが出てきます。

現在は、元里子と数か月ごとにお出かけをしています。御朱印集めや甘いものを一緒に食べたり、洞窟に行ったこともありました。
元里子には、あなたが嫌いになったから離れて暮らすことになったわけではないと知ってもらいたかったので、ボランティアとして外出できないかお願いしました。里子に会いたくないと言われれば、諦めるしかありませんが楽しみにしてくれること、出かけている時にちょっとした甘えを出してくれることがとても嬉しく感じます。外出の時間は私たちにとって、やさしい時間となっています。

今でも、何が正解だったのか、里子は我が家に来て良かったのかどうか等、わからないことだらけで、この感覚はこれからもずっと続くのだろうと思います。

娘と二人で体験を話していた時は、娘に質問が集中していました。里姉という立場で良いことも悪いことも語る存在は珍しいので、娘の語りを聞きながらそれぞれに子どもの顔を思い浮かべている方が多かったように思います。
その展開は、今回も変わらないだろうと思っていたのですが、里父が入ることで、里父と里母に向けられる質問が多くあり、意外でした。里父と里母が里親家庭をしながら感じていたこと、見ていたこと、大切にしていたこと等がそれぞれ違っていたのが要因の一つかもしれません。

不思議な体験

講座が終わってからの帰り道、「皆で話せて良かったね」が3人の感想でした。何が良かったのかはわからないのですが、貴重な体験になったことには確信を持てました。

私たち家族に何が起きていたのだろうと夫や娘に聞いてみました。夫は、自分たちがしてきたことに関心を持つ人がいることに驚いたそうです。誰が自分の話を聞きたいのだろう、そんな人がいるのかと思っていたそうですが、真剣に聞いてもえ、質問を多く受けたことで、自分がしてきたことを初めて認められたと感じられたと話してくれました。里兄である息子にも講座に出てみないか誘ったのですが、

「自分が人に聞かせるような話は一つもないので出ることは遠慮します」と辞退した感覚と同じだったのだとわかりました。

娘は、「家族だから言えることもあるけど、逆に言いにくいこともあるから、こうして話せたことはいいことだと思う」と言っていました。講座で話す体験は、私たちにとって心温まる経験でした。良い事だけでなく、辛い話しもありましたが、そこをお互いに知ることができ、家族に対して、もっとそれぞれの気持ちを受けとめていという感覚になりました。

講座という特別の場で、自分が話すことを求められている場に身を置き、

第三者（社会）が耳を傾けてくれることで、話に値することだと感じられた

家族の話から、それぞれの思いを知ることができ、
家族の意外な一面もわかった

自分もわかるように意識して話そうとして結果、自身の整理をしていく作業をし、
家族として分かり合える可能性を知った



この講座で家族と一緒に話せたことは、私の気持ちを楽にさせてくれました。

今回のような気づきが多く起こるような話は、その後の生活の中では起きていません。講座の前はよく、家族と話しているようで肝心な話ができない、わかってもらえないと感じ続けていました。講座が終わってからも家族との話は、そこまで深まるものになっていませんが、これまでとは違う何かを手に入れ、余裕を持っていられる感覚が今はあります。

家族への理解が深まる話をするためには、非日常的な設定がいるのでしょう。講座の時にできたような話が家族の中で、もっとできればいいのにと思いますが、難しい。わかっているようでわかっていない、でも分かり合いたいと思いながら生活していくのが家族なのですね。

周辺からの記憶 39

2020 年度　シンポジウム

村本邦子（立命館大学）

2023 年度はサバティカルなので、この機会にと行きたい所をあちこち訪ねている。東北へ行くのも、昨年度よりプロジェクトでは年 1 回となってしまったため、4 月、5 月は東北に足を延ばしてきた。今回は、震災遺構となった石巻の門脇小学校と大川小学校、浪江の請戸小学校を訪問した。昨年、門脇小学校を最後に、岩手、宮城、福島の 3 県にある 40 件すべての津波による震災遺構が出揃ったとのことである。

門脇小学校は、津波をかぶり、火災にも見舞われたところである。鉄筋コンクリート 3 階建ての校舎はほぼ全焼したが、校内の教職員や避難住民らは 2 階から裏山に逃げて無事だった。学芸員が、体験者の記憶を言葉と絵で表現したという展示コーナーがあったり、最後には「心をほどく」というコーナーが準備されていて、植物や雨のしずくなどリラクゼーション系の映像が流れているなど、心のこもった暖かい展示がなされていた。それとは対照的に、児童 78 人中 74 人、教職員 11 人中 10 人が命を落とす大惨事となった大川小学校は、その後、訴訟も起こり、遺構として残すか否かについても紛糾したこともあってか、これまで 2 度訪れた時にはなかった柵があちこちに貼られ、胸の痛む悲しい場所になっていた。請戸小学校はできたばかりの時には見かけなかった原発災害についての浪江の町の記録がきちんと扱われていた。



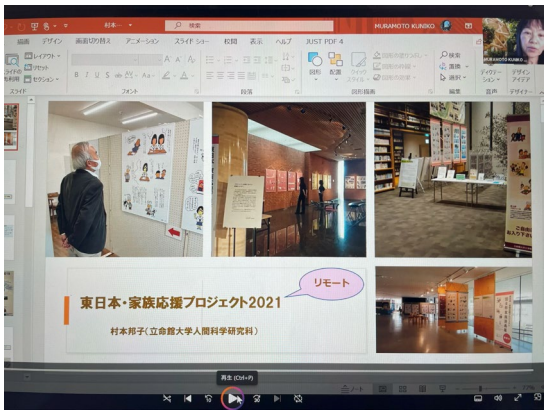
7 月には南相馬に原発事故を扱った新しいミュージアムもできるようだ。9 月にまた訪れたい。

シンポジウム「リモートから復興の証人となった１年～聴く・学ぶ・繋がる」

第1部

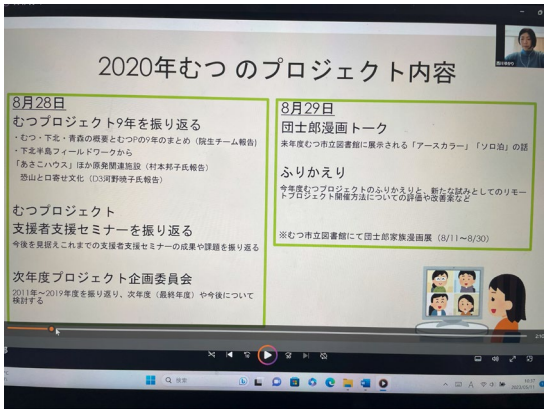
院生による活動報告
～プロジェクトからの学び

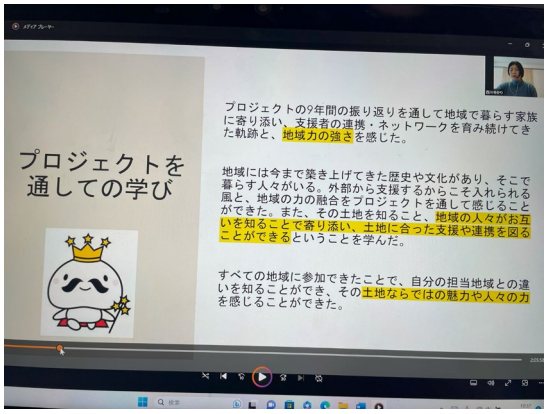
2021 年 2 月 20 日、オンラインで、シンポジウム「リモートから復興の証人となった 1 年～聴く・学ぶ・繋がる」を開催した。最初に、むつ、多賀城・石巻、宮古、福島の各チームが報告を行い、現地の方からコメントを頂いた。

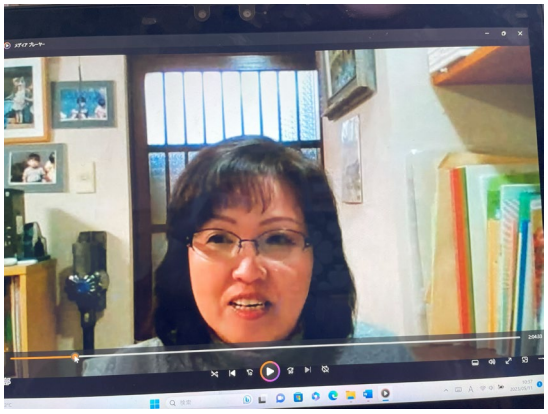


プロジェクトを通しての学びとして、むつチームからは、「プロジェクト 9 年間を振り返ったことから、地域で暮らす家族に寄り添い、支援者の連携、ネットワークを積み重ねてきた軌跡と地域力の強さを感じた。地域には今まで築き上げてきた歴史や文化があり、そこで暮らす人がいる。外部から入れられる風と地域の力の融合を感じた。土地を知ること、地域の人々がお互いを知ることで、土地にあった支援や連携を図ることができる。リモートの形ですべての地域に参加できたので、地域による違いを知り、それぞれの土地や人々の魅力を感じた。むつから始まるこのプロジェクトが、他の地域を牽引する役割を担っているという意識を現地の方も感じてくださっているからこそ、プロジェクトを毎年各地で継続することができ、あらたな人のつながりを生み出している。オンライン開催によって、現地の方も他の地域に参加することができ、あらたなつながりから連携や協働が生まれた。自分たち院生もさまざまな職種の院生や修了生とつながることができ、今後の生き方や働き方を考えることができた。」との報告だった。

杉浦裕子さん（青森県むつ児童相談所主任専門員）からは、「リアルで会って、むつの空気や匂い、食材など味わって欲しかった。それがかなわなかったことは残念だったが、リモートだったことで、これまでむつに来た修了生から、今こうしています、むつでの経験が活きていると聞き、感謝でいっぱいになった。地元では、いつも良い風を吹き込んでもらっているが、負担をかけているだけでなく、活かしてもらえているのだと嬉しかった。みなさんは、むつの娘や息子のような存在。先週は地元スタッフで集まって、今後のことを話し合った。私自身は 3 月で現役を退くが、継続への前向きな話が出ていてありがたい。力を頂いたと思う。」とのコメントをもらった。

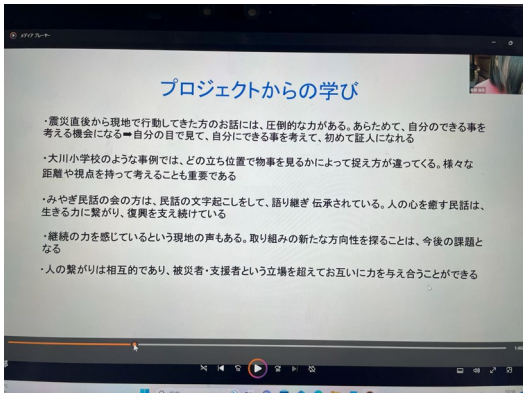






多賀城・石巻チームからは、「震災直後から現地で行動してきた方の話には圧倒的な力がある。自分の眼で見て、自分にできることを考えて初めて証人になれる。大川小のような事例では、どの立ち位置で物事を見るかによって捉え方が違ってくる。様々な距離や視点をもって考えることも重要だと思った。みやぎ民話の会の方々は、民話の文字起こしをして、伝承している。民話は生きる力につながり、復興を支え続けている。継続の力を感じているという現地の声を聞き、取り組みの新たな方向性を探ることが今後の課題になると思った。人のつながりは相互的であり、被災者支援者という立場を越えて互いに力を与え合うことができると学んだ」と報告があった。

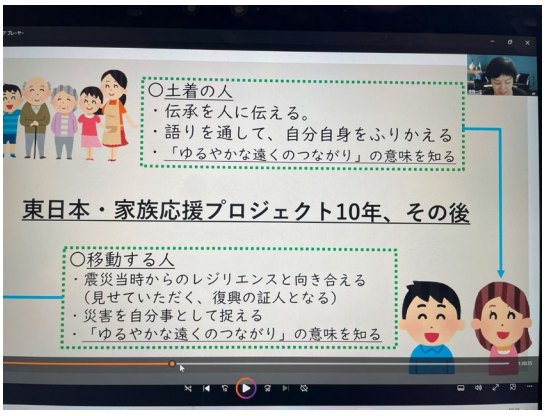
現地の丸山隆氏さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）からは、「あっという間の十年。これまで縦のつながりしか見えなかったが、リモートで横の拡がりを見れて良かった。こうやってネットワークを作ってきたすごさを感じる。自分たちの体験を話したが、HP の報告を読み、よく感じてもらえたことがわかり、良かった。最近も震度 6 で、4 日間の断水があった。現地のひどさは自分が経験して、その場に居合わせることで初めてわかるものである。ない方がよいことではあるが、みなさんも、今後、そんなことがあった時、きっとプロジェクトの体験が蘇って、ああ、とわかるところがあると思う。その時にこそ活かされるものがあるのではないか。語らなければ伝わらないし、聞いてもらわないと語れない。天気予報をしても天気は変えられないが、人間の行動は変えられるという言葉を聞いた。先々頑張って欲しい」とのコメントをもらった。

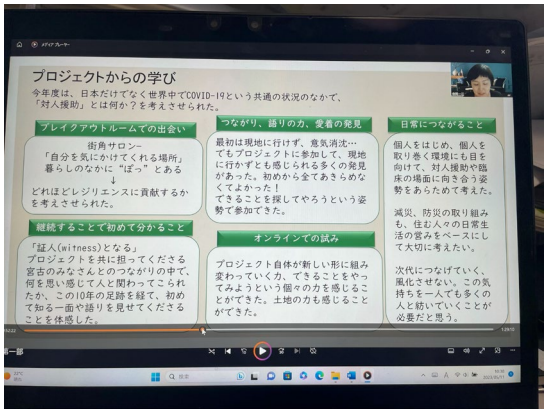




宮古チームは、「世界中が COVID-19 という共通の状況を抱えるなかで、対人援助とは何かを考えさせられた。リモートでも、ブレイクアウトルームでの出会いが良かった。自分を気にかけてくれる場所が暮らしの中にあることがレジリエンスに貢献する。最初は現地に行けず、意気消沈したが、現地に行かずとも多くの発見があり、初めからあきらめなくてよかったと思った。できることを探してやろうという姿勢で参加できた。継続することで初めてわかることがある。オンラインの試みで、プロジェクト自体が新しい形に組み変わっていく力、できることをやってみようという個々の力を感じることができた。個人をはじめ、個人を取り巻く環境にも目を向けて、対人援助や臨床の場面に向き合う姿勢を考えた。減災・防災の取り組みも、日常生活の営みをベースに考えたい。次世代につなげていく、風化させない。この気持ちを一人でも多くの人と紡いでいくことが必要である」とのことだった。

現地の齊藤清志さん（宮古市企画部田老総合事務所所長）からは、「立命館にはずいぶんお世話になってきた。私は3年前からプロジェクトに関わらせてもらっている。十年ひと区切りと言われるが、被災者からすれば区切れない。これまでも、これからも、毎日、一日一日を重ねている。地元の小学生の半分以上が震災を経験していない時代になった。地元の人も語りたがらない。こうして院生たちと会話しながら、思い出したり、語ったり、継続していくことが大事である」とのことだった。鷺田敦子さん（社会福祉法人若竹会多機能事業所すきっぷサービス管理責任者）からは、「私は7回目の参加。手探りだったが、少しずつ形ができてきた。次世代につなげていく、風化させないというのが被災地の私たちの役目である。宮古を思ってくれている人がいるということがありがたい」と言って頂いた。

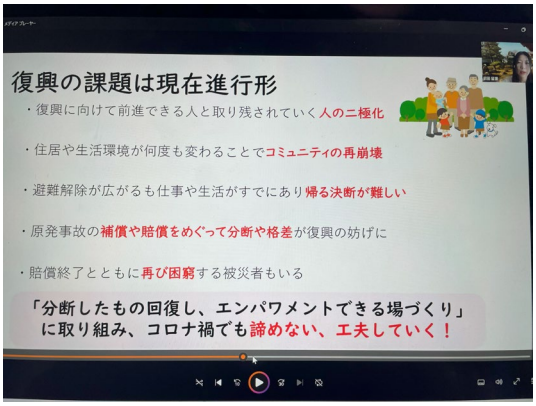






福島チームは、「語り合うだけでなく、語り継ぐことの意義や大切さを学んだ。東日本大震災に関わらず、様々な課題を自分ごと化して考えることが大切である。学んだことをどう理解し、周りの人にどう共有し、自分なりに実践するかということを模索することが必要であると実感した。さまざまな立場からの考えを学んだり、さまざまな職種の人と議論したりすることを通して、対人援助職として多角的な視点から他者と向き合う重要性を痛感し、再認識できた」との報告だった。

現地の小磯厚子氏（白河市つどいの広場事業・おひさまひろば副代表）からは、「寄り添うとするみなさんがありがたい。福島は放射能のことで、第二、第三の課題を抱えた人がたくさんいるなかで、忘れたいし、忘れる人が多い。みなさんのように、あらためて聞いてくれる、忘れないで頂けるということだけでありがたい。また、みなさんが調べたことを教えてもらうことで、伝承館などに行ってみようとかなど、自分の方も学ぶことがある。発信することで働きかけることができる。自分もできることを考えよう。県内でも立場によって違う人のことを考えられるようにしたい」ということだった。





修了生による報告
～プロジェクトからの学びとその後

木下大輔さん（京都府教育委員会認定フリースクール学びの森教室長）からは、「むつに行った時、自分は何の当事者なんだろうかと考えた。阪神淡路は5歳の時で、覚えていない。自分の立ち位置をどこに定めたらいいのかわからなかった。

その経験があり、今、フリースクールで不登校の子どもたちと関わっているが、自分はどういう存在として活動するのかと、立ち位置を意識する。それは今も刺さっているプロジェクトからの学びと言えると思う。」



新谷眞貴子さん（NPO 法人家族・子育てを応援する会理事長）からは、「奈良県広陵町でNPO法人の代表として乳幼児の子育て支援をしている。公立中学校で教員として30年勤め、子どもや家族を見てきて、地域で家族の支援ができたらと大学院に入った。

震災の年、福島で被災した方と出会い、中学生と一緒に考えた。『わかって欲しい、忘れないで欲しい』と言われたその思いがプロジェクトにつながった。福島に行き、レポートの終わりに『修了後にも発見があると思う』と書き、修了してからも、多賀城と福島のプロジェクトに継続参加した。

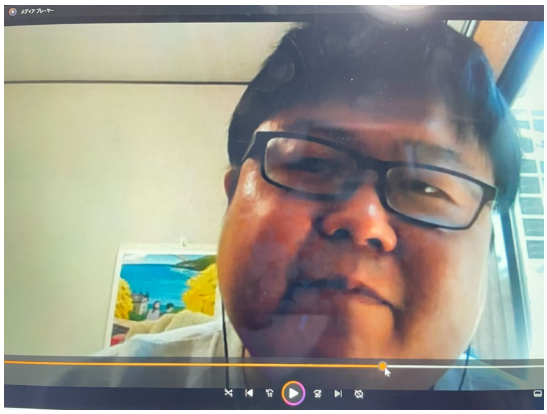
5年前、活動に踏み出せなかった私に、『漫画展をやったらいいやん』と団先生に背中を押してもらい、震災で考えた漫画展やトークの意味を自分の町の人たちと考えている。子育てに寄り添い、地域に広げたい、つながる、共に発信。プロジェクトで自然に学んだこと、土地土地で生きるみなさんに教えてもらったこと、チームとして活動するなかで学んだことである。院生たちには要領オーバーがたくさんあると思う。それでも、後から支援の現場でわかってくることがあるということを伝えたい。」



内田一樹さん（自由の森学園中学高等学校社会科教諭）からは、「2015年、増田先生と石巻に行った。埼玉県の自由の森学園で高校1年生の副担任に入っている。生徒たちは、小学校入学時、3.11を関東で被災、今年コロナでまた入学式が延期になるという経験をしている。石巻に行って、景色、食べ

物も良かったし、のびのびして、得るものが多かった。自分の個人史の中で大きな意味がある。関わった人たちにたくさんのものをもらった。

石巻とは予定があれば関わり続けるようにしてきた。コーディネーターの阿部さんの紹介で中高生の学習支援の団体に参加し、子どもたちと関わった。去年もZOOMで学習支援をした。院生報告を聞いて懐かしい。直接聞くことで得るものがある。証人になるとはそういうこと。機会があれば現地に行って欲しい。文字で知ったことは、直接自分の経験からくる知に結びついて初めてより意義深いものとなる」



高井小織さん（京都光華女子大学准教授）からは、「むつに2015年に行ったが、前泊してあさこハウスや大間原発周辺に行った。これが大間マグロ、福島のおきあがりこぼうし。ZOOMで懐かしい方々にお会いできて嬉しい。今、言語聴覚士養成の教員をやっている。京都の公立の中学に勤めていて、2015年に転職して初めて東北を自分で回った。

広島の原爆が落ちた地点に近い所で生まれたので、核の問題は自分の中にずっとある。まず青森に行って、六ケ所村や東通村など、自分から情報を取ろうとしないといけないなと思った。福島では、あぐりコーヒーやみんなの家でお話をお聞きし、それぞれ条件が全然違うなかで言いにくいことが増えていて、表面上は上手につきあっていても、自分の言葉で語ってつながることができにくい状況になっていると思った。

今、マスクをして、口元が見えず、どれくらい伝えられていないのか。職場でもZOOMを使うが、これは視線がつながらない。相手と一緒に向き合って話していくことが大事。客観的に離れて見て、単なるエピソードからも抽出されるものがあるのだなと思う。振り返って、大学院に行ったことは長い人生のなかで良い２年だった。若い人たちが、学ぶということを外から受け取るものではなく、自分という歴史を積み重ねながらアウトプットしていく、そんなことができる人たちがどんどん増えるといい。私自身も聞こえない子どもたちを育てるお母さんのサークルと繋がり続けるなかで、福島と繋がってている。これからも関わっていきたい」ということだった。



鼎談「漫画展の働きについて」

団士郎さん、桜井忍さん（むつ市立図書館館長）、清武愛流さん（修了生、劇団Bridge industries代表）による鼎談をした。最初に団さんからむつでの漫画展の写真が紹介され、「きれいな展示でゆっくり見てもらえるし、気に入っている」とのことだった。桜井さん、清武さんの順に思ったことが語られた。



桜井さんからは、「最初は、あまり被害もなかったのに、ここでやっていいのかなと思っていたが、何年かやっているうちに、家族の問題はどんな場所でもあるのだから、ここでやってもいいのかなと思うようになった。毎年、先生方や院生のみなさんに来てもらって、遠い遠い親戚のおばちゃんのような感覚で、今年も会えて良かったなあと思う。

むつの図書館は薄暗い。図書館と言う場所柄、一人で来る人が多く、漫画パネルの前でじっくりゆっくり見ている人たち、ひとつの作品の前で佇んでいる姿をカウンターから見ていると、感慨が湧いてくる。出かけて行った先で、周りに漂う雰囲気も味わいながら、漫画と対峙する。自分の過去の思い出や抑え込んでいた感情などが沸き上がってきて、漫画を味わう。

ＣＤとコンサート、DVDと映画館がまったく違うように、漫画展のパネルが会場に届き、会場の雰囲気を纏い、同じパネルでも、各地で違ったものが受けとめられているのではないだろうか。コロナが落ち着けば、また違う場所での展示を見れたらと思っている」とのことだった。



清武さんからは、「2012年に入学し、前半の５～６年、漫画展にいた。いつも素敵な空間に展示されているが、自分自身の居心地は良くはなかった。ネガティブな意味ではなく、ポジティブに受け留めている。僕は、その違和感が好きで、ワクワクする。違和感は、そこから何が起きるかわからない。それをどう居心地よくするかを楽しんできたし、そうするなかで思ってもいないことが起きてくる。場と人との臨場感を伝えられたらと思う。もしかしたら、フラリと立ち寄る人も同じかもしれない。あたふたしながらも、振り返れば、普通に過ごしている人と一緒に存在してみようというところから始めていたと思う。

たとえば、むつには弁当を食っている人がいた。僕もそこで飯を食うことにした。スマホ触っている女子高生がいたら、僕もスマホ触ってみた。漫画展をどうするというのではなく、そこにいる人たちと一緒に過ごす。漫画を読みに来る人がいたら、冊子をどうぞとお渡しする。ただ、飯食ってたり、スマホいじっていた人がいきなり接近してくるとびっくりする。小冊子が鍵になっている。これがなければ関われなかった。

時々、おしゃべりすることもある。おしゃべりしていく人たちは、ある程度試行錯誤して、乗り越えた経験があったり、その最中だったものがおしゃべりのなかで試行錯誤が完結していく。必死に自分の体験を伝えようとする人たちの多くは、微笑ましいというか笑顔で終話する。そして、あんた次の人たち来たから冊子もっていかなきゃだめだよと背中を押してくれる。

話さない人は多い。それも大事。話すこと、話せないこと、関われないこと、彼らから学び、応援されたことが多かった。オレンジ色のほんわかした暖かい空間だった。過ごしにくいけど、過ごしやすさもある。関係性を気にしなくていい間柄。人がちらほらいる空間だったり、少々ざわつきがあったり、誰かしらがそっといる。お互いにいることを感じながらいる。非日常だが日常でもある。彼らがどうなったかは知らないし、彼らも僕の先を知らない。だからこそ起きること、起きないことがある。漫画展にただいるところから始まるものがあった。僕も応援されている立場だった」ということだった。



団さんから、「漫画の展覧会をすることがある。さまざまな展覧会があるが、プロジェクトでは、４県で場所を模索してきたなかで、図書館は合うなと感じている。多くの場合、表現者は何かを見てもらおうとすると、誰に見せたいというのがあるが、私の場合は、私の描いたものを見てもらいたいというのが主ではなく、どなたがいらしてこの作品を見て頂けるのか、来場者を待っている作品である。図書館に並んでいる本は、読んでと主張しない。誰かの手にとられるのを待っているというイメージがある。そんなにたくさん人が来なくても、じっと見てくれている人たちがいる。

たまたま声をかけると、『こういうことあるよね』と、その人のことが語られることが何度もあった。物語を呼び覚まし、物語に人る場の提供。図書館は、ある程度の時間いても、誰からも不審がられないという世の中でも珍しいところで、そこにあの物語が置かれている。

前提としては、どの人にも物語がある。京都の京阪三条で漫画展をやった時、院生たちがインタビューしたら、ずいぶん多くの人、特に年配者がたくさん語ってくれた。東北での漫画展でも、それぞれの場所で今のようなことが起こっていて、語られなかったかもしれないけど、物語を秘めたパネル

と物語を持った人がそこで出会うというプロジェクトだった。直接被災に関わってではなく、こういう形で漫画の展示をして見てもらうという枠組みを十年続けてきて、これからも続けていけるといいし、またあらたな場所でもできるといい。これからも継続展開できたらいいなと思っている」ということだった。

さらに、桜井さんから「たしかに年配の人ほどよくわかる。私も年齢とともに物語が深く刺さるようになった」と、清武さんから「人と人とが直接つながっているというより、物を通してつながっていく。ゆるやかで末永くつきあっていける関係。その場所の決められた範囲で一緒に過ごしていけるというのは、人の日常の姿だとあらためて感じた」との言葉があった。

第1部への福原悠介さんコメント

福原さんは、1983 年宮城県仙台市生まれ。アートプロジェクトや民話語りなど、地域の文化を映像で記録するほか、「対話」をテーマとしたワークショップを行う。主な監督作に『家にあるひと』（2019）、『飯舘村に帰る』(2019)など。また、小森はるか監督『空に聞く』(2018)、小森はるか＋瀬尾夏美の『二重のまち／交代地のうたを編む』(2019)などにも参加。記録集「セントラル劇場でみた一本の映画」がある。

ここまで全体を通して聞いて、継続することの力を実感した。今回、コロナでオンラインになったが、それでもできること、それでしかできないことを模索している。これまでオフラインで継続してきたことが、それを可能にしている。一からこの関係性をオンライン作ることはできなかったと思う。継続して現地で作ってきた力、粘り強さに頭が下がる思いである。

むつの報告を聞き、東日本大震災と言うと、どうしても宮城、岩手、福島を思うが、原発の問題、青森の津波被害など知らなかった。チューリップ祭りやあさこハウスの柔らかい抵抗の仕方や、恐山の話もなるほどと思った。震災で死者の声を聞くことがあらためてクローズアップした。杉浦さんの「本当に会いたかった」という声を聞いて、継続していくことの形を想った。

多賀城・石巻は、自分も宮城なので、震災ボランティアでよく行った。大川小は居たたまれない気持ち。丸山さんの「天気は変えられなくても、人の行動は変えられる」という言葉は、現地でいろいろなことに取り組まれてきた人の言葉だと思った。

宮古では、獅子踊りや民話など地域に伝わってきたものが、コミュニティの歴史を連綿と繋いでいる。とくに岩手はそういうものが多い土地だと思った。村本先生の「ゆるやかな遠くのつながり」と言う言葉、そういうものが近くの強いつながりと別にあるのだと思った。斎藤さんのコメントで、「十年一区切りではない」という言葉が印象に残った。

福島は、子育ての問題、放射線の問題があり、他の地域と違う。地域が単に断絶したというだけでなく、非常に語りがたい実際が

ある。出て行った人、帰ってきた人、現地に残って子育てしている人の話しずらさ。「飯舘村に帰る」の映画を撮ったが、村に帰っているのは高齢者なので、若い人のことをあらためて知ることができた。

修了生の皆さんの言葉も印象深かった。被災者でない自分が何者として関わるのかを問うことが大切である。継続の力を実感されてきたことが伝わって来た。その時わからなくても現場の実感として理解することがある。僕も同じことを考えることがある。何かわからなくても現場の言葉や体験を浴びてみることも大事だと思っている。文字ではなく、直接経験することの大切さ。民話の語りともつながるものを感じる。

それから身体的なコミュニケーションを研究されていたのが印象的。マスクで表情が見えない、口の動きが見えない、ZOOMで視点が合わない、身体的なレベルでコミュニケーションできないなかで、どのように関係を作っていけるのかを考えさせられた。

漫画展のことでは、桜井さんは、被害は大きくなかったが、その場所でやる意味は何かを問われた。漫画になった誰かの物語を見るという行為から、そこにある種の普遍性が生まれているということだと思うが、そこに通じ合うものがある。

空間の問題、ライブとＣＤ。単に情報として受け取るのではなく、現場で見ることの意味も印象的だった。

清武さんも場の話をしていた。展覧会をどう作っていくかの試行錯誤。快適さを作るだけでなく、ノイズかもしれないものや場のルールがぶつかりながら模索していくというありかたは印象的だった。場に対する感覚が鋭敏なのだと思った。話さないことも大切。

団先生は、滞在してもらう場を作って、他の人の物語に自分の物語の連鎖反応を引き起こすものとしての漫画ということだったと思う。それがプロジェクトの中心になっていることの意味、十年継続していることの意味がある。誰かの物語が誰かの物語を生むのである。

中村さんコメント

私はおもにむつに関わって来た。十年、年を取ったなということと、次につながる若い人たち、修了生の再活性化が連綿と続いている。縦糸、横糸、斜め糸のような形で、十年というある区切りで出会った人たち。留学生たちもいて、世界各地の災害や原発事故、危機とともにある時代にこういうつながり方が大事だなと思う。次の十年どうするかなと考えながら、こんなふうに拡がりのあることをしていたのだとわかって、元気をもらった気がする。



第２部　映画「飯舘村に帰る」の鑑賞

第2部では、福原悠介監督による映画「飯舘村に帰る」を鑑賞した。



「飯舘村に帰る」

監督・作品提供：福原悠介／出演：島津信子　（2019年／55分／日本／Blu-ray）

東日本大震災による原発事故の影響で、思いもよらず避難しなければならなかった福島県飯舘村の人びと。避難指示が解除され、6年以上続いた仮設住宅での暮らしから、村に帰る選択をした村民たちは、かつての村の様子や帰村後の暮らし、村への想いを語る。語りを聞き、身ぶりを捉えた映像の記録。＜短編プログラム＞

映画鑑賞に先立ち、福原さんから、「震災後、仙台で映像記録の仕事をしながら、『聴くこと』をテーマとして考えるようになった。大災害後、後世はどう聴くことができるのか。『飯舘村に帰る』は、みやぎ民話の会の島津信子さんが聴き手を務めている。島津さんから、飯舘村の仮設住宅に通い、避難指示解除後に村へ帰った人を訪ねて話を聴くので記録して欲しいと言われた。作品性は弱く、いわゆる映画にしては何も起きない感じがするかもしれないが、島津さんが長年仮設に通って関係を作った人たちとの会話をそのままに感じてもらえたら」という説明があった。





第3部　座談会「こころの復興と聴く力」

第３部では、千葉晃央さん（修了生、家族支援と対人援助ちばっち主宰）がファシリテーターとなり、福原悠介さん、島津信子さん、2020年度院生プロジェクトメンバーである葛西優花さん、寺岡一江さん、前田留里さん、若洲花菜翠さんがパネリストとなって座談会「こころの復興と聴く力」を開催した。

福原：　先ほど少し触れたように、私は、「聴く」とはどういうことなのか考えながら、震災後、映像で記録してきた。民話語りの記録や地域のドキュメント映像など、最近では、瀬尾夏美さんと小森はるかさんの『二重の

町』のドキュメンタリーの撮影編集をやった。

もともと仙台の生まれで、東京の大学に行き、自主製作の劇映画を撮っていた。その後テレビや映画の現場で働いたが、挫折して、2010年、仙台に戻った。いわゆるニート状態だった時に震災が起き、自宅の被害はそれほどなかったので、せめてボランティアでもと石巻に通うようになった。

車がなかったので、せんだいメディアテークのボランティアのバスツアーを利用させてもらった。メディアテークはいろいろな活動をしていて、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」というのをやっていて、そこの手伝いをするようになった。いろんな人が登録して、いろんな記録を集めてアーカイブしていく。みんなでそれらを見て、話し合ったり交流したりする場所としても使われていた。おもに映像を使っていたので、過去の経験を活かすことができ、活動のプラットホームができた。

そこでやったことのなかでも、民話の記録、みやぎ民話の会の小野和子さんとの出会いは大きかった。小野さんが聴き手を務めて語りを聴くドキュメンタリー映画「うたう人」の撮影にもカメラマンの1人として参加した。民話に特別な興味があったわけではなかったが、山荘に泊りがけで行って、初めて目の当たりにした民話の語りの場は、すごい場だった。昔、おじいさんやおばあさんから聴いた民話が語り手さんの体にあって、それを声で語る。信頼関係と言ってしまえば簡単だが、それで言い尽くせない場。聴き手が小野さんであるということで語りが生まれてくることがよく伝わってきた。民話を語ると言うと、一方的に観客に語るイメージがあったが、パフォーマンスではなく、語り手と聴き手で共にその場を創り上げていくところに民話が発生していく。共にある場に発生する何かと感じられ、衝撃的だった。

このドキュメンタリー映画は、濱口竜介さんが撮った「波の音」「波の声」に続く三本目で、東北三部作だった。その後、濱口さんは、「寝ても覚めても」でカンヌに行ったり、脚本を書いた「スパイの妻」が大ヒットしたりで活躍している。最初の二本は被災した人同士が向き合って語るというドキュメンタリーで、三本目は被災と直接関係なく、民話を語る。

たくさんの人がそこで起きたことを記録しようと東北にやってきた。濱口さんもその一人だった。津波でなくなってしまったものは記録できない。語りしか残らない、とにかく話を聴くしかないと言う時に、我々はどのように聴くことができるのかというなかで、語る・聴くということがテーマになったと思う。普遍的な営みに視点がフォーカスしていって、その結果、民話というところまで行ったのではないかと思う。

濱口さん、瀬尾さん、小森さんなど若い表現者たちが、小野さんたちが50年近くやってきたことに共鳴した。自分もその一人である。小野さんについては、『会いたくて聞きたくて旅に出る』という名著があるので読んで欲しい。みなさんのプロジェクトにも根底に聴くということがあったのではないか、接点があるのではないかと思う。

「飯舘村に帰る」の聴き手である島津信子さんは、みやぎ民話の会の代表で、長年、小野さんと一緒に民話を聞いてこられた。丸森に住んでいて、飯舘村の人たちの仮設住宅に通っていた。避難指示が解除され、村人たちが帰還して会えなくなるので訪ねたい、あらためて映像で記録してくれないかと言われ、「わすれないセンター」に所蔵することを前提に引き受けた。

初回はカメラを持たずご挨拶に行った。談笑されている光景から、とてもいい関係であることが感じられ、ジャーナリスティックな視点で福島の状況を切り出すというよりも、島津さんとの関係を撮ろうと思った。それで、照明も使わず、小さなカメラとマイク、最低限のもので撮ると決めて行った。

編集のために何度も見直してみると、震災の話だけでなく、嫁入りの話や家出の話など、直接震災と関係ないパーソナルな話があり、そこで飯舘村ってそんなところだったのだなと感じられるようになった。どうしても被災地、被災者というイメージが先行してしまうが、現地の人々にとっては、そこに住んできた生活の時間があっての震災である。

そういうところを中心に編集しようと考えた。それは、みやぎ民話の会の姿勢が生み出したものでもあると思う。話だけ採って来ようというのではなく、どんな状況で民話を聞いたのか、背景にある暮らしも含めて丁寧に聴くという姿勢で、情報だけ採ってくるのではない聴き方が生み出していたものを撮影したものから発見した感じだった。



また、カメラマンとして現場にいて編集するという立場で、僕はいったい何を聴いたんだろうと思った。聞き手は島津さんだが、撮影しながら二人の声だけでなく、自分も何かを聴いていたという実感が何となくあった。この実感は何なのかを考えた。

まさにカメラで撮ったことによって聴いたこと、何度も撮影したものを見直す編集のなかで、何でもない話から村の土地の実感が伝わってくるということを発見していく。

どういうことなのかよくわからないまま、その時に何かを聴いたという実感があった。聴くというのは、音声を受け取って、言語を解釈してというだけでなく、撮影でカメラを向け、その人をどう撮る、どういう存在なのかをカメラを通して通して感じる、それも聴くことだった。編集で何度も見ることで、そこで起こっていることを発見していく。その時に何かを聴いた実感が生まれる。音声を聴き、とにかく言葉を交わし合うということだけでなく、相手の存在を受け取るプロセス、受け留めるという行為も聴くということではないか。カメラを回しながら僕も聴いていたのだという実感があった。

団先生の漫画も、聴いたことを漫画としてアウトプットしているのではなく、漫画を描くこと、展示すること自体が聴くことなのではないか。語っていることでさえ、おそらく聴くことなのではないか。なぜかと言えば、飯舘村でカメラで撮って、誰かの存在を受け取って、その体験が、今こうして僕に語らせている。この映画を撮るなかで、聴くということをそんなふうに理解するようになった。

みなさんのケアの現場でも、相手が必要としていることを聴いて判断し、アクションを起こすというプロセスがあると思うが、結果的にケアがうまく機能したとしたら、ケア自体が聴くという行為そのものなのではないか。その人の存在を受け留めるプロセスに聴くという行為が入っているはずだから、単に話を聴くだけでなく、存在をひっくるめて聴くこととして捉えたい。そんなところで、みなさんとの接点があるのではないかと思う。

島津： 福原さんから小野和子さんの話があったが、震災後、いろいろご縁があって、福原さんにも映像で記録する活動に入ってもらった。福原さんの撮られる映像はすごくきれいなんです。音声も丁寧に拾ってくださっている。福原さんって、良い仕事する人だなあと思っていた。

ご縁があって、国頭にあった仮設住宅に何度かお邪魔して、最初は昔話を聞いてもらって楽しんでもらえないかな、あわよくば村の民話を聞けないかなと思っていたが、「貧しい村で、昔話を聴く余裕なんかなかった。働くことでみな精一杯だった」と言われた。村に帰って縁が切れるのはしたくないと思い、村を訪ねてお話を聴こう福原さんに声をかけたのが始まりだった。

実際に撮ってもらって、福原さんへの信頼があったので、聴き方は甘いし、反省点も多いが、編集は福原さんに任せようとお願いした。福原さんがどんなふうに編集してくれるのかという興味もあった。見てなるほどなと思うところがたくさんあった。私自身が原発からの避難を前面に出すより、飯舘村ってこんなにこの人たちにとって大切な所だったということが伝わればいいなと思っていたら、そのとおりの編集だった。

それで終わったと思っていたが、福原さんは、この映画を、山形の国際映画祭、東京や福島、バリアフリー上映の映画祭など、あちこちに連れて行って、多くの人に見せてくれた。映画に仕事させてくれてることをありがたいなと思っている。

飯舘村のもう少し若い世代が思っている違っているのではないか。できれば、コロナが落ち着いたら、また村を訪ねて第二弾を撮りたいなという思いでいる。



福原：　バリアフリー上映では、どう届けるかということを考えるきっかけにもなった。今は、誰でもスマホで撮れて発信できる時代なので、何か作って終わりというのではなく、届け方まで考えて作る必要がある、届け方を含めて記録であると考えるようになった。

葛西：　香川県出身で地震とは縁のない生活だった。大阪に入って一人暮らしを始め、2年前に北摂地震があり、生まれて初めて地震の怖さを経験した。それまでは、地震と共に生きてはこなかったので、興味を持って、多賀城・石巻のプロジェクトに参加した。現地に行かずに理解できるのかなど不安もあったが、シンポジウムの打ち合わせなどで話し合ったり、共有するなかで、少しずつ馴染んできた。

そうやって入り込めたというようなところで、この映画を観た。今日で3回観たが、それぞれ村との関係も思いの形も違う人たちで、多様性があるのが興味深い。お話の途中で入るのどかな景色と、対照的に車の走る場面や工事の場面も印象的だった。

語っている言葉に大きな力があり、聞いている自分がドキリとさせられる瞬間があった。「原発を作った人は馬鹿だ」という強烈な言葉と柔らかい表情もあり、何とも言えない表情で聞いている妻の様子も感じられた。地震とは一切関係ない生い立ちの話などが気になって、なぜそういうお話が映画に組み入れられたのかと考え、ずっと暮らしてきた日常が想像できるからこそ、その当たり前がガラッと変わった様子がわかると感じた。

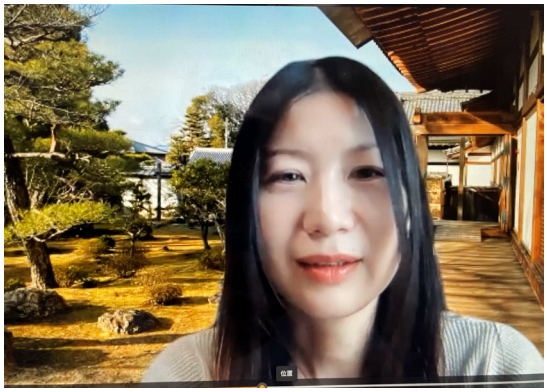


前田：　私にとって東北は縁のない土地で、プロジェクトに入るまで詳しいことは知らなかった。

全体を通しての学びは、まだまだ終わっていないこと、その根深さ、失ったものの大きさ、復興までの遠さだった。同時に、人のつながりを感じる。

映画は、じわじわくるものだった。声なき声を聴くというか、「被災者」ではなく、そこで生きてきた人があるということを感じる。当たり前の日常を奪われることの辛さ、それは放射能より辛い。自然のなかで生きてきた人にとって、私たちのように便利さを優先する方が不自然で、そちらの方があるべき姿なのかなと。だからこそ、そこにフレコンバックがあるというのが異様な光景だった。自然を大事に、自然と共に生きてきた人たちが、その異様な風景のなかで暮らさなければならないことを思った。

団先生の漫画展にあった、見ている人の場と共通するそこにある空気感、眼に見えない空気や場の力、そこに発生するものがあるということが印象に残った。



島津：　午前中に出てきた「自分事ごと」いうことがひっかかっている。30年くらい前に宮城沖地震があり、近いうちにまたあるよと言われていたのに、私にとってはずっと先だろうと思っていた。それが大震災があり、もうすぐ十年だねというところで、今日もまた起こった。

いつ何が起こるかわからない。その後に台風もあり、先日の地震で、津波から逃れて、ようやく再建したのに、また先日の地震で家が壊れた人。放射能から逃れて、丸森に家を建てた後、台風でまた被害に遭った人。そしてコロナもあり、何気ない日常が一番大切なんだとあらためて感じる。

この映画は、見る人によっては、もっと放射能や避難を前面に出して聞いたらいいんじゃないのと言う人もいるかもしれないが、全村避難は周知のことだと思うので、そのなかで暮らしてきた人々の暮らしが奪われて、それでも戻ってきたんだなと感じてもらえたらと思う。

「もう十年」かもしれないけれど、この十年、一人一人の時間は違う。全体の十年は一括りにされるが、一人ひとりで年老いていく。映画に出てくる元正さんは亡くなったし、最初に語った佐藤さんも今は入院している。体調を崩されたり、一人一人の十年はものすごく大きい。

村全体で考えた時、30年後、はたして何人暮らしているのかな。こうやって少しでも多くの人に知ってもらうこと、自分ごととして感じていって欲しいなと思う。こういうことを通して、人と人とのつながりが震災をきっかけにできているということは評価していいことだと思う。良い方に捉えて、アクションを起こせたらいいと思っている。

福原：　静かさと音の対比、映像的なことに気づいてもらって嬉しい。場の力と言う言葉が出て来て、団先生の話ともつながってくる。一方で場がない。飯舘村の方々は、仮設にいた時はみんながいたが、戻ってからは、高齢化も進み、移動も難しい。人が減っている、若い世代は帰ってこないというなかで、そもそも場がない。場の重要さと困難さを思う。みなさんのプロジェクトは、これまで作ってきた場があることで、これからも作っていける。島津さんの自分ごとということ、院生のみなさんに逆に聞きたいが、プロジェクトに参加しようと思って、あるいは参加して、どのへんが自分ごとですか？

葛西　地震を初めて経験した時、死ぬんじゃないかと思って、震度とかは全然違うが、それでも怖かった。その思いでプロジェクトに参加して、現地の方の被災体験を聴くなかで、リンクするところがあった。揺れが起こった時の心情を近く感じた、誰にでも何が起こるかわからない。起こると恐怖を持つ。リンクしたことで、自分ごと化したように思う。

前田　友達ができて、おととし初めて石巻に行った。日和山に連れて行ってもらい、そこからの景色を見ながら、そこに被災時のみなさんの写真があった。今見ている穏やかな遠くの海がどういう状況だったかと想像した時、これまで私が知らずにきた時間に、みなさんはすごい思いをしてきたんだなと思った。

同じ日本に住んで、同じ年月やってきたこと、当たり前にできていたことができなくなった。その時に、知らないことは罪だなと思った。同じ日本なのにこんなに違うんだ、知らないことがたくさんあるなと。プロジェクトで学んで、どういうプロセスを経て今にいたったのか知りたい、知らなければいけない、語り継いで次の世代にも伝えたいなと思う。現地に行った時のショックから自分ごと化はあったと思う。

若洲：　私は関東出身で、都内で震災を体験した。映画を観て、二人目の方が、息抜きにと町内で楽しいことをやったら、「被災したからお金もらってていいね」という心無い言葉や嫌がらせをされたというのを聞いて、「自分だったらしないけど、その人の気持ちもわかる」というところが印象に残った。

思い出したのが、震災の時、下校中で電車が止まって、大人が駅員に寄ってたかって怒鳴っていた。あの日一番ショックだったこと。それが思い出された。物理的なもので壊されるものあるが、心理的な面でも人を変えてしまうところがあるのかなと一番に思ったところです。

それから、飯舘村は貧しい村と言っても、どの人も飯舘村が好きなんだなというのが伝わってきた。東北と聞いて、思い浮かべられるものが漠然としていたが、思い浮かべられるお顔ができたり、土地のお祭りや民話がパッと思い浮かべられるようになったのが自分の中の変化だと思った。



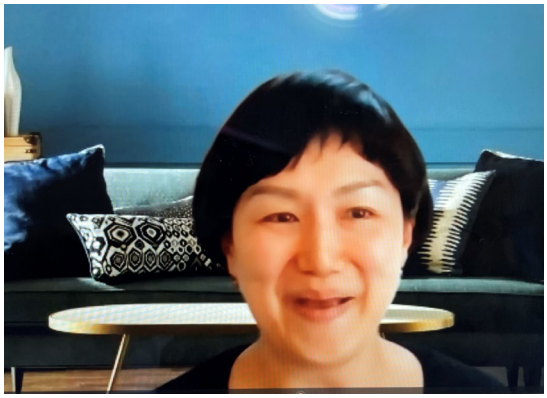
寺岡：　私はプロジェクトに導かれた印象を持っている。社会人1年目に阪神淡路大震災を経験した。生まれて初めて兵庫の海辺に釣りに連れて行ってもらって、初めて震災に遭った。私は早めに自宅に帰れたが、本当にホッとした。2年経って帰れない、何年先になるかわからないというのを聞いて、いったいどんな思いだったんだろうと重ね合わせて聞いていた。

東日本には、家族旅行でも行ったし、初ボーナスをもらって1週間旅した。お世話になったのに、その後訪れることができず、後ろ髪をひかれる思いの時に、十年続いているプロジェクトがあると知って、関わってみたいと思い参加した。

映像を何度か観て、見るたびに変化がある。島津さんが「あなたにとってどんな村？」と優しく、でも鋭いなと思ったが、聞いた時、トップバッターの佐藤さんが「仕方なく」と言いながら、ご夫妻が向かい合って、その間に島津さんがいて、2人が互いにうん

うんと聞いているのを見て、そこに暖かい空気が流れていた。

若洲さんが言っていたように、いろんな人から言われたというところが気になっていたが、仮設に入った時は馴染めなかったが、1年経って喧嘩するようになったんだというのを聞いて、仲がいいというより、ぶつかるというのも大事なつながりの要素で、そこから生まれてくるものもあるのかなと思った。



島津　お金の話が出たが、村の人、双葉や大熊、原発の影響で家を離れなければならない人にはそれなりのお金が出ている。村の人からは、帰村してお金が出なくなったと聞いた。もうひとつ、大きく農業やっていたり、酪農でも手広くやってきた人には、仕事をしなくても、それだけの補償金が出ている。家を何軒か建てたという話もあるが、補償金が出た。

周りの人が言うのもまるっきり見当違いではないということもあり、それでも、自分の住んでいた土地を離れないといかないということへの補償は当然。働かなくてもお金が入ることになって、その方の生き方がまるっきり変わってしまった。人間ってある程度働いて、労力にあわせて賃金もらってという感覚が変わってしまった人がいるというのは大きな弊害ではないか。

一人ひとり事情が違うし、その人の感覚がまるきり変わってしまうんじゃないかな。家族関係やコミュニティが壊れてしまったという問題は表に出ないけど、そういうこともたくさんあったんじゃないかなと思う。難しい。申請にも膨大な提出物が必要だったり、一概に言えないところもあるが、本来あるべき姿から大きくはずれてしまった人もいるのかなと。お金の話は難しいですよね。

福原：　若洲さんの話はリアルだった。それも一種の被災だと思う。当時子どもだった人たちが、被災地にも、少し離れたところで間接的に体験した人もいただろう。9年経って「あの体験は何だったんだろう」と、当時子どもだった人たちが言葉を獲得していく時期なんだなあと思った。取り乱した大人を見るという経験、たしかにそういう視点もあるなと思う。今、瀬尾夏美さんが、十年前に子どもだった人たちの震災の聴き取りをして、劇団の俳優が朗読するという「十年前、子どもだった私は」という取り組みをしている。

寺岡さんの話で、和夫さんの仕方なく言ったというところ、僕もすごく好きで、東北人の気質というか、なんかわかる。「いいとこですよ」などとは言わない。照れもあるだろうが。もしマスコミの人に聞かれたなら、サービスで話したかもしれないが、素の話し方が出ていて、そこに注目してもらってありがたい。仮設で1年経って喧嘩するようになったというところ、僕も好き。即席のコ

ミュニティでは、そこでやっていかなければならないから、互いに気を遣い、助け合いながらやっている。喧嘩できるほどのコミュニティを作るにはどうすればいいのかな。

前田：　一番初めに観た時、菅野フサコさんの話が、始まったばかりのところで終わってしまったのが、アレと思っていた。何度か観るうちに、そうかと。こうやって、これから語ろうとする人がまだまだいるんだな、いったん切り取ったものの、まだまだ聴くことがあるんだなという広がりが見えた。

福原：　まさにそういう狙いで、いろんな事情があって、そんなにたくさんフサコさんの話が聞けなかったということもあるが、切りたくなくて、その場にいてくれるだけで語っている、存在だけでいいというつもりだった。編集上の考えとしては、これからも続いていくという一種の余韻。清武さんが「話さないことにも意味がある」と言ったが、必ずしもみんなの前で言葉にしないといけないということではない。語ることと語られないことをセットで考えていくことをラストに込めたつもり。

島津：　第二弾をとりたい、話を聴き続けたいと思うのは、ちょっと見方を変えていくことで、また違う印象があるだろうなと。この方々と一緒に旅行したことがあるが、おみやげに水仙の球根を買った人がいた。村に帰ったら植えて水仙ロードにするんだよと言った人がいたことが忘れられない。

聞き方が弱いのもあるし、親しくなったからこそ、余計聴きずらくなったこともあり、聴き方によってまた違った話が聞けるんだろうと思ったり。

宮城では揺れるのが当たり前のようなところがあり、地震に大きな印象を受けたという話を聞いて、土地柄の違いを感じ、こうやってやり取りすることで想像力を働かせることが大事なことだなとあらためて思っている。今まで民話を聞いたりしてきたが、まだまだ甘いなと最近思っている。

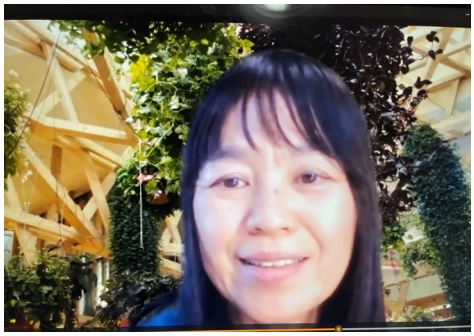
こんなふうに、まるきり離れたところで話がやりとりできることは嬉しいことだし、それをきっかけに、調べてみたり、何かの機会に足を運んだり、自分ごとにしていけるといいなとすごく思いました。

ブレイクアウトルームでの交流

ここで、3〜4人で10分ブレイクアウトルームを設定し、その後、少し共有してもらった。

・故郷を想う気持ち。飯舘村貧しいと言うが、きのこや山菜もとれて、牛や馬がいて、人と人とのつながりもあるのに貧しいとはどういうことなのか、何かが起きた時に水や電気がなくなったら急に不幸になるが、ミャンマーとかは何もなくても幸せだという。
・島津さんの優しさと鋭さのバランスが話しやすさを作っている。飯舘村に行ったことのある人がいて、そのことを思い出した。自分ごととして捉え直したい。
・保育士教育の現場で、存在を受け取るところ、想像力をもって関わると力強く語られた。
・阪神淡路や熊本、北摂地震の体験者が語

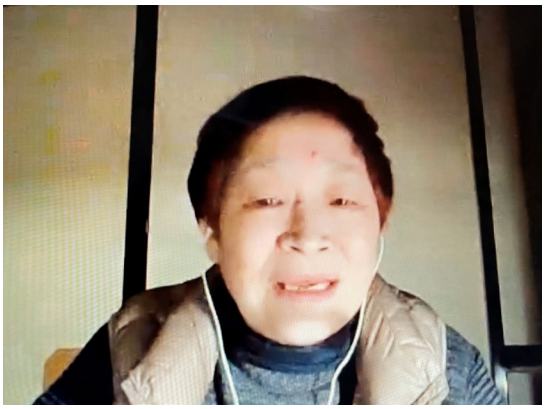
られた。周囲とのギャップ。震災の体験をしていないから、薄っぺらな理解だと意識しながら模索していく。
・ふつうの映画との違い、普通の人がこんなにきれいに映されている。空気感を丸ごと切り取ったような映像だった。自然の撮り方、想像力で見ていく映画だな。
・現地の方の話で、教師の経験があっても、聴く力に気づいたのはずいぶん後になってからと聞いて、語りが大事とは知っていたが、今回のプロジェクトで聴く自分に気づけたことが大きかった。
・飯舘村に行った院生がいた。メディアは大変だったこと、あるいは逆に乗り越えた話ばかり強調する。親しいからこそ話せないことがあるし、親しいだけでは話せないことがある。
・声を荒げていないところが印象不快。穏やかに語るからじわじわくる。震災同時の子どもへの興味。







加藤：　この作品を多くの人に見てもらったことに感謝。島津さんは聴くことに反省しているが、自分たちは長く小野さんに教わってきたのにわかっていなかった。百年後に残っていく時、大事だなと、こういうことが残っていくということが感じられる映画だった。

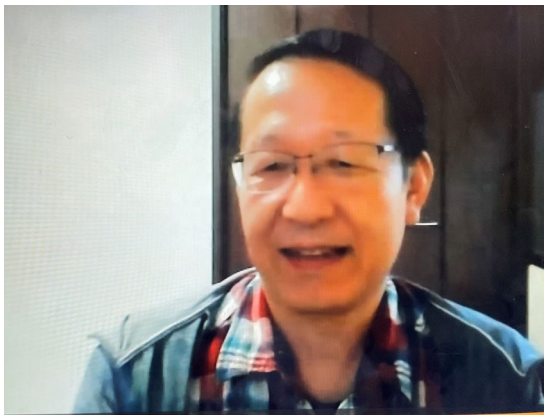


大平：　毎年皆さまが遠野に寄ってくれて本当に嬉しくて、沿岸に来ていたのは知っていたが、こんな巨大なプロジェクトだったとは初めて知った。こういうことだったら、もっと話も変わったかもと思った。知らないことは罪だと。被災地を見に来てくれるのはありがたいと思ってきたが、大きなプロジェクトの経緯を知り、あらためて感謝の気持ち。若い方々がちょっと口にしたことを、すごく端的に捉えて伝えてくれる

ことがすごい。映画で声高に叫んでいないことがじわじわ伝わってきてすばらしい。子どもたちの声も楽しみ。



丸山：　当時大変な思いをしたかもしれないが、感謝の方が多い。皆さんから大きなエネルギーを頂いている。こんな場を作ってもらって感謝でいっぱいだし、これからも続いていくことを切に願っている



島津：　皆さんの声を聞いて、この映画の意義を見直している。バリアフリー上映で字幕がついて見ると、また違って見えてくる。今日は皆さんの感想を聞いてまた違った見え方に。いつもカメラを抱えてもくもくと作業している福原さんが、こんなに考えて語られた。小野さんがよく言う「自分のなかに民話が残った」という話。震災を縁にして、人と人との縁ができて、十年経ってまたあらたなご縁が出来たということを前向きに捉えて進んでいけるということはいいことなんだな。プロジェクトを十年続けてもらったことで学ばせてもらった。

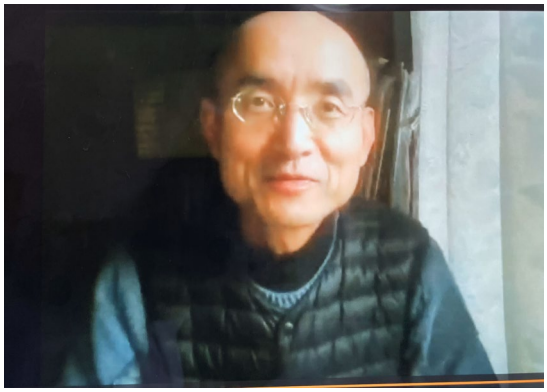
福原：　長時間ありがとうございます。何度も観てもらって、感想を聞かせて頂き感謝します。

午前中から場の大事さをあらためて感じた。今回はオンラインで、映画が起点にある。プロジェクトには団先生の漫画が起点にある。ある時パッと作るのでなく、皆さんが十年間やってきたことでこの場ができている。この場だからこそ生まれたものがあるのだと思う。

平田：　今年度は不安で始まったプロジェクトだったが、現地に行ったらイベントを遂行することが中心で、今回は深くお話ができたことがよかった。これが継続なんだなと。映画も4回観たが、観るたびに気づくものがある。継続し、反復しながら学びが深まっていくんだなと思う。

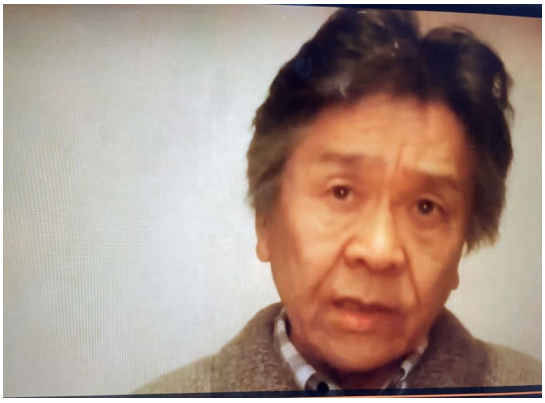


鵜野：　皆さんの声を聞かせてもらって、とても良い会になったなと思っている。どういう形でこれを続けていくのかなと案を考えながらいるところ。続けていけたら。



団：　いろんなことを興味深く時間を過ごした。映像としてモノを作る、記録として残していく。未来の人のために届けるという意味合いもあるが、今のこの時代にモノを作ることの意味、いろいろな意味をつくるというひとつが福原さんの作った映像だなと思った。

　事件や出来事や騒ぎを話題にするという傾向がある。紅葉や夕焼けが綺麗と言う日常、こちらが本当の目的なんだということが伝わらないと。望ましくない災害や事故が起こることは多いが、それでも人はああいうふうに生きている。出来事中心でなく暮らし中心に描かれた。私が漫画を描くにも気をつけているところで、それが一番美しいと思う。



つづく

精神科医の思うこと㉙

病名を伝えるということ

松村　奈奈子

今は診療所や児童相談所などに勤務しているので、最近の流れで「発達障害」の診断をさせられてしまう場面が多いです。「僕って発達障害ですか？」「友達に自閉症やから診てもらえって言われて」なーんて受診する若い患者さんも増えました。ネット社会で、良くも悪くも「病気」について簡単に情報が得られる時代になった事も、大きく影響していると思います。

ただ、病気の名前を付けられるのは医師だけ、という事になっているので、なかなか重い仕事だと思っています。なんで、病名を告げる時には少し緊張し、悩む事も多いので今回は「病名を伝えるということ」

「発達障害」の診断が増えたこの頃ですが、精神科医としては「気分障害」「統合失調症」「てんかん」がメインの疾患です。ただ、気分障害（うつ病や躁病）は、本人も状態を自覚しており、よく知られた疾患であるので、病名の告知はわりとスムーズです。なので、今回は他の病名で緊張した思い出のあるエピソードを２つ

「統合失調症」の病名告知はいつも緊張します。長くお薬を飲まなくてはいけないし、症状が生活に大きく影響する病気だからです。

「患者さんがどういう風にこの病気を理解したら、上手く病気と付き合っていけるかしら」「どんな言葉をつかったら、わかりやすいかしら」「家族にどう説明したら、上手くサポートしてくれるかしら」などなど、事前に思う事はいっぱいです。そしてタイミングも悩みます。ただ、こちらが「伝えたいなぁ」と思ったタイミングが、患者さんから「僕の病名はなんですか？」と聞かれるタイミングにあっていることが多いです。そういうもんなんですよね。

病名を知らずに、お薬をのんだり、毎月通院するのは無理なもんです。「統合失調症」

は長期的に治療が必要な病気なので、もちろん病名を伝えるのは大切な事です。

その中で１番印象に残っているのは、まだ精神科医になって数年の若い頃の話です。外来に紹介状を持って３０代の男性と母親が受診されました。紹介状には、男性が国立大学を卒業後に関東で公務員をし、妻と子供と生活をしていた事。就職後すぐに発症した統合失調症で、仕事が継続できなくなり、家族とも上手くいかなくなり、京都の実家に独りで帰る事になったのでよろしく・・・という内容が書かれていました。いろいろお話を聞きながら、当然、病名告知は終わっているもんだと思っていたら「先生、僕の病名はなんですか？」と突然問われて「ええっ、聞かれてないんですか？」と驚きました。「お母さんは病名聞かれてますよね？」と横に座る母親を見ると、うつむいてしまいます。「母親は話してくれないんです。ちゃんと病名を聞きたいです」と男性は言います。男性は質問に対する反応もよく、知的に高く理解力もあるのが十分に伝わります。しかし、まだ初めてあった患者さんの事を十分知らないまま、病名を伝えるのは抵抗がありました。一方で、男性の強い思いも伝わり、母親に「お伝えしてもいいですか？」と聞くと「先生の好きなように」と困った顔で話します。もしかしたら、母親が病名を告げないよう前医にお願いしていたのかもしれません。病院を変えるのをきっかけに、男性は前に進みたいのかも、と感じて、私も覚悟を決めました。

理解力のある方には、統合失調症の病気の原因である神経伝達物質ドーパミン仮説の話から、なぜ症状がでるのか・・・などなど丁寧に説明する事にしています。そして、約１００人に１人の発症率や予後についても話します。医学部時代にも統合失調症を発症した学生はいました。やはり、仕事を継続するのが難しいケースが多かったという話を、いつもする様にしています。知的レベルに関係なく発症し、多くのケースで仕事の継続が難しくなるという事を伝えます。しかし、８０代の母親の車いすを押す、親孝行な患者さんを見る事も多く、家族として幸せに暮らすケースも多いという事も話します。そして最後に、「家族の会」や「患者さんの会」がある事も、お話しする様にはしています。私の説明より、当事者との交流が得るものが多いとも、考えています。

このような内容を話し終わると、男性は「聞けてよかった」と話し、母親はほっとしたような表情で私を見つめました。

その後すぐ、私は転勤となってしまったのですが、少したって当時の病院のソーシャルワーカーさんとランチした時に「そういえば先生のあの患者さん、地域の患者さんの会のリーダーになってましたよ」と聞きました。「そうか、そういう風に力を発揮してくれているんだー。そういう展開になったのか・・・」とちょっと嬉しくなりました。あの時、病名を伝えてよかったなぁと思いました。病名を知った事で、男性は前にすすんだんだなぁと思います。

もうひとつの思い出は、「てんかん」の患者さんでした。

「てんかん」は神経内科や精神科で診察する事が多いのですが、「てんかん」にはいろいろタイプがあって難しいので、私は発作がコントロールされるまでのお薬の調整は、てんかん専門の先生にお願いしています。なので、安定した患者さんの定期的な脳波検査とお薬をお渡しするのが私の仕事です。「てんかん」の患者さんですが、せっかく精神科に来てくれているので、ただお薬をお渡しするだけでは申し訳ないので、診察では、ちょっとした愚痴をきかせてもらったりして、すこしいい気分で帰ってもらうよう努めています。

２０代後半の男性が「てんかん」で通院されていました。お薬の調整も上手くいって、発作はコントロールされており、診察は雑談が中心でした。とっても爽やかで、モテるだろうなーと思ったので、もしパートナーが出来たら「てんかん」の事は先に話して理解してもらう事が大切、もしひとりでうまく説明できないならお手伝いはできる事、を時々話していました。男性はいつも「そんなん、まだまだっすよ」と笑っていました。

ところがある日突然、緊張した面持ちで男性は若い女性と診察室に入ってきました。「ん？えーと」とこちらが戸惑っていると、「結婚するねん、先生説明してくれるって言ってたやん」と顔を赤らめて話します。まじっ、聞いてないやん、前もって言ってよーと思いましたが、女性も何も聞いていないようで、キョトンとしています。そこで、男性が「てんかん」通院している事から説明を始めました。男性のてんかんは遺伝しないタイプで、長期的にお薬をのまなくてはいけないが、精子にはお薬の影響はない事などなど・・・こちらもやや緊張して説明しました。話し終わると、女性は「なんや、そういうことやったん」「なんも言わんと、ついてきてくれっていうし、何かと思ったわ」「そんなん気にしいひんで」と笑って話します。女性の笑顔をみて、男性は「ぷはー」と大きく息をはいて「よかったー」「緊張したー」と笑います。爽やかな若いカップルのやり取りに、こちらも一緒に笑顔になりました。医師をしていてよかったなぁと思えた時間でした。後にふたりは結婚し、いい感じだと報告を受けました。

病名を伝える事や病気の説明をするのは、医師の仕事であります。上手に使ってもらったら、いいと思います。

精神科の病名を伝えるのは、どんな病名でも未だに緊張します。疾患を正しく理解し、どうやったら前に向いていけるかを、一緒に考えるのが仕事かなぁと思っています。そして、長くお薬を飲み続けなければならない病気は、患者さんにとって大きな負担です。病気と付き合っていくうえで、仕事や家族や友人など周囲にどう理解してもらうかも、とっても大事です。ネット社会で情報は簡単に手に入るようになりましたが、間違った情報もあります。社会が変化して、私が医師になった頃より、精神疾患についての理解も十分ではありませんが、少しは前に進んだように思います。そんな中、医師としてどんなお手伝いができるのか、これからも考えていきたいと思っています。

そして、ここ数年の流れで、発達障害の病名を告知する場面が飛躍的に増えました。ケースにより、本人・家族の理解の仕方に特徴があるので、これもなかなか難しい。またいつか、それについても書いてみたいなーとは思っています。

馬渡の眼　11

居場所の大人にできること
－ 子ども食堂篇 II －

馬渡　徳子

2019 年度より、私の講義を履修していた大学生と大学院留学生 6 人が、交代で主として学習ボランティアに参加している。彼らは、学習を積極的には勧めないで、「雑談時間を大切にしていて、子どもたちから求められたら、宿題を一緒にやったり、イベントの準備作業を一緒にしたり」というスタンスを通してきており、ゆったりと子どもたちのそばにいての個別対応の場の方が多かった。

そこに、こんな変化がみられた。

昨年度末に厨房機器の修理をきっかけに出逢った社会人の青年が、会社の応援もあり、修理後もボランティアとして参加することとなった。

それまでは、昔ながらのボードゲームやカードゲームが数点あっても、子どもたちが他の子やボランティアの大人たちに呼びかけて、集団で取組もうとする場面があまりみられなかった。

ところが、3 月にどちらかというと控えめにひとりの時間を過ごしてきた中学生が、「これ、面白いらしいよ」と持参した「人狼ゲーム」という心理戦のカードゲームが、今ちょっとしたブームになり、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人の青年たちが夕食後のまったりとした時間を過ごしている。

このカードゲームの盛り上げ役を最初にしたのが社会人の青年と大学生だった。

その後、子どもたちは、めいめいが自分の進行ノートや作戦を練って、ファシリテーターを交代で行っている。プレイヤーは、自分で質疑応答をどんどん工夫していて、観ていてなかなか面白い。

4 月から参加したオーバー還暦世代の大人たちは、何度参加してもゲームのコツを掴めず、すぐに負けてしまう。にもかかわらず、子どもたちはそんな大人たちの反応を毎回面白がって誘ってくるので、誘われた大人たちは、ほいほいと張り切って参加して結果

すぐに負けるという展開となっていて、そこにまた笑いが生まれている。

そういえば、自分の子ども時代に、ボードゲームやカードケームをするときは、お盆や正月に親戚が沢山集まった時や、ブームになったゲームを買ってもらえた友だちの家でやることぐらいだったなあとふりかえる。

そうそう、あの時、子どもたちが大人を負かすと嬉しかったっけ。

悔しいので、オーバー還暦世代で作戦会議を開いて、ギャフンと言わせたいよねと相談中である。

今日こそと
マスク外して
心理戦
またも読まれて
地団駄ひとつ

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

僕が小学 1 年生のころ、画家の父は我が長屋の 2 階四畳半を仕事場に、日本画を黙々と描いていた。筆を使う父の横に飼い猫を抱いてにじり寄り「おとーちゃん　何かお話して」と、ねだると、いつも機嫌良く童話や日本の昔話と気のむくままに話してくれた。

そんな数々のお話の中で僕にとって思い出深いものとして、(1) アリとキリギリス、(2)3 匹の子豚、(3) サルカニ合戦、がある。

昭和 35 年頃、我が家にも待望の白黒テレビがやって来た。

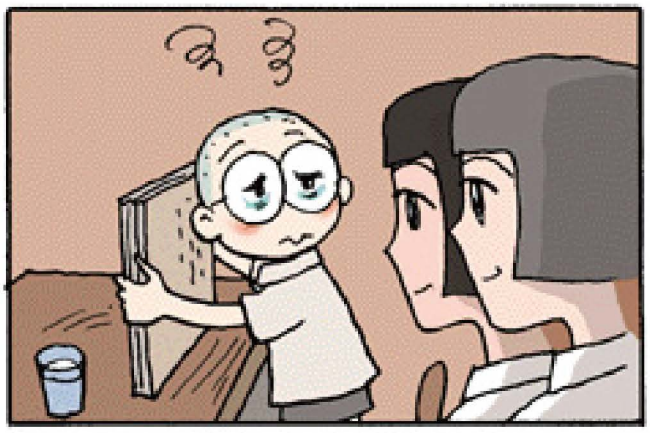
魅了されたのがウォルト・ディズニー劇場、大好きな漫画映画にどっぷりはまった。「3 匹の子豚」を観て最悪の事態をイメージして準備することの大切さを教わった。

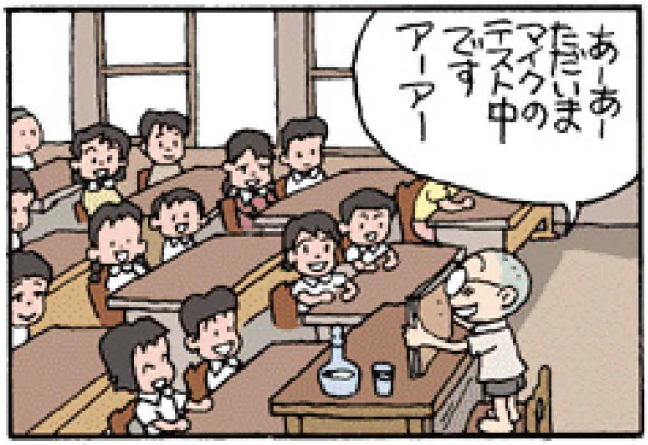


●小さいアリがじつは最強と知らされた童話

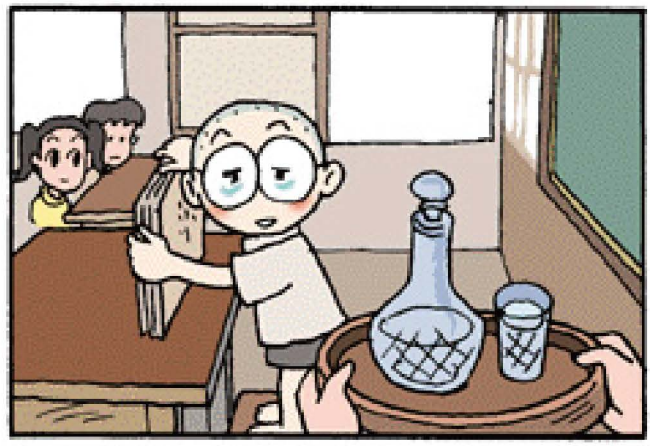
「サルカニ合戦」は、高校 2 年の春から秋までかかり制作した 8 ミリ漫画映画 (9 分カラー) のタイトル。美術クラブの友人知人の助けを借りて完成、秋の学園祭で上映出来たことが今も夢のよう。

「アリとキリギリス」、担任の女先生に頼まれ小学 2 年の冬休みを使い完成させたはじめての紙芝居、休み明けに教室でクラスの友達の前で上演した。そんな経験のおかげで人を感動させるためには、誰も見てないところでする努力の積み重ねが大切なんだと学んだように思います。


1



2


3



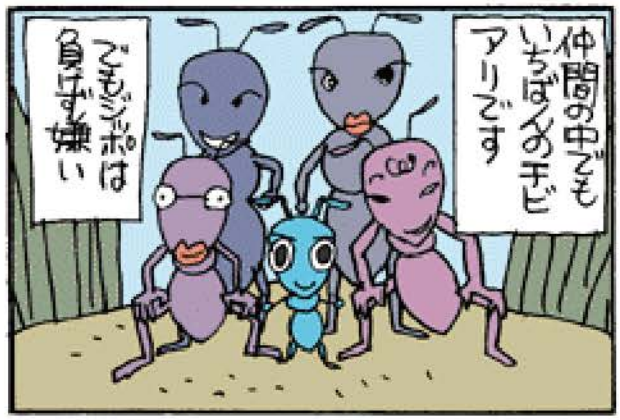
4

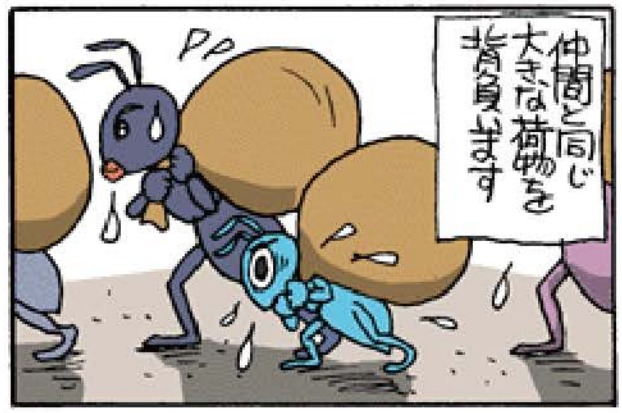
やぶにらみ日記 (544-1)

東成区の昭和

(86 -1) 写生









やぶにらみ日記 (544)

東成区の昭和

(86) 写生









やぶにらみ日記 （545）

東成区の昭和

（87）写生



やぶにらみ日記 （546）

東成区の昭和

（88）写生



やぶにらみ日記 （547）

東成区の昭和

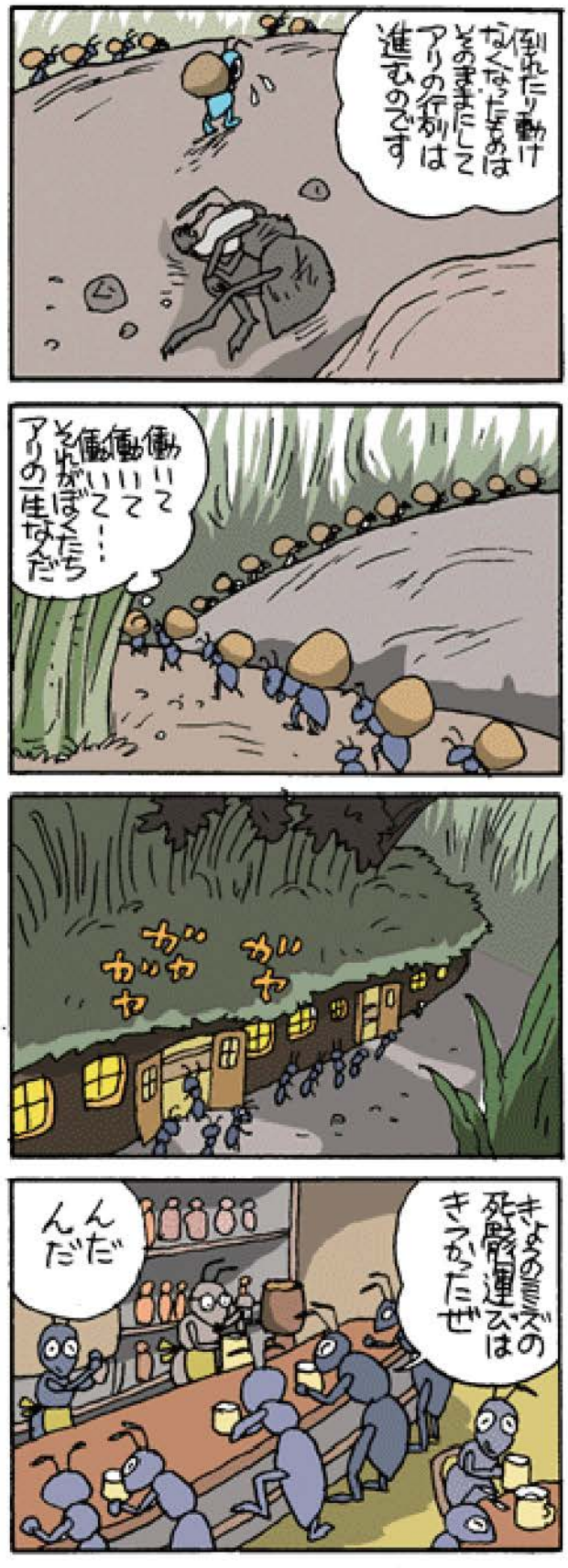
（89）写生



やぶにらみ日記 （548）

東成区の昭和

（90）写生



やぶにらみ日記 （549）

東成区の昭和

（91）写生



やぶにらみ日記 （550）

東成区の昭和

（92）写生



やぶにらみ日記 （551）

東成区の昭和

（93）写生



やぶにらみ日記 （552）

東成区の昭和

（94）写生



やぶにらみ日記 （553）

東成区の昭和

（95）写生



やぶにらみ日記 （554）

東成区の昭和

（96）写生



やぶにらみ日記 （555）

東成区の昭和

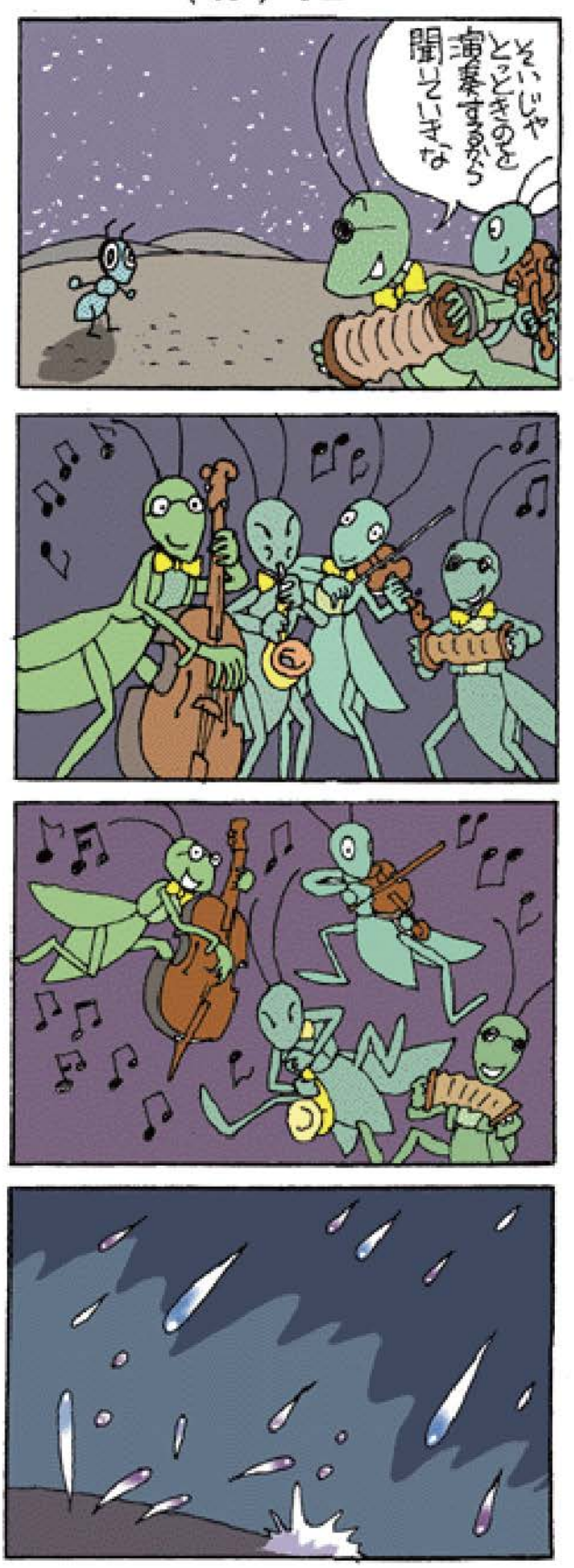
（97）写生



やぶにらみ日記 （556）

東成区の昭和

（98）写生



心理コーディネーターになるために Vol.11

山下桂永子

☆年度はじめの相談枠争奪戦

年度初めに行われる継続ケースの担当者決定会議の一幕。

継続ケースの時間、曜日、担当者を決めていく作業の中で、ある相談員の先生が予定表を見ながら冷静に私に伝えてくださる。「山下先生、その時間はもう部屋があいていません。」「え？ほんとだ！じゃあ曜日を変えてここは？」「山下先生、そこはもう担当できる人がいません。」「わ！そうなの！？じゃあ時間をずらして。。。」「山下先生、保護者が仕事の都合で16時以降でないと来れないと言っています」「ええ～？あ！ここ入るんじゃない？」「山下先生、そこは A 先生が担当かぶってます。A 先生が分裂でもしない限り無理ですよ」若い相談員の A 先生が驚いた顔で、「え？え？えーと、ぶ、分裂、がんばります！」などと言う。「いやいやいやいやいやちがうちがうちがう！うーん、はまらん。やっぱり枠が足りない。。。うーんどうしよう。。。」



☆担当者決定会議

担当者決定会議は、前年度末に面接の継続が決定されたケースについて、曜日と時間、担当と使用する部屋を決めていく、年度初めに 2 週間ほどかけて毎日行われる会議である。もちろん継続ケースなので、昨年度と担当やプレイセラピーで使う部屋を変更しないように努めてはいる。しかし保護者や本人の希望日時とこちらが提供できる条件との折り合いがつかないことがしばしばある。継続ケースの数は年々増えてきており（2023 年度の継続ケースは 90 件ほど）、相談枠と保護者の希望とのマッチングが年々難しくなってきている。さながら降ってくるブロックを回転させながらそろえてはめていく、パズルゲームのようである（そろってもブロックは消えないが）。

継続ケースは年度末の終了判定会議で、必要性が散々議論された上で、教育センターでの面接を継続すると判断されたケースである。枠がないからといって断るという選択肢はなく、どうにかこうにか工夫をして入れ込んでいくしかない。近年では、教育センターの通所について、保護者や本人が希望すれば遅刻早退扱いにならないよう学校園にお願いしているが、それで時間をずらして相談枠を増やして対応するにも限界がある。

☆変更のリスクと相談員の葛藤

担当する継続ケースの曜日や担当、部屋の変更は、相談員にとって、どれもできれば避けたいことである。保護者面談もプレイセラピーも安定的で継続的な構造は、クライエントやセラピストに安心感、安全感をもたらし、その結果、連続性のある関係性と質の高いセラピーが提供できるというのは基本的かつ重要なことである。そのセラピーの構造を変えなければならないのはできれば避けたい、いやなんとしても避けたい。そうでなくてもクライエントは、進級や進学で、日常が変化と不安だらけのことが多い年度初めなのである。せめて教育センターに来た時ぐらい変化のない、安心安全なセラピーを提供したいと思うのが相談員の心情である。



継続ケースの担当や部屋を変更することはセラピーの構造や枠組みに変化をもたらし、担当者とクライエントの関係性に少なからず影響するものなので、そこには当然リスクを伴う。そんなリスクを負いたくはない。しかしどこかで妥協しなければ担当するケースの継続そのものが危うい。一番高いリスクは何か、それを避けるには他のリスクを背負ってでも変化を受け入れるしかないのか、それともこのまま押し通すことができるのか。相談員はみんな葛藤を抱える。年度末の終了判定会議ですべてのケースについて、相談員全員でケースの内容を共有しているので、お互いのケースについてのリスクも承知している。心理指導員である私も多くの担当ケースを持っているので、その心情はよくわかる。

☆心理指導員としての葛藤

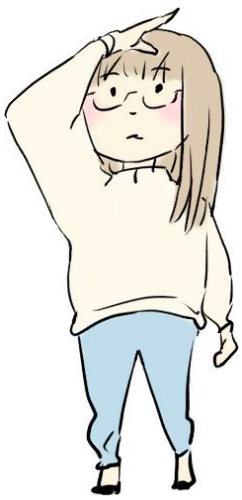
しかし、心理指導員としての私は、教育相談全般のコーディネートを担う立場である。4月中旬から始まる教育相談スタートまでに全ての継続ケースについて担当、曜日、時間、部屋を決めるまでこぎつけなければならない。あれこれパズルゲームをしてもどうにもならないとき、できるだけリスクを抑えた形で変更することを相談員に提案していかなければならないことも多い。



「どなたか曜日とか部屋を替われそうなケースありますかね？」「私がＡさんの保護者に連絡とって、他の曜日に移れないか聞いてみるので、Bさんのプレイセラピーの部屋を変更は可能ですか？」「昨日決まったCさん、保護者担当の変更は

可能ですか？」「Dさんの月に２回の面談を１回に減らして、その裏にEさんの面接を月１回入れたらいけませんかね？」など、なんとか継続ケースが限りある相談枠に入るように、相談員の方々に提案することになる。しかし私自身は、提案やお願いはしても決定権があるわけではないし、提案によるリスクを私が負えるわけではないので、提案をしたら、あとは待つしかない。

会議に出席している相談員には緊張が走る。数秒が長く感じる沈黙。その後、相談員の中で「B さんのお母さんに他の曜日に移れないか聞いてみます」「部屋の変更は大丈夫だと思います」など言って下さるなど、それぞれの葛藤に折り合いをつけてくださる方がでてきて、毎年助けられている。その場では折り合いがつかずに後から個別にお願いすることもあるが、それも渋々承知していただくというよりは、他のアイディアを出してくださったりすることも多い。



そして担当が変更になったとき、それが相談員にとって不本意で、担当ケースを手放すことが忍びないことはあっても、そこは相談員同士で丁寧に次の担当に引継ぎが行われる。相談員同士の信頼関係の中で、バトンが引き継がれていくのである。前年度の担当も、新年度の担当もそれがクライエントにとってベストな選択ではないかもしれないが、変化のリスクをチャンスに変える機会にしていくようにするしかない。そんな毎年の相談員の方々のいろんなせめぎあいの中で気づいたことは、担当する相談員は決まっていたとしても、そのケースは教育相談員全員で抱えているのだということである。

☆チームで行う教育相談

普段から教育相談では、終了判定会議や担当者決定会議、新しいケースの受理会議などの会議を通して、今誰がどのようなケースを担当して、そのケースの内容はどのようなものか、自分の担当ケース以外のことも見立てや情報を共有している。

そういった仕組みがあるので、年度初めの担当者決定会議で、少なからず担当や部屋の変更があっても、それぞれの相談員が納得してリスクを背負い、誰かに決められたわけではなく、主体的にケースを担うということができているのだろうと思う。



そして担当が変更されて、面接自体は個別の 1 対 1 であっても、その背後には、相談員同士の信頼関係に基づいた丁寧な引継ぎと、会議でぶつかりながら練り上げられた見立てや関わりの方針があるので、新しい担当者が自信をもって対応することができる。教育相談はチームでやっているのだなと常々感じている次第である。

先人の知恵から
40

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

漸く「夕行」に突入。少しずつ、一歩ずつ進んでいこう。今回は以下の７つ。

- **大器晩成**
- **太鼓も撥の当たりよう**
- **泰山は土壌を譲らず**
- **大山鳴動して鼠一匹**
- **大事は必ず細より作る**
- **大は小を兼ねる**
- **大勇は勇ならず**

＜大器晩成＞

偉大な人物は時間をかけて実力を養っていくから、大成するのに時間がかかるということ。鐘や鼎のような大きな器は、簡単には作り上げることができないという意から。　　**出典　老子**

この諺は有名だが、今の時代、何もかもがスピーディーで、大成するまで待てない雰囲気が強い。子どもたちは、何かを創意工夫するのにも、一つ一つのことを咀嚼するにも、時間をかける必要がある。サクサク仕事を片付けるだけではなく、じっくりと取り組むことで、学びも発想も豊かになる。そんな時間が、特に子ども時代は大事だろう。

他の子に比べて、何をするにも考え込んでしまうような子や、じっくり観察するような子に、保護者はイライラして、「さっさとしなさい！」などと怒鳴ったりしている。アリを追いかけて、アリの巣を見つけ、ずっと観察している子や、砂場で何度も何度も山を作り、トンネルを掘る子、たくさん失敗を繰り返し、どうすれば良いのかを学んで行く子など、中々見かけなくなった。保護者は失敗しないように助言し手を貸してしまう。更に子どもたちは与えられたゲームや

YouTube ばかりに時間を費やしている。それでは自ら学ぶ力は育たない。よく観察し、考えるような子どもには、特にゆったりとした時間を与えたほうが良い。何かにつけ急かしてばかりいる保護者に対し、この諺を伝えてゆっくり育てることの大切さを伝えている。

＜太鼓も撥(たいこもばち)の当たりよう＞

相手の反応は、こちらの出方次第で違ってくることのたとえ。太鼓は、撥で大きくたたけば大きく響き、小さくたたけば小さく響くことから。撥＝太鼓などの楽器を打ち鳴らす棒。「桴」とも書く。

保護者からよく相談されるのは、「子どもが言うことを聞かない」ということである。保護者の思い通りにならないのが子どもである。２歳前後は自我が出てきて、イヤイヤ期なので、「いや！」ばかり言われる。思春期に入れば、またそこで反抗的になる。保護者は反抗的な我が子に対し、怒鳴ってみたりなだめてみたり、あれこれ苦戦を強いられる。そうやって保護者も子も成長していくのである。何でもかんでも保護者の言いなりになるような子はむしろ心配である。最近は反抗期がない子どもたちも増えた。反抗期真っただ中の子どもに対しての、「いうことを聞かない」という相談はむしろ嬉しい。保護者には「順調に育っている」ことを保証し、その上で、「反抗期には、大きな生簀(いけす)に放った魚と思おう。大枠はあるが、その中である程度自由にさせてあげよう。失敗も自分の力になるからあえてさせよう。そして、上手くコントロールするには、この諺のように、ここは撥を軽く当て、こっちは強く当てるなどの工夫をすることが必要」と伝えて、具体的な対応を一緒に考えるようにしている。

具体的な対応については、小さい子の場合は、褒める、おだてるは大事だが、少し大きくなってきたら、褒めるより認めるほうが良い。叱り方にも気を付けないといけない。全否定にならず、行動のみを指摘し、修正していくことなどがそれである。

太鼓をうまく叩くように、子どもをうまくコントロールできるようになるには、試行錯誤が必要だろう。千里の道も一歩から。

＜泰山(たいざん)は土壌(どじょう)を譲(ゆず)らず＞

度量の広い大人物は、多くの人の意見に耳を傾けることによって、ますます見識を高めていくというたとえ。泰山が大きな山となったのは、どんな小さな石や土くれでも退けずに受け入れたからであるという意から。泰山＝中国山東省にある山。一般にただ大きい山の意味でも使われる。

出典　史記

最近は、ネット情報を検索して、多くの情報を取り入れる方が多い。子育てについての情報もほぼネット情報である。多くの人の意見に耳を傾けることは大事であるが、情報がありすぎるとかえって迷うこともあるだろう。

いろいろな意見を探し、聞こうとする人にはこの諺を使うことはない。むしろ、人の話を聴かない保護者に対して、この諺をあえて出す。勿論、「あなたは度量が小さいから言うのだけど」というような話ではない。

むしろ、「あなたのように度量の大きい人は、この諺みたいに、多くの人の意見を聞いてきたから大きいのでしょうね」と別に嫌味として言うわけではないが、わざと言うことがある。そして「これからも更に様々な意見を聞いて、取り入れ、もっと大きくなるのでしょうね。」と続けるのである。人は褒めないとこちらの話など受け入れてくれない。相手が思ってもいない褒められ方をすることで、「え？」となる。そして大抵、この後何を言うのだろうと聞く姿勢になる。そういう姿勢になったらすかさず、「ほら、やっぱり人の話をよく聞く方ですよね」と続ける。人というのは面白い！もちろんすべてがこう上手くいくわけではないが、この諺をこんな風に使っているという一例である。

<大山鳴動して鼠一匹>

大きい山が音を響かせ揺れ動くので、大噴火でも起こるのかと見守っていると、小さな鼠がたった一匹出てきたにすぎなかったという意から。「大山」は「泰山」とも書く。

物事というのは、大げさに受け取ろうとすればするほど、大げさになり、大したことないと思えば思うほど大したことではなくなるものである。

子育てでもよくそういうことがある。不安の強い人は、ちょっと咳をしただけでも、肺炎ではないか、悪い病気ではないかと大騒ぎして、病院に駆け込む。結果、病気ではなく、むせただけなどということもある。

対人援助の仕事をしていると、ケースについて、こうなったらどうしよう、ああなったらどうしようとあれこれ心配し、前もって要保護児童対策地域協議会を開いた方が良いとなって、多くの関係機関を呼び、大騒ぎになる事が時々ある。しかし、結局懸念したような大事にはならないことも多々ある。物事の見極めは難しいが、大げさにする前に、良い情報や安心材料に目を向けることが大事だ。良い情報や安心材料を見ていくと、そこまで心配しなくても大丈夫だろうということが見えてくるだろう。不安になって大騒ぎしているような支援者には、「大山鳴動鼠一匹ということもあるから、もう一度ケースを見直してみようと伝えている。

英語では・・・

Much bruit little fruit. （ 騒ぎばかりが大きく、収穫はほとんどない）

<大事は必ず細より作る>

どんな重大なことも、最初はごく小さなことが原因で起こるものである。大事のきっかけは常に些細なことであるということ。

出典　老子

前述の諺とは対称的かもしれないが、子育てにおいても、対人援助においても、小さなサインを見逃さないことは大事である。子どもが急に問題児になる事はない。それまでには何かしらサインが出ている。その小さなサインを見逃さなければ大事にはならない。特にいじめ問題などは、小さなサインに気づかなければ下手をすると手遅れになる。日頃からよく観察していれば、子どもの小さな変化、サインに気づくだろう。

子育てにおいても、毎日の子どもの顔色

や表情、食欲などを見ていれば、「何か違う、おかしい」ということに気づきやすい。いじめ自殺という悲しい事態を見聞きするたびに、どうしてもっと早く気づいてあげられなかったのかと悔やまれる。

物事の小さなほころびも、放っておけば、大きくなっていずれは壊れるなど大事になってしまうだろう。気づいたらできるだけ早く、何らかの手当をすることが大事だ。

＜大は小を兼ねる＞

大きなものは小さいものの代わりになる。小さいものより大きいものの方が幅広く役に立つということ。「大は小を叶(かな)える」ともいう。

出典　春秋繁露

大雑把な筆者は常にこの感覚でいる。服でも入れ物でも、小さかったら入りきらなかったり、ちょっと体形が変わってもすぐに着られなくなったりする。やや大きめだと、多少体形がかわってもすぐに買い替えなくて済む。鞄もあまり小さければ物が入らないし、大きすぎても邪魔だが、やはり小さいよりは大きいほうが、入れる物が多い時に助かる。

子育て中の保護者が、子どもにちょっと大きめの服を買ってしまってと嘆いていたりする時、この諺を使う。子どもは直ぐ大きくなるので、ちょっと大きめがちょうどよいと。ただし靴は余りぶかぶかだと脱げたり転んだりしやすいので、靴はできるだけ足の大きさに合わせようとは伝えている。

大きな器の中に入れた金魚は大きく育つが、小さい器に入れているとあまり大きくならない。人を育てるのも同じように考えられないだろうか？大きい、広い心で子どもを育てれば、子どもも大きく広く伸び伸びと育つだろうが、あれしちゃだめ、これしちゃだめ、そっちはダメなど、窮屈な狭い世界に閉じ込めていたら、子どもは大きく育たない。小は大を兼ねないのだ。

＜大勇(だいゆう)は勇ならず＞

真の勇者は、やたらに威張ったり、人と争ったりしないから、ちょっと見ると勇気がないように見える。

出典　六韜(りくとう)

思春期の初めに、ちょっと突っ張りたくなる時期がある。そんな子どもにこの諺を使うことがある。「かっこいい」にあこがれる子どもたちは、最近ゲームにはまっているので、ゲームの登場人物などに感化されやすい様子が見られる。ゲームに登場するような「勇者」という言葉には結構反応がある。だからこそこの諺が使えるのだ。

この諺のように、ちょっと見勇気がないように見える人ほど、芯はしっかりしていると伝えると、クラスで目立っている子に苦手意識を持っている子が少し元気になる。

自分をはっきり出せない子たちも、こうした諺を聞くことで、昔から言われていることだからこそ、自分を認めなおすことが出来たりする。諺って面白い。

出典説明

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道徳経（老子）』二巻を著したという。

史記・・・百三十巻

中国古代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏、殷、周，秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

春秋繁露・・・十七巻八十二篇

前漢の董仲舒の作とされる書物。「春秋公羊伝」の説に従いつつ、君主権の強化や革命説を重視し、また災異説・陰陽五行説についても述べている。

六韜・・・六巻

中国の兵法書。週の太公望の著と伝えられるが、現存するものは魏晋時代に成立したとみられる。文韜・武韜・竜韜・虎韜・豹韜・犬韜の六巻から成る。戦国時代から漢代の兵法を集成したもの。同じ兵法書の「三略」と合わせて「六韜三略」と称される。

うたとかたりの対人援助学

第 25 回「教育人間学からみたリハビリテーション原論」

鵜野　祐介

1．患者からのまなざし

今年（2023 年）2月 18 日に脳梗塞を発症し、2か月間入院しました。この間、最初2週間いた国立循環器病センターと、転院した千里リハビリテーション病院で、たくさんのお医者さんや看護師さん、そして何よりも、理学療法士（Physical Therapist）・作業療法士（Occupational Therapist）・言語聴覚士（Speech Language Hearing Therapist）という三種類のセラピストの皆さんに、大変お世話になりました。

今回は、私自身がこれまで勉強してきた「教育人間学」の立場から、「リハビリテーション」とは何かという問いについて、立ち止まって考えてみたいと思います。その手がかりとして、私をご担当下さった数名のセラピストさんからうかがったご意見を使わせていただきました。

患者からのまなざしに立ったこの小文が、日頃こうした現場に接する機会のない皆様にとっては、新鮮な感覚を持って読んでいただけることを期待しています。一方、日々現場で悪戦苦闘されているセラピストや医療・看護の従事者の皆様に対しては、何か発想のヒントとなる情報を提供できればと思うと同時に、皆様へのエール（感謝と激励の気持ち）を届けることができればと願っています。

2.「教育人間学」とは何か

はじめに、「教育人間学」とは何かについてお話します。まず「教育」という言葉から通常イメージされるのは、「学校」や「子ども」ではないでしょうか。実際、大学の「教育学部」や「教育学科」で学ぶ学生たちは、多くの時間を割いて「学校」や「子ども」のことについて勉強すると思います。

けれども考えてみれば、「子ども」が「学校」に入学してから卒業するまでの期間の前にも後にも、「教育」はあるのではないでしょうか。つまり、赤ちゃんや幼児にも、それから「学校」に通う「子ども」時代を終わった人にも、「教育」との縁（関係）はずっと持ち続けていると思われるのです。

母親のお腹の中に命を宿したその時から始まり、「おぎゃあ」と産声を上げて外の世界の空気を胸いっぱい吸いこんでから、心臓の動きを止めて息を引き取るまで、人生の最初から最後までずっと、私たちはたくさんの人びとと関わりながら生きています。そうした関わりの営みがすべて「教育」と見なすこともできるのです。

具体的に話してみます。私たち人間／人類は、この世界に生物学的な意味におけるヒトとして生まれるわけですが、母親や父親をはじめとする周りの人びとによって、飲み方や食べ方を教わり、手で何かをつかみ、手と足で這い、やがて二本の足で立ち、歩くようになります。その一つ一つのやり方を教わり、学んでいかないと、人間になることはできません。さらに、言葉をおぼえ、話したり聞いたりするようになることも、人間であるということの証しであり、これらはまさに「教育」という営みだと言えるでしょう。

一方、事故や病気により、または高齢によって、自分の身体や言葉が思うように使えなくなった時、周りの家族や知り合い、専門家の人びとの関わりが欠かせなくなります。さまざまな支えや手助けを受けることによって、生きづらさが少しマシになったり、楽になったりして、人間らしい暮らしが過ごせるようになるのです。それらもまた広い意味での「教育」や「学習」の営みととらえることができるでしょう。

以上をまとめると、人生の最初から最後まで生涯にわたって、さまざまな人びととの関わり合いの中

で体験されることは、「人間」としての営みであり、これを「教育」のありようと見なす考え方に立つのが、「教育人間学」の根本的な発想である、と私は考えています。

このように、とても広い領域にわたる学問であるため、一人でその全てについて万遍なく研究していくことはできません。そこで私の場合には、特に歌をうたうことや物語をかたること、これらをきくことといった、人間のふるまい（表現行為）について研究してきました。ですから、これから記す内容も、うたい、かたり、きくことと結びついたものになるであろうことを、予めお断りしておきます。

それでは本題の「リハビリテーション」に移りましょう。

3. 「リハビリ」は「回復」させることか？

「リハビリテーション」は短縮されて「リハビリ」と呼ばれて、今日の日本の社会でごく当たり前のように使われています。でも、その意味を立ち止まって考えることはなく、病気したりケガをしたりした人が、それ以前の状態に戻るために訓練を受けること、というのが「リハビリ」の一般的なイメージではないでしょうか。日本語訳としては「機能回復訓練」とされ、私自身も病気する前にはそうでした。

ところが今回、脳梗塞を発症し、MRI の画像に白く映された脳細胞を目にした時に、思い知らされたことがあります。この白い部分は壊死してしまっており、決して蘇生しないということです。まだ使われていない、いわば眠っている状態の神経線維に刺激を与えて、壊死してしまった細胞の働きの代わりができるように努めるわけですが、壊死したところが元の状態に戻ることはない。完全に「回復」することはありえないのです。

実際に「リハビリテーション」に取り組む人びとの大多数にとっても、状況は同じでしょう。言語や記憶の機能だけではなく、手足の運動機能についても、まったく元通りになること、つまり「回復」することは、ごく稀なケースに過ぎないでしょう。

だとすれば、「回復」を目標において努力をさせようとすることは、当事者である患者に対して無理難題を押しつけることになる。悪影響を及ぼす場合さえ起こりうるのではないでしょうか。

のみならず、リハビリテーションに取り組む人（＝患者）を介助し支援するセラピストに対しても、患者の「回復」を目標に置くことは、「回復」が望める割合が低い患者に対してのモチベーション（動機づけ）が低くなってしまうことになりかねないのではないか。つまり、「回復」が最大の達成目標に据えてしまうとき、良くなる見込みが低い人に対して、見込みが高い人に対してよりも熱意の注ぎ方が少なくなることが起こりかねないのです。

実際にはおそらく、回復の見込みの高さと低さによって対応が違うようなセラピストは、一人もいないでしょう。それは、「回復」すなわち「元の状態に戻すこと」を絶対の目標として価値を置くことに対して「良し」としていないからではないでしょうか。

そう考える時、「回復」ではなく「快復」に重きを置く方がいいような気がします。「元に戻す」ことではなく、現在の自分の状態を基準として「より快適な状態」を大切にするという考え方です。患者の一人として、私自身そうした疑念を抱くようになっていました。

4. ジャンヌダルクの「リハビリテーション」

このような理由から、「リハビリテーション」の定義について、元の意味からきちんと確認してみたいと思うようになりました。そこでこの言葉を調べてみると、当初考えていた「リハビリ＝機能回復訓練」という狭い意味ではない、幅広くて奥深い意味があることが分かってきたのです。

例えば、「公益財団法人　日本障害者リハビリテーション協会（JSRPD）」のＨＰには、「リハビリテーション」の目的として、以下のように書かれています。

「リハビリテーションの目的は全人間的復権です」

もともとはラテン語で、re（再び）＋habilis（適する）からきています。中世及び近世ヨーロッパでは、キリスト教の「破門の取り消し」や「名誉の回復」として用いられており、ジャンヌダルクのリハビリテーション（名誉の回復）やガリレオ・ガリレイのリハビリテーション（名誉の回復）として用いられていました。

わが国では、社会の偏見や政策の誤り等のために、奪われ・傷つけられた尊厳・権利・人権が本来あるべき姿に回復することとしてとらえ、リハビリテーションを全人間的復権と表しました。

（https://www.jsrpd.jp/rehabilitation/purpose/）

つまり、この言葉はもともと「名誉の回復」という全人格的な意味を持っており、無実の罪を着せられて異端者として火刑に処せられたジャンヌダルクや、

教会から破門されたガリレオ・ガリレイに対する「リハビリテーション」という用法があったのです。

したがって、麻痺した手足の機能回復訓練などはそのごく一部であり、障がいのある人の、「奪われ・傷つけられた尊厳・権利・人権が本来あるべき姿に回復すること」としてとらえる、「全人間的復権」を旨とするのが「リハビリテーション」であるというのです。これなら納得できると思いました。大事なのは、人間の尊厳、人間らしく生きる権利、基本的人権の「回復」なのです。

このように見ていくと、「リハビリテーション」には「快復」と「回復」、両方の意味があることが分かります。つまり、怪我や病気を患う前と同じような、まったく元の状態には戻らないけれども、身体的・心理的に改善され、より心地よい状態になることを意味する「快復」と、いったん失われ傷つけられた名誉や尊厳、精神性や人間性などの取り戻すという意味での「回復」、これら２つの意味合いを含んでいると考えられます。どちらも大切だと思います。

５．嚥下介助は人生に三度経験

毎日、朝昼晩の食事のために食堂へ行くと、否応なくいろいろな患者さんを目にしました。その中で、いわゆる「嚥下（えんげ／えんか）」と呼ばれる、食べ物を口に運んで咀嚼して飲み込むことが、自分では難しい方のために、セラピスト（言語聴覚士）が介助をしている様子が目に留まりました。患者さんの口に黙々と食べ物を運んでいる方もいれば、雑談をして気持ちをほぐそうという方もいて、セラピストによってまちまちですが、いずれにしても根気強さがいる仕事だと眺めていました。

考えてみると、多くの人びとが自分の人生において三度、嚥下介助を経験するのではないでしょうか。まず、生まれた後に必ず、嚥下介助をしてもらいます。つまり、おっぱいを飲んでいた時期の後には、スプーンなどで離乳食を口に含ませてもらっていたはずです。

次に、親になったとき、今度は自分の子どもに嚥下介助をしてあげる。あるいはまた、自分の親や祖父母に嚥下介助をしてあげることもあるでしょう。

そして三回目は、自分が病気したり年老いたりした時に、再び誰かに嚥下介助をしてもらうのです。つまり、一回目と三回目は嚥下介助の受け手として、二回目は与え手として経験するのです。これはまさに、教育人間学的な営みと言えるでしょう。

６．セラピストの立ち位置　〈伴走者〉と〈聞き手〉

そこである日、言語聴覚士（ST）のＵさんから、嚥下介助のコツについて伺ってみました。漠然と抱いていたセラピストに対する私のイメージに基づいて、次のように聞いてみたのです。「心がけているのは、患者さんのペースに合わせること、つまり寄り添うようにすることでしょうか？」

すると、寄り添うだけではダメなのだと、次のように言いました。「相手のペースに合わせるだけではなく、テンポよく口に入れてあげることもしないと、集中力を切らしてしまい、食べ残してしまうこともあります。タイミングを計って、相手のペースも押さえた上で、こちらのペースも示しつつ、というバランスが大事なのです」。なるほどなあと思いました。

そこで、他の方がたにも、セラピストとして心がけていることについて質問してみました。特に、米国の臨床心理学者カール・ロジャースが提唱した「来談者中心療法」における「非指示的カウンセリング」の考え方に基づいた、「寄り添い」や「傾聴」といった態度を重視する、カウンセラーとは、セラピストとして何か違いがあるのかどうかについて知りたかったのです。

別の ST の K さんは、自分が心がけているのは「寄り添い」や「傾聴」ではなく、「並走」だと言いました。患者さんと一緒に走っているというイメージだと。もっと具体的には、ブラインドランナー（視覚障がい走者）と数十センチの紐（ロープ）で手首をつないで走るガイドランナー（伴走者）のイメージだと言います。

また、もう一人の ST のＮさんは、「患者自身が選択し決定して、ベストパフォーマンスが出せるよう気を配るのが ST の役割です。患者さんを前から引っ張るのではなく、患者さんの頑張りを下支えし、時にはクッションになることです」と説明してくれました。これに対して、「その人の最大限の能力を発揮させること」と言ったのは、OT のＴさんでした。

一方、「少し離れたところから見守るのがセラピストの立ち位置です」と話してくれたのはＫ医師です。看護師が、「看」という字が「手」と「目」でできており、「手当て」という言葉もあるように、患者のすぐそばにいて関わろうとするのが看護師の本分であるのに対して、あえて少し距離を置こうとするのがセラピスト（療法士）の立ち位置だというのです。

これらの話を聞いて、うたやかたりの「歌い手や語り手」と「聞き手」との関係に似ている、と私は思

いました。「歌い手や語り手」が患者で、「聞き手」がセラピストです。

「歌い手や語り手」のベストパフォーマンスが出せるよう気を配るのが、いい「聞き手」の条件です。相槌を打ち、時に大声で笑い、時にため息をついて、うたや物語の世界に引き込まれていく。そうした「聞き手」の様子が察知されると、「歌い手や語り手」はますます、生き生きとしたパフォーマンスができるのです。

東日本大震災の後、東北各地の民話を語る会の人びとが、震災の体験を「民話のように」語りました。それによって自分が「生きる力」を受け取ることができたと、「聞き手」も「語り手」も証言しています。

震災体験の「聞き手」の多くは、「語り手」と同じような体験を持つ当事者ではありません。したがって、「語り手」の気持ちを 100%理解することはできません。いつもそばにいるということもできません。でも、今このひとときを、この場に一緒に過ごして、「語り手」の気持ちを少しでも理解しようとすることを「聞き手」は努める。そして全身全霊を込めてその声を受け止めて、自身の感動を「語り手」に伝えようとします。その時、それを感じ取った「語り手」は、「生きる力」を「聞き手」から受け取る。そうして自分も全身全霊を込めて語ろうとする。そしてまた、「聞き手」もその語りから「生きる力」を受け取る。

以上のような両者の共振するダイナミズム（力動性）が、患者とセラピストとの間にも発生するのではないか。私自身の実感として確信されるのです。

7.「いのちの授業」でリハビリテーションを学ぶ

「嚥下介助」のような、誰もが経験する大切な営みにもかかわらず、学校の中で取り上げられるのは、看護・介護福祉教育の現場以外にはほとんどないと思われます。これは大きな問題だと思います。

近年、小中学校の総合学習の教科の中で、「いのちの授業」に取り組んでいるところがあるようですが、この「嚥下介助」をぜひプログラムに入れてほしいものです。また、高校の家庭科や保健体育科でも教えてほしいですし、大学でも、例えば私のいる教育人間学専攻の実習授業などでも、「嚥下介助」をする立場とされる立場を交代で疑似体験するということをさせたらと思っています。

その他にも、理学療法や作業療法の具体的なプログラムを、患者とセラピストに分かれて、交代で模擬体験してみてほしいと思います。リハビリテーションを学ぶことは「いのちの大切さ」や「人間の尊厳の大切さ」を学ぶことになるに違いありません。今後ぜひ具体化していきたいと思います。

8. いのちのバトン

最後に、もう一つの教育人間学的な意味づけができそうな体験について紹介します。実は２月 18 日に私が入院した直後、母が危篤になり、３月８日に亡くなりました。満 94 歳での老衰死ですから、あっぱれと言うべきなのですが、臨終に立ち会うことができず、葬儀への参列もリモートで出席せざるを得なかったのは、やはり辛いことでした。

一方、病院の食堂でたくさんの方がたを目撃し、手足の麻痺の人、ヘッドギアやギブスを付けた人、虚ろな表情の人、嚥下介助を受けている人、などなどと比べる時、自分は運動機能にはほとんど支障なく、この程度の失語症だけで済んだこと、何よりいのちが助かっていることに対して、「偶然の幸い、ラッキーだった」と思うようになっていました。

けれども実はそうではないと、葬儀の後のご住職の、次の言葉に気づかされました。「お母さまは祐介さんに、ご自身のいのちを手渡して、あの世に逝かれたに違いありません」。

私がここに生き永らえており、この程度の病気で済んだのは、決してラッキーだったのではない。母がいのちのバトンを私に手渡してくれた、その証（あか）しなのだと。

だから、今度は私が、母から受け取ったいのちのバトンを、これから周りの人びとや次の世代の人たちに手渡していかなければならない。そうすることが、母のいのちのバトンを証（あか）すことにもなる。こんなふうに考えるようになりました。

脳梗塞
生き永らえて在りしこと
母のいのちのバトン証せり

病気して、はじめて気づかされたことが他にもたくさんありました。それを、このような形で文章にしたり語ったりすることもまた、いのちのバトンを手渡すことだと感じています。

まあ、「ぼちぼちいこか」と、空を見上げているところです。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第26回

黒田長宏

＜2023年2月17日＞

今回は、マッチングアプリから久しぶりにマッチした派手なスタートだったが、3日ほど、相手からラインに移行してやり取りしていたものの、なぜかわからないが、相手が AI を使って返事してくるので、こちらからライン友達を辞め、ブロックさせていただいた。

面白かったのは面白かったが、変だった。相手の意図はわからない。そして、2つやっていたマッチングアプリを1つに減らした。マスメディアに出ているソロ研究家という人がマッチングアプリは効果なしと伝えているが、私もそれは実感している。競争が生じると永遠に負け続ける人が出てしまうのが現在のマッチングアプリの仕組みだ。これが克服できたら、マッチングアプリの独占になれるとさえ思う。

＜4月12日＞

あれからマッチングアプリを辞めてしまい、とは言っても何も効果がなかったのだが、それから何もなく、パソコンを開いたら、AI のような相手というのが、ここ数日急に NHK などマスメディアが紹介しまくっている、チャット GPT というのが脳裏に浮かんでしまった。数日前に、『婚難救助隊』のサイトのカウンターが1万を超えたので、1千ごとに登録者（数人だけど・・・）にメルマガを出していたのだが、そのメルマガの管理会社がメルマガサービスを辞めてしまうというのでショックだったが、登録者に1万1千までカウンターが伸びる前にメルマガサービスが終わりそうだと説明しておいた。何事も難しいものだ。

＜5月3日＞

締め切りまで22日になってしまっていた。今日は憲法記念日。とても良い天候で、ゴールデンウイークも行楽や帰省にとても気持ちいい人が大勢いるだろうと思う。コロナの毒性も弱くなっていけば良いのだが。前回記述した間にチャット GPTをやってみたが、私は誰か聞いたら、元日銀総裁なのだそうだった。やは

り、生身の人間が話し相手のほうが良さそうだ。

マッチングアプリも効果はなかったものの、気を紛らわすのには作用していたらしく、やらなくなってしまうと、地域、職場その他、まるで出会いもない感じで、打つ手なしのように思ってしまう。しかし、ここで絶望したら負けである。

実際の出会いは不確定だが、各SNSで結婚難で孤独死まで追い込まれる人が私も含めているというのに、やれパパ活だ、やれ不倫だのとふざけた話があったら、ふざけるなという強い非難をSNS で世界中に拡散させている。

私の考えでは、結婚できない人が孤独死するのは、不倫または結婚しないふざけた人達がいるためなのだ。この活動は不確定ではない。自力である。ところが結婚は一人ではできない。いくら発信しても他力がかかわる。正確にはそういう性的モラルの不安定な情報が流れないとできない活動だが、まずそういうことはない。連日、男女関係の不貞な話は流れてくるのだ。日本の性モラルは乱れているか、もしくは無いのだ。そして文部科学省以下の教師たちは表向き安定しながら裏では・・・？？？

婚難救助隊のYouTubeの登録者は今日のところ261名。

＜5月7日＞

このペースではまだ書いたばかりではあったが、締め切りのアナウンスがあったのでいつも通り、はやめはやめでいこうと思う。昨日今日の天気はそれぞれ強風と雨で不安定である。大型連休を過ごす人達のラストは自宅が無難だろう。

今回はまずマッチングアプリをやめてしまったことが大きい。マッチングアプリは気休めにかならないのだが、気休めがなくなってしまったので、焦りがではじめてしまい、生活が癇癪気味になってしまい困った。

特に5月に YouTube『婚難救助隊』の登録者数が260前後で増えたり減ったりしていて着実に伸びなくなっていた。ところが、この時点で264人の登録になっている。まだまだ決まりきった予測はできないと思うべきかも知れない。私のYouTube が有名になればなるほど、日本の結婚難問題は解決できるという矜持が大事だ。世界まではなにしろ人口爆発の途中である。まず日本。それには自分自身を諦めないことだ。

〔PBLの風と土　第25回〕

立場を超えた対話的理解で地域の変容を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. コロナ禍の収束・終息の中で

連載開始から6年目の春、いよいよCOVID-19は収束かつ終息の兆しを迎えた。デンマーク滞在を機に始めた本連載は、その名のとおり、渡航前から立命館大学で取り組んで来た教養教育におけるサービスラーニングと、1974年の開学時から全学部でProblem-Based Learningを導入していたオールボー大学での教育実践の比較研究について、現場から紹介するために始めたものである。帰国後も現地でご縁を深めた方々との交流を通じて、PBLにまつわるトピックを取り上げてきた。しかし、コロナ禍を経て、その頻度や内容は大幅に変わり、徐々にサービスラーニングへの力点が強くなっていった。

昨年度の本連載を振り返れば、第21回では地域社会での実践を通じた学習法であるサービス・ラーニングにおいて重視される市民性（citizenship）に関する日本の政策動向の整理と米国で教育実践への評価に用いられている市民参加をテーマとしたルーブリックを取り上げた。第22回では本連載で盛んに取り上げてきているサービス・ラーニングにおけるSOFARモデルの構築と使用に積極的に携わってきたインディアナ大学-パデュー大学インディアナポリス校（IUPUI）において、CMG(Civic-Minded Graduate)と呼ばれる、公共心にあふれた、地域に貢献する卒業生を輩出するという理念について、具体的に求められる知識やスキルセット及び心構えなどの要素とあわせて紹介した。そして第23回では、ノースキャロライナ大学に長く在籍したパティー・クレイトンらの論文（Clayton et al., 2010）から、SOFARモデルとして提示された大学と地域とのパートナーシップのあり方への評価指標である「TRES（Transformational Relationship Evaluation Scale：変容的関係評価尺度）」の内容を紐解くこととした。TRESそのものは第20回でも触れていたものの、第22回において調査票と調査票を用いたインタビューの枠組みを日本語に訳出しながら整理した上で、第23回にはカンザス州にあるフォートヘイズ州立大学のロリ・ニフィンらの論文（Kniffin et al., 2020）をもとに、その発展・改良版であるTRES2を日本語に訳出し、大学地域連携においては両者の交流の水準ではなく関係性の変容が重要となることについて確認した。

そうした中、2023年3月、TRESをはじめとした各種の理論的・方法論的な研究を牽引してきたIUPUIに訪問する機会を得た。東日本大震災の発災から12年を迎える3月11日には宮城県気仙沼市を訪れる予定としていたため、3月5日に日本を発ち、現地には4泊という短い滞在となったものの、2017年2月に立命館大学での公開研究会に招聘したロバート・ブリングル先生の協力を得て、充実した調査を行うことができた。なお、一連の調査に際しては、2つの研究プロジェクト（立命館大学の北出慶子先生を代表者とするJSPS科研費19K00723「日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発」および筑波大学の唐木先生を代表者とするJSPS科研費21K18479「初等中等高等教育におけるパートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化」）の支援を得た。今後、その内容は次回以



図1：IUPUIキャンパス内（2023年3月8日）

降、本連載において紹介していくことを、ここに記して、各種支援に謝意を表したい。

そこで今回は、前回の予告のとおり、まずはKniffinら（2020）によって確認されたTRES1とTRES2の比較により、明らかとされた観点について紹介する。その上で、現地で得た点について簡単に触れる。先に次回以降の予告を記しておくなら、どんな調査となったのかについて、次回から紹介していく。最早「サービスラーニングの風と土」という様相を呈しているが、本連載の原点であるPBLの観点にも引き続き関心を向けていくことをここに記し、少なくとも2023年度は引き続き「PBLの風と土」という名前にて、対人援助の観点から論じていくことをお認めいただきたい。

2. TRESの比較表から導く3つの教訓

まず、比較表から見られる特徴を紹介する前に、過去の本連載を振り返りつつ、TRESとは何かについて簡単にまとめておくことにしよう。まず、TRESには教員中心に構築されたバージョン1（Clayton et al., 2010)と、サービス・ラーニングに関係する多様なステイクホルダーの利用を前提に簡略化したバージョン2（Kniffin et al., 2020）がある。その際、TRES2で想定した多様なステイクホルダーとは、SOFARモデルの名称にも掲げられた5つの要素、つまりStudents（学生)・Organizations（地域団体）・Faculty（教員）・Administrators（大学の執行部や事務局等）・Residents（地域住民）である。[1]このSOFARモデルについては、本連載では第9回で紹介した後、複数回にわたって触れた上で、第23回においてBringleら（2009）による8つの特徴を紹介して詳述した。[2]

SOFARモデルをサービス・ラーニングの評価ツールとして活用する際に、射程に入れられるのが、8つの特徴の1つにも位置づけられたE-T-T連続体という考え方である。この点については本連載の第19回で「SOFARの二項の相互作用からもたらされる成果の質に関する側面は、それが搾取的であるか、交流的であるか、変容的であるかの度合い(E-T-T)にあらわれる」(Bringle et al., 2009, p.7)という議論を紹介した。この3つの関係については、連載第20回で取り上げており、EnosとMorton（2003）による研究に象徴されるように、サービス・ラーニングでは大学と地域とのあいだで目的を共有して両者の満足度が高まることを目標とせずに私利私欲を越えた意味創出を図ることが「変容的」とされているものの、まずはそうしたパートナーシップのための初期段階として「交流的」な関係構築が必要となるという。その上で、Bringleら（2009）は、実践的研究を通じて「交流的関係よりも低い水準で作用している関係がある」(p.7)ことに関心を向け、大学と地域のあいだでの「慢性的な依存関係」の状態にあるとき「搾取的」な関係であると位置づけ、搾取的—交流的—変容的（E-T-T）の連続体は順当な進歩（E→T→T）だけでなく後退（E←T←T）もがあると触れている。

表1：交流的関係と変容的関係
（Enos and Morton, 2003, p.25、筆者訳）

基準　Criteria	交流的 Transactional	変容的 Transformative
人間関係の基本 Basis of relationship	交流を基軸としつつ功利主義的 Exchange-based and utilitarian	功利主義を越えた目的に焦点 Focus on ends beyond utilitarian
最終目標 End goal	交流の満足度 Satisfaction with exchange	志の相互向上 Mutual increase in aspirations
目的 Purpose	当面の必要性の充足 Satisfaction of immediate needs	より広範な意味創出のニーズ喚起 Arouses needs to create larger meaning
パートナーの役割 Roles played by partners	管理者 Managers	リーダー Leaders
既存の目標の指示 Support of existing institutional goals	各機関の目標を受容 Accepts institutional goals	各機関の目標を吟味 Examines institutional goals
団体間の境界 Boundaries	個々の関心のもと一体となり活動 Works with in systems to satisfy interests of partners	私利私欲を越えより広範な意味創出 Transcends self-interests to create larger meaning
パートナーの自己認識 Partner identity	個々の機関での自己認識の維持 Maintains institutional identity	共同体での集団的な自己認識に変化 Changes group identity in larger definition of community
関与の対象 Scope of commitment	限られた時間・資源・人材での交流 Limited time, resources, personnel to specific exchanges	無制限に交流可能性に各者が参画 Engages whole institutions in potentially unlimited exchanges

Kniffin（2020）は、そうした「変容的」関係のもとでのサービス・ラーニングが設計され展開されるための評価尺度としてTRESが開発されたことを踏まえ、変容的関係のもとでのサービス・ラーニングの特徴を明らかにすべく、TRESがどう活用されているかの事例を表2のとおりに比較している。ここではTRES1から3事

表2：TRES使用例の比較表
（Kniffin et al., 2020, pp.12-14、筆者訳）

使用例	SOFAR参加者	調査のあり方	調査の目的	具体的な内容と重要項目
TRES 1				
1 2州にわたる4キャンパスからなる教員ら	F→O	省察と評価	関係構築と知識創造とツール開発	●ツールの共同開発者の提案でTRES 1を試験的に導入し、ツールの有効性を実証 ●経験豊富なサービスラーニング担当教員20名が、広範にわたる4部構成のインタビュー過程（対面・口頭、一部は遠隔・書面）の一端として、各々が2地域団体の代表者との関係性を検討するために使用。 ●試行錯誤のプロセスを地域住民に押し付けることにならないよう教員だけで試行的に実施——恐らく現在の研究者たちなら別の選択をしたであろう ●多くの教員が今以上に変容的な関係を望んでいると共に、現在のパートナーシップは時間的制約や従前の関係性の中での経験によって制限がもたらされていることが判明
2 サービスラーニングセンターが支援する地域団体と教員	F↔O	省察	関係構築	●教員と地域パートナーが双方のメンバーの互いの経験や視点を対等に重視したペアとなった上で専門的な能力を開発していく機会を提供
3 複数機関の教員と研究員	F↔O	研究	知識創造と関係構築	●アメリカ中西部の4大学の教員とそれらの大学でパートナーとなっている地域組織が使用 ●変革的なパートナーシップを特徴づける条件や支援を表面化することを企図
TRES 2				
4 教員、学生ら、地域団体のリーダーあるいはスタッフと、住民ら、パートナーシップ対象の人々	S, O, F, かつR→パートナーシップ自体	省察と研究	関係構築と知識創造とツール開発	●TRES 2の共同開発と試行実施 ●ツールの使用範囲をパートナーシップの対象全体へ明確に拡大 ●パートナーシップの対象に関する情報を提供すると共にその発展を扱った協働執筆プロジェクトの進展と精緻化に寄与 ●SOFARのカテゴリーを全関係者を網羅（当時、大学の管理者らは当該パートナーシップの対象のメンバーには存在せず）
5 博士論文執筆中の博士課程の大学院生	F/A↔O	省察と研究	知識創造	●教員あるいは事務局等と地域団体のスタッフからなる3組が参加 ●授業でのパートナーシップが稀であるダンスの分野において地域と大学との関係性が確立していることを検討 ●変化に関する暗黙理論を導出するためにガイド付きの会話を通して関係性を検討 ●TRES 1のいくつかの構成要素をTRES 2の全体に統合
6 教員、事務局等、学生、地域団体のスタッフ、地域住民ら、芸術分野での協働プロジェクトのメンバーたち	S, O, F, A, かつR→パートナーシップ自体	評価	ツール改良と普及	●現場で集まった際に新たな評価の手法を提示 ●身体的・認知的な障害のある方にとってのTRESのアクセシビリティを検証
7 博士論文執筆中の博士課程の大学院生	O↔O	研究	知識創造	●授業でのパートナーシップが稀であるダンスの分野において地域と大学との関係性が確立していることを検討 ●キューバの信仰に基づく市民社会組織（Faith-Based Civil Society Organization）のメンバー25名とその北米の連携団体との組織間の関係性について吟味 ●対人関係のあり方や捉え方について追求すると共にそれらが相手組織の実績にいかに影響を与えるかについて調査 ●米国とキューバが政治的に極度な敵対関係にあったことが草の根レベルの協働にどのような影響を与えたかを分析
8 研究大学での複数の国際サービス・ラーニング（Global Service-Learning: GSL）プログラムの教員と事務局担当者ら	F, A, かつO →パートナーシップ自体	省察と評価	関係構築とプログラム基盤強化あるいは改良	●国際サービス・ラーニング（GSL）プログラムの管理者3人とそれぞれの地域パートナーが各々のプログラムの設計理論や協働プロセスとそれらの実践の根底にあるエートス（例：力関係、権威）を検証するために使用 ●パートナーシップを検討するためいくつかの選択肢の1つとしてTRESを提供し、TRESがプログラム評価プロセスや結果の多文化的妥当性に寄与する、あるいは寄与しない条件について固有の情報を収集 ●パートナーシップの実践と学習活動を倫理的な地域貢献の原則とより一致させるべく管理者と地域パートナーの間での国際サービス・ラーニング（GSL）プログラムの計画変更を促進 ●多様な状況での活用と有用性を広げるためにスペイン語に翻訳
9 小規模リベラルアーツ大学のサービスラーニングセンター管理者ら	A→O, F, かつS	省察と評価	プログラム基盤強化あるいは改良	●TRESがプログラム評価と教育評価の実践にどんな情報を提供できるかを検討 ●プログラムの関係性は複雑性と流動性を持つものであって尺度で評価することには困難性があることを強調

例、TRES2から6事例を、(1)調査票の使用例（誰が何のために回答したか）、(2)使用対象（SOFARのどの関係性について検討したか）、(3)位置づけ（実践の振り返り・研究・診断的評価、これらの複合など）、(4)目的（関係構築、知見の導出、ツール開発、ツールの改良、ツールの普及、プログラム能力開発、プログラム能力向上）、(5)詳細と意義、これら5点から整理されている。前述のとおり、TRES1はサービス・ラーニングを担当する教員が活動の受入団体を対象に大学が地域にどのような貢献が可能かを可視化・数値化するために用いたという背景から、表1におけるTRES1の使用例は全てが「F→O」となっている。一方でTRES2の使用例ではSOFARで示されるサービス・ラーニングの5つの構成要素がそれぞれに省察を促す機会を得ていることを見てとることができる。

表2でまとめられた9つの例をもとに、Kniffinら（2020）ではサービス・ラーニングにおける関係の改善について、とりわけ変容的関係のもとでの取り組みのためには何が重要となるのかについて検討を行っている。その際、変容的関係とは「民主的（共創的で、地域資源を活かす）」（p.15）関係か、という問いが掲げられている。[3]ここで本連載第10回および第11回で、2019年7月に立命館大学大阪いばらきキャンパスでのミネソタ大学のアンドリュー・フルコ（Andrew Furco）先生を招いた講演会で紹介された大学と地域のあいだで足りないものを補うという姿勢で関わり合う「デフィシットアプローチ(deficit approach)」ではなく、互恵性のある「ポジティブ アプローチ(positive approach)」が必要、という指摘とも呼応するものである。このような観点のもと、表2に並べた9つの例の検討から、大学と地域が変容的関係を保ち、共創的で地域資源を活かす民主的な関係を構築するために、3つの教訓があると示されている。

1つめの教訓は「参加者間での意味づけのサポート（Support for Meaning-Making Among Participants）」（p.15）である。なぜなら「学びと成長と社会変革は対話が拓く（dialogue as a pathway for learning, growth, and change）」ため、という。比較表にまとめた例では、3と7以外は質問の追加や選択肢の拡張などにより、調査の主

体と対象とが各々に工夫して対話がなされており、今後はTRESの利用者に省察への手がかりとなる問い（prompt）を組み込む必要があると判断した、と述べている。そして、TRESを現状の評価だけでなく関係構築の仕掛けとして活用することで、担当者の異動（退職、解職、離職）の影響を緩和し、長期的な安定性が高まるかどうか検討の余地がある、とも記している。

2つめの教訓は「文化的差異の理解（Attention to Cultural Differences）」（p.16）である。教訓1がSOFARに象徴されるサービス・ラーニングでのパートナーシップに参加・参画していく人々の立場の違いに配慮した上で価値の共創的を図る必要があるという点を含むものとすれば、教訓2はその過程において各々の立場の差異が顕在化することへの注意を向けるものである。比較表にまとめた例では、例6、7、8から、認知症が見られる高齢者、英語の語学力が低い人、また運動能力に制限のある人など、現場の活動で関わり合う人々の多様性と、特に言語的の理解の度合いが回答に影響することに注意が向けられている。そもそもTRESが大学教員らを中心にして設計されたツールであることも影響し、ある程度は抽象度が高い表現も含まれていることから、文化的多様性や実用性の観点を踏まえると多言語での翻訳版の作成と利用によって内容の妥当性や有用性を高めていくという方策が述べられている。[4]

そして3つめの教訓が「浸透している権力関係への配慮（Sensitivity to Pervasive Power Dynamics）」（p.16）である。サービス・ラーニングでは、SOFARとして掲げる5つの構成要素がそれぞれに当事者意識（ownership）を持つことが変容的関係には欠かせないことは言うまでもないが、TRESという調査手法を関係の性の評価と今後のあるべき関係の構想・設計のために用いるためには、教訓2とも関連して、言語的なコミュニケーションへの依存度を低くする必要があるのではないか、と述べている。比較表にまとめた例では、Aや○に用いたもの（1、2、3、5、7、8、9）やSや○（4と6以外）など、TRESの利用範囲は広がってきているものの、「単に回答者として研究に参加することは、共創とは異なる（Simple participation in a study as respondents, however, is not the same as co-creation）」と指摘する。先述のとおり、研究は大学が主導して展開する営みであるということも鑑み、さらには各構成要素内・構成要素間において無自覚のうちに影響を及ぼしている構造的・制度的な権力関係にも注意を向けながら、想定外の結果が導出されたとしても、むしろその内容を丁寧に洞察してこそ、新たな価値の創出につながるのではないかと整理している。何より、変容的関係の1つの様態として、地域社会の問題解決に取り組んでいるときには（比較表では例8において、国際的な公衆衛生のプログラムでは現地側では活動継続を期待して調査対象が望む結果を探索して回答する傾向への懸念が表明されているように）研究と実践の双方に深い理解が必要となると示されている。

3. TRESが1と2の2バージョンある意義

こうして使用例を比較してみた結果、TRESは1と2のあいだで、オリジナルの1の方が簡略化された2の方に優位性があるとされるのでもなく、後発の2の方が先発の1よりも有用性が高いとされるのでもなく、ただ開発の順番が1から2の順であったことが確認された。むしろ、3つの教訓から、TRES1もTRES2も、ツールそのものの長所や限界を見つめた上で、どのような場所でどのような背景や目的で活用し、関係者の内省を促し、学習や実践を評価する手法として、導入と使用と結果を分析・共有するプロセスが精緻に取り扱われる必要がある。実際、本連載の第24回では、研究者が中心となって開発された評価ツールとしてのTRES1「研究者らの『わかりたい』という思い」が先行し、TRES2は調査される側の迷惑を鑑みて地域社会の変容がもたらされるよう「研究者らの『よくしたい』という思い」が反映したものではないか、という筆者の見解を記したものの、実際の使用の段階においては目的や価値は流動的になりうる、ということになろう。加えて、サービス・ラーニングの研究方法という点では、伝統的なインタビュー調査などもあることに加え、そもそもツールとしても多様なものがある、と、具体例が示されている。

まず、SOFARとTRESの研究から発展したものとして、「ColRM（Collaborative Relationship

Mapping）」（Price et al., 2016）と呼ばれる手法が紹介されている。これは参加の度合いをネットワーク分析の観点から視覚的に分析するもので、TRESによる一連の質問やSOFARに基づいた関係性の検討がなされている点が特徴とされる。実際の図解に対する筆者の素朴な感想としては、自己分析の手法の一つであるマインドマップと、集団内で意味の解釈を図るファシリテーション・グラフィックを組み合わせたもの、という印象を抱いたことを記しておきたい。なお、Kniffinら（2020）では、参加の水準が適切か「批判的に検討（critically examine）」できると述べている（p.18）。

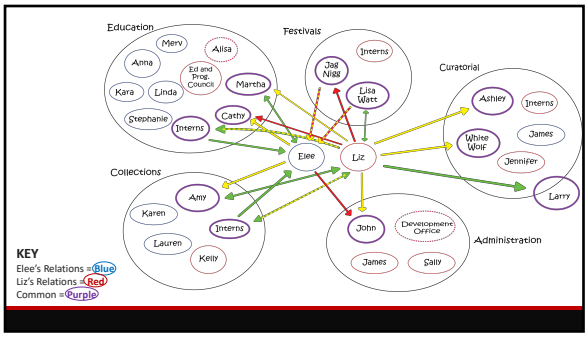
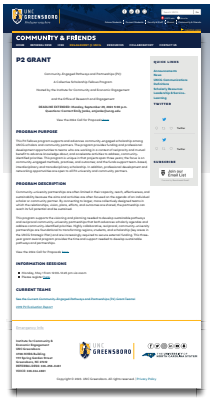


図1：ColEMの例（Price et al., 2016, p.57）

これに加えて、いずれもシステム思考のプログラムとして、2つの例が紹介されている。1つノースキャロライナ大学グリーンズボロ校（UNCG）における3年単位の助成プログラム「Community-Engaged Pathways and Partnerships（P2）」である。Kniffinら（2020）によれば、P2はあえてTRESを使わないことを選択した取り組みであるという。TRES1・2から見出された3つの教訓を引き合いに出せば、3年間にわたるプログラムを通じて、(1)パートナーシップ・アイデンティティ（Partnership Identity）、(2)生成的互恵性（Generative Reciprocity）、(3)集団的リーダーシップ（Collective Leadership）と、サービス・ラーニングにおける構成要素間の相互作用に迫るものとして取り上げている。

もう1つが、DEA（Democratically Engaged Assessment）と呼ばれる「民主的関与評価」という取り組みである。Bandyら（2018）によってまとめられた「DEA白書」によれば、これは日本語では「技術官僚」という定訳がある「テクノクラート」的な地域貢献のあり方を「Deficit-based」（p.18）とし、その対極にある地域資源を活かした「Asset-based」こそ「民主的関与」だとするものである。この対比は前述のとおり、本連載の第10回で紹介したフルコ先生の講演録にもあったように、前者が地域の「ために（for）」、後者が地域と「ともに（with）」と区別できる。そうした区別のもと、完全参加（Full Participation）、共創（Co-creation）、厳格さ（Rigor）、生成力（Generativity）、実現可能性（Practicability）、回復力（Resilience）の6つを「民主的関与」の核となる価値（core value）として評価観点に据えている。



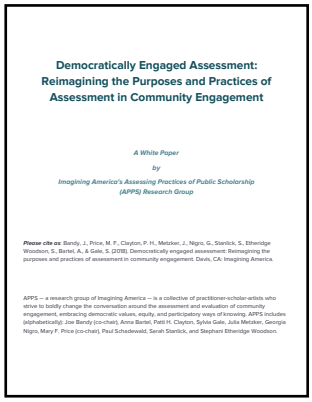


図2：TRES以外のシステム思考の評価プログラム
左：UNCGにおける「P2」のウェブサイト
右：DEA白書の表紙（Bandy et al., 2018）

4. 共通認識のもとでの集団意思決定へ

以上、変容的関係であるかを評価・設計するツールであるTRESについて、その使用例の比較から導かれた知見を紐解いてみた。SOFARモデルに見られるように、そもそも変容的関係とは、大学と地域が組織的な手続きのもとで対等に交流する関係にとどまらず、サービス・ラーニングに関わる全ての参加者の連携・協力を通じて、地域の価値の追求を図ることを意味していた。そこにE-T-T連続体という概念を重ねてみれば、漫然とした関係構築では、むしろ互いに他者を利用する搾取的関係になってしまうことがある。だからこそ、常々、関係者が当事者意識のもとで適切な関係構築が図られているか評価し、その後の展開を設計する手立てが必要とされる。

結果としてTRESは変容的関係かどうかを評価し、今後の取り組みを設計する上では、ツール自体が一定の理論的背景のもと、緻密に検討されたことも相まって、関係当事者が効果的に利

用するにはいくつかの課題があることが明らかとなった。それらは今回示した3つの教訓に集約された、と捉えられる。ただし、参加者間での意味づけ、文化的差異の理解、権力関係への配慮という3点は、TRESの利用時のみに限られる観点に留まらない。ましてやサービス・ラーニングにさえ留まることなく、結果を協働で解釈し、お互いの立場を尊重し、無意識のうちに浸っていた思い込みを解くことは、むしろあらゆる場面において重要な態度である。

これで第19回から長きにわたって取り上げてきた大学の地域連携におけるパートナーシップのあり方についての検討は1つの区切りとなる。ただ、TRES1と2の比較表の分析から、新たに「民主的関与」という観点に触れることになった。加えて、この点は今回の連載の冒頭で触れたIUPUIへの訪問においても、その必要性を痛烈に体感した点でもある。換言すれば、損失を意味するdificictな接近では、地域の変容はもたらされないことを痛感した、ということである。

そこで次回からはIUPUI訪問内容を複数回にわたって報告したい。ちなみに、Kniffinら（2020）には、これからは「現象学的に有意義な（phenomenologically meaningful）」理論的枠組みが有益となる、という指摘がある。その理論の一つの例として、批判的人種理論（Critical Race Theory）が挙げられている。社会的・文化的な複雑さの中で他者を尊重し理解する実践的な学びがどう展開されていたか、現在進行形でそのあり方を模索している現場での実践とその蓄積についてまとめていくこととしたい。

（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

Bandy, J., Price, M. F., Clayton, P. H., Metzker, J., Nigro, G., Stanlick, S., Etheridge Woodson, S., Bartel, A., & Gale, S. 2018. Democratically engaged assessment: Reimagining the purposes and practices of assessment in community engagement. Imagining America.

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Clayton, P. H. Bringle, R. G., Senor, B., Huq, J., Morrison, M. 2010. Differentiating and Assessing Relationships in Service-Learning and Civic Engagement: Exploitative, Transactional, or Transformational. Michigan Journal of Community Service Learning. Michigan Journal of Community Service Learning, 16, 5-22.

Enos, S., & Morton, K. 2003. Developing a theory and practice of campus community partnerships. in Jacoby, B. and Associates. Building Partnerships for Service-Learning. (pp.20-40), San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Kniffin, L., Camo-Biogradlija, J., Price, M. F., Kohl, E., Williams, J., Del Conte Dickovick, A., Goodwin, A., Johnson, K. V., Clayton, P. H., & Bringle, R. G. (2020). Relationships and partnerships in community– campus engagement: Evolving inquiry and practice. International Journal of Research on Service- Learning and Community Engagement, 8(1), Article 15.

Price, M. F., Napier, P., Wood, E., & Officer, S. D. 2016, October 6–8. Collaborative Relationship Mapping (Col-RM): A tool for building bridges, relationships, and capacity. National Conference of Imagining America: Artists and Scholars in Public Life, Milwaukee, WI, United States.

【注】

[1] 本連載の第9回で初めて紹介した際から、SOFARモデルの図に示されたAdministorsを「職員」と訳出してきている。これは教員に対する立場を明確に区別するために便宜上記したものの、厳密にはAdministratorsは大学の執行部を指すことから、一部には教員も含まれることがある。ここではFacultyは授業を直接担当する者、Administoratorsは授業の管理・運営に携わる者と捉れば、解釈上の混乱は避けられるだろう。加えて、このように捉えてみれば、授業運営を補佐する専門職員はFacultyの側に含めて実践の評価や設計にSOFARモデルを使用することができる。

[2] 8つとは、(1)大学と地域の2者関係を5つに拡大、(2)5つに拡大した要素をサービス・ラーニングにおける関係性を分析する単位として提示、(3)大学を学生・教員・事務局に区別、(4)地域を団体のスタッフと住民に区別、(5)パートナーシップ(協力関係)とリレーションシップ(人間関係)とを区別、(6)5つの構成要素間で成立する10個の2者関係の相互作用の質は親密性・公平性・誠実性の3つの属性によると特定、(7)人間関係が搾取的・交流的・変容的かの評価能力の向上が必要、(8)構成要素間での相互作用においては同一属性内での各人の視点を考慮、である。

[3] 原文では「Are transformational relationships also (always? usually?) democratic (i.e., co-created, asset-based)?」とある。

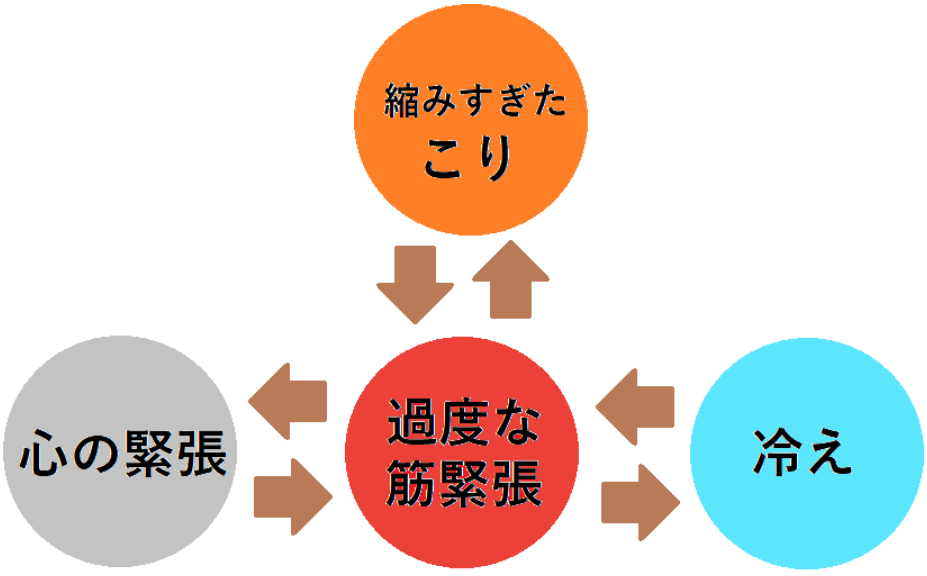
[4] なお、本連載第23回で示したTRES1、第24回で示したTRES2は筆者が訳した非公式の日本語版である。その際「power」を「権力」ではなく「力関係」と訳出した。Kniffinら（2020）は、その他「identity」や「trust」などを挙げて「現地の言語的・文化的理解に従って項目や用語の適合を図る」（adapting items and terms according to local linguistic and cultural understandings of constructs）ことに焦点を当てることを提案している。



自律訓練法とこりの改善

JR 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

縮みすぎたタイプのこりと過度な筋緊張、心の緊張、体の冷えは相補的な関係にあります。
反対に、心の緊張を少なくすると、過度な筋緊張も少なくなり、こりが減りやすくなり、また体の冷えも改善します。



心の緊張をとく方法として、自律訓練法というとても良い方法があります。

そこで、自律訓練法の普及に貢献された佐々木雄二先生の『自律訓練法の臨床ー心身医学から臨床心理学へ』（1996）を参考にしながら、自律訓練法とはどのようなものか紹介したいと思います。
専門書でありながらわかりやすく書かれていて、とても読みやすい１冊です。



（参考にしながらと言っても、要約しているだけで、ほとんど受け売りです。ご了承ください）。

佐々木雄二先生は１９３６年広島県のお生まれです（２０２３年2月２２日没）。
九州大学医学部を１９６１年に卒業され、池見酉次郎先生（１９１５年～１９９９年）のもと、心療内科の創設に参画されました。
１９７９年に筑波大学心理学系に助教授として移ってこられました。運よく私もこの年に入学し、先生に指導していただきました。
とてもやさしくておだやかな先生でした。一緒にいるだけで、落ち着いた気持ちになってしまうような、そんな温かいお人柄でした。

◆自律訓練法の歴史

自律訓練法の源流は、古代ケルト人が信仰したドルイド教の「ドルイドの眠り」や、３世紀のエジプトのパピルスに書かれた、光る物体を凝視させて催眠に誘導するエピソードなどにさかのぼることができます。

１８世紀末フランスのフランツ・アントン・メスメルは「動物磁気術」というトランス状態に入る方法を治療に用いましたが、ルイ１６世が組織した調査委員会に動物磁気の存在を否定されました。
それでも、メスメルの方法（メスメリズム）は多くの病気に有効であったため、１９世紀前半から中葉にかけて、ヨーロッパ、北米、インドなどに広がっていきました。

１９世紀にはスコットランドの近代催眠術の祖ジェイムス・ブレイドは、メスメリズムへの導入法を考案し「催眠（hypnotism）」と呼びました。

１９世紀末、ドイツのオスカー・フォークトは、催眠トランス状態に入ること自体に治療的意義があることを発見しました。当時の催眠療法は、催眠状態に導入した上で、治療的な暗示をかけるというものでした。しかし、フォークとは繰り返し催眠トランス状態に入るだけで健康に有効であることを見出したのです。

しかし、治療的効果が得られるまでに数十回、数百回の催眠導入が必要となると、実際に治療に利用するには限界がありました。

そこでトランス状態を自分でも得られるように工夫を重ね、自律訓練法（autogenic-training または autogenic-therapy）をつくったのがヨハネス・ハインリッヒ・シュルツ（１８８４年～１９７０年）でした。
シュルツは、催眠状態に入った時にすべての人に起こる心身の変化に、気持ちの落ち着いた感じや身体の重たい感覚、温かい感覚あることを拾い上げました。
そして「気持ちが落ち着いている」といった自己暗示を繰り返すことで安心感をえられることを確認しました。そして、１９２４年に６段階の自律訓練法の標準練習を完成しました。１９３２年には『自律訓練法―集中性自己弛緩』が公刊されました。

その後、シュルツとその高弟ウォルフガング・ルーテ（１９２２年～１９８５年）によって自律訓練法は順調に改良・展開され、１９５９年には二人の共著で英語版も出版され、世界各国へと広まっていきました。

日本で初めて自律訓練法が紹介されたのが１９５１年、京都大学文学部の佐藤幸治先生によります（その時は「自生修練」という訳語でした）。
「自律訓練法」という訳語は１９５９年に東京教育大学（現在の筑波大学）の成瀬悟策先生（１９２４年～２０１９年）がはじめて使われました。
翌１９６０年の催眠研究会（現在の催眠医学心理学会）で自律訓練法が取り上げられ、１９６３年に、シュルツと成瀬悟策先生の共著で日本語版も出版されました
１９６０年代前半は、日本で自律訓練法の検討・実験がおこなわれた時期でした。
佐々木雄二先生も、１９６２年から１９６４年にかけて、九州大学心療内科で２５５名の患者さんに自律訓練法を指導され、その結果を論文にまとめられています。

１９６０年代後半から７０年代前半は、大学病院を中心に自律訓練法が普及していき、さらに、一般の診療所などにも広がっていきました。
しかし、指導技法の習得が不十分な指導者も現れるようになるなどして、弊害が生じてきました。
そこで１９７７年に、池見先生、佐々木先生らが呼びかけ人となって、日本自律訓練学会発起人会が結成され、会合を重ねて、１９７８年に第１回日本自律訓練学会が九州大学で開催されました。

一方、ルーテが１９６１年に設立した国際自律訓練法委員会（ICAT）を通じて、世界規模での普及と情報交換がおこなわれてきました。
ICAT の初代委員長ルーテが１９８５年に急逝したあと、しばらく活動が停滞しますが、２代目委員長を池見先生、３代目委員長を佐々木先生が務められました。

その後、自律訓練法は、医療や教育の分野にとどまらず、企業にも広がり、ストレス緩和、メンタルヘルス、創造性開発などにも活用されるようになりました。

◆自律訓練法の効果

自律訓練法の効果はきわめて幅広いものがあります。アンジェルら（1976）は次のような効果を挙げています。

１　知的側面：注意力の増大、記憶力の改善、課題への対応力の向上、学業成績の向上など

２　社会的側面：対教師・対友人関係の緊密化、授業中の学習態度が積極的になる、自発的な活動の増大など

３　心理的側面：テスト不安の減少、情動の安定、攻撃的態度の減少、欲求不満耐性の上昇、神経質傾向の改善など

４　生理的側面：不眠、胃腸障害、頭痛、チック、呼吸障害、発語障害などの心身症や機能的障害の改善ないし治癒

５　その他：刺激対応の柔軟性の増大、スポーツ成績の向上、創造性の開発など

◆自律訓練法の技法

シュルツの完成した６段階の自律訓練法の標準練習は、次のような公式と消去動作を用います。

背景公式：「気持ちが（とても）落ち着いている」
第１公式：「両腕（て）両脚（あし）が重たい」
第２公式：「両腕（て）両脚（あし）が温かい」
第３公式：「心臓が（自然に）静かに規則正しく打っている」
第４公式：「（自然に）らくに息（いき）をしている」
第５公式：「お腹（おなか）が温かい」
第６公式：「額が気持ちよく涼しい」

消去動作：両手を開閉したり、両肘を屈伸したり、伸びをしたり、その他体を動かして、自己催眠状態から覚めるようにします。

できるだけ静かで気が散らない場所で、リラックスできる姿勢（座るか寝る姿勢）になり、目を閉じて、公式を心の中で唱えます。

まず背景公式を何回か繰り返してから、第１公式に進み、何回か心の中で繰り返し、その後、消去動作をおこないます。そのまま眠る場合は、消去動作をしなくてもかまいません。

重たい感覚を無理に感じようとせず、ぼんやりと体の感覚に注意を向けます（受動的注意集中）。
訓練しても、重たい感覚がすぐ現れるとは限りません。あせらず、「現れたら儲けもの。そのうち現れるさ」くらいのつもりで訓練を続けるのが良いと思います。
もし、腕や脚の重たい感覚が現れたら、その感覚をよく味わって消去動作をしてください。そして、第１公式の訓練を何度も繰り返します。

第１公式がうまくできるようになれば、第２公式に進み、心の中で何回か繰り返し、消去動作をします。
訓練を続けて、腕や脚の温かい感覚が現れるようになったら、第３公式に進みます。
以降、同様に、うまくいくようでしたら、第４公式、第５公式、第６公式へと進んでいきます。

第１公式や第２公式ができれば、それだけでも効果はありますから、無理に先に進む必要はありません。
気長にコツコツと続けるのが良いでしょう。

標準練習が十分できるようになれば、標準練習によってえられた自律状態を基盤にして種々の特殊練習に進みます。

ただ、心の緊張を減らし、体のこりを解消するのなら、標準練習で十分効果がえられますから、ここでは特殊練習の説明は省略します。

◆自律訓練法の目的

開発者のシュルツは、父方の呼吸器系が弱い体質を受け継いでいる上に、生後６カ月で百日咳に感染し、肺炎を併発し、1歳の誕生日から３０歳まで気管支喘息に苦しめられました。シュルツの喘息は、感情的に興奮すると誘発されるので、心身症の部類に入るものでした。

シュルツは２０歳で催眠に関心を持つようになり、２０代で自律訓練法の基本的なアイデアを構築していき、３０歳のころに気管支喘息を克服しています。シュルツは自分の喘息を治すために自律訓練法を生み出したとも言えます。

その後、開発を進めて、４０歳のころに患者にも正常者にも使える標準練習を完成しています。

シュルツは自律訓練法を「心身全般の変換（脳の変換）をうるための訓練法」としています。
自律訓練法でえられる心身全般の変換（脳の変換）には次のようなものがあります。

１　緊張から弛緩へ
２　興奮から鎮静へ
３　交感神経優位状態から副交感神経優位状態へ
４　エルゴトロピック状態からトロフォトロピック状態へ（エネルギーを利用しやすい体制からエネルギーを蓄積しやすい体制へ）
５　反ホメオスターシス状態から向ホメオスターシス状態へ

シュルツは、興奮から鎮静への変換をえることで、喘息を克服したのでしょう。

ところで、自律訓練法でえられる心身の変換の一つに、「緊張から弛緩へ」という変換があります。
心と体の緊張が減れば、筋肉も弛緩し、縮みすぎることも少なくなり、その結果、筋肉が縮みすぎて生じるこりも少なくなります。
自律訓練法は、こりを少なくしたり、予防したりする方法にもなると言えます。

また、自律訓練法でえられる心身の変換の一つに、「交感神経優位状態から副交感神経優位状態へ」という変換もあります。
交感神経優位から副交感神経優位に変換が起こると、消化器官での消化・吸収が活発になって発熱し、また、末梢血管が拡張して血流が良くなり、内臓の熱が手足に運ばれて冷えが少なくなります。
自律訓練法は、冷えを少なくしたり、予防したりする方法にもなると言えます。

ではまた

追伸
自律訓練法のおかげで私の肩こりが良くなった話まで書くつもりだったのですが、もう締め切りを過ぎてしまっているので、その話はまた稿を改めて書きます。

現代社会を『関係性』という観点から考える

㉔　「知らないことが不安や排除につながる」ということ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。

その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、**「地域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**というタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、**Society から Home へ矮小化していく社会**について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自身の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる**「家族助」**についてというテーマで、現在議論されている地域包括ケアシステムの在り方について私論を述べました。

連載 24 では**自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ**というタイトルで、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながることなどについて私見を述べさせていただきまし

た。

連載 25 となる今回は、**「知らないことが不安や排除につながる」ということ**をテーマで私見を述べたいと思います。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にすることが主目的)、冒頭でこれまでのテーマを振り返ることが必要と考えており、連載 14 以降では、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

1　地域コンフリクトはなぜ起きるのか

薬物依存症者等施設を始めとしてとする地域生活の場や施設が、「自分たちの居住エリア」に設置されることになった場合、「自分と異なる人たちが集まる、あるいは居住する施設」が「自分たちの居住エリアに入ってくる」ことの恐れなどの感情から、往々にして地域コンフリクトが発生することがあります。私自身も、関西方面で初めて設置されたダルクで理事をしていたこともあり、施設の移転などの際にそうした厳しい状況に直面した経験あります。

昨今では、児童福祉法の改正に伴って特別区が児童相談所を設置できるようになった際、東京都内のある特別区が児童相談所の設置を計画した時、設置予定地域で激しい反対運動が起き、全国レベルのニュースにもなりました。「ネギすら高級スーパーで購入するようなこの地域に、そうした施設を必要とする人々が来られても、その人々も環境の違いに戸惑われるだろう」という内容の、当該「地域住民」の声が報道された時には、「無知と無縁は人を歪ませる」という、北九州でホームレス支援を長年なさっている奥田仁志氏が、その経験からよく述べられる言葉を思い出しました。

上記児童相談所設置の際の反対運動については、当該地域住民の方全てがそうした排他的な意識を持っておられたわけではないはず（と信じたい）ですが、こういった場合は、どうしても「声の大きな人々の声」が報道されることもあるのだと感じました。また「ネギすら高級スーパーで云々」という言い回しはいかにもキャッチーであり、そうした「強い言葉」が関心を集めた面もあったと考えられます。

私自身は、こうした地域コンフリクトの多くは、「知らない」こと、そして、歪んだ「我々意識」が背景にあると考えています。

2　歪んだ「我々意識」

多様性が重んじることを目指す（SDGs など）社会にあってなお、自分の周囲の人々や環境に同質性を求め、「異質である」を感じたものを排除しようという考え方は、残念ながらまだ残っていると上記の一件でも感じました。ある意味これは歪んだ「我々意識」とでも呼べるものだと私は感じています。

同じ属性や志向を持つ者が集まり、その同質性を核として結束力を高めていくということは、仲良しグループがいわゆる「おそろい」の文房具やアクセサリーを持つことでその同質性を外部にアピールすることなど、比較的幼い世代でも見られる現象だと考えられます。一見すると無邪気で微笑ましいことでもありますがが、「自分たちとは違う」ものに対し、排除の方向に傾いていくものであれば、それは「いじめ」その他の問題・課題に発展してしまうでしょう。

子どもの行動は大人の考え方を映す鏡のような側面を持つと考えています。仲良

しグループの無邪気なふるまいと微笑ましく考えるだけではなく、「自分とは違うもの」に対する排他的態度につながる芽を含みかねないことについて、周囲の大人は注意を払う必要があります。

実際、同質性を求められることに違和感を感じ（あるいは同質性を示すモノを購入することに心理的・経済的な負担があって）、しんどさを感じていても、そのグループから抜けられないということもあるでしょう。

「スクールカースト」という言葉が登場して久しいですが、世界史の授業でインドにおけるカースト制度を教わった私としては、そうした言葉が日本の学校で日常的に使われる言葉となったことに驚きを禁じ得ませんでした。そして「カースト」から落ちないために、「自分の本当に好きなこと」ではなく、「グループやそのリーダーと同じようにふるまうこと」に力を注ぐことによって消耗しているのであれば、それは現代の若い世代の「生きづらさ」につながっていくでしょう。

「わたしたち」「我々」という言葉はよく使われますが、実はその定義は曖昧です。自分たちと同質のものだけを「わたしたち」「我々」としているのでれば、それは連帯の名前に借りた、異質なものを排除することに他ならないと私は考えます。

読者の皆さんはどのようにお考えですか。

3　ドキュメンタリー映画『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』

今回、このテーマで執筆させていただくにあたって、上記ドキュメンタリー映画を取り上げたいと思います。内容等の紹介がやや長くことについてお許しください。

これは 2021 年に、障害者と司法の課題に長年取り組んでこられた池原毅和弁護士の企画によって制作された、主として精神障害者のための GH（グループホーム）移転を巡る「施設コフリクト」をテーマにしたドキュメンタリー映画です。

冒頭では、この地域コンフリクトの当事者となった社会福祉法人 SKY かわさきが運営する GH の日常が描かれています。スタッフもメンバーの方も顔を出して登場されています。日中活動の場への参加やささやかなレクリエーションなどの日常生活の場が淡々と描かれています。調子を崩して入院するメンバーさんに対する支援員のケアの場面も収録され、精神障害者の「地域の中での暮らし」の一端を垣間見ることができます。

しかし（撮影当時）7 年前のグループホーム移転を準備していた時期には、「子どもたちの安全が確保できない」「やっと建てたマイホームの地価が下がる」といった移転先住民の声が上がりました。事業者による住民説明会は 3 回にわたって実施されましたが、説明を重ねるほど、理解を得られるその前に、反対派の住民はより結束し反対運動を盛り上げるような結果となってしまいました。しかも、当該 GH の移転予定地域には、系列の訪問看護ステーション等によるサービスを受けながら精神障害者当事者も居住しているのです。建設準備スタッフは「運営反対の幟旗が立ち並び、連日ヘイトスピーチのような反対運動がおこる地域で暮らす精神障害者当事者やその家族がどんな思いをしているか」と懸念します。

一方で、反対派の住民側は「障害者を差別しているのではなく、運営側への不信感が反対する主たる理由である」と述べる一方で、説明会においては、「精神障害者は人を殺しても無罪だ」「殺され損じゃないですか」「防犯ビデオをつけてくれるのか」「危険な施設の隣に親を住まわせられない」という差別的な発言が飛び交います。

池原弁護士氏はこうした反対運動について、「(反対する) どんな理由より、本当は『(地域に) 来てほしくない』というのが本音」「犯罪者 100 名のうち精神障害のある人の割合は 0.9%。これが (障害のない) 健常者の場合は 3.3% (日本　2019 年調査)。精神障害者は健常者より犯罪を行う確率は低い」と言及しています。

社会福祉施設の仲介を多く手掛けている会社がこの GH の移転に関わっていましたが、当該不動産会社の社長は「障害者施設があるエリアが、(それだけで) 資産価値が下がることはない」こと、重要事項説明書に「障害者施設が近隣にあること」を記載する必要もない」ということを説明される場面もあります。一方で、別の地域で GH の設立を検討している別法人のスタッフが、「犯罪者や騒ぎを起こす人が来るのではないか」という地域住民の反対が強く、建設が進捗しない状況を語る場面もあります。

障害者施設の設置にあたっては、かつては (自治体からの助成その他の関係で)「住民同意書」が必要とされた時代があったものの、現在はそれは必要とされていないということが映画では強調されています。しかし事業者は、しかし、GH を設置した後のメンバーさんの生活も考え、地域住民に理解を求める試みを繰り返していきます。

つまり、事業者の説明不足ではなく、障害者に対する「不安」があるから、施設設置に対する反対運動が起きるということが、この映画の訴えるところです。

まずは GH を実際に見てもらい、実際に地域で暮らしている人の暮らしを「自分の目で見て考えること」が、事業者から「説明を聞くこと」以上に、重要であることということも、実感できるところです。

一方で、住民説明会だけではなく、事業者からは近隣の学校等への働き掛けも行われます。「障害者差別に通じる幟旗は通学路にも立ち並んでいます。それらを日常的に見ながら通学することで、子どもたちの内面に障害者を差別する気持ちを育ててしまうことにならないでしょうか」という問題提起が、事業者側から学校に対してなされていきます。その結果、時間はかかったものの、最終的に幟旗は降ろされ、施設移転は実現することになります。

その後 GH 設置・開設後も特に大きな問題は起こっていないということも最後に語られます。GH で暮らす当事者が服薬できなくなったり、症状が悪化した場合は、事業者が迅速に対応している所以です。つまり、「あたりまえの地域生活を支える」ための支援体制が整っているからです。

一方で、退院促進に取り組む精神科病院のスタッフからは、入院治療を続け「今が地域に戻るタイミング」という時点で、地域でグループホームという社会資源があることはとてもありがたいというコメントも収録されています。地域移行が進まない原因の 1 つとして、地域の受入れ体制にあることを実感する場面です。

DVD のパンフレットでは、このグループホームを運営する「SKY かわさき」の三橋理事長の言葉が収められています。

話し合いは (地域住民の施設移転に対する) 抗議集会となり、このままでは理解を得られないと判断し、移転計画を粛々と遂行した。一方で多くの支えも得られ、3 月後には幟旗などはおろされ、半年遅れの移転が実現した。地域コンフリクトの際、私たちは地域住民に「お願い」したのではない。住民、事業者が全力で戦い、事業所は撤退しないということをわかってもらった。それで双方が傷を負ったが分かり合ったこともある。移転が無事終了した時、元町会長からペンキが塗り替えられた頑丈な

鉄製ゴミ箱がグループホームにプレゼントされた。「ゴミ出し」は地域社会の中にあって最も大切な約束事であり、このプレゼントは「僕たちは受け入れている」のサインのように思えた。普及啓発は言葉だけでは進まない。良いところも悪いところも喜びも悲しみも持つ人としてあるがままに姿を現していくところから（始まる）。そしてそれを支える人と人とのつながりから安心が生まれる。

4　『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』を見て考えたこと

「不安の正体」とは何かということをまず考えさせられるのは、知識として単に「知っている」「聞いたことがある」というレベルではなく、自分自身が主体的にその事象に関わっていくなど体験を介し、より「深く理解していく」ことが、現実の社会生活では重要になってくることだということです。

そして、これは前回の連載 24 でも述べたことですが、個々の人間がそうした作業のために費やすことのできる時間、「深く理解する」「それを記憶する」ことに要するワーキングメモリーともいうべき部分にもおそらくは制限もある（脳科学に関しては素人なのでこうした表現が正しいかわからないのですが）ことを考えると、**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**ということについて、私達人間はより自覚的である必要があり、それが社会で生きていくうえでの謙虚さや他者への気遣い、社会課題への積極的関心につながっていくのではないかと考えています。**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**と自覚するによって、初めて自発的に「より深くこの世界を知ろう」という動機付けがなされるのであろうと思われますし、何よりも「自分に知らない世界がある」ということを「知っている」（自分の無知を知っている）ことは、例えば「自分の知らないことを知っている人」と話し合う際に、相手のことを尊重することにつながると考えています。

現在は、インターネットの普及により、様々な情報に手軽にアクセスできるようになりました。しかし、インターネットで簡単に得られる「情報」が本当に正しいかどうかという眼差しを常に持っておかなければ、情報の波の中でおぼれかねません。

インターネットが普及する以前は、より専門性の高い分野に関する情報は、図書館等に足を運び、学会誌や専門誌などのバックナンバーなどを地道に確認する等の作業が必要でした。相応の歴史を持つ学会誌や専門誌の場合、掲載に至るまでに幾度もの査読があり、掲載決定後も編集委員会と筆者がやり取りを重ね、学会や専門誌の紙面にふさわしいものとなるよう作業が重ねられます。私自身も、学会誌に寄稿する立場、査読する立場の双方を経験してきましたが、そうした双方向のプロセスがあってこそ、世に出せる形になっていくということを幾度も経験しました。

一方で、そうしたプロセスを経ずに発信される情報も多くあることは、読者の皆さんもご承知のとおりです。そうした情報を閲覧して、「知ったつもり」になってしまうことは、そのリソースが偏った考え方に基づいていたり、根拠が不明確な場合はより危険です。

そうした意味で、先に紹介した「不安の正体」という映画は、精神障害を持つ人々が地域生活に移行していくことの重要性について、ドキュメンタリーという形ではありますが、実際の映像で知るという貴重な機会であると感じました。

映画のタイトルの「不安の正体」とは、自分たちとは異質である（と感じるもの）を日常生活圏から排除しようとする自分の内にある意識だと私は考えます。「精神障

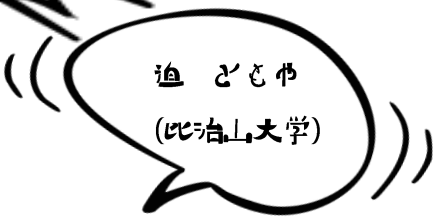
害者が怖い」という単純な「不安」もあるかもしれませんが、多様性が重んじられる現代社会にあって、自分が、「異質（と感じるもの）なものを認めない」人間であることを自分で認めたり、ましてやそのことを他者に知られたりすることが、「不安の正体」ではないかと私なりに考えています。ゆえに、反対理由が「事業者側の説明不足」といった、より形式的なものにすり替えられていったのでしょう。自分の内面を見つめることで、差別意識に気付いてしまう「不安」があり、そしてそのことで周囲から「差別的な人だと思われる」という「不安」があり、それらを直視しない（できない）がゆえに、こうした「不安」を感じることになった相手を攻撃するに至る、プロセスを描いたものが「不安の正体」という映画だと私は考えています。

自身の内にある「不安」に向き合うことができるようにすること、それについて「悩む」力を持つこともまた、人としての成熟につながっていくと私は考えます。自分の中の「不安」に向き合うこと、そして必要があれば、その「不安」について信頼できる相手に相談したり安全な環境で話し合うこと、それが今の社会に求められる関係性の１つだと考えています。

参考文献：映画『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』（2021 年　企画：池原毅和　企画協力　三橋良子　監督　原田基晴　制作・販売：映像グループ　ローポジション）文中では上記 DVD の封入資料内の SKY かわさき三橋理事長の言葉を引用。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ 20

「進撃の巨人」と思春期課題 その1



「名作」と呼ばれる物語は、多義的な内容をもつことが多いものです。多義的とは、様々な解釈ができるということ。神話や伝承などは不思議なお話なのに、なぜか心に残りませんか？　諫山創さんの「進撃の巨人」も様々な立場の読者が、それぞれの視点で解釈することができるのに、「正解」らしきものにたどり着くのが難しい名作のひとつです。謎の多い暗示的な物語の構造が、世界的ヒットの理由のひとつなのでしょう。

筆者は「進撃の巨人」を思春期の課題がたくさん描かれた作品だと考えています。一種の寓話のようなものとして読みました。しかしこれも多義的な解釈のひとつにすぎません。むしろ、独自の主張と言った方がよいかもしれません。筆者なりの解釈から、思春期の課題を重ねた「進撃の巨人」を語ってみましょう。

「進撃の巨人」の主人公は少年エレン。三重の城壁で守られた世界に住んでいる。突然出現した「巨人」によって、人類は滅亡の淵に立たされ、壁の中に逃げ込んで 100 年が経った。壁の外に広がる世界に憧れるエレンは、外に出られる調査兵団に憧れる。ただ、かれらは壁外調査のたびに多数の死傷者を出し、壁内の住民から疎まれていた。エレンが 10 歳になったとき、壁を超える大きさの巨人が現れる。壁が破られ、巨人の群れが侵入することに。人類は第二の壁まで撤退するが、エレンの母親は彼の目の前で巨人に喰い殺されてしまう。エレンは幼馴染のミカサ、アルミンとともに調査兵団に入る。５年後、また突如現れた巨人と戦うことになったエレンは、巨人に喰われてしまう。

その後、巨人と戦う調査兵団の前に、おかしな動きをする巨人が現れる。他の巨人に襲い掛かり、殺す巨人だった。戦いの末に力尽きた「巨人を殺す巨人」のうなじから現れたのは、喰い殺されたはずのエレンだった。エレンは不安定ながらも、自分の手を噛み切ることで巨人化する能力をコントロールできるようになり、調査兵団のリヴァイのもとで監視と警護を受けることになる。（第１巻～第５巻）

壁の中に閉じこもる人類、人類を喰う巨人、自傷による巨人化…。こうした設定が思春期を生きる人の

心象風景に重なっているのではないか、と筆者は考えます。思春期には心身が爆発的に成長して性的衝動が高まりますが、同時に心は成長に追いつかず、子どものままでバランスを崩しやすく、大人の世界への憧れと忌避感が同時に現れます。

摂食障害が始まりやすいのもこの時期です。成長に伴って体形が変化すること、自分の外見の理想と現実が一致しないことなどから、認知が歪みはじめ、食行動の異常が起こることは少なくありません。巨人に喰われることへの恐怖や、主人公エレンが喰われることによって巨人化するという設定は、摂食障害や大人の世界への忌避感を表していないでしょうか。

人類を喰う巨人は無表情、あるいは同じ表情のままで人類に襲い掛かり、喰い殺すのです。巨人は人類を喰っても消化できずに吐き出します。巨人が存在する理由も、攻撃的な行動の意味も分かりません。「この世界は残酷だ」というフレーズが、「進撃の巨人」の前半部分で繰り返されます。

巨人が象徴しているものは何でしょうか。私たちの現実世界に置き換えれば、いじめや虐待のように、なぜなのか理解できないまま暴力を振るわれ、自由を奪われるような出来事を表しているのかもしれません。しかしそんな世界に、私たち読者は、大人として適応していきます。

「大人になると皆、死んだような同じ表情になって、朝から晩まで楽しくもない仕事をする。そんな大人になんか、なりたくない」。思春期に、そんな気持ちになった経験はありませんでしたか？　筆者にはありました。思春期を引きずったまま、20代、30代、あるいは一生を過ごす人も決して少なくはありません。嫌いな大人社会に囲まれている不快感、そんな大人に自分の心身が近づいていく不安、こうした思いは緊張をもたらします。この不安感や緊張は「進撃の巨人」全体に漂っています。思春期を経験した私たち読者の共通の記憶が、物語に引き込まれるしかけになっているように思われます。

思春期の心身の混乱を生きる人たちは、身体的な衝動が高まり、自分をどう扱っていいか分からない混乱状態になることが少なくありません。そんな人たちにとって自傷行為は、「死なずに済む」ための有効な手段となることがあります。自分自身や周りの大人への受け入れがたい気持ち、不安や怒りなどの暴走を、自分に向けて少しだけ吐き出すことが自傷行為なのだと思います。全部を吐き出してしまうと感情が爆発してまわりのモノを壊したり、家族や友人を傷つけたりしてしまいます。自分の命をかけた危険な行為に及ぶかもしれません。

「進撃の巨人」前半では、エレンは自傷によって巨人化し、その能力を人類のために使うことを試みます。エレンははじめ、巨人化できる能力をコントロールできず、幼馴染のミカサを殺してしまいそうになります。その様子を見た調査兵団はエレンに対して、「貴様の正体は何だ？　人か？　巨人か？」と追いつめます。エレンは、自分でも自分の状況が分からず混乱しながら「人間です」と答えます。エレンは疑いをかけられながらも、巨人化できる能力を人類のために使うことを約束します。

思春期を生きる人たちが、大人になっていく心身をコントロールし、周囲の世界に適応しようとする姿が描かれているように読むこともできそうです。

壁の秘密を知る血族の一員が、偽名を使って調査兵団に身を隠している。無理をしてでも周りの期待に応えようとする良い子のクリスタ。対照的に皮肉屋のユミルがいつもそばにいる。巨人に追いつめられて塔に逃げ込んだ調査兵団のピンチを救ったのは、巨人化できる能力を持っていたユミルだった。彼女はクリスタを守るために巨人化して戦うが、襲いかかる巨人が多すぎて捌ききれない。自分一人なら巨

人化して逃げられるはずなのに。クリスタはユミルに「こんなところで死ぬな！　自分のために生きろよ！」と叫ぶ。

領主レイスの妾の子であったクリスタは、母を目の前で殺されていた。母の最期の言葉は「お前さえ産まなければ…」だった。クリスタは自分が生きている意味が分からなくなり、周りにあわせて良い子として過ごしてきたのだった。（第９巻～第 13 巻）

皮肉屋のユミルも良い子のクリスタも、実は「自分が生きている意味がわからない」共通点を持っています。ユミルは実は物乞いの子で「ユミル」という名前を与えられて利用された過去を持ちます。過酷な運命に翻弄されますが、周りの人たちが幸せになるならと耐えてきたのでした（第 22 巻）。ユミルは命がけで戦う場面で「もし生まれ変わることができたら、今度は自分のためだけに生きたい」と呟きます（第 10 巻）。

ユミルもクリスタも（実はエレンも）、親や周りの大人たちの希望のままに生きることを選択したものの、「自分らしく生きていない」ことに苦しみ、自分に絶望します。

思春期を生きる人は、親や周りの大人から教えられてきたことに疑問を持ちはじめ、自分の目で確かめたくなります。しかし世界には、自分だけでは分からないことがたくさん存在するのです。親や大人に疑いの目を向けると、今度はこれまでに得た知識や自分の経験まで疑わしくなっていきます。自分が何なのかが分からなくなり、自分が生きている意味がつかめず、自暴自棄になってしまいます。

成熟を拒否したい気持ちは、ときに引きこもりにつながります。部屋の中に閉じこもれば、安心できるように思えますが、部屋の外には不安をもたらす大人やかれらが生きる世界が相変わらず存在します。引きこもる人は、外部の助けなしには生活ができない状態になります。家族や他者に依存しながら、自分自身の独立を保とうとする試みは不安定です。心身のバランスを崩すこともあります。一旦、まゆのなかに閉じこもり、活動を止めて力を蓄え、徐々に外の世界との繋がりを取り戻していくプロセスは、思春期を生きる人たちによくある姿です。

壁の中に引きこもる人類という設定は、筆者には、思春期の不安や恐怖心から閉じこもり、幼少期に信じた大人の教えを守り続ける子どものように見えます。「外の世界は危ないから、家の中だけで遊びなさい」と強く教えられ、親に抱え込まれた子どもです。しかし壁があるということは、壁の外が存在します。引きこもり続ける限り、外の世界は気がかりなものとなります。自分の意思で生きることは、親の言いつけに背くこと。見せかけの安全な領域から離れ、壁の外に一歩を踏み出すには勇気が必要です。

勇気を発揮できずに引きこもる子に対して、接触しようと試みる大人は、子どもの目から巨人のように見えないでしょうか。ふいに表れて外の世界の存在を知らせる大人は、教師かもしれませんし、カウンセラーかもしれません。引きこもる世界に風穴を開ける存在がいることで、引きこもりを脱することができる場合があります。ですが、引きこもる子どもからは、その存在は恐ろしく見えるかもしれません。

クリスタは、父レイス卿から巨人化する薬を受け取り、自分に注射してエレンを喰うことを求められる。エレンの父グリシャは、レイス家の巨人の力を奪ったうえで自身をエレンに喰わせ、その結果、エレンは巨人化する力を得たのだった。自分の存在理由に絶望したエレンは、「オレはいらなかったんだ」と涙を流す。クリスタも父の願いのままに行動することを迷い、薬を投げ捨ててしまう。クリスタはエレン

に、「自分なんかいらない、なんて言って泣いている人がいたら…そんなことないよって伝えに行きたい」と言い、エレンを助けようとする。二人はともに、自分の判断で生きることを選ぶかに見える。（第15巻〜第16巻）

自分で進むべき道を考え、自分らしく生きることを選ぶことは簡単なことではありません。大人は責任をもって自らの判断の結果を負うことを求められます。ときには自分で負いきれない結果が訪れることもあり得ます。しかし、「自分の判断」だと信じて選んだ道は、家族や身近な人の影響をも排除して、本当に自分ひとりで考え、選んだものと言えるのでしょうか。

こうした問いを含む「進撃の巨人」後半については、引き続き次回で考察しようと思います。世界観や歴史観を問う展開が待っています。クリスタの本当の名前はヒストリア。ここにも暗示的なものが示されているようです。

紹介作品：

諫山創（2010-2021）『進撃の巨人 1〜34巻』講談社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒　sakotomoya@gmail.com

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 22～

＜『叩くな』と言われても＞

杉江　太朗

～目の前に一本のボールペンがある～

昔、私と同じ援助職として従事するAが、『目の前に一本のボールペンがあったとして、それがボールペンであるかどうかを確かめるために、第三者にどうやって質問をするかと常々考えている』と話していた。

正直、話の流れも覚えていないし、Aがどんなニュアンスで話していたのかも覚えていない。普通であれば、「これはボールペンですか？」と聞くのかな・・・と思いながら、Aの話を聞いていると、ありきたりな質問では面白くない、例えば、「それはボールペンですか？」と質問しても、そんなことは、誰が見てもわかるし、質問をされた側も、「当たり前」「それが何か」と思うだけで、質問をしている人への興味や関心を生むことはないだろうとのことであった。

その考えに答えがあったのかどうか等も覚えておらず、何が正解なのか、そもそも正解があるのか等何もわからないまま、Aとのやり取りのみが記憶に残っており、そのことを私も常々考えるようになった。

ただ、ニュアンスが合っているのかどうかわからないが、ふと似たようなことを考えることがあった。それはタイトルにある『叩くな』というやり取りである。

～『叩くな』と言われても～

ネットやテレビでは、児童虐待が深刻化していると言われ、その件数が右肩上がりであること、その件数のうちのセンセーショナルな数件を取り上げ、それが全てであるかのように報道され続けている。視聴者の興味を得るためにそのような手段となりつつあるのであろう。そうした報道では、暴力がしつけの延長であったと言われ、しつけであっても暴力は虐待である、虐待はいけない、子どもへの暴力はダメだと繰り返し伝えられる。

例えば、目の前に「子どもに怪我をさせた親」がいたとする。その親に対して、「叩くな」と伝えたとして、どれだけの人がその行為を止められるだろうか。煙草にせよお酒にせよ、「やめなさい」「ダメだ」という禁止言葉だけでやめられたら苦労はしない。暴力も同じで、禁止するだけで暴力がなくなるのであれば、ニ

ュースで「叩いてはいけません」と流し続ければ解決するが、実際はそうではない。さらに、叩いている側からしても、「叩いてはいけない」ということは、小さな頃から繰り返し言われてきただろうし、その人もわかっていることかもしれない。それでも叩くと言う行為はなくならない。私には、この「叩くな」という言葉が、「これはボールペンか？」という言葉に聞こえてしまってならない。

～目的は叩くことをやめてもらうこと～

叩くなと言われて叩かなくなるのであれば、そんなに簡単なことはない。それで叩く人がいなくなれば、私の仕事は廃れていく一方のはずだ。叩くという行為を肯定するわけではないが、叩くに至った理由やきっかけは、いったい何なのであろうか。叩く前には何かきっかけがあったのではないか。さらにきっかけがあったとしても、全ての人が叩くかと言われたら当然そうではない。叩く前には何らかのその人なりの気持ちの動きがあったはずである。ということは、叩く前には、何らかの気持ちの動きがあり、気持ちが動く前には何かのきっかけがあったということになる。何か『きっかけ』があり、『気持ち』が動き、『結果』として、叩いてしまうのである。このことを、刺激（きっかけ）、思考（感情、気持ち）、結果（行動）に分けて考える人もいるのではないだろうか。

「しつけのために叩いた」とか「あくまでもしつけだ。」という言い分を聞いたことはないだろうか。今は、しつけであろうがなかろうが暴力は許されないのであるが、そういったときに、その人に「叩くな」と伝え暴力を否定してしまうと、その人なりの「しつけをしなければならない」という気持ちまで否定して伝わってしまうかもしれない。そうなれば相手からは反発しか得られない。この業界の目標は、叩くと言う結果をなくすこと、言い換えれば、叩くという結果を別の方法に置き換えてもらうことである。叩くという行為に至ったきっかけや経緯、その気持ちの動きは否定せず、叩いたという行為のみ否定し、何か別の手段に置き換える。そんな風に、プロセスは否定せず、結果のみを置き換えることが出来たなら、結果として叩くという行為がなくなることに繋がっていくかもしれない。

東京から京都に行くには、新幹線、普通列車、飛行機、自動車、バス、タクシー、徒歩、ヒッチハイクなど様々な方法がある。ここでは、結果として京都に着けば問題ないという考え方をする。徒歩で京都を目指すことは、適切だとは思えないが、そのことを否定してしまうと、京都に行くという目的そのものまで否定してしまうことになりかねない。

では、「叩くな」というやり取りをめぐって、どのような言い方（=バリエーション）があるのか考えてみたいと思う。

～私流、対応のバリエーション～

≪心配事を伝える≫

例えは、叩く行為が続くことでどんな心配があるだろうか。当然、子どもが怪我をするということが一番懸念されることではあるが、このご時世、叩いたという結果が警察に伝わってしまうと、叩いた張本人が逮捕されてしまう可能性がある。

『それ以上叩いて、もし警察に伝わってしまうと、逮捕されてしまうかもしれない』『〇〇さんには逮捕されて欲しくない』『警察に捕まらないように別の方法を考えていきましょう』

要は「叩いて欲しくない」ということなのであるが、行動を咎めることを前面に出さずに、行動の行く末を心配して伝えるのである。

≪例外を探す≫

子どもを叩く人が、24 時間ずっと子どもを叩いているかと言えばそうではないはずである。叩かない時間や叩かないこと（例外）もあるはずである。では、どんな場面では叩かずに済んだのであろうか。

『叩かずに済んだときはどんなときですか？』『いつも叩いているわけではないと思います。叩いたときと叩かなかったときはどう違うのですか？』

子どもが死んでいない以上、そうでない行動を用いた場面は必ずある。そのことを聞きだすことで、適切ではない行動を、適切な行動に置き換える意識付けを行えるかもしれない。

≪ど真ん中ストレート≫

とは言っても直球で勝負することもある。例えばあくまでもしつけだと主張される方に対して、「叩くことは虐待に当たります」と根拠を示して伝えることもある。これは、「お役所が虐待に当たると言うのであれば、辞めるようにしよう」という捉え方の変化を期待するものである。しつけをしなければいけないという思いが強く、真面目な方には効果があるかもしれない。（実際に叩かなくはなり、腕立てや腹筋などを強要するようになった親もいるので使い方には要注意）

≪頼み込む≫

お願いだから叩くことだけでも辞めて欲しいと頼み込むこともある。これは、ある程度相手との関係性を感じている場面での方法となるが、アイツが頼むのだから聞いてやっても良いか・・・と思ってもらえることを期待する。このときに、子どもの心配はもちろんだか、「（叩いた人）が捕まらないようにしたいからお願いだし・・・」というニュアンスを含めると、叩いた人の存在を否定せず、守りたいという気持ちも伝わるかもしれない。こちらも、叩く人を排除したいわけでは

ない。叩くという適切ではない行為を排除したいのである。

≪メリット、デメリット≫

叩くことのデメリット（怪我のこと、関係性のこと、エスカレートしやすいこと）などを伝えることは多いと思うが、叩くことに実はメリットがあることを伝えることもある。

暴力を用いることで、最初の方は確かに子どもが言うことも聞く場面があり、叩くことには実は、即効性が隠されているのである。まずはそのことをメリットとして伝え、（あくまでも即効性があることは認める）しかし、人は痛みに対して耐久性を備えているため、叩き続けることで、最初ほどの効果は得られなくなり、さらなる痛みを必要とするので、叩くことがエスカレートしてしまうという、結果としてデメリットに繋がることを説明する。その人の行為を全て否定するのではなく、一部だけは認め、しかし、そのことを継続することの不味さを知ってもらうのである。

また力関係で行動させるというパターンを子どもに誤学習させてしまう心配があると伝えることもある。このことも叩くことのデメリットである。子どもに将来、暴力を用いたら物事が解決できると思うような大人になって欲しいという親は少ないはずである。親として子どもを思う気持ちに訴えかけるのである。

≪社会システムを伝える≫

例えば、ニュースで児童虐待によって逮捕される事件があったとしてそのニュースを扱うこともあった。たいていの場合、ニュースになるようなことはしていないと言われてしまうが、児童相談所は、暴力を罰するための機関ではないが、警察などの司法に、結果として暴力を用いたことが伝わってしまうと、それは逮捕の対象になってしまう、もしかしたら、このニュースで逮捕されたと言われている人も同じような状況かもしれない、などと説明し、社会の中で、全ての暴力が虐待と見なされる時代になっていることを伝えるのである。

～もう一度、ボールペンの話～

では、冒頭のボールペンの話に戻る。正直、このように書きながらも、実際にどのようなやり取りがあったかは全く思い出せないし、おそらく記憶は変換されていると思われるので、そういったやり取りがあったかも怪しい。とは言え、目の前にボールペンがあったとして、「これはボールペンですか？」というような当たり前の質問はしたくはないし、当たり前ではない質問をどうやってするのか、そのことを常に熟慮していかなければいけないと思う日々である。

『痴漢アカン』という言葉がある。痴漢がダメなことは誰でもわかっている。

同じように、虐待はダメだということも皆がわかっているはずである。子どもの安全を守るために、如何にして目の前の適切ではない行動を変換してもらうのか。それは、一方的にダメだと伝えるだけではなく、相手の行動に興味を持ち、こちらの質問を介して、こちらの働きかけに興味を持ってもらう工夫が必要であろう。何度でも言うが、叩くなと言われて、叩かなくなるのであれば、それほど楽なことはない。そうでないからこそ、この仕事は奥が深く、常に探求心が求められるのである。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑧～

ヤング？ケアラー？

♪♪♪

松岡園子

今回の 2 号前、対人援助学マガジン 51 号に書かせていただいた A ちゃんの話の続きです。あれ以来、時々A ちゃんと会い、近況報告をしあっています。先日 A ちゃんから、入院中のお母さんのことを詳しくききました。

入院中に認知症の症状がでてきてしまい、退院できたとしても在宅で過ごすのは難しそうとのこと。お母さんが入所できる施設を探しているとのことでした。お母さんが住んでいた家を引き払うことにし、ほぼ 1 人で片づけや手続きをしたというのです。

「何杯ゴミをほかしたか……」

私なら、とても 1 人でそんなことができるだろうかと思うほどの片づけや手続きを短期間でやった A ちゃんはすごいと思いました。

20 年弱の時を経て、私と A ちゃんを再会させてくれた A ちゃんのお父さんが亡くなり、お母さんも大変な状況です。そこでふと私は現在の自分の母のことを思いました。

私の母はといえば、足腰が弱ってきてはいるものの、元気に家で過ごしています。毎日服薬は必要ですが、統合失調症の症状も感じられないほど落ち着いています。私は 10 代がいちばん大変だと感じたけれど、また違う時期にもっと大変な状況になる人だっている。

一般的には子どもが 10 代の間は親世代も若く、困ったことがあっても親世代に頼ればなんとかなります。しかし 10 年、20 年と経つうちに状況が変わり、今度はこちらが親世代を支える番になる。また、育児に携わる人もいるでしょう。介護や育児をケアと呼ぶとすれば、時間の経過とともに、ケアに関わる人が次第に増えていきます。それは仕事、家事や自分のしたいことと並行して生活の中に入り込んできます。さらに、自身や親以外の家族が病を抱えるということも考えられるでしょう。

それを 10 代で迎える人もいれば、20 代、30 代で迎える人もいます。ただ、10 代の間は

周囲に同じ状況の人が見当たらず、自分は家族のケアをしながら自分の学校生活も送らなければならない、それは珍しいことだと感じることもあると思います。また、人生経験が少ないために物事を解決する発想に乏しいなど、悩むことも多いと思います。

しかし、10 代だから大変で、20 代以上になると大変ではないからサポートは必要ないとも言い切れるものではありません。家族の状況はそれぞれ違っていて、必要なケアもその家族 1 人ひとり違います。ケアを担う人の経験や考え方、性格、周囲の環境などによっても大変さが変わってくるのではないでしょうか。

その人がいくつであっても、周囲の理解と、そうした環境の変化を迎えた時に対処していく力があれば、なんとか乗り切っていくことはできるのではないかと思います。周囲にできることはその人の状況を理解することと、乗り切るために必要な力を考え、支えることではないでしょうか。

私の周囲には A ちゃんの他にも、母親のケアを担っている B ちゃんという同級生がいます。B ちゃんは 2 人の子供の育児と家事、自分の仕事をこなしながら、離れたところに住む母親の所へ通っています。B ちゃんが 20 歳の頃にお母さんは脳梗塞で倒れ、その後遺症で麻痺が残っています。お父さんは昨年亡くなりました。B ちゃんとも時々会うのですが、

「会う前に、お母さんをお風呂に入れてから行くわ」

と当たり前のように言います。彼女にするとそれが生活の一部のようにさらりと言います。私が同じ状況だったら、こなしきれるだろうか？と思うほどの仕事量のように感じます。しかし B ちゃんにすると、それが日常なのです。

A ちゃん、B ちゃんと話していると、ヤングケアラーと呼ばれる人たちと、ヤングではなく（？）ケアを抱える人とでは、なにが違うのだろうと考えることがよくあります。

10 代で、周囲と何か違う体験をしていると感じたとしても、20 代 30 代と時を経るにつれて、周囲との環境の差をさほど感じられなくなると思います。それは、周囲の環境も変化していく（親世代が定年を迎えたり、病にかかる、介護が必要になることなどが増えてくる）からです。いま私は 40 代ですが、「母には持病がある」と話しても、病の種類はそれぞれですが、周囲には家族をケアする体験をしている人も多いため、それを自然に受け入れてもらえていると感じます。私も自分の経験からケアを担う人の気持ちを理解することもできますし、福祉サービスの情報やこれまでに役立った知恵を伝えることもできます。

今の私ぐらいの年齢になると、家族のケアをすることはなにも特別なことではなく、自然なことだと感じられるようになってくると思います。

また、ケアを他の人に任せたり、ケアをしない選択をする人もいると思います。それは人それぞれの選択です。どんな選択をするにしても、一旦は目の前の状況を受け入れて対処し、日常を創っていく。それはいつでも誰でも起こり得ることなのだと、自分のこれまでを思いながら、A ちゃん、B ちゃんの姿を見て考えさせられました。

第２０回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

―― ドナーとレシピエントの術後の状態 ――

一宮茂子

はじめに

前回の対人援助マガジン 52 号の投稿は個人的事情によりお休みさせていただきました。そのため本稿では対人援助マガジン 51 号の事例の続きを紹介します。この事例は父親である昭雄さん（仮名：40 歳代）から胆道閉鎖症の長男（20 歳代）への移植であり、その移植手術は 1990 年代後半におこなわれました。長男は生来、胆道閉鎖症であったため生後 3 ヶ月で肝門部空腸吻合術（葛西手術）をうけました。その後も胆汁の流れは改善しなかったため、胆汁を体の外へ出す手術（外漏手術）をうけ、その後、ある期間を経て外漏を閉じる手術（外漏閉鎖手術）をうけました。術後回復は順調にすすまず、腸閉塞になり、その手術をうけました。さらに腹膜炎となり手術をうけました。長男は生後まもなくから合計 8 回の手術と治療を必要としたのです。こうして長男は誕生してから退院するまで、3 年 6 ヶ月もの長期間にわたる入院治療をうけましたが、無事に退院できました。

その後の長男は中学 2 年生のときに脾臓が大きくなっていることがわかり脾臓の摘出術を受けました。長男はこれまで「余命半年」と告知されたことが何回かあり、家族はその都度「絶望の淵にいた」ことを経験していたのです。

その後の長男は依然として体調がすぐれず学校を休む日がありましたが、小中学校は普通学級で学びました。その間、体育以外の勉強はなんとかついていけたそうです。高校は県内の私立高校に進学しましたが、3 年目を終わった時期に体調が悪くて出席できず、卒業単位は半分以上も残っていたそうです。そのような時期に通信制高校があることを知りました。主にレポート提出で単位取得が可能であり、年数制限がないことから通信制高校に入学し、7 年をかけて卒業しました。そして卒業後は電子系専門学校に入学して情報処理の会社で働く夢をインタビューで語っていました。

１．前回（第 51 号）紹介した内容

インタビュー時点の長男は 20 歳代後半でした。彼は幼少時の大病で何回も手術をうけ、その後も長い闘病生活を強いられながらも常に前向きで忍耐力のある青年のように見えました。

病歴は前述のとおり、長男はこれまでに胆道閉鎖症による手術を 8 回うけ、さらに腹膜炎の手術をうけていました。しかし長男の体調は回復したとは言いがたく、休みながらも通信制高等学校に在籍し 7 年間を要して単位を取得したのです。そして卒業後は電子系の

専門校に入学し、将来は情報処理の会社で働きたいという夢がありました。

そのような長男の夢を知っている家族が生体肝移植を決断した根拠を次のように語っています。長男と家族は治療のため地元病院に入院していました。その期間に肝臓が悪そうに見える女の子に出会いました。そのときの彼女の顔色は黄疸のためか土色でした。しかし、あるとき普通の肌色に変わっていたのです。驚いた母親が女の子の家族に尋ねると Y 大学病院で肝移植を受けたとのこと。その子に巡りあったことが契機となり、長男と家族は移植の決断をすることができたそうです。

本稿のドナー候補者は父親と母親と次男の 3 名でした。父親は家長としての立場から、妻である母親は長男の術後の世話をする必要性があることからドナー候補者からはずしています。最終的に父親と次男がドナー候補者となりました。先行研究からドナー決定には、医学的条件（年齢、体格、血液型、健康状態)、ジェンダー規範（本稿では家長である父親としての責任)、家族規範（家族としての責任）の 3 つがあることがわかっています。本稿では父親と次男の医学的条件の結果がほとんど変わらなかったため、ジェンダー規範と家族規範から「次男をドナー手術で殺しては生きていけない」という父親自身の強い思いから、自発的意思でドナーになることを決断したのです。

インフォームド・コンセントをうけた父親はインタビュー時点でその時の心情を次のように語っています。「現段階ではドナーが死亡した例はない」ということ、しかし「自分が 100%生還できるとも思っていなかった」こと。なにもかも承知のうえで父親は長男の命を助けるために自らドナーの意思表示をおこなったうえで犠牲と負担を担うことになったのです

生体肝移植は 2003 年に日本で初めてドナーの死亡が報告され［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会 2004］、生体臓器移植医療の根底を揺るがす事態になりました。これにより、生体肝移植をめぐるドナーの問題が指摘されるようになりました。そのため生体肝移植ドナー体験者の会［2003］の有志が「生体肝移植ドナー調査に関する要望書」を厚生労働省に提出したのです(注1)。そして日本肝移植研究会が 2004 年に初めて郵送による質問紙調査を実施しました。その結果、ドナーの移植後の健康状態の把握や配慮、費用などの経済面、家族やレシピエントや医療者との関係性の変容について、これまでほとんど考慮されてこなかったことが明らかになったのです［日本肝移植研究会ドナー調査委員会 2005］。

それまでの移植医療関係者は生体肝移植のドナー手術は安全な手術だと思われてきたのですが、どのような手術でも決して安全な手術とはいえず、リスクがともなうことが再認識されたのです。以下、本稿ではドナーとレシピエントの術後の状態を紹介します。

(注1) 「生体肝移植ドナー調査に関する要望書 2003 年 2 月 4 日」(http://www.lifestudies.org/jp/seitai.htm, 2023.5.25).

２．ドナーとレシピエントの手術がもたらした影響

生体肝移植ドナーは術後合併症の有無によってその影響は異なります。通常、ドナーの回復状態が順調な場合は術後約 2 週間で退院となります。しかし手術後に合併症を併発すると入院期間が延長し、ドナーの身体的苦痛ばかりでなく心理的にも社会的にも不利益をこうむります。おもなドナーの合併症はつぎのとおりです。胆汁が腹腔内に漏れる胆汁漏、胆管が狭くなって胆汁の流れが悪くなる胆管狭窄、腹膜の細菌感染などで炎症がおこる腹膜炎、傷の化膿などの創感染、腸の癒着による腸閉塞、ストレスによる胃潰瘍・十二指腸潰瘍、胸腔内や腹腔内に水がたまる胸水・腹水、腹腔内に膿がたまる腹腔内膿瘍などです。

一方、レシピエントの合併症は、腹腔内で出血する腹腔内出血、胆管や腸管の縫いあわせた部分の一部または全体が離開する縫合不全、ドナーと同様に胆管狭窄、さらに特徴的なのは、移植された肝臓がレシピエントの体内にはいると異物と認識され免疫組織が攻撃して取りのぞこうとする拒絶反応や、その拒絶反応を抑制するために免疫抑制剤を内服することにより感染症にかかりやすくなることです。

２-1.　ドナーの術後

ドナー手術は、人体でもっとも大きな臓器である肝臓の一部摘出術です。そのためドナーにとっては手術侵襲がきわめて大きいといえます。当時の Y 大学病院では、成人間の生体肝移植はドナーの肝臓の 3 分の 2 にあたる右葉を摘出して移植していました。子どもに移植する場合は成人ドナーの肝臓の 3 分の 1 にあたる左葉を摘出して移植していました。肝臓の右葉摘出術は、左葉摘出術に比べるとドナーの術後負担は大きいといえます。昭雄さんは肝臓の右葉を摘出して長男に移植しました。のちにドナーの右葉摘出術は医療や技術の進歩により右葉よりも小さい左葉摘出術になっていることを附記しておきます。

ドナーは健康体であったとしても、術後の休養期間は必要であり重要です。インフォームド・コンセントにおける術後休養期間は、ドナーの仕事内容や運動量によって異なることを説明したうえで、事務職などの職種ならば約 1 ヶ月で復職している場合もありますが、できれば肝臓がもとの状態に回復する 3 ヶ月をめどに休養することを勧めています［京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部 2004: 47］。

ドナーである昭雄さんの回復状態は、術後 2 日目には自ら進んでベッドサイドに立ちました。さらに術後の痛みが強いときには 2 回ほど鎮痛薬の注射をうけました。その後も術後の痛みがありましたが術後早期に入浴による鎮痛効果を経験したのです。早期に入浴した理由は、昭雄さんは東北の温泉地に居住していて、別荘には自ら温泉を引きこんだ風呂を作っていました。その温泉風呂の効果により身体的にも精神的にも苦痛が軽減されることを経験していたのです。そのため術後数日経過した時点で昭雄さんは風呂に入りたいと思ったのです。看護師にその旨を伝えると、看護師はサランラップのような透明な抗菌性

のドレッシング製品を創部に貼ってくれました。こうして傷口を保護して入浴すると、それまで絶えず違和感があった傷の痛みが「ス～と引いてなくなった」のです。

医療従事者は術後の早期離床を促しますが、昭雄さんは自ら進んで術後早期にベッドから起きあがり、自ら入浴やシャンプーをして体を動かし、歩行も病棟内から病院外まで徐々に距離を伸ばして歩いたことが、体内の血流を良好にして多くの酸素を取り込んだことが功を奏して回復状態が早かったとも推察されます。

さらに昭雄さんは付きそう妻の精神的な負担を軽減するために、手術が成功して生還できたなら「痛かったら我慢する…女房に言うても痛みが和らぐわけではない…むしろ女房の心の痛みを誘発するだけ…俺は痛くても黙っていよう…自分で自分の体は治そう」という思いで手術に臨んでいたのです。

ドナーの入院期間は通常 2 週間です。しかし昭雄さんは早期離床が効果をもたらしたと推察され、結果的に入院期間は 11 日間と短く、術後 1 ヶ月で復職しました。昭雄さんからみた術後プロセスは「私は完璧な手術をしてもらった」と受け止めていて、ドナー手術が成功して長男の命が救えたことと、一家の主として 1 ヶ月間の休養で社会復帰できたことで経済的基盤は盤石となり、ドナーとしての達成感と満足感を語っていたこたがわかりました。

2-2．レシピエントの術後

一方、レシピエントの合併症は、腹腔内で出血する腹腔内出血、胆管や腸管の縫いあわせた部分の一部または全体が解離する縫合不全、ドナーと同様の胆管狭窄、さらに特徴的なのは、移植された肝臓がレシピエントの体内にはいると異物と認識され免疫組織が攻撃して取りのぞこうとする拒絶反応や、その拒絶反応を抑制するために免疫抑制剤を内服することにより感染症にかかりやすくなることがあげられます。

長男は移植手術をうけるまですでに 9 回の手術をうけていました。そのため腹腔内の癒着が強く、手術室にはいって開腹して移植手術にいたるまでに内臓を傷つけないように癒着をはがすのに時間を要したようです。その結果、レシピエントの手術時間は 15 時間 11 分となり日付をまたぐ長時間を要したのです。

移植術終了後は ICU に収容されて、心臓、肺、腎臓、その他の臓器の動きを監視しながら、移植された肝臓がうまく働いているかチェックします。そのため手術後は以下のようなチューブやドレーンが身体とつながっています。

それは、口には人工呼吸器のチューブ、鼻には胃管チューブ、右鎖骨下には中心静脈栄養のライン（点滴)、左手首には静脈ラインと採血用・血圧測定用動脈ライン、右手首にも静脈ライン、胸部には心電図モニターの電極、腹部には胆管チューブ、腹部の左右から創部のドレーンチュブ、膀胱には導尿チューブなどです。どれも全身状態を把握するために大切な命綱です。これらの点滴ラインやドレーンは、術後の経過とともに数日から数週間で一つ一つ除かれていきます。

長男は 4 泊 5 日間 ICU に収容された後、人工呼吸器は外されて酸素マスクとなり、病棟の個室に収容されました。病棟ではこれまでと同様に濃厚治療とケアが続きましたが、心電図モニターは外され、排液量の少ないドレーンは抜去されていきました。術後 1 週間経過したころ創部から胆汁が混ざった粘液状の排液がみられるようになったため、胆管造影検査をおこなったところ、肝胆空腸吻合部近くの腸管に穴があいていることが判明しました。発熱もあるため縫合部を開いて排液を体外へ流出する処置をうけ、創部の持続洗浄を開始しました。術後 10 日目には創部から出血があり輸血しました。長男の病状は、37 度から 38 度代の発熱と創部から胆汁が混ざった粘液様の便が出ているため、創部の持続洗浄とドレーンの持続吸引を開始して創内部の治癒を観察する状態が続きました。術後 3 週間後も同様の状態でしたが、加熱した流動食の摂取を開始しました。しかし状態は改善せず、結局、移植術後 69 日目に腸管の穴を閉じる手術（腸管穿孔部閉鎖術）が根治療法となり、その 1 ヶ月後に退院となったのです。長男の治療は困難を極めたのですが 116 日間の入院を要して軽快退院となりました。

次回はドナーとレシピエントが移植後に専門職の関与者や、非専門職の関与者によってさまざまな支援をうけるのですが、その支援の内容と、関与者との関係性をみていきます。

文献

京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部，2004，田中紘一監修『いのちの贈りもの──肝臓移植のためのガイドブック』.

日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004，「生体肝移植ドナーが肝不全に陥った事例の検証と再発予防への提言」『移植』38(1): 47-55.

日本肝移植研究会ドナー調査委員会，2005，「生体肝移植ドナーに関する調査報告書」（http://jlts.umin.ac.jp/images/donor_survey_full.pdf，2023.5.25）.

生体肝移植ドナー体験者の会，2003，「生体肝移植ドナー調査に関する要望書 2003 年 2 月 4 日」（http://www.lifestudies.org/jp/seitai.htm，2023.5.25）.

こころ日記「ぼちぼち」その③

性は人権

長い間、「性教育」の研究と実践をしてきた。学校現場では、率先して教材を研究し学習計画も提案してきた。日本社会では、まだまだ性について語ることがタブー視され、今でも学校でさえ性教育には消極的である。教育現場での位置づけが明確ではないので、性教育の実践は、各学校に任されているのが現状だ。できればやりたくないというのが、教師の本音だろう。

「すべての人間は性的な存在である」と言った人がいる。「性は人権」であることを説明するのは、難しいと感じている。

最近は、ジェンダー、多様な性など性に関する話題が、メディアにも取り上げられる機会が増えた。これらのことが、社会全体に広がり議論され、教育に反映してくれるといいが、なかなかそうはいかないのが現実だ。

30 年ほど前、「性教育元年」と言われた時期があった。その時は、やっと性教育の実践が広がると喜んだものだ。しかし見えない力によって、性教育バッシングが起こる。それからの日本の性教育は、残念ながら停滞したままだ。SNS で発信される様々な性の課題。今度ばかりは、一時の流行りに終わらせたくないなと思っている。

性教育は、家庭、学校、地域での実践が大事だ。教員を退いた今、私にできることは地域での「性と生」の発信である。

2019 年に子ども若者が集える居場所として「まちの保健室ちむちむ」を開室した。行政の助成制度を利用し、「からだとこころ」の相談機関としてスタートさせた。主な活動は、子ども・若物への性に関する情報提供、学校などへの出前性教育、
支援者のための性の学習会の開催などだ。

2020 年、これから活動するという時にコロナ禍に突入。活動に制限はあったが、途切れることなく継続していくことを大事にしたいと、仲間と頑張り、今年 3 年目を迎えることができた。

地域での小さな活動だが、様々な機関・職種の人達からの相談が増え、性の課題が身近であることを改めて考えさせられる。

援助職に就いている人達からの声のほとんどは、「私たち自身も、自分のからだについてちゃんと学んでこなかった」「性の問題について、どう支援していいかわからない」というもの。

性は特別なものではないと思う。むしろ日常的なこと。そのことが、普通に支援の中に含まれていないことに気がつく。

子ども・若者の「性と生」の情報発信の場として始まった保健室だが、援助者のための性教育の学びの場ともなっている。



学びは成長

そんな保健室に、定期的に通ってくる A さんがいる。彼は今 45 歳。出会いはもう 15 年程前になるだろうか。

ある人から、個人的に性教育を教えてあげてほしいとの依頼があった。当時彼は、小物を作成する作業所で働いていた。軽い知的障がいがあり、自立に向けて頑張っていた。

作業所の職員には、彼についての悩み事があった。若い女性職員への距離間の問題。そばに近寄り触れる、性的なことを口にするなど。私生活でも、例えばお風呂に入らない、排泄の課題もあった。彼の性への関心の高さに手を焼いていることが切々と伝わってきた。

とりあえず、数人の男性職員とともに、グループでの学習会を始めることにした。

男女のからだの違いから、大人の体に近づくと変化していく事柄など、丁寧に伝えた。まず自分のからだを清潔に大切に扱うこと。セルフプレジャーでの大切なことも伝えた。彼は自分の困りごとなど正直に話をしてくれ、それに答えるといった学習を数回したことを覚えている。

学習会にサポートとして参加していた若い男性職員が、「今まで学んだことがなかったことを知れてよかった！」と感想をもらした。A さん自身よりも、職員の研修にもなっていたことに、驚きとともに嬉しかったのを覚えている。

A さんへの性教育の学習は、職場での困りごとの末に実践されたことだが、気になっていたことがあった。彼の母親がそのことを快く思っていなかったことだ。「学習会は性への関心を益々増長させることになる。できれば、何も教えずにいてほしい」との申し出があった。職員と母親との関係や、彼が作業所に来れなくなることを考え、これといった説得する手立てもなく、
学習会は終了となった。

保健室開室が再会に…

施設での利用者の性の悩みに、どのように対応すべきか？という相談があった。その利用者の一人に A さんがいたのだ。

久しぶりの出会いだった。すっかり成人になった A さんの姿に感動。いやぁ、おっさんになっていたことにも…、年月の流れを思った。

彼は、15 年前の性教育の学習をしっかりと覚えていてくれた。あれから実家を離れ、今はグループホームに入所し、毎日仕事に出かけているそうだ。

障がいのある仲間でグループを作り、色々な活動をしている。そのーつが性教育を学ぶということ。グループの名前は、MMK サークル。意味は「**も**てて、**も**てて、**こ**まっちゃう」らしい。男性ばかりだが、性について正しく学び、素敵な恋をすることを目標にしているそうだ。そのサポート役として、「まちの保健室ちむちむ」が選ばれたのだった。

A さんは、毎月開催している「性と生」の学習会にも毎回参加している。まずは、自分がしっかり学ぶことで、人に伝えられると言う。MMK サークルでは、リーダーとして性教育の学習会の企画をし、司会もする。

あの時、色々な課題のあった A さん。実生活での悩みは？と尋ねると、自身の健康のこと。ビールもお菓子も大好き、なかなかセーブできないと愚痴る。いい出会いがないとも…。そして、親の健康と介護についても心配している。

保健室には、ヘルパー同伴でないと来れない。まだまだ自立するにはハードルが高い。しかし彼の将来の希望は、好きな彼女ができ結婚すること。彼の思いにより添い、何かいい道筋がないかを考えることが、私たちの役目だと思っている。



性は関係性

施設職員の相談に、施設内の恋愛禁止というのがある。なぜ？と問うてみると、もしもセックスしたら、妊娠したらということが心配とのこと。

ちょっと前まで、中学生の生徒手帳には、「不純異性交遊」禁止といった項目があった。中学校の生徒指導にも、カップルができるとすぐに妊娠を予想する傾向がある。それとよく似ていると思う。

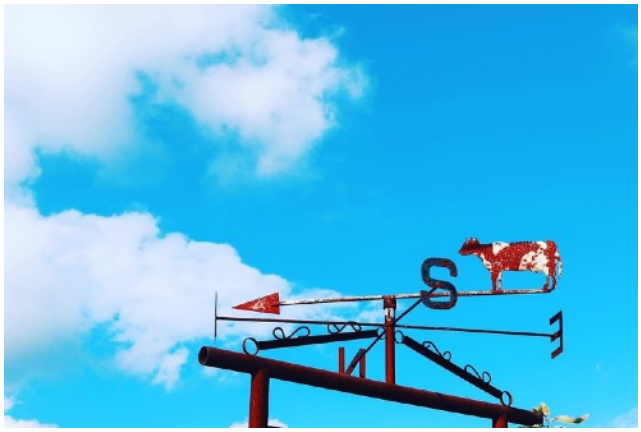
ちなみに A さんの職場、グループホームも恋愛禁止らしい。

誰にでも性的欲求はある。食欲と同じように、コントロールもできる。上手くコントロールするには、スキル学習が大切だ。

中学生にアンケートをとると、一番の悩みは、どうやって好きな人に告白するかだ。そして男女問わず、セックスなどより恋愛に興味があることがトップに！

援助者がイメージする性とのギャップを埋めることが課題だと思っている。

つづく



原田牧場 Note

page 13

酪農家がどんな風に搾乳をしているのか？それに対する牛さんの泌乳メカニズムを語ります。ある日の作業中、搾り残す牛が現れました。乳房にまだ張りがある状態なので触るとすぐにわかります。でもミルカーでいくら吸っても乳は出てきません。出ないならそれでいいんじゃないの？自然に出るだけで。と思われると思いますが、乳房炎という病気になってしまうのです。もう少し張りがなくなるまで搾りたいな、まさか病気かな？と顔を見ると、ゆったり反芻をし元気な様子です。残りはマッサージをしながら時間をかけて手搾りでなんとか出しました。以来、搾乳にものすごく時間のかかる牛になってしまいました。こんな牛は初めてです。なぜでしょう？　搾乳担当4人で「しぶ子チャレンジ」と名付け、案を出し合いながら試行錯誤することになりました。ちなみに「しぶい」とは業界用語でちょっとずつしか乳が出てこない、という意味です。動きが滑らかでない の意からきていますね。

文献によると、乳房の下部（乳頭槽）に貯まっている牛乳は全体の30%、あと70%は上部（乳腺葉）にあり、オキシトシンの分泌によって搾ることができる牛乳です。つまり分泌促進ホルモンが出なければほとんどの牛乳は搾れない→オキシトシンの効果は５分程度→迅速さが肝のタイムレース。さらに！オキシトシンを後退させるストレスホルモン＝アドレナリンが存在します。牛に不快な思いをさせると出にくい乳がますます出なくなってしまうのです。人間側の基本手順は、まず乳頭をお湯のシャワーで洗浄し汚れを浮かせ、専用のシャンプー水で下拭きしたあと、一頭一布きれいな布巾で水気がなくなるまで仕上げ拭き。

乳頭のマッサージを兼ね、拭く強さや時間（30秒くらいが理想、手早すぎてもだめ）が刺激となり大脳へ伝わるように、というイメージで作業します。
乳しぼりなのに大脳をへ向けて、って聞いてびっくりですよね？
届け、届け、と念を送る感じでやっております。

◎ベテランパートさんのチャレンジ…牛にとても優しい方でストレスは与えませんが、拭き方も優しくそよそよという感じ。時間をかけて丁寧にやってくれましたが、搾り残ってしまいました。乳頭への刺激不足？

◎社員ちゃんのチャレンジ…真面目でストレートな性格。しっかりめに真っ直ぐ拭き下ろす手法で念入りに拭いてくれました。平常心で乳頭4本をリズミカルにいったのが良かった気がします。搾り残さず搾乳時間も早めに終わりました！牛のみぞ知るポイントがある様子。相性も関係しているかも。

◎私のチャレンジ…布巾は牛肌温度に温めて、子牛が吸い付くようなイメージで拭きました。あまり強く擦ると足をバタバタさせるので程々で。搾り残さなかったのですが、搾乳時間が15分くらいかかってしまいました。途中オキシトシンが切れた頃、尻尾の付け根（気持ちいいポイント）を掻いてやると、少し出が復活したけれど、牛も早く餌場へ行きたくて、イラッとして出るアドレナリンとのせめぎ合いという感じでした。

◎牧場長のチャレンジ…機械仕事がメインで搾乳はあまりやらないので、牛もやや違和感を感じつつスタート。拭き方はトルネード（業界では推奨されている手法）で捻りながら拭きます。汚れが取れやすいのですが、ぎゅーっとされると嫌がる牛もいて、しぶ子も足バタバタ。結果、時間がかり搾り残しは乳房マッサージ（熟練の技）で出しました。いつもと違う雰囲気が大きく影響したかも。

相性について。牛も好き嫌いがあります。しぶ子の様子からすると…
・パートさん→優しい→ちょっとナメている
・社員ちゃん→フラット→かまわれすぎず、いい距離感
・私→話しかける、かまう→牛的にはちょっとうざい
・牧場長→男、いつもと違う→緊張感がある

相手によって変わる心理状態が、泌乳に影響しているのは間違いないです。他、舎内で放し飼いにしていると、強い牛との競争や、搾乳中に他の牛に小突かれた、新入りの牛が大声で鳴くので気が散る、などでアドレナリンが出ます。それをできるだけ回避しながら寄り添って搾ることが解決策という結論に至りました。
しぶ子のように神経質なのは特例で、ほとんどの牛はミルカーの機械音や乳頭マッサージで速やかに泌乳します。乳房の大きさに偏りがあって三本は搾り終わってるけど、一本だけ搾り遅れていて「これ、あとちょっと搾らせてな、すぐ終わらせるよ」って言いながら私が集中してしていると、牛も協力してくれ、いい緊張感の中、二人でゾーンに入っているような研ぎ澄まされた感覚になることもあります。これは美味しい牛乳が搾れているぞ、と嬉しくなるひとときです。人間本意の仕事の効率のため、牛を追い立てたり、怒ったり、驚かせたりして搾った牛乳と、味は全く違うと思います。

　最近、スタバへ行って、店員さんにお任せしておすすめのドリンクを作ってもらいました。アーモンドミルクのキャラメルマキアートが出てきました。牛乳とは違う風味がとても美味しかったです。脂質が少なく健康に良いとされる豆乳やオーツミルクなど植物性ミルクが店頭にたくさん並んでいますね。嗜好性、自分の体調に合わせた飲みものを選べる時代です。
様々な商品がある中、牛乳はどの飲み物とも違う、血の通った飲み物だと知っていただきたくて書きました。ニュースでも度々報道されているように酪農情勢は悪い時期を抜け出せていませんが、今日も牛たちと仲良く、とびきり美味しい牛乳を搾っています。



筆者　　原田　希

1973年　大阪府吹田市生まれ

2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年　北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫ともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

＜新連載＞

ザイコロジー

①

そだちと臨床研究会

川畑　隆

あらためてのご挨拶

「かけだ詩」３年間続いたんですって?!
頑張ったんですね
１回に８つずつだとして
全12回で100近くですからね
自分の書いたのを「詩」って言うのが
恥ずかしいから
「ちょっとした短文」なんて
ひとには言ってたんですって
でも「かけだ詩」ってタイトル
だったんですよね

それで底を突いたんでしょうか
どうもそれもあるらしいんですけど
“在庫”もまだあるし
書きたいこともまだあるし
ということらしいですよ
“在庫”ですかあ…

今度はふつうの文章も書くんですって
詩みたいなものの後にですか?
それって詩の説明するってことでしょうか??
だとしたらとっても恰好わるいんじゃあ??
屋上屋を架すって言うか
「いまのギャグ、ココが面白いんですけど」
みたいなもので…
でも書きたいんですって
まあ好きにさせときましょうか

いいわけ

「在庫」と呼べる何かをもとに書く…まずは高校生時代に書いた歌詞を材料にして、そこから 68 歳の頭に浮かぶことを書きはじめようと思います。「懐古」は高齢者の常でしょうが、「展開」のきっかけになるかもしれません。

高校生から社会人になってからのあいだに書いた歌詞は 60 ぐらいで、それらを眺めていたら、駄作だと思っていたものもそれはそれでちょっといいかもなと思えてきたりして…。

最初は「在庫が切れたからといって昔のものを持ち出すなんてやめとけ」…そんな声が自分の中で大きく聞こえていましたが、それもだんだん小さくなってきて、そのうち「人がどう思おうといいじゃない。だってワタシはサバサバしてるから…」と丸山礼さんが横に座っていました(NHK でやってたドラマのことです)。

往生際がわるい

講演やワークが終わった後に、「コレをうまく伝えられなかった」「大切なことがモレてた」と気がついて、どうしようかと思案することがあります。「終わったことだし、もういいか」とケリをつける気持ちと「やっぱり伝えないと…」と焦る気持ちの両方に引っ張られながら、どちらにも転び得るわけですが、私は後者の方に転ぶ場合が結構あるんです。もちろん受講者に後から連絡がつきやすい場合に限られますが。つまり「往生際がわるい」し、講演やワークの

主催者に手間をかけてしまうことになります。でも性分だからしょうがありません。

その性分ですが、「往生際がわるい」部分はあるでしょうが、それで伝えたいことを伝えられるし、助かる人もいるかもしれません。人は100か0かではなく同時に２つ以上のことを考えているものだというのと同じように、意味や価値も同時に２つ以上が相乗りしていると考えると、「往生際がわるい」という大きな声だけに負けて、他の意味や価値を捨ててしまうのはもったいないと思います。ですから、「往生際がわるい川畑」でもいいんです。

…そんなわけで、まずは高校生時代に戻ります。

はじめての歌詞

中３の頃に、家にあったギターを触りだしたように思います。吉田拓郎の夜のラジオを聴いていましたし、高校に入ると自由国民社の『新譜ジャーナル』を毎号買って泉谷しげるの『白雪姫の毒リンゴ』なんかもよく歌ってました。高田渡の「三条へいかなくちゃ…」っていう『珈琲ブルース』や、浅川マキの『赤い橋』『カモメ』なんかも好きでした。一方でモスグリーンフォークといわれた森山良子の歌も好きで、ブラザースフォーのレコードも小遣いで買ったりしていました。高１のときに友だちとはじめてコンサートに行きました。会場は住んでいた北九州の小倉の隣の八幡の体育館でしたが、吉田拓郎、赤い鳥、五つの赤い風船、ジローズを目の前で聴きました。吉田拓郎の『花嫁になる君に』のギターが格好よかった…。

『かぜをなおして』は高１の頃だと思います。たぶん初めて書いた歌詞です。曲をつけて一人でこっそり歌ってました。具体的な「君」はいませんでした。空席が目にとまって妄想をたくましくしたのでしょう。

かぜをなおして

僕はいま君のこと考えてる
ぽっかり空いた席を見つめながら
僕はいま落書きしてる
机の隅にかわいい人の名を

君はいま何を思ってるだろう
ふとんの中で天井を見つめながら
君はいまどんな顔してるんだろう
つまんなくてふくれているかしら

なんだか寂しい君のいない今日
はやくかぜをなおして僕のために

君と僕気の合う二人
太陽の下をぺちゃくちゃ喋りながら
君と僕手をつなぎ歩こう
元気になったら　ね　きっと

また朝が来た

また朝が来た　学校へ行かにゃならぬ
仲のいいふとんに別れを告げる
また朝が来た

さあさ出かけるよ　まだ薄暗い外
何だか知らない何かに期待をもって
さあさ出かけるよ

僕はバスを待つ
しかしながらなかなか来ない
イライラしてくる　西鉄のバカ
僕はバスを待つ

電車が通り過ぎる　くもった窓の中に
ぎゅうぎゅう詰めの男と女
電車が通り過ぎる

僕は歩き出す　バスをあきらめて
時計を覗き込む　時間がない
僕は走り出す

毎朝の繰り返し　こうなるから仕方がない
時計を覗き込む　時間がない
僕は走り出す

犬

犬が寝ていました
朝の光を浴びてました
体を地面にピッタリ
顔も寝そべってました

いつもは起きてるのですが
今日はじめて見ました
そのおだやかな寝顔は
私をほんわかさせました

たぶん子犬だったのでしょう
お父さんのまわりを
クンクンとうろついていましたが
やっぱり横に転がりました

オートバイが近づいてきます
ここまで来ないでください
どうか起こさないでね
夢を見させてあげましょう

私は昔
ドルという犬に噛まれたことがあります
だから今でも怖い
そんな気持ちもあるのですが

でもやさしいですね
かわいいですね
憎めない顔をして
精一杯のんびりしてました

私は時計を覗き込み
カバンを抱え走り出しました
汗がにじんできました
もう犬は見えませんでした

あの寝顔が浮かんできました
あと三分しかありません
あの寝顔がムニャムニャ言いました
おまえはいいねって言ってやりました

小倉高校

高校の通学が思い出されます。福岡県立小倉高校。自宅の最寄りのバス停まで 10 分くらい歩いて「小倉高校下(?)」までバスで 15 分。バスに遅れたときは裏道をひた走り。夏は汗びっしょりで、でも着替えはもっていませんから素肌密着自然乾燥にまかせていたんだと思います。『また朝が来た』に電車が出てくるんですが、バス停からは当時の国鉄の電車は見えなかったはずです。これは路面電車が走っていたということなんでしょうか。でも走ってたかなあ？わかりません。『犬』はバスに乗れなかったときの裏道でのことです。覚えてはいませんが、「白い犬」だったと目の記憶が決め込んでいます。

中学ではバレーボール部(まだ 9 人制で、私は中衛の右でした)のキャプテンで、成績もよいほうだったので、まあ自己肯定感も保っていたように思います。兄二人が通った進学校の小倉

高校は安全圏ではありませんでしたが、受かってホッとしたのを覚えています。ところが、高1の最初の定期考査の成績は460人中300番台後半…。結局、私の出た中学校は成績レベルが低かったのです。そのこともあってバレーボール部には入らず、というか入る勇気がなかっただけですが、かといって勉強に打ち込むわけでもなく、中途半端な高校3年間でした。でも、同じように成績のふるわない友だちがギターの名手で、土曜日になったら家人がどなたも不在の彼の家に行って自作の歌を披露したりしていました。その縁で高3の文化祭では舞台上で「みんなで歌おう」の伴奏バンドのサイドギターとボーカルを担当しました。それが高校生活のただひとつの私の「ハナ」だったように思います。ただ、私のボーカルは生徒会役員のマイクを通した大音量の歌声にかき消されてしまいました。

電話

今日はいるだろうと期待したのだが
やっぱりちがった声がした
いないのは朝も昼も　そして夜に電話
やっと安堵の声がした
一回ですんなりいかなくて
夜を待ったのだが
何かしら大げさになったなあ
ためらいはある
前から言おうと気はあせってはいて
今から言うから　聴いていてくれよね
僕は君を感じよく思っていて
自然に話したい　いろんなふうにね
しかし妙に意識してしまう　この頃は
やっぱり気楽に話したい　笑いながらね
あらたまって言うのは
おかしいかもしれないけど
これからも僕の友だちでいてほしいのさ
電話が大切だと思ったから
ちょっとかけてみただけで
べつにどうでもいいとも思えるんだけど
聴いてほしかっただけさ
日は暮れ　公衆電話の風は冷たいけれど
何かホッとした嬉しさはかくせない
一日がかりの今日の僕の電話

バス停

『また朝が来た』でバス停が出てきたので、『電話』を切り離せなくなってしまいました。

高校生になって、小学校の同級生の女の子とバス停で時々顔を合わせることがありました。その子は中学から私立に通っていて、バス停は一緒でも乗るバスは別でした。時々顔を合わせると今日は会うかなどうかなと予想しますし、そのうちそれが期待に代わります。特別に大きく好意を抱いていたわけではありませんでしたが、気になる存在でした。

バス停では一言二言かわすぐらいで、それ以上の交流はありませんでしたが、もうちょっとくっつきたい気持ちになったのだと思います。電話をかけて映画にでも誘ってみるかと決心して、電話した記憶があります。歌詞のとおり、そんな時はなかなかつながらないもので、やっと話せたときには結構疲れがたまってたんじゃないでしょうか。「僕の友だちで…」なんて“安全パイ”みたいな台詞をホントに言ったかどうかは覚えていないし、映画に誘っただけかどうかも不明です。でも、この記憶はたしかだと思うんですが、映画には行きませんでした。ということはどのレベルでかはわかりませんが、交渉不成立だったのです。次の日からバス停でどうだったかも、これまた覚えていません。

ここには載せませんが『デート』という歌詞もあって、それもその子をイメージして書いたものです。デートはしなかったわけで、でもよ

っぽどしたかったのだと思います。ただ恋焦がれて失恋というわけでもなかったので、「恋愛ごっこをやってみたかった」ということなのでしょう。

今さらの見栄

なんかずっと「軽い」高校生を描いたようで、昔のことであっても自分で自分を弁護したくなってきました、青臭い灰色の歌詞は5㎎ほどでも「重たい」でしょうか。

あれから二年たったんだ

あれから二年たったんだ
一緒に勉強した友だちがそれぞれ自分の
　道を決め　それぞれ違った夢を見る
別れても道で会ったら声をかけようと
　言い交わした　それなのに
知らん顔して通り過ぎてく奴がいる
人は離れてく　人は離れてく
その虚しさに　僕は冷たい風を感じる

あれから二年たったんだ
心を惹かれた女の子が途中で学校を
　やめて　化粧してスナックで働く
事情があって苦しんで人が変わった
　みたいだという　一度会って話したい
でももう話が合わないだろう
人は離れてく　人は離れてく
その虚しさに　僕はふと空を見上げる

あれから二年たったんだ
とても親しかった一人の友がこれだと自分の
　道を決め　一人で離れた土地へゆく
よく話した気のおけない間柄だった
それなのに　今はたやすく会えなくて
　話すこともできない
人は離れてく　人は離れてく
その虚しさに　僕は昔のアルバムをめくる

人はみんな自分から離れてゆく
自分の知らない世界に入り込んでゆく
その恐ろしさに　その寂しさに
僕は人間の孤独を思う

どうしてこんなに悲しいんだろう

『あれから二年たったんだ』はそのタイトルからして高二か三の頃に書いたんだと思いますが、当時、一番好きでよく我鳴ってたのは、吉田拓郎の「どうしてこんなに悲しいんだろう」だったように思います。♪悲しいだろう／みんなおなじさ／おんなじ夜を迎えてる／雨の中を一人歩けば／生きてることさえむなしいよ／これが自由というものかしら／自由になると寂しいのかい／やっと一人になれたからって／涙が出たんじゃ困るのさ／やっぱり僕は人にもまれて／みんなの中で生きるのさ♪…いま何も見ずにこの一番の歌詞を書いたのですが、覚えてますね。そして、『あれから二年たったんだ』は、きっと吉田拓郎のこの歌のような歌を作りたくて作ったんだと確信しました。高二の私が「人生ってむなしいね」としかめ顔・したり顔で一人うなずい♪てる自分が見える♪…『たどり着いたらいつも雨降り』になってしまいました（意味不明だったらごめんなさい）。

ところで、『あれから二年たったんだ』の２フレーズ目ですが、かつて“心を惹かれた女の子”について書いた“在庫”があるんです。サンヨーのワープロ専用機のフロッピーディスクに入ってるんですが、ディスクはあっても機械がありません。ザイコロジー②までにどうにかしなければなりません。

2023.04

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たち－

「男性の育児休業」

13

たまむら　ふみ

玉村　文



はじめに－パパの育休－

我が家は 4 歳と 2 歳の 2 人の子ども達がいる共働きの世帯です。母親であるわたしはどちらも産後に育児休業を取得し、それぞれ約 1 年間ずつ産休育休を取得し仕事から離れていました。夫はというと、どちらのときも育休は取得せず、平日は仕事と家庭生活を両立させていました。

日本の育児休業の制度は諸外国と比較して充実していると言われます。一方で、男性の育児休業の取得率の低さは課題としてありました。そのため、育児・介護休業法が改正され、2022 年 4 月から施行されました。その大きな要点は、男性の育児休業取得促進です。今回は、男性の育児休業について考えてみます。

１．里帰り出産

里帰り出産とは、出産前から出産後の一定期間を、実家に帰って近くの産院等で出産することをいいます。日本では「初めての出産イコール里帰り出産」をイメージすることが多いかもしれません。他の国の事情に詳しいわけではありませんが、女性がメインで育児を担うことが多い、育児や介護等ケアは家族が担うという「伝統的な考え」が根付いていた日本の特徴的な営みだろうとは思います。

実際には、里帰り出産を選択した人は全体の半分ほどだそうです。それも年々減少傾向にあるようです。例えば、コロナ禍以前の平成 29 年「子ども・子育て支援推進調査研究」の「妊産婦に対するメンタルヘルスケアのための保健医療の連携体制に関する調査研究報告書」では、出産にあたって「里帰りをした」と答えた人は、50.1%、「しなかった」と答えた人は 48.8%でした。また、株式会社ベネッセホールディングスが 2020 年に実施した「たまひよ妊娠・出産白書 2021」によると、里帰り出産をしたと回答した人は全体で 56.8%、新型コロナウィルスの感染影響で里帰り出産を中止した方も数%いるものの、里帰り出産をしていない方もいることがわかります。

里帰り出産をしない場合、産後の産褥期（母体が回復するまでの期間）に誰がサポートするのでしょう。そのサポート役割としてはまずパートナーが第一に思い浮かびます。国や地方自治体のサービスを活用するケースもありますが、24 時間体制の子育てでは、母親が一人で担うには限界があります。そこで男性の育休の取得が促進されることとなりました。

２．男性の育休

厚生労働省の実施した「令和 3 年度雇用均等基本調査」によると、令和 3 年度の育児休業取得率は、女性が 85.1%であるのに対して男性は 13.97%でした。前年の令和 2 年の調査では、12.65%、その前の令和 1 年度は 7.48%でしたので、取得率は年々上昇しているとはいえます。取得率だけではなく、取得期間も確認が必要です。個人差はあるものの産後に母体が回復するまでの期間として 1 ヶ月程度安静にして過ごす必要があると言われます。その間、パートナーがメインで家事育児を担えるほど、育休取得期間はあるのでしょうか。令和 2 年度の「雇用均等基本調査」によると、育休を取得した

男性のうち、育休期間が 5 日未満の割合は 28.33%だったようです。まだまだ取得率も取得期間も課題だと思います。

一方で、育休にこだわらずとも仕事を調整したり、年休や特別休暇制度を活用しても良いのです。男性が家事育児を行える時間や期間が確保されていることが重要です。母体の回復というだけではなく、子どもと父親の愛着形成にも役立つことだと思います。

我が家の父親でありわたしの夫は、育休は取得しませんでしたが、2 人目が生まれ入院中は、仕事を調整し上の子の世話と家事を担い、在宅ワークをメインにし残業はせず、産後も家事育児を担おうと調整をしていました。2 人目のときはコロナ禍ということもあって、在宅ワークが推進されたことも後押しになりました。在宅ワークだと通勤時間が必要ないため、保育園の送り迎えもできます。子ども達は父親と朝ごはんを食べ、夜ご飯を食べ、一緒にお風呂に入る 1 年を過ごすことができました。

3．パパの育休ケース

2023 年になり、わたしの周囲では育休を取得する男性たちの姿が見られるようになってきました。同僚達は 1 ヶ月から 3 ヶ月ほど取得していました。その他にもママ友のご家庭から、パートナーが 1 ヶ月の育休を会社で初めて取得したという話を聞きました。法改正が後押しとなっていることは間違いないようです。

里帰り出産の場合、母親が産後すぐに育児がスタートするのに対して、パートナーは親になる時期が遅れてしまうという問題があります。母親は産院で母親としての指導を受けたり、産後からノンストップの育児がスタートする一方、里帰りからパートナーのいる自宅に戻ってくるまでの間にタイムラグがあるからです。親になるには学習も必要ですし、赤ちゃんと一緒に過ごす経験も必要です。里帰り出産の場合、どうしてもパートナーである男性は父親になる時期が遅れてしまいます。もちろん、母親にとって、里帰り出産をするメリットはあるでしょう。そのメリットを上回るくらい男性の育取得期間とケアの質と量が求められます。2023 年にわたしの周囲で複数の男性が育休を取得したケースでは、里帰り出産を選択された方はいませんでした。

おわりに

まだまだ取得率や期間が短いという課題があるとはいえ、身近になってきた男性の育休。

これからのスタンダードになっていく期待も込めて、わたしは応援していきたいなと思っています。これまでは、家事育児をあまりしない（できない）父親への不満話がママ友ネットワークの共通話題になっていたようなところがありました。しかしながら、現代の父親は仕事も子育てもすることがスタンダードになっていくのだろうと思います。その場合、ママ友グループでの共通するパパ話ってどんなものになるのでしょう。パパもママもよくやっているよね、という褒め合いが共有できるようになるのでしょうか。それとも新たな論争が生まれるのでしょうか。

HITOKOMART No.12

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

スマホの光

今どき蛍の光や窓の雪あかりで本を読む人はいないだろう。いざという時にはスマホが強い味方である。

しかしこの光がいささか興ざめとなることもあり、迷惑に感じる事も多い。

蛍はキレイな水辺での夏のごく短い期間の楽しみだが、スマホの光は季節を問わず、夜の街中を動き回っている。

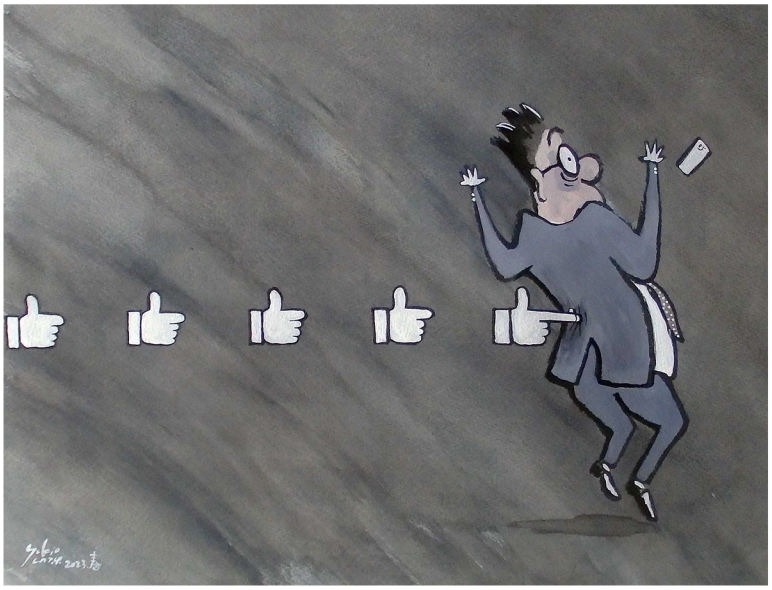




日本の夏はスイカと花火である。
スイカは新しいフルーツやジェラートに押されて目立たなくなったが、花火は全国各地で観光の目玉イベントになっている。
しかし人ゴミの嫌いな僕にはあまり興味が湧かない。

人を集める

控え目に自宅の庭先で子供たちとやったファミリー花火レベルが良い。そして線香花火が一番だ。
線香花火に人生を語る人も多いのはその燃え方の妙である。暗闇の中で火花が『人』の字に見える事がある。



変　異

SNS上で使われる「👍」の数には特にこだわっているわけではないが、してもらうとそれはそれで嬉しいものである。
会った事もない不特定多数の人からの『いいね』は自分への支持だと思ってその数を自分のエネルギーに変える人も多い事だろう。
しかしこれがふとしたことから突然逆転し、攻撃の対象と変わる危険性も多分にはらんでいるのだ。
ネット民の価値観、考え方はとても移り気で不安定なものだから。



好奇心

幼い頃、親にしかられると「サーカスに売ってしまうで！」とよく言われたものだ。
だから団塊世代の子ども時代はサーカス団にはそういう身の上の子どもたちがたくさんいて、辛い環境の中で苦しい訓練を受けているのだという風に思い込んでいた。
そんな幼少期の刷り込みからか今でもサーカスに対するイメージは何となくミステリアスな一般世間とはちょっとちがう特殊な空間と感じてしまうところがある。
だから今もあのサーカスのテントには、子どもの頃に抱いていた好奇心や恐怖感とともに、謎めいた空気感を連想してしまう。



バランス石頭

「ロックバランシング」と言うのだそうだ。
自然の中に転がっている石をバランス良く積み重ねて見せるアート作品のスタイルである。
普通に考えたらとても積み重ねることは無理だと思われる石が小さな接点だけで絶妙のバランスで積みあげられている情景は、まさにアートとしての美しさがある。
オリンピックの種目に加えられることになったブレイクダンスの最後の決めポーズとちょっとイメージが重なって見えた。



Wi-Fi

7年ほど前にニューヨークを一人でうろうろした事がある。小さな地図を持ってはいたがWi-Fiが完備されていたのでスマホの地図アプリを活用した。スマホの画面をチェックしながら中心街からかなり離れたエリアに入り込んで歩いていたのだが突如道が分からなくなってしまった。

スマホの画面が全く変わっていない事に気がついた。どこかでWi-Fiの接続が切れてしまっていたのだ。こうなると全く知らない街で右も左も分からない、おまけに日本語は通じない。

稚拙な英語力でどうすれば良いのかうろたえてしまった経験がある。

最終的に行き着いた地下鉄の駅から路線図を確認してホテルまで戻って来る事ができたのだが冷や汗をかいた。

京都の街中を歩いていると殆どの外国人観光客はスマホ片手に街を闊歩している。

昔は車の中に道路地図町はいつも入れていて、初めての道を走った後は必ず道路地図で道を確認して道を記憶するようにしていたが、その習慣は無くなった。

確実に地図スキルは衰えているように思われる。



地下鉄・扁桃 線

トンネルを抜けるとそこにはいつも新しい景色がある。川端康成の『雪国』の語りとは異なるが、走る電車の先頭車両の正面に立って流れてゆく線路の先を眺めるのはいつの時代も子供にとっては電車の楽しみの一つである。

電車が暗闇の中に突入後、はるか先に見える小さな明かりの点が次第に大きくなって近づいて来るのを、ガラス窓に顔をくっ付けて見ながら、運転手気分に浸っていたものである。

そんな時はガラス窓に写る自分の顔の真ん中に、明るい出口がいつも見えていてそれは希望に向かって走る銀河鉄道にも似た高揚感があった。

川下の風景⑩
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【対話】

先日、北海道医療大学 福祉マネジメント学科の鈴木 和先生とオンラインを通じて対談させて頂く機会を得た。本学科では、向谷地先生を中心に“対話実践”を多く取り込んでいる。

以前にも増して、この“対話”というフレーズを見聞きするようになった。ネット社会、Z 世代、社会の分断化、一方の多様性尊重というキーワード。コロナ禍も相まって、世の中のコミュニケーションの仕組みを見直す動きもあるだろう。そして、“対話”の流行はビジネスの世界でも多く語られるようになる。パンデミックや紛争、経済冷戦時代が深刻化するなかで、食いつぶされた資本主義社会の行きつく先が見えない。そして、日本においては人口減少、つまりマーケットの拡大限界と縮小、生産年齢人口減少に伴う労働力不足。それはいち労働者の生産性向上という業務効率化というシステム変容と共に、個人や組織のコミュニケーションの流れを見直す動きになっている。こうした急激な“対話”尊重路線や組織の心理的安全性など、流行用語のように語られると何とも白々しく思える。それは、経営手段として“対話”を語る経営陣と、目的として“対話”を求められる社員の認識の溝の深さを思う。

結局、見下したような関係性の中で“対話”を語ること自体が対等ではない。役職、資格、地位、名誉、そこから下りて、膝を突き合わせて語る覚悟は簡単ではない、と資格者である私自身は思う。それは自己開示でもあり、その上での他者受容である。インプットとアウトプットを増やすことで、コミュニケーションの流れを循環させる。冒頭の鈴木先生はそれを体現して学生との“対話”を重ねて行こうとする試みが面白い。構内はサンダル履きであるとか、トレードマークの眼鏡だとか、ちょっと茶髪にしてみるだとか。自己と他者の折り合いをつけるコミュニケーション。

コロナ禍の折、鈴木先生を招いて『ケアマネさんと語ろう会』と銘打った、ケアマネジャーを対象にした“対話”の機会をオンラインで設けることがあった。残念ながら数回行っただけで、その後の継続は無かった。会の目的を十分に周知できなかったことも要因だが、同じケアマネジャーである私から見れば地位と資格を持つ者が、如何に自分を語る作業に慣れていないかという課題も見えた。支援とか、多様性とか、持続可能な社会だとか、結局は多数派からみた視点でしか語らないのは、自身が不可侵の安全領域からはみ出すことを拒絶しているからだろう。

【認知症の理解】

93 歳になる母は物忘れが著しい。さっき食べた物を忘れる。食べてないから早くご飯をくれ、という自身の要求も忘れる。その時、その時の物語を自身で紡ぎ、時に怒り、時に泣き、時に笑って、一日の大半はこくりこくりと居眠りながら 90 を過ぎた晩年を暮らしている。傍から見れば愛嬌のある暮らしだと思うが、当の同居している家族には我慢ならぬことも多いようだ。毎朝の日課になっているデイサービスに行く行かないの押し問答。前日の夜に母が了解していても、朝が来ると急にお腹が痛い、と言い出す始末。「ほら、お迎え来たよ！」「早く行ってよ！」「行けば楽しいから」遠い昔、学校に行くのが嫌で親子で押し問答をした縮図が、今は 90 代の母と 70 代の子の間で繰り広げられ

る。学校もデイサービスも行ってしまえば意外に楽しいと言って帰ってくることも多いが、高齢の母はその記憶を留めておけないのだから、毎回家族を一喜一憂させ、イライラとストレスの鬱積を導いている。そんな多くの家族が抱える介護負担の背景も理解できるが、負担が大きくなればサービスの追加や、いずれ“だまし討ち”みたいな変化球で勝負する羽目にもなり、それはそれで苦労が絶えない。認知症高齢者の在宅介護はこのような構図で悪循環を引き起こし、多かれ少なかれ認知症の親を否定的に捉える傾向が強くなる。高齢の母の独自の世界に介入して説得するのは困難だ。結局、支援の矛先は介護者家族の「認知症の理解」に結びつく。しかし、単なる知識としての「理解」の教授がすべてではないだろう。

第一に、歳を重ねることで変化するシステムの視点。要介護者が高齢化することで、介護者家族も高齢化していく。平均寿命が延伸するなかで、2040 年まではこの構図は加速する。歳を重ねるということは心身共に機能低下を負うことでもあり、心身機能の低下は活動性や意欲にも影響を及ぼす。そして、次第に社会環境との接点も少なくなり、要介護者を取り巻く家族システムは閉鎖的になりがちで、次第にインプットとアウトプットの機会が少なくなり、より閉鎖的なシステムと境界内での悪循環に拍車をかける。

第二に、病気や障害、介護の辛さや喜びなどに関する言語化による外在化。インプットとアウトプットが少なくなることで閉鎖的悪循環となり、それでは介護者家族自身も語るべき対象を見つけられない。結局は「認知症の母」というように否定的な存在は内在化される。むしろ介護者家族は、病気や症状の「理解」というよりは、「病気」や「症状」について語ることから始める必要がある。

【地域の理解】

同じような構図は、マクロなシステムでも見られる。認知症を患い、記憶力の低下が著しい独居の女性。身体能力は高く、昼夜問わず地域社会をふらふらと渡り歩き、あっちの花を摘んでは持ち帰り、あっちの人が気に入らなければ怒ってみたり、家の中が汚れるのが嫌なら外にゴミを投げ捨ててみたり、周囲からすればその行為の理解は難しい。しかし、余程の都市部でない限り、地域もまた平等に老いていく。老若男女が上手く循環する地域社会では、子どもの声も許容できるのかも知れないが、老いた地域社会は意外に他者の許容範囲が狭くなり閉鎖的悪循環に陥る。「あの人がやった」「あの人が悪い」の犯人捜しは地域社会からの排除を押し進めるが、仮に誰かが排除されても、システムはいずれ別の対象にフォーカスしていく。

【対話という理解】

こういった閉鎖的システムに対しては、如何にインプットとアウトプットの循環を作り出すか、という点に着目する。それは単に情報や知識の教授ではなく、まずはアウトプットの糸口を見出していく。その方法論が“対話”であり、それ自体が目的でもない。あくまでも目的はシステム内外の循環であり、それによって介護する側も、介護を受ける側も悪循環からの変化に期待できる。多くのことを無理に聞き出すとか、無理に語る必要はない。辛いことを「辛い」と言い、嬉しいことは「嬉しいね」と言える自己開示と他者受容。変化はそんな始まりで良い。

2023.5.25　米津達也

幾度となく会い、語り合うことの意味

～チーム医療とナラティブ～

本間　毅

ワークショップの参加者

- 主催者（遠見書房）
  司会 A 介さん
  アシスタント B 介さん
  アシスタント C 介さん
- 発言者
  K 原さん（心理職）
  K 野さん
  M 田さん
  M さん（事務職・SW）
  I 井さん（心理職・教員）
  非病院勤務さん
- 他の参加者の皆さん
- プレゼンテーションと対話
  本間　毅（医師・退院支援研究会）

謝辞

「第 11 回ナラティヴ・コロキウム」で私が担当したワークショップは、前半の 70 分を「チーム医療とナラティブ」と題する私のプレゼンテーション、後半 50 分は架空の事例を取り上げたグループワークに続き、A・B・C 介さんと 6 名の参加者ならびに私で対話をしました。

事前に、ワークショップの内容を倫理的配慮に基づいてテキスト化したものを、他の講演や論文等に活用したい旨を参加者に説明し、参加者全員から同意を得ています。有償の講演ですが、商業的利益相反はありません。括弧内の註は専門用語などの理解を深めるための私見で、ワークショップ後に寄せられたアンケートの回答の要旨の全文責も私にあります。

ナラティブの力を得て、チーム医療が医師の持つ権力のくびきから抜け出し、チームの構成員それぞれの主体が、真の統合を目指して変容しつつあることが垣間見えれば私の作戦は成功です。この場を借りて主催者と参加者の皆様に感謝いたします。

はじめに

司会 A 介さん

皆さんこんばんは。遠見書房の A 介です。第 11 回ナラティヴ・コロキウムの 2 日目となります。本日は、本間毅さんによる WS②、「チーム医療とナラティブ」です。本間さんは新潟県生まれで杏林大学医学部卒、整形外科医・リハビリテーション医、そして対人援助学会の理事、退院支援研究会の代表です。現在は新潟県の病院に勤務し、患者と家族の生きざまを感じ、みんなにとって幸せな退院支援を行うことを考え、日々臨床をされています。趣味はベンチプレス、アイロンがけ、料理、お茶目なところがある先生です。本間先生、よろしくお願いします。

本間

はい本間です。宜しくお願いします。

チーム医療にもいろいろありますが、共通して大事だろうと思われる「病状説明」、「カンファレンス」、「退院支援」を中心にお話しします。

司会のA介さんからご紹介いただきましたが、私はバブル経済が始まる直前の昭和59年に社会人になりました。現在は、地元の病院の地域包括ケア病棟（2014年にスタートした「回復期関連病棟」のひとつ。急性期病棟で対応するまでではないサブアキュート、急性期治療を終えたポストアキュート、在宅復帰支援が必要な患者さんが対象）という、入院期間を2か月前後に設定した病棟で勤務しています。

私は現在、関西に本拠地がある対人援助学会の常任理事をしていますが、令和4年11月に「新潟水俣病と私たち」をテーマに第14回年次大会を新潟で主宰しました。また、2021年春に『患者と医療者の退院支援実践ノート』を遠見書房から刊行しましたが、本屋さんでお買い求めになりたい方は、「看護コーナー」に向かって下さい。何故かと言いますと、我が国における退院支援のトップランナーは、もともとは看護師さんの宇都宮宏子さんだからです。宇都宮さんは、現在も全国行脚をしながら、各地で素晴らしいグループワークを行い、退院支援で重要な役割を担う中堅の看護師さんたちを勇気づけ、研究と実践を両立されています。その宇都宮さんの最近のキーワードは、退院支援を一歩進め、「地域へつなぐ、その方の人生を再構築する」と伺っています。

次に、2017年春に発足した私ども退院支援研究会について説明します。患者さん家族が不安なく退院を迎える。これは当たり前ですが、支援者が疲弊しないように、「支援職ができて嬉しい、もっといろいろ勉強したい」と、やりがいを感じながら成長できるように支援することも研究会発足の目的です。

研究会の活動ですが、コロナ禍以前は事例検討会（https://tsk2017.com/ お知らせ欄）を定期的に開催していました。ただコロナ禍の前から、私には検討会が制度を適用するためのケース・マネージメントのお手本と言うか、システム化してはいけないという問題意識がありました。退院支援を適切なタイミングで、取りこぼしなく行うことは大切だが、システム化してよいのかということは、今でも私にとって根源的な悩みです。あと、今回のような講演だけでなく、整形外科やリハビリテーションの学会で研究発表をしてきました。しかし、退院支援に関する演題は、不採用やその他のセッションの最終日の発表になることが多くて、少しやる気がなくなっています。最近は、対人援助学会で、異分野の方たちと研究する機会が増えています。学会HP（https://www.humanservices.jp/）のWeb誌.「対人援助学マガジン」と、地域連携関連の学術誌に、過去数年間、連載執筆をしてきました。地域連携の学術誌では、私には退院支援を「診療報酬を見据え、効率よく病床を運営するシステム」として捉えている方や施設が多いような印象を受けました。

退院支援研究会の2018年度年次大会で、医療系のナラティブ研究者で知らな

い人はいない、立命館大学総合心理学部の齋藤清二教授に特別講演をお願いしました。その時のテーマが「医療における多職種協働と物語能力」で、斎藤教授は、チーム医療の現場で物語能力が求められる理由として、今回のワークショップの内容とも関連しますが、超高齢化社会では、診断が確定したら治療をして軽快・治癒に至ると単純に考えにくい慢性疾患や難病が減らない、ロコモ（運動器の障害による移動機能低下）やフレイル（加齢により心身が衰えた状態）と呼ばれるようになった老化を病気として捉えるようになった、心理・社会的因子の影響と、死に逝く人や家族への支援の在り方などについて考える機会が増えたからと述べられていました。さらに、個々の患者の経験に関心を寄せ、患者のナラティブを尊重するところから医療の構造を組み立て直さなければならないと、斎藤教授は強調されていました。また、当事者の「病いの物語」に配慮・注意し、吸収・解釈して尊重する、支援者は受け取った物語の意味や価値を想像し、共有された物語に心動かされて新しい関係に参入する「ナラティブ・コンピテンス」[1]が求められていると言われていました。

それでは、チーム医療における病状説明の問題から考えてみましょう。

病状説明

入院生活を患者さん目線で考えると、入院中は医療者が生活全般を統括し、患者さんは侵犯体験（個人情報のやり取り、検査や治療 etc.）さえ自分の意思で決定できません。そして、医療者にとって科学的な根拠と職業的な善意に基づく行為でも、患者さんとの関係は有無を言わせぬものになる可能性があります。医療者はクライエントへの強制の許容範囲を、社会通念とは別次元で設定できる権限を委ねられていると認識すべきです。

気が付いた方もいると思いますが、ここまでを、私は M.フーコーの『監獄の誕生』[2]風に述べてみました。太古、囚人や犯罪者は、見せしめの意味も込め残酷な身体的刑罰を受けていたが、18 世紀末以降、徐々に精神的な刑罰を科せられるようになった。そして、功利主義者 J.ベンサムが考案したと言われる、「監視されているかもしれない」と言う人間の心理を利用した全方向から囚人を監視するシステム panopticon（すべてを見る、という意味）、映画などで中央のタワーに銃を持った看守がいて、囚人はその周囲を取り巻くように獄坊に収監されている状況のことです。その監視システム panopticon の歴史に始まり、時間とともにその考え方が孤児院や感化院、学校、軍隊から病院に及ぶようになったというのが M.フーコーの主張です。J.ベンサムは、最大多数の最大幸福を願う人道的な観点から、「犯罪者を恒常的な監視下におけば、彼らに生産的労働習慣を身につけさせられる」と考えたそうです。

患者さんの中には、冗談交じりに「入院は監獄みたいだ」と言われる方がいます。患者さんのドイツ語はクランケ kranke ではなく、最近ではパチエント patient が多く使われ、英語でもペーシエント patient です。いずれにしても、「忍耐強く我慢する」という意味があ

り、病気や怪我という重大な問題を抱えながら耐え忍ぶ人やその家族に、我々は大いに敬意を払うべきだと思います。

病状説明の場面で、患者さんや家族に「ご質問は？」と問いかけても、「お願いします」という言葉が先に口をついて出てくるものだと思った方がよいでしょう。つまり患者さん側から医師に確認や質問をし難いのは当たり前なのです。だからこそ、医師の説明の後、フォローしてくれる看護師や相談員の存在そのものが重要になります。

心理学者の皆藤は、「患者は人格的な癒し、即ち医療チームが患者に向き合い、人間的な対話が成立することを願っている」[3)]と述べています。またユング派の神話心理学者、グッケンビュール・クレイグは、「医療者は健康で病むところがないふりをせず、自分の中にある（『治療者元型』と対をなす）『患者元型』を意識することで、患者側の『治療者元型』が引き出され、より良い治療者・患者関係ができる」[4)]と言いました。「元型（archetype）」とは、我々が言葉にしたり、具体的にイメージしたりすることが出来ない、心の奥底にあり我々を突き動かすようなもので、女性性・魂アニマ anima や、いたずらの如く予期せぬ言動で事態に変化をもたらすトリックスターtrickster などがあります。また、この議論に関連する「傷ついた治療者・癒し人」という概念があります。これについて詳細を述べることは致しませんが、例えば医療者の自己開示で、思った以上にクライエントの共感を得られることがあります。（本文中の「クライエント」は患者さんと家族やそれに近い人を意味します）

私くらいの年齢になりますと、医師自身が病気をしたり、家族の病気や介護、あるいは看取りを経験したりすることが珍しくなく、それをクライエントに伝えると、お互いの大変さが分かり合えることがあります。でも、病気に詳しいからといって、医師がクライエントの周辺事情を知りもせず、自分の経験の方が大変だなどと、自慢するようなことは慎まなければなりません。部活動で体罰をするコーチが話題に上ると、「昔はそれが当たり前だった。そのおかげで自分は成長できた」と自慢している大人は、人間的に成長していないことと似ていますね。いわゆる専門家権力の悪しき発動です。

病状説明は、医学的な知識や権威を押し付ける場ではありません。あるいは、相談員や退院支援看護師も病状や家族背景を十分に考慮せず、制度やサービスの提案を行うだけではその役割を果たしているとは言えません。医師の病状説明をサポートする立場にあるスタッフは、専門的な情報をクライエントが理解しやすいようにかみ砕き、特定の選択肢への誘導を避け、相手が考える時間や異議申し立てをしても構わないという雰囲気を醸し出す役割もあります。患者さんや家族は、医療の方針を決定したり、治療の効果を客観的・科学的に評価したりできないからこそ、「あなた達は病気のことをよく知っているかもしれないが、自分のことは自分が一番知っている」と考えます。若く健康そうな医師や看護師は、患者さんに「あなたは私と同じような状態

になったことがありますか」と聞かれることがよくあります。私も研修医の頃に患者さんから、「先生はめまいが起こったことがありますか」と問われ、「いいえ、めまいはありません」と答えたことを憶えています。医療者はクライエントの苦悩に関して無知であることを自覚し、自分たちの働きかけが「その患者さんのあるべき姿；その人らしさ」を損なってはならないと思いながら説明を行うべきなのです。事前に作成した説明用紙を一気に読み上げるような、定式化された病状説明では、クライエントの切実なメッセージ、あるいは言葉や意識のもっと深いところから発生する感情の変化に気付かない可能性があります。

我が身を顧みず限界を超えた闘病や介護を続けていたクライエントは、自己を守るため意図せず「抑圧」や「否認」を行い、一見して大変な事が無かったかのようにふるまう[5)]ことがあります。私は60歳を過ぎてから、このような講演の場などで、あがって胸がドキドキすることがなくなりました。でも、自分では何とも無いと思っていても、血圧や脈拍には変化が生じています。私の中の無意識が、「ドキドキしてはいけない、あがってはだめだ」と、強力に気持ちを抑え込んで、私自身に誤解をさせているのでしょう。こういう状態が行き過ぎたり、常態化したりすれば危険な状況を招きかねません。クライエントに、「大変でしたね」と声をかけたとき、「それほどでもありません」と返されたその表情が限界越えのサインだったと気づいたときは後の祭り。ナラティブを正しく読み取るためには、表情やしぐさなどの非言語的なメッセージにも注意を払うべきです。説明をする側が、例えばボールペンを指で回したり机をコンコンとたたいたり、背伸びをして柱の時計を見たりすると、聞く側には嫌な感じが確実に伝わります。クライエントの、病状説明を聞きにくる予定が立たないという返事や、約束した日時に遅刻するという行動にも（現実を直視できない）何かしらの意味が込められている可能性があります。

アドバンス・ケア・プラン ACP について補足します。超高齢化社会を迎え、診療科によらず病状説明で ACP を確認することは、必須の手続きになりました。整形外科でも、かつては骨折の病状説明で、ACP に言及するという発想はほぼ皆無でした。近年は、骨折患者さんの多くが超高齢者で、骨折後に食事に手を付けなくなり、誤嚥から肺炎を来たす時には、経管栄養の希望を確認しなければならないことも珍しくありません。そして、患者さんが90歳前後ともなれば、予期せぬ転機（特に、急な心肺停止）をとることさえあります。

入院時にエンディング・ノートまで持参するクライエントがいる一方で、例えば、お母さんの入院に付き添った息子さんが、「母は若いころから人一倍健康に気を付けて、ここまで長生きしました。医学が進歩しているのに、母が死ぬなんてあり得ませんよね」と詰め寄られ困惑することもあります。

数年前、訪問診療のスタッフが患者さんの家族に、死に至る危害を加えられる事件がありました。90代の母親が死亡

した翌日に、家族が訪問診療のスタッフを呼び出して蘇生処置を求め、医師とコメディカル・スタッフがその要求を断った直後に事件は発生しました。とても熱心で、素晴らしい訪問診療チームであったと伺っていますが、「ひょっとしたら、この家族は、お母さんの老化やその先にある死を受容していないのかも知れない」という予兆を、チーム内で共有していても、このような悲劇が起こってしまいました。

「生命の終焉」が理解され、腑に落ちるには、時間や第三者の協力が必要になることがあります。そしてクライエントの価値観や地域性などの生活史、新潟では昔から地縁・血縁によって形成されてきた集落を「部落」と言いますが、そこに伝わっている文化や死生観をも尊重する姿勢が求められます[6]。

「生命（ヴィータ）」を医療者とクライエントはどのように捉えるか、**図１**から考えてみましょう。



図１．生命をどう捉えるか

まず、食料品店でよく見かける左下の「茸盛り合わせパック」を想像して下さい。私の場合、それを見ると、家に残っている食材を使ってうどんや茸鍋でも作ってみようかと考えます。パックの中の茸の生命は完全に断たれ、「一巻の終り」状態です。人間に話しを戻しますと、多くの医療者は、病気や怪我を負った治療対象としての生命を、「有限な生命；ビオス bios」と認識します。一方、身近な場所で茸や山菜を購入できるのに、危険を冒してでも山に採りに行く人はあとを絶ちません。右下の茸のように、里山で雨露を帯びた苔の中から顔を出す、茸の周りには茸に成るべく潜む菌糸から、誰に摘まれることもなく息絶えた茸の名残りまで、即ち、生以前から死以降をも包摂する、「連続性がある根源的生命；ゾーエーZoe」が存在します。クライエント側が捉えている生命の概念は、これに近いのではないでしょうか。医療者が、患者さんを病院で看取ってお見送りをしてからも、一連の弔いの儀式が家族や親しい知人を待っています。このビオスとゾーエーの定義は、精神科医で臨床哲学者の木村敏先生と、神話学者で宗教史学者のカール・ケレーニイの解釈[7]に基づきますが、イタリアの哲学者 J.アガンベンの定義[8]とは趣が異なります。アガンベンは、ビオスをそれぞれの個体や集団に特有の生き方をもつ生、ゾーエーを動物であれ人間であれ、神でさえも、生きているすべての存在と定めています。木村敏先生は、この問題についてジョルジュ・アガンベン本人に問いただしたのに、明快な回答が得られなかったのは遺憾であると言われています。要は、医療者とクライエントは生命を全く同じものと捉えていない可能性があるということです。

カンファレンス

カンファレンスを行うにあたっての心構えです。カンファレンスの場を準備することは、心の準備につながります。確かに、医療機関でカンファレンス専用のスペースを常時確保することは難しいと思います。だからこそ、普段の整理整頓は当然のこととして、直前に食事をしていた方がいた時などには、換気にも配慮する必要があります。また、参加者間の距離や配列も大切になります。壁際や出入り口の脇にスタッフが陣取っていると、クライエントや外部スタッフは落ち着かないので、テーブルに沿って均等な間隔をあけて座るのが理想でしょう。カンファレンスに遅刻しないことは勿論、誰かの発言中にヒソヒソ話は止めましょう。私自身、病状説明中にそれをされると、「患者さんの取違いをしたまま話しているのでは」という考えが胸をよぎることがあります。スタッフが自己紹介する時はフルネームと職種、例えば「PTの○です」より、「私は担当理学療法士の○です」と話し始めた方が分りやすく、親しみが持てます。ご家族には、患者さんとの続柄（目の前の女性が、娘さんなのか息子さんのお嫁さんなのか分からないことがあります）と普段のちょっとしたエピソードを、「私は患者の長男の嫁です。おばあちゃんとはいつも口喧嘩をしていましたが、入院となると心配ですね」などと話してもらうと、互いに緊張の糸がほぐれます。これは無駄な時間ではないのです。身寄りのない患者さんの場合、ご本人の同意があれば（死に水をとる約束を交わしている人もいます)、昔からの友人や民生委員、行政や地域包括支援センターの担当者に参加を呼び掛けてもよいと思います。「自分のいないところで大事なことを決めないで欲しい」と思うのは誰でも当たり前のことで、カンファレンスに直接参加できなくとも、「自分のために皆が集まってくれた」と聞いて、安堵して笑みを浮かべる高齢の患者さんは少なくありません。

不測の事態が生じやすい、当日の受け持ち看護師が、カンファレンスの場所を確保して司会進行を受け持つのは至難の業です。その役割は、相談員か退院支援看護師が担当し、結果を必ず病棟スタッフ、特に病棟の責任者である師長に伝える必要があります。医療従事者が多忙なのは分かりますが、質問や確認ができないレポートの代読は責任放棄と言われても仕方がありません。さらに、医師が退席した後の会話も、チーム全体に還元すべきでしょう。医師が退席して、はじめてご家族や外部スタッフから本音が聞かれることがあります。困難な事例ほど、カンファレンス終了後の余韻の中で参加者の交流が深まり、その先の道が開かれることがあります。「できた！」と思っても心を途切れさせない、「残心」を忘れないようにしましょう。

昔からの慣習に囚われて、チーム内のあるべき対話を妨げていないか。私のような 60 歳過ぎの大柄な男性医師に対し、「思っていることを何でも遠慮しないで話してごらん」と、20 代前半の女性スタッフを促しても、それは無理な話です。医師から他の職種へのタスク・シ

フト/シェア（チューブ類の調整や抜去、鎮痛処置、ワクチン接種 etc.）が推奨される現在、「全ての医療行為は医師の指示のもとに行われる」と言い続けるのは無理があります。疾病に関する知識や経験が豊富な医師でも、クライエントについては新人のスタッフの方が詳しいことはよくあります。また、医師をチームの「蚊帳の外」に置くと、退院日を知らないのは主治医だけということさえ起こりかねません。チーム内の対話では、「誰が誰に何を伝えようとしているのか」、「この対話の内容はクライエントの利益を優先しているのか」と、常に問い続けましょう。あるサービスの受給を目指して、主治医が記載する意見書や診断書から、病状や障害を判定する側にサービスの必要性が伝わるような情報を盛り込むためには、チーム内の対話力が求められます。

医療チームは、クライエントの気持ちを変えることは難しくても、それを察することは出来るはずです。介助者が家族の場合でも、「異性には下着の準備や片付け、入浴・排泄の介助を頼みづらい」という患者さんの気持ちは、介助の技術・安全性・快適さと同じように尊重されるべきです。また、高齢の患者さんやご家族は、スタッフの業務を「よそ様の親切・お世話にすがっている」と捉えていることがあります。お礼の言葉とともに両手を合わせる方には、そのような気持ちがあるのかもしれません。失禁や転倒への対応やコメントは、正確で予防的な視点に立ったものでも、クライエントに「申し訳ないことをした」と思わせてしまうことがあります。家族はあらゆる場面で、もっとできることがあったのではと、自分を責めたり反省したりしがちです。その気持ちの裏返しとして、スタッフに攻撃的な言葉を投げかける方もいますが、ナースコールを押せるのに一人でふらふらトイレに向かう人、頑張ってお茶やお菓子で訪問スタッフをもてなしてくれる人には、その人なりのプライドや理由があるのです。

最後に、「国際生活機能分類 ICF」運用上の注意を述べます。退院に向けたアセスメントやプランの立案に ICF が活用されるようになったのは、とても良い傾向だと思います。ICF を運用する上で大切な、「要素還元思想」という概念があります。例えば、時計の部品（針や文字盤の種類・材質・色 etc.）という具体的な要素を知ることで、抽象的な「時」の理解が深まるという考え方です[9]。ただ、「時」には時計の針のように、誰にでも平等に流れる客観的な時間クロノス Chronos と、主観的な時間カイロス Kairos 以外にも、季節や時代、タイミングもあります。そう言うわけですから、「時計を詳細に知れば、時は全て理解できる」という過剰な還元は避けるべきです。

退院に向けた ICF の運用でも、良識に従い、クライエントに関する情報や解釈を可能な限り枚挙して再検討[10]をする必要があります。ICF の「心身機能・構造」「活動」から、「参加」を再構築する際には、「健康状態」や「背景因子」との相互作用も念頭に置き、クライエントの「親密圏」[11]から「公共圏」[12]へ段

階的に移行を進めるべきでしょう。同居家族がいる患者さんの自宅退院であれば、家族との生活を再開（親密圏への参加）してから、徐々に社会へ戻る（公共圏への参加）ということを意味します。身寄りのない患者さんや、介護施設への退院でも、まず安心できる場へ帰り、次に社会との交流を再開するという流れを意味します。（下線部全体[13]）

次回は、チーム医療と退院支援について述べ、全体の考察とまとめを行います。グループワークでの対話とアンケートの要旨もぜひご覧下さい。

参考文献など

1. *R.シャロン　齋藤清二他訳：「ナラティブ・メディスン」.医学書院.2011.*
2. *M.フーコー　田村俶訳：「監獄の誕生」.新潮社.2020.*
3. *皆藤章：「日本の心理臨床　体験の語りをめぐって」.誠信書房.2010.*
4. *G.クレイグ　樋口和彦他訳：「心理療法の光と影」.創元社.1981.*
5. *小此木啓吾：「日本人の阿闍世コンプレックス」.中公文庫.1991.*
6. *川島大輔：「生涯発達における死の意味付けと宗教」. ナカニシヤ出版.2011.*
7. *木村敏：「あいだと生命」.創元社.2014.*
8. *J.アガンベン：「ホモ・サケル(聖なる人間)」.以文社.2007.*
9. *上田敏：「ICF の理解と活用」.萌文社.2009.*
10. *谷川多佳子：「デカルト『方法序説』を読む」.岩波新書.2021.*
11. *A.ギデンス　松尾精文他訳：「親密性の変容」.而立書房.1995.*
12. *落合恵美子：「親密圏と公共圏の再編成」.京都大学学術出版社.2016.*
13. *臼井正樹：「介護福祉を巡る断章」.退院支援研究会 2019 年度年次大会特別講演.*



miho Hatanaka,

第一子妊娠前の助産師になりたての頃、職場の先輩とマタニティビクスのインストラクターになるべく講習に通いレオタードも新調した。しかし“実体験”としては行わず。後にマタニティ・ヨーガの指導者養成コースを修める。“好き”と“合う”は違う、か。今回は、妊婦のための保健指導教室で行うヨーガの話と、一枚の写真を。

【第 10 話　助産師のしごと；妊娠期保健指導《ウェルカムベビー教室》の話　その２】

もう何年も前の話になるが、インド政府公認のヨーガ教師養成コースに学んでいた時、「インドでは誰もがヨーガをやっているというのは知らぬ人が描いた勝手なイメージだ」と聞いた。日本でも何度かの流行があったようであるが、現在の流れが欧米のセレブリティの間でのブームを受けていることもあり、「ヨーガといえば若い女性がやるもの」で「体の柔軟性がある人」が「難しいポーズを取るもの」として敬遠する人もいると思われる。ところが、実は日本のヨーガ人口を支えているのは中年期以降の年代の人たちだと知って驚いた。イメージとして前面に“若い女性”が出てくるのは、“インドでは誰もが…”と同じく画になりやすいのかもしれない。

そのヨーガ、健康に良いといわれているが効果は身体面に留まらず、心理面での効果もみられるとのこと。ある研究では、自尊感情の高まりや人生への満足感、前向きに生きる意欲の増進など心理状態の向上がみられたということである。妊婦を対象としたヨーガの研究においても、出産に対する自己コントロール感や自己効力感の向上による出産満

足度へのプラス効果が報告されている。私が講師として携わっている《ウェルカムベビー教室》でも、出産準備教育の位置づけであるため心と体の準備をテーマとして講義形式で話をするほかにマタニティ・ヨーガを実施している。参加者の声を集約・分析してみて興味深いのは、身体面での効果についての感想に比して心理面への効果を感じている者の割合が多くみられることである。中でも〈自分でもヨーガをしよう〉という動機づけが生じている点は、本人の具体的な行動変容を促す可能性が考えられ注目すべき点だと考える。本教室でヨーガのプログラムに参加する妊婦の多くは、フィットネスクラブ等で運動すること自体を目的として参加する妊婦とは異なり、あくまで保健指導教室の一環として参加している。ヨーガに対する元々のモチベーションが特に高いというわけでもない人たちに、何が〈自分でもヨーガをしよう〉という思いを起こさせたのだろうか。

一つには、「簡単なポーズばかりだったので家でもやってみたい」、「わかりやすくて自分でもできそうだと思った」といった感想にみられるように、易しいということが重要な要素のようである。これには逆にやむなしの事情もあって、誰に対してもひらかれている公の保健指導教室の集団指導の場では、個々の妊婦の細かな状態までは把握しきれないため、安全に参加してもらえるということは最優先の課題となる。かかりつけの産科クリニック等で行われるプログラムであれば、即、医療ともつながっており医師の許可の下で参加できるがここではそうではない。指導する側としてどのような動作を行うかといった内容を熟慮するだけではなく、妊婦自身にも、自身の体調に鑑みた参加を促さなくてはならず、時には自主的に見学を選択するといった判断をしてもらうことも必要になる。ただこの点については、妊婦が自分の体調に責任を持つという姿勢を養うことにもつながり、出産の準備教育としても意味のある姿勢だと私は考えている。教室ではガイドをしながら様子を見つつ、「体の声を聴くように」と声をかける。“自分ひとりでもできそう”に感じられる「簡単」で「わかりやすい」ものが提供できているなら幸いである。

また二つ目に、保健指導の一環であることの利点として、分娩のメカニズムを理解した上で体験してもらえるということが挙げられよう。講義では分娩の進行やその時どきの体の状態を説明し、その進行を促進するためにヨーガを活用できるようにと展開する。「今、このヨーガでやっている動きはお産の時に役に立つのかもしれない」と動作の意図を体感を通じてイメージできることは、“ヨーガをする”という具体的な行動への動機となり得、単にスポーツとしてだけではない意義として認識されることが示唆される。参加者の感想の分析からは、〔実践したことを分娩時に活かしたいという思い〕や〔身体面での準備をしようという気持ち〕が出現して〈出産に向けた前向きな気持ち〉が生成されており、心身両面での出産に向けてのモチベーションを上げることに結びついている。

我がことを思っても、良いと頭ではわかっても行動変容に結びつくことが容易ではないことは重々承知。しかしもしも参加した妊婦の何人かでも、地道な実践によって自身の身体感覚に自信を持つことができ、「私にはできる」という想いが育まれ、ひいては主体的なお産や育児につながれば、と願う。そのプロセス全体がその人の携えていくものとなろう。お産を通じた経験は唯一無二のもの。遠い冬のある日、第一子を出産後に「お産は、自分自身をも産み出す経験なんやなぁ…」と思っていた自分自身を思い出す私である。

（＊　2020 年度対人援助学会 第 12 回年次大会 ポスター発表の内容をもとに編集、加筆しました）



Purple

＊　写真に寄せる　ひとこと　＊

日本では１月。
この島では「夏」であった。
雨季にもかかわらず雨に降られた日はさほど多くなく、この海をみながら私は多くの時間、ヨーガをしたり、樹にのぼって海をながめたり、風のとおりのよい部屋で昼寝をして過ごした。

神様に捧げる花と、お香のかおり

このような記憶が私のなかにあるだけで、気持ちはいつも、すぐそこに“旅すること”ができるのである。

福祉教育への挑戦(10)

最終回　中等教育段階で福祉を学ぶ生徒は増える？

髙井裕二

今回は非常勤先の高等専修学校で行った調査をもとに、中等教育段階で福祉を学ぶ、対人援助に関心を持つきっかけについて考えてみたいと思います。髙井（2023）にて、非常勤で勤務をしていた高等専修学校で福祉コースを選択した生徒に「福祉コースを選んだ理由を教えてください」という自由記述式のアンケートを実施しました。4 年間で 92 名（この数字からも、高等専修学校及び福祉コースの生徒が多いわけではないことが伺えますね）の生徒を対象としています。ここでは、結果をもとに、主観も織り交ぜながら書いてみます。

①消去法

ファッションを学ぶコース、パソコンを使った情報を学ぶコースそれぞれが苦手だったので、福祉を選んだという内容です。非常勤先の高等専修学校に進学することを前提とした場合、この時期は入学時にコースを選択しなければならなかったので、「一番、自分の中でなんとかなる」と感じたコースを選択したと言えます。

入ってからベッドメイキングや介助等、手先の不器用な生徒は入学後に苦労していましたが、中学生時代に福祉がどう映っていたのか気になりますね（アンケートのみでインタビューまで実施できていません）。

②家族のケア（介護）の経験

祖父母、妹や弟などの世話をすることを通して、「より良い介助方法を学びたい」と思ったり、家族の役に立ちたいと感じたりしたことがきっかけのようです。「ヤングケアラー」と呼ばれるように私生活に大きな支障が出る状態は問題ではありますが（「ヤング」だから問題で、それ以外の世代なら良いという価値観やケアをそもそもどう捉えるか、語るのかという課題は別途存在します）、福祉に関心を持つきっかけとしてケアの体験はあるようです。

③中学校の職業体験（中学校時代に触れた福祉教育）、保護者が福祉職

中学校時代に地域にある福祉施設に行って介護等の体験で福祉に関心を持った生徒です。授業をしていても、初めから介護職として働きたいといった明確なビジョンを持っている生徒が多かった印象です。

また、親が介護職員などの福祉職で身近に見てきたこと、福祉職の保護者から勧められたから福祉コースを選んだという生徒もいました。「きつい」「汚い」「危険」の３Kと表現されることもある介護職ですが、保護者の働く姿勢に感化されたり、保護者が自身の仕事を肯定的に捉えたりしていることも伺えます。

上記のように見ていきますと、今回のテーマである中等教育段階で福祉を学ぶ生

徒を増やすためには、③のように中学校での職業体験の選択肢に福祉業界を充実させていくことや福祉業界で働く保護者層に 10 代で福祉を学ぶことができる学校があることを周知することなどが必要かもしれませんね。とはいえ、①のような消極的な理由で入学した生徒でも入ってから福祉を学ぶ楽しさを感じてもらえたら、彼らが自然と周囲に言葉にしてくれて、「あそこで福祉を学んでいる先輩が生き生きとしているから」と関心を持つ生徒が増えてくるかもしれません。

私の内容は高等専修学校に絞った内容でしたが、10 代の若者に対して福祉、福祉職をどのように伝えていくか、福祉業界全体で考えていきたいですね。

この連載では、高等専修学校の中で介護職経験のない私が介護系科目を悪戦苦闘しながら教えていくことを「福祉教育への挑戦」と題して書いてきました。しかし、この 2023 年 4 月より所属大学が変更したことに伴い、高等専修学校での非常勤講師を断念せざるを得なくなりました。大学や福祉系職能団体でも福祉教育を行っているものの、本旨と合わないと判断しまして、今回を持って最終回とさせていただきます。まとまりのない文章ばかりでしたが、お読みいただきまして、ありがとうございました。

【参考文献】

髙井裕二・竹田直樹「高等専修学校及び福祉コースの選択理由に関する研究
-テキストマイニングを用いたアンケート分析を通して-」,『教育文化研究』,第 13 号(2023)

第 15 回：第 2 章–その 8–

インプット（読書）とアプトプット（執筆）

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

渡辺からもう 1 冊

前回のつづきです。

ワークショップ「対人援助実践をリブートするさらなる 1 冊」(2021）において渡辺が紹介させていただいた文献は，2 冊でした。

1 冊が，前号でとりあげた「目に見える世界は幻想か？物理学の思考法」（松原隆彦先生著，2017）です。そしてもう 1 冊が，ポール.J・シルヴィアが著し, 高橋さきの先生が翻訳され，講談社から発行された「できる研究者の論文生産術」(2015）でした。ちなみに副題が「どうすれば『たくさん』書けるのか」です（右図参照）



今回は，この本にまつわる，渡辺の些末な日常について，ご紹介させていただきます。

読書というインプットを積み重ねて気づくこと

対人援助学マガジン 49 号（対人援助実践をリブートするこの一冊 第 6 回：第 1 章–その 6–）で述べた通り，筆者渡辺は 1999 年より「読書記録」を開始し，今日までそれを継続しております。フロッピーディスク時代からの記録ですし，一部，未整理データもあるので，正確な累積読了冊数は不明です。ですがおそらく，これまでにおよそ 5000 冊程度を読んでまいりました。そして，50 号（対人援助実践をリブートするこの一冊 第 8 回：第 2 章–その 1–）でご紹介させてもらった通り，渡辺は，日常生活のさまざまな場面場所で，読書を試してまいりました。

こういった「前振り」がほのめかす通り，渡辺は，「読書すること，それを継続すること」の，いろいろな問題なり課題に気づくようになりました。例えば，1 度読んだ本の内容を忘れてしまうことです。読んだことすら，忘れてしまうのです。新たな読書を開始して，本の

ページを開いていくうちに，徐々に既視感にかられ，読書記録を確認すると，その本を数年前に読了していたことに気づく（笑)・・・このような経験を何度か味わってきました。物忘れならぬ「読書忘れ」体験に，一時は激しく落ち込んだものです。

その他，せっかくいい本を読んで，その内容を自分の生活や人生に活用していこうと思っても，やっぱりそれらを忘れてしまったり…。また，ある人に「いい本あったら紹介して」と頼まれても，その「いい本」が喉元からでてこなかったり…。そんなわけで，どんなにいい読書体験をつみあげても，忘れてしまってはなんも効果もないのではないかと不安がるようになったわけです。

とはいっても，すべてを覚え，すべてを覚え続けれる人などそういません。その意味で，暗記方法なり記憶方法に興味がいくわけではありませんでした。ではどうしたものかと考えたとき，自分に足らないのは，読書して得た何かをアウトプットすることなのではないだろうかと，そう考えるように成ったわけです。

ここでいうアウトプットとはなにか？

それは，読書して感じたこと，気づいたこと，学んだことを，書字として自らが記すことではないかと考えたわけです。そう，そこで，ポールJ・シルヴィアの「できる研究者の論文生産術」と出会うわけです。

How to Write a Lot とは？

「できる研究者の論文生産術」では，とにかく，書くことの方法と，書き続けるための方法が，実にわかりやすく書いてあるのです。やる気，才能，ひらめきといった要素に左右されず，とにかく書くための場面設定，書き続けるための環境設定について徹底的に記されているのです。

あまりにもわかりやすいので，気持ちよく楽しく，渡辺は一気に読了してしまいました。ぜひ皆様も手にとって読んでみてください。こういったたぐいの専門書と異なり，実に読みやすい文体，読みやすい構成となっております（あくまで渡辺個人の評価)。

・・・そして，読み終わった後，気づくのです。自分の失敗に。

読むために読むのではなく，書くために読んだのに，読んで終わってしまっていたことに。

というわけで，2 回目の読書とあいなりました。そして 2 回目は，すぐに中断となりました。その本に紹介されている通りのことを実践しなければ，つまり，アウトプットするためのさまざまな場面設定や環境設定を行わなければ，その続きを読めないのですから。

というわけで, 2 回目の読書は今も終わっておりません。日々の生活の忙しさにかまけて，なんだかんだと実践を怠って，今日に至っているわけなのです（笑)。未熟な渡辺です。成長のない渡辺なのです。

How to Write a Lot へ

とはいっても，そう，落ち込んでばかりはいられません。

渡辺が未熟であることは間違えのない事実ですが，落ち込む必要はないのです。

なぜならば，いま，アウトプットしているのですから（なう）。

これをお読みなっている方は，まさに今，渡辺が（一応）アウトプットしている（こともある）ことにお気づきになっているわけなのです。

読者の皆様，ご確認してくださってありがとうございます。感謝申し上げます。

・・・でも，渡辺，たいしてアウトプットしていない現状にあるので，ここは 1 つ，もう少々お時間を頂戴して，・・・それなりのペースで頑張っていこうと思います（逃げ口上）。

「この一冊」を一旦中座して

さて，第 1 章，第 2 章にまたがって，執筆者陣で多数の文献をご紹介させていただいてきましたが，ぼちぼち，第 2 章を終えたいと思います。

次章からは，少々趣を変えたいと思います。

繰り返し述べてきた通り，私たちは，対人援助学会ワークショップ「対人援助実践をリブートするこの一冊」でとりあげてきた内容を紹介させていただいてきました。

ですが，実はもう 1 つ，私達が手掛けたワークショップがあるのです。それは，「対人援助実践をリブートするこの一本」です。2021 年度の対人援助学会である 2022 年 1 月 30 日に，オンラインで開催させていただきました。このワークショップでは，本ならぬ「映画」を用いて，対人援助を考えてみたのです。

次章，第 3 章では，そのワークショップについてご紹介させていただこうと思います。

－つづく－

第 16 回：第 3 章–その 1–

対人援助職として働く私が, 観てよかったと思った映画３選

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

今号から，第 3 章に移行致しまして，文献ならぬ映画紹介となる。前回でも触れたが，2021 年度の対人援助学会（2022 年 1 月 30 日開催）の企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするこの一本」でとりあげさせていただいた内容となる。

その映画とは，さまざまな援助領域にかかわる私達が自身の臨床の「支え」となったり，臨床に迷った際の道標となったり，臨床を続ける糧となった作品となる。読書の皆様がご興味をお持ちなってくだされば幸いである。

「プリズンサークル」

プリズンサークルという映画は，大きな劇場で上映しなかったこともあり，知名度が決して高くない。しかし，それでも上映中は，心理士（師）として働いているなら観ておいた方がいいと，Twitter の心理クラスターで話題になっていた。

日本で初の官民協働の刑務所である「島根あさひ社会復帰促進センター」では，受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り，更生を促す「TC（Therapeutic Community=回復共同体)」というプログラムが日本で唯一実施されている。窃盗や詐欺，強盗傷人，傷害致死などで服役する 4 人の若者たちが，新たな価値観や生き方を身につけていく姿を克明に描き出していくドキュメンタリー映画で，この取材の許可を得るために 6 年，そして 2 年間にわたり密着取材をした重厚な内容となっている。

恵まれた環境に育った多くの人たちは，犯罪をしないこと，すなわち法令遵守行動を学習する。しかし，映画に登場する若者たちは，生育環境に恵まれずに，犯罪行動に抵抗する態度や行動の獲得に失敗してしまい，生き延びるためにむしろ積極的に犯罪的態度や行為を獲得してきた。こうした生育環境の違いによって，「善良な市民」と「犯罪者」に分けられてしまうことを，まざまざと見せつけられて衝撃的だった。「自分は加害者という意識がなかった。ずっと被害者だと思っていた」という一人の若者が率直に心情を吐露する場面を今

でも覚えている。

自分がもし，逆の立場だったら，犯罪者にならずに「善良な市民」になれただろうか？　この映画を観てから，この問いがずっと心の中にある。

この映画の素晴らしいところは，逆境の中にあっても適切な支援があれば，更生する可能性があることを示したことだ。若者たちは対話をすることで，犯罪者としてではなく，一人の人間として尊重される体験をし，適切な人間関係を取り戻していく。

対人援助職に従事する一人として，援助の必要な人には過去の様々な随伴性があって，現在の行動が発現していることを，この映画を観てから，より感じるようになった。表面的で一時的な行動を見て，その人を判断することのないようにしたい。

「生きる」

生きる。黒澤明の代表作の一つ。末期がんであることが分かったやる気のない市役所の課長が病気をきっかけに一念発起し，これまでの生き方を改め，一部の市民が熱望している公園の建設に積極的に関与していく。生きながら死んでいる。対人援助職は，精神的負荷の大きい仕事である。その摩耗から自分を守るために，流す技術も必要となるが，これを過度に乱用すると，生きながら死んでいる状態で仕事をすることになる。そこに存在しているけど，その場にしっかりと留まっていない感じが，苦しいほど理解できた。そんな状態に陥った時にこの映画を思い出して，自分を鼓舞している。

「カッコウの巣の上で」

カッコウの巣の上で。刑務所から逃れるために精神異常を装って閉鎖病棟に入院した主人公のジャック・ニコルソンが，管理主義的で人権意識の低い看護婦長ラチェッドや病院の体制に反旗を翻すことで，周りの入院患者も人間性を取り戻していく。しかし抵抗運動は失敗し，主人公はロボトミー手術を施されて廃人にされてしまう。

支援を考えるときに，社会的妥当性という広い視点から考える重要性を教えてくれた。病院内で正しい行動をしている看護婦長でも，一般社会の常識と照らしてみれば，その支援が正しかったと胸を張って言うことはできなかっただろうと思う。閉鎖的な環境での支援は，独りよがりの支援にもなりがちであるため，社会とのつながりの中で，より適切な支援とはなにかと問うていきたい。

以上，私が影響を受けた映画 3 作品でした。

－つづく－

第 17 回：第 3 章–その 2–

未来に託すという“やりがい”

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

かつての映画ライフと「この一本」の選定

TSUTAYA の「5 枚で 1000 円レンタル」というサービスはご存知でしょうか？私が大学生だった頃にそのようなサービスが始まった記憶があります。そのサービスを知ってからは，週末や連休の前日になると TSUTAYA に出向いて映画を 5 本レンタルして，返却期限に追われながら鑑賞するという趣味（作業？）が定着した記憶があります。一番よく観ていた時期は月に 20〜30 本，年間だと 200 本近くは観ていた計算になります。そんなにわか映画フリークの私ですが，今回のワークショップのテーマを渡辺先生から振られた時には内心，少し頭を抱えてしまいました。

というのも私が映画になにがしかの感銘を受ける時，それは素晴らしいストーリーや俳優の演技，カメラワークや音楽といった客観的に評価できうる要因よりもむしろ，自分自身の過去の経験や葛藤，当時の問題意識や将来への悩みといった自分自身の固有の要素と作品をリンクさせて，結果として感銘を受けることが多かったためです。つまり，私の感銘ポイントは「鑑賞した時点の私だったから」であり，私の感銘が他者にも同様にもたらされるかどうかは全く未知数だったためです。

私が勧めるこの一本：ペイフォワード-可能の王国-（2000 年公開）

そんな葛藤の中で考えた，私が勧めるこの一本は，「ペイフォワード-可能の王国-」という作品です。振り返ると，この映画が自分自身の臨床，というより対人援助を続けている大きな理由の 1 つになっているという実感があります。

本作のあらすじは，以下のとおりです。主人公はラスベガスに住むアルコール依存症の母と，家を出て行った家庭内暴力を振るう父との間に生まれた，少年トレバー。中学 1 年生（アメリカでは 7 年生）になったばかりの彼は，社会科の最初の授業で，担当のシモネット先生と出会います。先生は「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら，何をする?」という課題を生徒たちに与えました。生徒達のほとんどは，いかにも子供らしいアイディアしか

提案できなかったが，トレバーは違いました。彼の提案した考えは，「ペイ・フォワード」。自分が受けた善意や思いやりを，その相手に返すのではなく，別の 3 人に渡すというものでした。トレバーはこれを実践するため，“渡す”相手を探します。仕事に就かない薬物中毒の男，シモネット先生，いじめられている同級生…。 いろいろと試みるものの，なかなかうまくいかず，「ペイ・フォワードは失敗だったのではないか」とトレバーは思い始めます。しかし，トレバーの気づかないところで，このバトンは次々に受け渡されて…。

ネタバレになるため詳細は書けませんが，この映画のラストを観て，幼少期から抱いていた「疑問」が氷解した思い出があります。私が小学生くらいの頃，なんでそんな話になったのか，文脈は失念してしまいましたが，看護師の母から「人を助けるのに見返りを求めてはいけない。見返りを求めない無償の愛（アガペー）が大切」という話を聞きました。聞いた当時は「見返りがないのに，なんで人助けなんてするんだ？意味ないじゃん。」などという疑問を抱き，釈然としませんでした。

それから十数年後，本作を鑑賞し，特にラストの展開を見届けている時，唐突に上述のエピソードを想起したのです。そして，映画内の「ペイフォワード」という行為とその結果（ラスト），さらに「見返りを未来に託す」という発想こそが，長年の疑問であった「見返りがないのに，なんで人助けなんてするんだ？」に対する回答のように視えたのです。私が幼い頃に抱いていた疑問の源泉は，「見返りを今・現在に求める」という考えだったのだと思います。もちろんそのこと自体は，とても自然で一般的な考えだとも思います。私が専門としている行動分析学においても，原則的に有機体の行動は後続する結果事象がその有機体にとって望ましく即時であるほど行動の生起頻度が高まる，一般的な言い方をするならば動機づけが高まるといった言説があります。しかし人間のような言語を使える有機体は，そういった即時の結果事象がなくても，すなわち，今・現在に見返りがなくとも，未来に望ましい結果事象があることで動機づけが高まることが示されています。

もちろん，賞賛やお金など比較的即時の結果事象は，対人援助を実践する私にとって大きな動機づけの 1 つであることは変わりません。また一般的にも言われているように，低賃金や重労働といった動機づけを下げるような要因が依然として多いことも現実です。ただそれでも，私自身が今もなお，現在進行形で対人援助の実践に立ち続けていられるのは，「ペイフォワード」から学んだ「見返りを未来に託す」という発想があるからこそです。動機づけに関して悩みがある対人援助職者はぜひ，ご覧いただくと良いかもしれません。

－つづく－

島根の中山間地から Work as Life

第９回
「これでいいのだ」

野中 浩一

タモリ

笑っていいとも、世にも奇妙な物語、ミュージックステーション。私が子どもの頃から見ている番組たち。私の中に、タモさんの番組は長寿というイメージがある。

物心がつき、気がついたらサングラスのおじさんが司会する番組を見ていた。流行り廃りの激しい芸能界の中で、まったく流行りも廃りも感じさせない飄々とした存在に見えていた。

たけし、さんまとともに「お笑い BIG3」という括りで TV に出ていることがあったが、私はこの 3 人が一括りで並んでいることを不思議に思っていた。タモリにジャンルがあるのか、よく分からなかったからだ。

興味が湧いて、戸部田誠著「タモリ学」を拝読。

タモリとその周辺の歴史を緻密に掘り起こし、興味深いタモリ自身の言葉が数多く記述されていた。その中から 3 つほど紹介したい。

お笑い芸人が、本来真面目な人間にもかかわらず、お笑いでアホなことをするギャップに年を追うごとに耐えきれなくなることに触れて「俺は〝お笑い〟が自分の存在と同じだから」「不真面目な人がものすごく不真面目なことをやっているんです」「最強。存在と考えが同じだからね」

『いいとも』新レギュラーに「コツはね、はりきらないこと」とアドバイスし、また「関係あることばかりに集中したら面白くもなんともない」(中略)「やる気のある奴っていうのは、中心しか見てないんだよね。お笑いっていうのは、大体周辺から面白いものが始まってくるじゃない」

漫画家の故赤塚不二夫への弔辞より「あなたの考えは、すべての出来事、存在をあるがままに、前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は重苦しい意味の世界から解放され、軽やかになり、また時間は前後関係を断ち放たれて、その時その場が異様に明るく感じられます。この考えをあなたは見事にひとことで言い表しています。すなわち『これでいいのだ』と」

不便と不安

郵便物が以前より届くのが遅い。生活範囲内のコンビニがいくつかつぶれた。問い合わせの電話をかけてもコールセンターや自動音声案内に繋がることが多い。

サービスの質が低下している実感がある。けっこう不便に感じている。

自治会の戸数が 36 戸から 31 戸に減った。今ある 31 戸の中でも会に出られない家や高齢ひとり暮らしの家も少なくない。人口減少の影響で縮小・統廃合する保育園や学校が身近にある。

地域の活気が減っていく感触がある。けっこう不安に感じている。

家は介護で忙しい。仕事は人手不足で忙しい。そんな話がよく耳に入るようになった。

表 1　年代別人口（総務省統計局ホームページより）

	15 歳未満	15～29 歳未満	30～49 歳未満	50～64 歳未満	65 歳以上
1978 年 （昭和 53 年）	約 2771 万人	約 2636 万人	約 3495 万人	約 1624 万人	約 992 万人
2000 年 （平成 12 年）	約 1847 万人 （▲924 万人）	約 2570 万人 （▲66 万人）	約 3361 万人 （▲134 万人）	約 2691 万人 （1067 万人）	約 2201 万人 （1209 万人）
2022 年 （令和 4 年）	約 1450 万人 （▲1321 万人）	約 1819 万人 （▲817 万人）	約 3107 万人 （▲388 万人）	約 2496 万人 （872 万人）	約 3624 万人 （2632 万人）

住んだことなきわが家

2023 年 3 月下旬、私と妻と娘 2 人と、熊本県の山鹿市を巡った。野中家が先祖代々住んでいる家があった場所を訪ねる旅である。

私は 45 歳ながら、これまで自分の祖先や家のことを知る機会が少なかった。

本家を父が売ってしまったのは 38 年前。私が小学校に入って間もなくのこと。長男である私はまだ物心がついたばかりで、父の転勤により全国を転々としている中での実家の売却であった。

祖父母が早くに亡くなったこともあり、熊本の家には物心つく前に 1〜2 回行ったきりである。2 年前に亡くなった私の父は、家や家族や親せきについて、何も語ってこなかった。ごたごたやどたばたがあって家を出たと、うっすら知るくらいである。

父については第 2 回で書いたとおりであるが、田舎での暮らしや農業およびそれを強制しようとする家に嫌気がさして、放蕩の末に管理職サラリーマンとして退職まで全国転勤する生活を送ってきた。そのため熊本の生家や親せきとの付き合いは家・土地の売買やお金のことに限られていたと思われる。

私は、家・土地や祖先や親せきのことをほとんど知らない中で、野中家の成り立ちを調べるために、家族とともに熊本へ向かった。そして長らく熊本に住み続けている叔母さんを頼りに、代々お世話になっているお寺、本家の近くに住む父のふた従弟のおじさん、地域の図書館や資料館を訪ねてまわった。

詳しいことは省くが、この旅で私の心に染み入ったことが 2 つあった。

熊本入りしてしばらく、家が点々としかない国道を走る。旧実家の近くまで来ているように思いつつも道に迷ったときのこと。道を尋ねるため、車を停めて一軒の家で場所を尋ねた。

玄関のドアを開けて「ごめんください」と何度か声をかけると、70 代くらいの細身の男性が出てきた。「野中と申しますが」と前置きをして、まだ会ったことのない親戚の名前を告げて、心当たりを尋ねた。その話の中で父宏典の名前を出したところ「宏典くんの息子さんかい」と、その場で立ち話になった。聞けばこの方、父の 1 つ上の年で同じ学校に通っていたとのこと。見ず知らずの私に懐かしげな笑顔を向けていただけたことが印象的であった。

その後、ふた従弟のおじさんの家を訪ねてお話を聞き、旧野中家のすぐ隣にある地域の納骨堂を見に行った。その際、おじさんから「父の 1 つ下（おじさんの同級生）の久住さんが旧野中家を購入して住んでいる」と聞き、おじさんの仲介でお会いして、話のなりゆきで久住さんのお宅（旧野中家）に入らせていただいた。

その家は、私が約 40 年前に入ったときと変わらず、物が増えたこと以外は時間が止まったままのようであった。4 歳当時、1 歳上の従兄（男の子）と 1 歳下の従妹（女の子）と一緒に戦隊ヒーローのサンバルカンごっこをした仏間や、テレビアニメのニルスの不思議な旅を見た奥の部屋など、記憶が蘇るほどにそのままであった。

その際に、久住さんから取れたての焼き椎茸をご馳走になり、家の中の案内までしていただいた。「この玄関の梁、立派でしょう。これだけの木は今じゃとれないよ」と、家の気に入ったところを語る久住さんの言葉の 1 つ 1 つに実感がこもっており、私は感動とも感謝ともつかない、何かこみ上げるものを感じずにはいられなかった。

40 年近くも前に父が（住むことがないであろう）実家を売却し、本来であれば先祖伝来の家と土地が私に引き継がれることなく父の代で雲散霧消したことは、私にとって長年にわたる小さな不満の種であった。しかし今回熊本に足を運び、野中家やその歴史を知る人たちと話をする中で分かったいくつかのこと。それらは大げさに言えば私や家族の今後を照らしてくれる piece のように感じられた。（※1）

多様性

「多様性」という言葉は、なかなかに扱いが難しいと感じることがある。

外国人について日本の報道でよく耳にする語られ方には「（裕福な外国人観光客による）インバウンド消費」、「（日本より賃金が低い国から来る）外国人労働者」という 2 種類がある。どちらも、日本人が豊かになる手段として外国人を利用するような響きがあり、この言葉自体、あまり気持ちのいいものではないと感じている。穿った見方であろうか。

G 7 広島サミットの後の広島ビジョンについて語るサーロー節子さんのニュースを目にした。G7 各国が対立国（ロシア、中国、イラン、北朝鮮など）の非難に終始し、自国の核保有を正当化していることを批判する節子さんの声が印象的であった。自国や友好国を是とし、自国とは思想や政治の枠組みが違う国を非とする。自国の論理で正義と悪を定義して区切ることは、ルソーが言うところの戦争状態、「国家と国家の関係において、主権や社会契約に対する攻撃、つまり、敵対する国家の憲法に対する攻撃、というかたちをとる（加藤　2009）」ことと隣り合わせにある振る舞いではないかと危惧せずにはいられない。

最後に奥野克巳「文化人類学入門」を読む中で驚いたことを紹介したい。高地ニューギニアのある地域では 7 歳から 15 歳頃の男性性を獲得するための儀礼が行われる期間は、男たちの間で同性愛的な性行為が行われているという（ホモセクシュアルな期間）。一方で、その後、男性は女性と結婚するも、他方で少年との関係が続く場合もある（バイセクシュアルな状態）。やがて妻が子どもを妊娠し出産すると、少年との性的関係は解消される（ヘテロセクシュアルな関係）というのである。

また、ベネズエラのある地域では、戦いの標的となる男性の死亡率が高く女性の割合が多い傾向にあるため、一夫多妻制の社会を形成している。結婚した女性は妊娠が発覚すると、その女性は、インセスト・タブー（※2）の範囲を超えて複数の男性を愛人とし、出産後は愛人関係を結んだ複数の父親から食

料をもらい子どもを養うという。またこの地域では、愛人は胎児の健やかな発育によいと考えられているとのこと。

主に先進国と呼ばれる国において性の多様性が語られるとき、「個人の選択の自由」のニュアンスが多分に含まれているように感じている。一方でアジアや南アメリカ、アフリカの性においては「儀礼としての性」、生き残り戦略のための「習俗の性」など、集団における性の多様性が見られて興味深い。

これでいいのだ

漫画家の赤塚不二夫は、満州で特務警察をしていた父のもと中国で生まれ育った。小学 4 年生で終戦を迎えると、ソ連軍の進駐により略奪と暴行の日々の中に身を置き、ほどなく家族とともに日本に引き揚げた。その後、妹の死や父のシベリア拘留や家族離散を経験して、日本で漫画家になった赤塚。著書「これでいいのだ」には、自分のこと以上に、家族のこと、身近な人のことが多く描かれており、それによって赤塚本人の像が浮かび上がっている。

今、家族と一緒に暮らせる日々。今日、食べるものがある食卓。本当はそこに不足はないのだろう。

語句等注釈

※1　人物の名前は野中姓を除いてすべて仮名

※2　インセスト・タブー＝近親相姦の禁忌

引用・参考文献

赤塚不二夫（2008）「これでいいのだ　赤塚不二夫自叙伝」　文藝春秋

加藤陽子（2009）「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」　朝日出版社

奥野克己（2022）「これからの時代を生き抜くための文化人類学入門」　辰巳出版

戸部田誠（2022）「タモリ学　タモリにとって「タモリ」とは何か？」　イースト・プレス

かぞくのはなし

きむら　あきこ

第六話　部屋と椅子とわたし

久しぶりに、二人で暮らしている娘たちの部屋に行ってみた。相変わらず、仕事に就活に忙しい娘たち。それに加えて、片付け下手の私の娘たちらしい部屋の乱雑さがあった。散らかり様を見ながら、服屋敷（服が散らかっている）、プリント屋敷（プリントが散らかっている）、などと互いに笑いながらからかっていた。すると、娘たちが、「お母さんの部屋は・・・」と言いかけた。はて？今の私の部屋は、割ときれいだし、片付いているから、〇〇屋敷なんて揶揄はできないはずだ。すると、娘たち曰く、「お母さんの部屋は、椅子屋敷。一人暮らしなのに、椅子ばかりある。」と言うのだ。そういわれると、確かにと頷けた。

一人で暮らすようになって丸３年が過ぎ、１年前には、３LDK から２LDK の部屋に引っ越しをした。引っ越しの時に、随分と断捨離をしたから、今の住まいはシンプルで物が少ない状態をキープできている。元々、片付けるのは上手ではないから、物は少ない方が管理しやすい。お陰さまで、広々した空間は居心地が良い。娘に言われたように、２LDK に一人暮らしをしている割には、椅子の数は多い。そのどれもがバラバラな椅子。どれも、安価な椅子なのだが、それぞれに思い出のある椅子なのだ。

例えば、食卓テーブルに合わせているのは、２つの椅子。一つは、テーブルとセットになっていた椅子。4 脚あったものの、少しずつ不具合が出てきて、残って使っているのは、１脚だ。安価な食卓セットの成れの果て、と言ったところ。それでも、この安価な食卓テーブルのセットは、十数年前に、独立開業した事務所部屋に、来客があった時に対応できるように、と買ったものなのだ。そんな理由で、捨てられずにいる。集成材の天板はぶよぶよしてきているし、椅子だって座り心地が良い訳でもない。でも、捨てられずに使っている。

そして、もう一つは、こちらも安価なテーブルセットの椅子だ。亡き父が、自分専用の晩酌スペースにしたい、と使っていたもの。父が使わなくなったのを機に、作業用としてもらってきたものだ。あちこちのビスが緩んでは、ガタガタするけれど、父が使っていた、と思うと捨てられない。たぶん、私が生きているうちには捨てないだろう。

台所には、シンプルなスツールが一つある。これも、千円程度で買ったものだ。台所で煮炊きの待ち時間に座っている。最近は、一人ご飯を台所でそのまま食べてしまうこともあって、そんな時には特に重宝している。





居間には、違う種類のパーソナルチェアが２脚ある。リクライニングが可能な椅子は、一人で映画などを見る時に座っているし、造りが大きめの椅子は、ゆったり座りながら、小さなテーブルと合わせてパソコン作業や、オンライン講座などを受ける時に使っている。やはり、どちらも、安価な椅子なのだが、自分だけのための贅沢な椅子のように感じている。そして、その脇にある、小ぶりなスツール。花台にしている。北海道の刑務所で作られたもの。刑務所で作られた作業品はとても質が良い。座面が小さいので自分が座ることはないのだけれど、これも椅子なのだ。

そして、廊下にある、唯一「ちょっと良い椅子」。リトルミイが座っているもの。同い年の従妹の家で使われていた食卓テーブル用の椅子だ。子どもの頃、遊びに行くと、洋風な食卓テーブルがとても格好よく見えた。母方伯母が使わなくなったものを、母がもらい、そのデザインが気に入って、1 脚母のところからもらってきた椅子だ。17 世紀後半に、イギリスの地方で生まれた、ウィンザーチェアと言うらしい。この椅子の座面は集成材ではないようだ。だから、

重い。そして、堅い。ただ、今の私の部屋の色合いとは系統が違うので、居間には置けず、普段は廊下に置いている。人が集まった時だけ登場する椅子だ。



ここまで見ると、一人暮らしには、持て余す数の椅子なのだが、まだ、ある。廃校になった学校からもらってきた、学校椅子。家の中に５脚ほどある。洗面所、寝室、居間の片隅の物置用、テレビ台としてなどなど用途は多岐に渡っている。



こうしてみると、やはり、娘たちが言うように、我が家は椅子屋敷だ。一人暮らしなのだから、私が座る椅子以外は、すべて「エンプティチェア」だ。でも、どの椅子にも思い出や、思い入れがあるから、座るたびに違う景色が見える。

娘たちが言うには、「お母さんは、寂しがり屋だから、椅子をたくさん置いているのだよ。」「家に誰か来て欲しい、そういう心理があるのは、寂しがり屋ということだよ。」と。「そんなことはないけれど」と思いつつ、空っぽの椅子にあの人やこの人が座っていることを無意識に感じているのかもしれないなあ。私は、寂しがり屋か・・・ふと、父の椅子に問いかけてみた。
「寂しがり屋でもいいじゃないか」と、父の声が聞こえた。



おわり

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（5）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「と思います」から「です」へ

昨年 6 月 15 日発行の対人援助学マガジン第49号がヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！の記念すべきデビュー♪（自ら祝う）、初投稿でした。今号から投稿 2 年目に入ります。しみじみと嬉しいです。これからも遷延性意識障害・ロックトインの状態にある方々やご家族、ご支援者との交流を通した学びや思いを発信し、皆さまと共有できる貴重な場としてお世話になります。どうぞよろしくお願い致します！

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（1）の本文で「意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことだと思います。」と書きました（p.308, l.21）。2 回目の投稿からは冒頭に固定メッセージとしてこの言葉を掲げています。ロックトインの状態にある方々との書字介助ヨミトリ（指談）による対話やご家族・ご支援者とのお話しの通訳、またオリジナル ICT 機器ヨミトリ君を使用しての意思疎通やゲーム操作を楽しんでいただくこと等を通し、今はこの取り組みが人の尊厳に関わる大切なことであるということを私は確信をもって言うことができます。今号から、人の尊厳に関わる大切なこと「です」とし、よりその重みをしっかり認識して活動を続けていきたいと思います。

できればずっと話していたい

そのような厳粛な思いで、また、ロックトインの状態にある方々の少しでもお力になりたいという切なる願いをもって日々取り組みをしているわけですが、実際、現場ではいろいろなことが起こります。喜びや笑いがいつもあるのはヨミトリ君の持ち味ですが、驚いたり戸惑ったり、途方にくれたり…。なにしろロックトインの状態にある方に向けてのICT機器による技術的支援と介助付きコミュニケーションという技能による両軸の支援という、おそらく前例のない取り組みですから、一つの現場の実践が次の取り組みへのマニュアルになっていくという、マニュアル日々更新、の日々です。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（3）で書いた東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」との連携（51 号　p.306, l.8）は順調に進行、発展しています。皆さんヨミトリでお話しをされ、ヨミトリ君でゲームに挑戦されていますが、やはり今は私のヨミトリの介助がないと言葉での会話ができないので、
「げーむもたのしいけど　やっぱりはなしがしたい」
というご希望になってしまうのです。そのお気持ちの表し方はさまざまです。
「すみません、どうしてもいいたいことであたまがいっぱいで　げーむにしゅうちゅうできません」と書かれる方がいます。またヨミトリ君で熱心にゲームをやって、お話しもして、その日のプログラムが終わってから、
「できればずっとはなしていたいですね」
と書かれる方。ヨミトリ君開発者の岡田さんと訪問はしたものの、ご本人の体調が芳しくなく、ご家族が心配されて出かけてお話しするのがとりやめになった方は承服できない様子で抗議のことばが…。ご本人としては外出できる体調との思いだったのでしょう。
「でかけるとやくそくしたのに　すごくざんねんです」
高木「でも無理してはいけないから、今日はここでヨミトリ君をたくさんやりましょう」
「いやです。」
高木「ちょっとだけ。だめ？」
（「少しだけでも」、「いや」の応酬一部省略）
「またすぐには来られないから、ヨミトリ君やりましょう」
「だめ。でかけないなら　よみとりくんやらない」

うーん。困ったけど、なんとか対処しなくちゃいけないけど、でもご本人の思いがとてもとても強く伝わってきます。こんなにストレートに気持ちを表してくださることに感動すらしてしまう…。ハッ！まずい。彼の気持ちの持って行き場はもちろん考えなくちゃいけないけど、後ろに岡田さんがいたんだった。
私のヨミトリでは、透明性を確保するために、とにかく当事者の方が書かれる文字を 1 文字ずつ読み上げます。ちなみに、ここだけの話と言われた時は、別のやり方で対応していますが。でも通常は 1 文字ずつ読み上げていくので、どんな言葉が出るかはその文字を読み上げるごとに明らかになって行く形で、そういうわけで、先ず一通り聞いてから内容の開示、非開示、サマライズ、オブラートに包むという忖度はできないのです。あくまでもご本人の発する言葉通りにトレースするスタイルです。
「でかけないならよみとりくんやらない」と言われて、岡田さんはどんな気持ちだろうか。平日はご勤務で、週末はヨミトリ君支援で多い時は一日に複数件の訪問やデモをこなし、その合間のわずかな時間を割いて、たぶん寝ないでヨミトリ君の設計をして、実機を工作して、ソフトのプログラミングをして、ゲームを開発されている。まさに七転八倒、じゃなくて、八面六臂の活躍・奮闘を続けてくださっている岡田さんに、
「よみとりくんやらない」
では、ショックを受けておられるのではないだろうか…。申し訳なくて私は後ろをふりむくことが

できませんでした。
「まじか…」
岡田さんの小さなつぶやきが聞こえました。あー、ごめんなさい。でもわかってあげてほしい。ご本人はそれだけ今日お出かけしてお話しすることを楽しみにされていたのです！
「高木さん、まずいです。」
「あ、はい。そうですよね。せっかく来てくださったのに申し訳ないですが、今日はどのように…」
「間違えました」
「…。え？」
普段から声が小さくて聞こえにくい岡田さんの声がますます小さくて聞こえません。
「間違えて持って来ちゃった」
「何を」
「ヨミトリ君につなぐケーブルのセット。あー、せっかく準備しておいたのにー」
ご家族はちょうど席を外しておられました。ぼそぼそ声の緊急会議です。
「ケーブルを忘れたって…。ヨミトリ君できないの？（いきなりぞんざい語の高木）」
「すみません、できません」
「じゃどうするの？」
ますます居丈高の高木ですが、こんな救いの手ともいえる展開になろうとは！
「幸いうち比較的近いので、取りに帰ります。すぐに出れば次の現場間に合うので」
ご家族にお声がけして状況を説明しました。
「今日はお出かけして外でお話しするのをとても楽しみにされていたようで、『出かけないならヨミトリ君やらない』とのご意向で…」
ご家族、すごく恐縮され、お詫びされます。そして残念そうです。
もちろんこちらの不手際も重なったことも一部お伝えし、こうしてお顔だけ見て帰ってきたことがありました。
「彼がやる気満々だったら、それこそ本当にがっかりさせちゃうところでした」とほっとした様子の岡田さん。想定外の展開でしたが、出かけたい気持ち、言葉で表したい気持ち、体調不良でやむを得ない状況とはいえ、楽しみにしていたチャンスが叶わなかったその方のことを思うと、お約束したらなんとか実現していく方向で、簡単にはこちらの都合でキャンセルするわけにはいかないと、気持ちを引き締めた次第でした。

現地現物

書字介助ヨミトリ（指談）を体験されると、ロックトインの方々はみなさん自分の言葉が届くことに先ず驚かれます。また

どうしてわかるのですか
はやくかけるのがふしぎです

とも、よく書かれます。
簡単にメカニズムを説明して、これをヨミトリ君でやれることを目指していますよと補足しますが、当事者の方々の指やこぶしから伝わる荷重の増減や方向を信号としてキャッチするところはヨミトリ君もヨミトリ(指談)も同じです。ただ、ひらがなのシンプルなストロークの構成であっても、文字の表出となると、そのプロセッシングが非常に複雑になります。はたしてヨミトリ君は書字アシストができるようになるのか？！
ここでヨミトリ君開発者岡田さんが大きな決断をしました。ヨミトリ(指談)への挑戦を表明されたのです。前述のひまわりから現在お二人ヨミトリの練習をされています。ロックトインの当事者の方たちが先生です。生徒として岡田さんが加わりました。
岡田さんの名誉のために現在の習得状況を先に言うと、他の二人と同様に、〇と×の読み取りは相当な確率でできるようになりました。最初は、実は、ヨミトリにけっこう自信があった模様です。でもいざやってみると…。

以下、岡田さんの証言です：

いやー焦りました。自分で開発したヨミトリ君 1 号で目視に至らないレベルの極低荷重をキャッチできたんですからね。自分の手でだって取れるだろう。そう思って臨んだのですが…。まったくわかりませんでした。ピクリともしない。後に続いて挑戦したひまわりのお二人がすんなりヨミトリできたので、非常に落ち込みました。撃沈でした。

「大丈夫ですよ。今でこそコミュニケーターとして活動していますけど、私も最初は全然だめでしたよ。定期的にロックトインの方のところにお通いして練習させていただいたとはいえ、1 か月に 1 回程度でしたし、〇×が取れるまでに 2 年近くかかったのです。そう簡単にできるようになられても困ります(笑)」
その時岡田さんにかけたなぐさめの言葉ですが、今振り返ると優越感ぷんぷんの厭わしい感じですトホホ。
そして驕れるもの久しからず。岡田さんはあっという間にめきめき上達し、パーキンソン病の進行によりロックトインの状態になっている方から
「いいですね。とてもかるくかけるようになりましたよ。」と
おほめの言葉をいただくまでに。私もうかうかしていられません。
それにしても、いつかも書いたけど、早い…。ヨミトリ君の開発も早かったけれど、ヨミトリで〇×を取れるようになるのも早すぎです。おそるべしシステムエンジニア。

このことを、今、協働している障害児福祉の専門家の方に話したところ、たいへん驚かれ、感心されました。指談の普及・指導にも尽力されている方ですが、「すごいですね。とにかく男性で指談やられる方が少ないので、先ずその点でたいへん貴重です。特に技術系の方は抵抗感強い方が多いのですが、岡田さん、さすがですね」
早速その言葉を岡田さんに伝えると、「開発のために対象を知ることは必要かなと。『現地現物』

ですね。」とクールな反応。余裕すら感じられます。称えつつ、どこか面白くない高木…。いいえ、そんなことはありません。負けないようにがんばるぞ。精進あるのみ！です。

100%はまずい？

「このままずっとはなしていたい」で書いた通り、東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」との連携のヨミトリ君の取り組みは意義深い活動として評価を受け、たいへんうれしく思っています。本年 3 月発行のひまわり広報誌 33 号では、ひまわり代表の外山さんが「ヨミトリ君について原稿を書いてください」と依頼してくださり、当初は見開き 2 ページ程度で簡単にご案内の文章をと思っていたものの、「2 ページでも 3 ページでも」という温かいお言葉に、結果、大いに調子にのった私は堂々（自分で言うか）6 ページの大特集記事を書いてしまい、完成した広報誌を届けた関係先はあきれ顔…。
しかし、その記事を読んだ方から何人もお問合せや読み取り君体験のお申込みをいただき、おかげさまで一歩一歩、着実に、情報を必要としている方にヨミトリ君のことが届いている実感を得て、本当にありがたいことです。感謝の気持ちで一杯です。
ひまわりでのヨミトリ君プログラムの一つの課題は、体験の成果が良すぎることです。だそうです。
「今のところ体験していただいたひまわりの遷延性意識障害の方は全員ヨミトリ君初回で操作できました。ヨミトリでも言葉をキャッチできました！」と喜び勇んで外山さんに報告したところ、
「全員…。」と繰り返され、私が「はい！今のところ成功率100%です」と続けると、再び
「100%…。」と繰り返され、「それはまずい。」と呟かれました。
「まずくないです。100%ですよ。」
えへん、と口に出しては言わないまでも、純粋に私としては「何がまずいの？」という感じです。

ここでヨミトリ君プロジェクトの頼りになるメンバー、我らが増尾さんの登場です。増尾さんは脳血流のAI解析による意思疎通支援の研究者です。
「外山さんが100%はまずいと言われるのですが」
単刀直入に聞いてみました。
「確かにそれはまずいですね。」と増尾さん。
「どうしてですか」
「100%だと、恣意的に上手くいく被験者だけを選定した検証として有効と認められないからです」
「でもわざとじゃありません。体験ご希望の方を募り、やってみたら結果的に100%だったということなのですが」食い下がる高木。
「やはりまずいですね。有効性の評価には、失敗例が必要です」
うーん。失敗例といっても、やるたび成功だからなー。
なんとも贅沢な課題点です。

そうこうしているうちに、直近で体験された脳出血の後遺症による遷延性意識障害の方が、ヨミトリ君の操作に困難があることが判明しました。書字介助ヨミトリの際は、比較的脱力していて手も取りやすく書字もスムーズにできるのですが、ヨミトリ君でゲームとなるととても強い筋緊張が入り、パネル入力の制御ができなくなってしまうのです。見ていたご両親は、もう少しなんとか力が抜けるとよいがと、少々残念そうでしたが、この事例を増尾さんに報告したら「それは良い失敗例ですね。不随意で筋緊張が突発的に強く入る方の場合は操作が難しい」と。実践する支援者としては、ご本人にもっと達成感を味わってもらえるとよいのにとの思いで一杯ですが、一方で、検証協力者としての貢献はとても大きく、そのことは一つの結果として、次回の訪問時にご本人にお伝えしたいと思います。

広がるヨミトリ君の輪

本マガジンに投稿を続けることは、3 ヶ月ごとにヨミトリとヨミトリ君の活動を振り返るとても貴重な機会となっています。毎回ロックトインの状態にある当事者の方の思いや、ヨミトリ君プロジェクトの進捗状況、ニュースをお届けできることはとても嬉しいことです。
ヨミトリ君の活動は、3 月 18 日付の地元有力紙の中日新聞に、「話せなくても指で語る　わずかな動き『ヨミトリ君」で意思疎通」のタイトルで大きく取り上げられました。ひまわりとの連携のことも紹介され、同会の会員の皆さんと共に掲載を喜びあいました。何より、取材に協力してくれたロックトインの当事者の青年とご家族が喜んでくださったのが一番うれしかったです。記事を目にした読者の方で、「夫が脳卒中の後遺症で寝たきりで話せないけれどもわかっているので、ぜひヨミトリ君を試したい」というご相談もいただきました。記事では、国学院大学の柴田保之教授（障害児心理学）のコメントも紹介されました。病気や事故で声を出せない人や字を書けない人も一人の人間として意見を持っていると社会が認めるべきということ、また、ヨミトリ君は第三者が介助する指筆談などの方法に対し、客観性が担保され、壁を突破する取り組みとも評価していただき、岡田さんも私も天にも昇る気持ちでした。

ゴールデンウィーク後半の5月6日には、脳卒中障害者のいきがい作りの NPO 法人ドリームの協力により、「ヨミトリ君と麻痺手で遊ぼう♪会」の第 3 回を開催しました。脳卒中の後遺症で片麻痺の方々が集まってくださり、初めて参加されたお一人の方は、「楽しかった。発症してから、リハビリはいつも自分との闘いだった。今日は、久しぶりにみんなとゲームでスピードや点数を競って楽しめた。ぜひまたやりたい」と言ってくださいました。
「ヨミトリ君なら麻痺手でみんなと楽しく競い合うことができていい。」なるほど。
思いがけない新鮮なコメントは主催者冥利に尽きます。

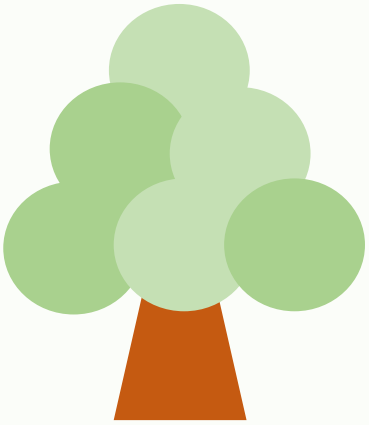
昨日よりさらに使いやすくなっているヨミトリ君
今日は操作するのがとっても楽しいヨミトリ君
さあ、これからヨミトリ君はどんなふうになるのかな。
明日はもっと楽しみなヨミトリ君に、

皆さまどうぞご期待ください！

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！

ヨミトリ君HP
http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/

*****
＜プロフィール＞
インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがいづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会　ひまわり」会。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。
ご一緒しましょHP https://www.goisshoshimasho.com/



こかげのにちじょう④

～退所児童のアドボケイター～

鳴海　明敏

５月某日

今年の３月から４月、年度替わりの時期に、高校卒業した子どもたちや高校中退後在園していた子どもたち６名が、あいついで退所した。そのうちの４名は、青森市内のグループホーム等で生活しながら、就労支援作業所で働くことになった。

学園の開設以来１３年間の退所児童は約１００人だが、そのうち現在も青森市内で生活しているのは人が１５名くらい居るので、併せて２０名くらいが市内で生活していることになる。もちろん自宅で親と暮らしている人もいるし、結婚してパートナーと生活している人もいるが、手帳を所持していて障害者のサービスを利用しながら生活している人もいる。

学園に入所すると、全員が学園の非常勤医師が勤務する病院の外来を受診し、カルテを作り、在園中はその医師の診療を受け、その病院の薬局から薬を処方してもらっているので、退所後も市内で生活している場合は、その病院へ通院して、調子を崩すと入院ということになる。

先日、そのような退所児童の一人から電話があった。グループホームで生活しながら就労継続支援 B 型の作業所に通っていたのだが、調子を崩して、現在は入院中だという。彼女が言うには、グループホームの世話人さんからのパワハラやセクハラに耐え切れず調子を崩してしまったが、信頼している相談支援事業所の支援員さんに相談して、今回の入院となったとのこと。入院して、これからのことを前向きに考えられるようになり、今後は一人暮らしをする予定とのことだった。

これまでの学園のスタンスは、退所児童から連絡があれば、対応するが、こちらから積極的に生活状況を確認するということはしてこなかったが、だんだん市内で生活している人

が増えてきたことから、もう少し彼らと積極的に関わることを考えた方がいいのではないかと思い始めている。

その際に、学園が単独で退所児童の支援という観点でかかわることも勿論ありだけど、なんか物足りないなあと思って、思いついたのが以下の構想である。

学園の退所児童が市内で、充実した生活を送っていけるように、関係機関のネットワークを構築して、連携しながら支援をしていくことが出来ればいいなあと思った。関係機関としては、病院（主治医、PSW、心理士）、相談支援事業所、就労支援事業所、グループホーム、学園などになるのかなあ。

今回電話してきてくれた人は、相談支援員さんとちゃんと話せたようだけど、そんな人ばかりではないので、ネットワークでの学園の役割としては、「退所児童のアドボケイター」という役割がいいような気がする。

（了）



はじめに

5月21日は、「世界対話の日」だということで、ちょうどこの期間の書道イベントを「対話する書道のじかん」として設定してみた。考えれば考えるほど、この「対話」ということばはたくさんの場所で使われているし、最近では学校での学びについて、「主体的対話的で深い学び」を重視する、などと使われている。もちろん精神医療の世界や相談場面でも「オープンダイアローグ」の有効性は高いと言われ、教育、福祉の世界ではあたりまえに「いいもの」とされている言葉ではある。しかし、はたして「対話」とは何か。なぜそれが人々にとって必要とされ、重要視されてきているのかということを、書道の時間を通して考えてみたいと思った。というのも、「誰でも調子に乗れる書道塾tane」とは、まさに毎回が対話の時間になっているのではないか、と、来てくれている方々が気がついてくれたことが大きかったからである。

対話の土台

書道塾taneの特徴は、①教えない、②何を書いてもいい、③評価しない、の３つである。①については、わたし自身は書道の師範ではあるが、そもそも「書」にはルールがあるわけではないので「こう書きましょう」ということを教えることはないし、文字の見本として何かきっかけがないと書けないという方には書くことはあるが、基本的には「手本」がない。②は、年齢問わずに集まっているため、当然「筆を持ったことがない」という子どもから、「古典臨書を書きたい」という大人まで、実にさまざまなニーズがある。そのニーズにすべて応えることなどはそもそも不可能に見えるが、実際にやってみると、それぞれが好きな本を持ってきたり、黙々と遊んでいたり、という自由空間が生まれた。③については、ここではいわゆる書道塾のように、級や段があったり、うまくなる練習をしたり、しているわけではない。提出することもないし、ゴールがあるわけでもない。なので、誤解を恐れずに言えば、ここにきて書道をやっても役には立たない。つまり完全に「自分だけの世界」を楽しむだけで、それについて誰も評価しない。この、「自分だけの世界」を、まずはたっぷりと味わうこと、そしてそれに、自分自身でOKを出すこと、それは子どもから大人まで全員ができるようになっていく。実はこのルールは、他者に教えない、どんな意見が出てもいい、意見について評価や判断をしない、という哲学対話のルールと同じであった。

書きっぱなし・言いっぱなし

「自分だけの世界」を自分で肯定する。それが目に見える形で味わえるということは少ない。だからこそ書道は分かりやすい。わたしたちは「言葉」を使うが、だからといってそれで全てが伝わっているわけではない。ひとが書きたいものをひたすら書いているとき、それは「誰かに見せよう」と思っているわけではない。なので、書道で好きなものを描いている状態というのは、「ひとりごと」のようなものである。言葉にならないもの、感情、そういったものも自然に出てくる。書き終わってみると、なんとなく気恥ずかしい感覚になる大人は多いが、それでもその「ひとりごと」を手に取ってながめ、「なかなかいいじゃないの」と思えたときの感覚は、自分の感情を肯定できた状態と同じではないかと思っている。

十分に書いた、と思うと、人は自分以外の人の書いたものに関心を寄せ、そこから一気に交流の時間が始まる。毎回この時間が、どのクラスでもどのイベントでも、自然発生的に生まれていて面白い。そもそも交流を目的としたわけではないから、終わってさっさと帰ってもよさそうなものなのだが、ひととおり書き終わると、もれなく褒め合いが始まる。褒め合いといっても言いたいことを言いっぱなしの小気味いいものだ。初対面だろうが常連だろうが、一気に深い会話をすることが多く不思議だなあと思っていたが、考えてみたら当然なのだ。「ひとりごと」を公開しているようなものである。その人の内面はとても出やすい。だからこそ、終わってからの語りの時間は、いつも深く心地よい。ある人は「温泉かサウナに行ったみたい」と表現している。書きっぱなし、言いっぱなし、いろんなものを手放した感覚になるらしい。

書道対話のすゝめ

自分の視点（書いたもの）に他者の視点（言われること）が加わることで、それはエンパワメントされる。対話は「双方向のコミュニケーション」である。書道対話はその点で、自分自身との対話から始められるからこそ、その安心の土台の上に他者の表現や言葉を重ね、より「聴く耳」（柔軟性）が発達するのではないかと思う。書道塾を始めるときには予想していなかったことではあるが、確実にここに通ってきている方々の柔軟性、多様性、許容量が増している。ここで語っていく言葉がそれを物語る。明らかに否定語が減った。自分が褒められた瞬間の反応が謙遜ではなく「ありがとう」に変わった。これは、大人に限らず子どもでも同じである。

とてもシンプルなことではあるが、大事にしていることを大事にして生きたい、その願いが誰にでもある。それを追求していく作業が対話だとすれば、単なる共感でもなく、受容でもないやりとりである。今までは「言葉」に頼りがちだった対話に、「書」という自由な表現活動の可能性があるような気がしている。



高校生Kさんの作品

櫻 井 育 子（生涯発達支援塾TANE 代表）
宮城県在住，1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。
「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。
「つなぎめを学ぶ講座」，「旅する書道塾tane」も開催中。http://ikuko-sakurai.com

社会教育の周縁

（３）社会教育の終焉②

山本 竜司（社会教育主事／社会人大学院生）

前稿では、松下の教育観から見た社会教育批判についてふれた。松下の批判は、厳密に言えば、「社会教育行政」に向けられたものである。

社会教育は日本独自の概念であり、諸外国で学校外教育に対応する概念としては、成人教育（Adult Education）やコミュニティ教育（Community Education）などが挙げられる。日本の社会教育は、成人だけでなく青少年を含めた全世代的であるところが特徴である。これに対して、諸外国の学校外教育は基本的に成人教育が中心である。

すでに述べたとおり、社会教育の法的定義は、「学校教育以外のすべて」であり、松下も「社会教育は、文部省（当時）・教育委員会所管のタテ割り施策の総体」と指摘している。松下は、これを社会教育行政の「ゴッタマゼ的性格」と表現している[松下：126]。現在では、「生涯学習」の理念のもと、文部科学省・教育委員会（文教施策、教育行政）の枠を超え、社会教育は地域再生・まちづくり・市民協働などさまざまな行政領域を巻き込んでいる。このような施策としての多様性ゆえに、社会教育のわかりにくさ、あいまいさにつながっているといえよう。しかし、逆説的にいえば、「このあいまいさが、社会教育行政を持続させて

きた」と松下は指摘する[松下：130]。

松下の社会教育行政批判の矛先は、制度としての社会教育主事など専門職員にも向けられる。市民に優越する「社会教育指導者万能論」は破綻しており、成熟した市民に対して「指導・援助」するという前提は崩れているというのである。今日の生涯学習社会という文脈から見れば、もはや「指導者」という立ち位置ではないだろうし、少なくとも社会教育万能論を自負するような社会教育職員などいないだろう。松下も、「社会教育行政関係の個々の方々を問題としてのべているのではない。（中略）ここでは社会教育行政という制度・政策ならびに理論構成の問題点を指摘しているのである」と補足している[松下：152]。

松下のいう、社会教育行政の「ゴッタマゼ的性格」は当を得たものであり、それゆえに、社会教育行政に何が求められているのかが問われる。あるいは、松下のいうとおり、もはや社会教育行政は不要なのだろうか。社会教育行政は実体として存続するのではなく、「機能」として存続する方向性を提案する意見もある。私も、社会教育が果たしてきた機能が担保されるのであれば、必ずしも「社会教育行政」という言葉にこだわるべきだとは思わない。しかし、名は体を表すというように、何が社会教育の機能を担保するのかは重要な問題である。今般、協働やネットワークという発想が主流化しているが、「みんなで担う」というスローガンの裏側には「共同責任は無責任」というリスクもある。社会教育がどのような機能を果たしてきたか、そしてそれをどのように担保していくか、そのために専門職はどうあるべきか、あらためて考えていきたい。

＜参考文献＞　松下圭一、1986、『社会教育の終焉』、筑摩書房。

コソダテノシンリ（3）

中谷陽輔

連載第３回目です。前回は、昨今話題の「こども家庭庁」について書いてみました。

“こどもまんなか”と謳う「こども家庭庁」が発足して２か月ほど。前回に続けてとなり、少々くどくなってしまうかもとは思いつつ、「コソダテノシンリ」を謳う本連載としても、その動きはスルーできない(!?)ので、再び「コソダテ」を取り巻く施策の動きとも関連させながら、こども家庭庁について書いていきたいと思います。

こども家庭庁の設置目的と役割

こども家庭庁は、これまで複数の省庁に分かれていた子ども政策の司令塔機能を一本化することを目的に設置されました。

具体的には、子ども虐待や母子保健は厚生労働省（子ども家庭局）、子どもの貧困や少子化対策に関しては内閣府（子ども・子育て本部）、といったようにわかれていた部署が、こども家庭庁に移管されることになります。また、子どもの教育に関しては引き続き文部科学省が主に担当するものの、いじめなど重大事案に関しては、子ども家庭庁と文部科学省が情報交換しつつ協力・連携して対応に当たることになっています。

加えて、こども家庭庁は、首相直属の機関として位置づけられており、他省庁への勧告権をもつ内閣府担当ポスト（子ども政策を担当する内閣府特命担当大臣）を新設してこども家庭庁に付与することで、他省庁が講じた措置について報告を求めることができるようになっています。

このように、こども家庭庁には、縦割りを打破して支援の抜け落ちを防ぎつつ、子どもの最善の利益につながるための政策充実に向けた役割が期待されています。

子どもと家庭にかかわる支援機関の「まんなか（center）」とは

前回の拙稿でも少し触れたように、こども家庭庁のロゴマークには、“こどもまんなか”という文字が、温かみのあるオレンジ色で描かれています。そして、何かの真ん中や中心となる点・人物・機関は英語で「center」と訳されます。ただ、上述のように、子どもと家庭の支援機関としての「center」は、これまで複数存在していました。

代表的なものとしては児童相談所。英語では「child guidance center」とか「child c

onsultation center」と訳すことができるようです。また、「子ども家庭センター」、「こども家庭センター」と正式に名付けている児童相談所もあります（2023 年5月現在で、大阪府、兵庫県、広島県など）。

ちなみに、私が勤めている社会福祉法人では、「児童養護施設」「乳児院」に加えて、1997年（平成 9 年）の児童福祉法改正によって新たに制度化された「児童家庭支援センター（Child Family Support Center）」が設置されています。「児童家庭支援センター」は、子どもや育児に関する相談援助を主に担ってきた児童相談所がパンク状態になってきたことを背景に、地域に密着したよりきめ細やかな相談支援を行う児童福祉施設として設置された、児童家庭福祉に関する地域相談機関です（cf. 厚生労働省, 1998,2020; 全国児童家庭支援センター協議会 HP）。

また、1993年（平成5年）から保育所において地域の子育て家庭等に実施されてきた「地域子育て支援センター事業」は、2007 年（平成 19 年）に「地域子育て支援拠点事業」に再編されつつ児童福祉法上の事業に位置づけられました。現在も、つどいの広場や児童館とともに、子育て中の親子が気軽に集まり、お互いに交流したり、子育ての不安・悩みを相談できる場として機能しています（cf. 厚生労働省, 2007; 内閣府, 2009）。

他にも支援拠点としては、2016（平成 28 年）の児童福祉法改正により「市区町村子ども家庭総合支援拠点」の設置が自治体の努力義務となっています。こちらの拠点は、ソーシャルワークの機能を担い、すべての子どもとその家庭及び妊産婦等を対象に、福祉に関する支援業務などを行うものとなっています。（cf. 厚生労働省, 2017a）。

そして、2017 年（平成 29 年）に改正された母子保健法に基づき設置されている「子育て世代包括支援センター」（法律上の名称は「母子健康包括支援センター」）。保健師など専門スタッフが、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援を一体的に提供することを目的として、設置が自治体の努力義務となっています（cf. 厚生労働省, 2017b）。

・・・これくらいにしておきますが、子どもや家庭に関して、本稿でまだ述べていない「センター」はいろいろとあります。それこそ各種の相談窓口としても、〇〇センターと名の付くものは全国各地に数多あります（cf. こども家庭庁, 2023）。さらに、これらの役所内の窓口は、こども課、子育て支援課、こども支援課、子ども家庭支援課、母子保健課、福祉課、健康推進課、福祉事務所、など自治体によっても名称が異なったりもします。

そういった状況を揶揄したいわけではありません。私自身、イチ保護者として、子どもに関することで役所に行くときには、健診ハガキの送付元や、保育所申込み先の窓口を調べていったりはしつつ、どういうとき、どこにいくのかは手探りだった記憶があります。どの支援機関も、必要性に応じて設置されてきたであろう一方で、一個人としては、なかなか必要な支援機関の見極めにくさを感じてしまっても無理ない状況だったと思います。

子どもと家庭にかかわる支援機関の、拡散と収束

ここまで、子どもや家庭にかかわる省庁や支援機関について、どこがまんなか（center）なのか、ある意味で「拡散」していたともいえる状況を述べてきました。

かたや、行政の縦割りを打破していき、その中枢としての司令塔機能を担うこども家庭庁。ちなみに英語では「Children and Families Agency」だそうです。そこは center じゃないんかい！というツッコミをさせてくれるところが絶妙です。

・・・そんな冗談はさておき、こども家庭庁による大きな変革の一つとして、「こども家庭センター」の設置が挙げられます。

油断させておいて、結局また「センター」かいな！！とツッコんだのは、新聞の見出しを読んだかつての私です。念のため。

「こども家庭センター」は、すでに述べた、児童福祉法に基づく「子ども家庭総合支援拠点」、および母子保健法に基づく「子育て世代包括支援センター」を、関連法案の改正を通して一本化していく機関とされます。いわば収束・集約の方向によるものです。

「子ども家庭総合支援拠点」は、虐待・貧困などの問題を抱えた子どもや家庭を支援する機関、「子育て世代包括支援センター」は、妊産婦や乳幼児の保護者を支援する機関、といった大まかな違いはありましたが、重複するケースもありながら、根拠法や機関そのものが異なるため、連携が取りづらい構造がありました。

それらが、こども家庭庁の所管として、「こども家庭センター」として統合され、全ての妊産婦、子育て世帯、子どもへ一体的に相談支援を行う機能を有する機関となります。具体的な動きとしては、2024 年 4 月以降の設置を目指し、各自治体に努力義務を課すものとなっています（cf. 厚生労働省, 2022）。

拡散と収束、というテーマからは、心理学を学んだ端くれとして、拡散的思考（発散的思考; Divergent thinking）および収束的思考（集中的思考; Convergent thinking）が思い浮かびます。拡散的思考と収束的思考という用語は、1956 年に知能研究の第一人者の J. P. Guilford が生み出しました。

それらは対極的にあるとされることが多く、例えば、拡散的思考には創造性が、収束的思考には論理性が必要とされます。他にも、拡散的思考は一つの問題に対して複数の解決のアイディアを生み出すもの、いわば可能性を広げて探るもの、である一方で、収束的思考はある問題に対する適切な解決法を見出すもの、いわば可能性を絞り込むもの、とされたりします。

これらを活かした問題解決の段階としては、拡散的思考で、多種多様な発想やアイディアを出していき、収束的思考で、解決目標や価値と照らし合わせてそれらの発想やアイディアを評価・検証して絞っていく、という流れがあります。誤解のないように述べたいのですが、拡散的

思考も収束的思考も、いずれも最適な解決にいたるための思考法であり、問題の質や状況による使い分けが必要です。

そのように考えると、子どもと家庭に関わる支援機関があちこちに様々な形で、ある意味で「拡散」するかのように作られてきていたのは、各所での多様なニーズへの解決を模索するプロセスにおいて、いわば子どもと家庭の実態に応じる中での、自然な動きだったといえるかもしれません。

それが、今は「収束」の段階として、こども家庭庁にまとめ上げられながら、子どもと家庭を真に支援するというのはどういうことか、という壮大なテーマを解決するための動きが問われている。・・・そのための“こどもまんなか”という理念。

だとすると、これまで子どもと家庭にかかわる「センター」に戸惑っていたかつての自分も、大きな流れの中に位置づけられるような気が・・・しませんかね。どうでしょうね。

とにもかくにも、そういった大きな流れの中で、一人でも多くの子どもや保護者が、さらなる混乱やたらい回しなどによって支援から抜け落ちることなく適切に支援されますように、と願いつつ、次稿は私自身がそろそろ流れを抜けて、こども家庭庁以外の話題について書こうと思っている、ということも付記しつつ、本稿を終えようと思います。

【引用・参考文献】

- こども家庭庁（2023）. 相談窓口 こども家庭庁 Retrieved May 25, 2023 from https://www.cfa.go.jp/children-inquiries/
- 厚生労働省（1998）. 児童家庭支援センターの設置運営について（児発第三九七号通知） 厚生労働省 Retrieved May 25, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta9237&dataType=1
- 厚生労働省（2007）. 地域子育て支援拠点事業：実施のご案内 こども家庭庁 Retrieved May 25, 2023 from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/321a8144-83b8-4467-b70e-89aa4a5e6735/9c4ab7a7/20230401_policies_kosodateshien_shien-kyoten_16.pdf
- 厚生労働省（2017a）. 市区町村子ども家庭総合支援拠点の設置運営等について 厚生労働省 Retrieved May 25, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000161700.pdf
- 厚生労働省（2017b）子育て世代包括支援センター業務ガイドライン 厚生労働省 Retrieved May 25, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakuj

ouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kosodatesedaigaidorain.pdf
・ 厚生労働省（2020）. 社会的養護の施設等について こども家庭庁 Retrieved May 25, 2023 from https://www.cfa.go.jp/policies/shakaiteki-yougo/shisetsu-gaiyou/
・ 厚生労働省（2022）.令和 4 年 6 月に成立した改正児童福祉法について：自治体向け改正児童福祉法説明会資料【資料 1】改正児童福祉法について　子ども家庭庁 Retrieved May 25, 2023 from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic page/field ref resources/a7fbe548-4e9c-46b9-aa56-3534df4fb315/5b2c20ea/policies jidougyakutai Revised-Child-Welfare-Act 04.pdf
・ 内閣府（2009）. 平成 21 年度版 少子化社会白書：第3節 地域における子育て支援拠点等の整備及び機能の充実を図る 内閣府 Retrieved May 25, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2009/21webhonpen/html/i2403000.html
・ 全国児童家庭支援センター協議会 HP Retrieved May 25, 2023 from https://zenjikasen.com

＜プロフィール＞
児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、
早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て＆子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
（https://childcare-support.hatenablog.jp/）

対人援助マガジン　５３号

教室の窓から

令和 5年
(2023 年) 5月
來須 真紀

やってきましたゴールデンウィーク明け

ドキドキワクワク？の出会いの４月。それが終わり、教員が２番目にドキドキするのが、実はゴールデンウィーク明け…。なぜなら連休明けのサザエさん症候群な教員と新学年新学級に慣れてきた子どもたちとのコラボ…。パワーアップした子どもたちと弱体化した教員となるからなのです。５３号では、そんな子どもたちと先生に５月によく行われる検診について、お伝えしようと思います。

検診の嵐

学校では、年に一度学年の初めに内科検診、歯科検診、耳鼻科検診、身体測定、心電図検診、眼科検診、視力検査、尿検査などなど、たくさんの検診があります。身体測定以外は、学校医と呼ばれる学校の近所の病院で自治体から委託されているお医者さんが日替わりで学校にやってきて子どもたちの検診をします。これは、よくよく考えるとすごい対人サービスだと思います。病院へ行かず、無料で、お医者さんの検診が年１で受けることができる。手厚いサービスですよね。

検診あれこれお医者様

この、学校医になってくださっている先生は、年間１～２回学校で検診をしたり、学校保健委員会と言って子どもたちの心身の健康状態について協議する会で助言をしたり、就学時検診で次年度就学児に検診をしたり、学校内で集団感染などおこった場合の相談に乗ったり…。自治体からの謝金以上の重責を担っていただいています。しかも、学校内の検診は、ご自分の病院を空にしてきてくださる訳で…。本当に申し訳ないと思ってしまうのは、私だけでしょうか…

検診あれこれ保健室の先生

そして、検診にて大活躍するのが、なんといっても保健室の先生養護教諭。検診の日程調整、お医者さんとの連絡調整、検診計画を立て、当日の役割分担を考える、当日使う器具の準備片付け、記録整理、検診結果の記録、保護者への通知、などなど…。しかも、養護教諭は基本的には１校につき１名多くて２名。一人でこんなたくさんの仕事を短期間に。けがをした子や体調が悪い子の来室の合間を縫って

やって下さています。ありがたい、ありがたい。

検診あれこれ教頭先生

学校のなんでも相談役といえば教頭先生。実は検診でも教頭先生は大活躍。養護教諭のサポートをしながらお医者さんのお出迎え(駐車場の確保を含む)して校長室へご案内して、お茶を出すように頼んで、検診がスムーズに進んでいるか管理して…。実は、検診当日は通常業務に加えて検診日のミッションを遂行されているのです。

検診あれこれ担任の先生

担任の先生も検診の日バタバタします。いつもと日課が違うので子どもたちにその日課を理解させることや学習の段取りを日課に合わせることから始まります。「今日の検診の説明はどの時間でどういうふうにしよう?」「検診の順番待ちの時間は何をさせよう?検診が終わって教室に入った子どもには何をさせよう?」「受診の順番は誰からにしよう?」などなどやることはいっぱいです。中にはスケジュールが変わると嫌がる子どもや検診自体を嫌がる子どももいるので、スケジュール変更や検診についての説明には時間をかけます。

検診になると、クラスごとに順番で受診します。大抵前のクラスが終わりかけに誰かが「そろそろ検診にきてくださーい」と呼びに来てくれます。それまでの時間は、途中で途切れても差し支えのない学習に取り組んでいます。(漢字練習とか読書とかテストやプリントの直しとか)それでも「ちょっと待ってー。まだやめたくないー」なんて言う子どももいるのでそれをなだめながら整列させ、検診会場に連れていきます。

検診会場に着いたら、大抵前のクラスの検診が終わっていません。(途切れなく検診をすることで学校医さんの拘束時間をなるべく少なくするという工夫)ということで、ここでは教員の決まり文句「静かにしましょう」が連発されます。それに対して、非日常のテンション UP の子どもたちはじゃべりたくて仕方ない…。一昔前?にあった集団予防接種での「痛かった?痛かった?」のテンションに似たものを感じます。(そう考えるとほほえましいのですが)ただ、この子どもとの闘ぎあい、どうしてもこちらのお願いを聞いてもらう必要があるのです。それは、担任にとっても重責。「記録」があるからなのです。特に歯科検診は、歯の状態の記録を歯科衛生士さんばりに付けなけらばなりません(私の勤務した学校は大抵そうでした)しかもお医者さんは大抵マスクをしていらっしゃる。そしてちんぷんかんぷんの専門用語。これらを聞き逃すまいと必死なのです。だから、本気で静かにしてほしいのです。(私個人的な見解かもしれませんが…。昔「記録が聞こえないからお願いだから静かにして」と子どもにお願いしていたところたまたまその場面を校長先生に目撃され、「そんな自

分本位の指導をしてはならない。そうではなくて自分自身のための検診だから真剣に静かに受けなさい」と指導しなさい。と言われたこともあります。)

検診あれこれ総括

と、実は、検診一つとってもバタバタな学校現場。現場の先生からは、「これは、本当に学校がやらないといけないことなのか。」「子どもの病院に連れていくのは保護者の責任で学校がすることではない。」などの声が聞こえてくることもあります。

また、保護者の立場からすると学校の検診で引っかかると病院の受診を求められるため、すでに治療中の疾患を指摘されて帰ってくると、学校の検診のために病院受診をしなけらばならないということも起こってきます。「あーめんどくさい。うちの子アレルギー性鼻炎なのは、10年前から知ってるのよ。知っていて経過を見ているのよ。いつ病院に連れて行こうかしら。」なんて声も聞きますし、反対に「え?うちの子の活舌が悪いのは舌の構造に問題がある可能性があるって?それは、分からなかった。早速病院を調べよう。」という、ありがたかった。という声も聴きます。

私個人的には、家庭によるかな?という気がします。前任校(短信にも書きますが転勤しました)のような外国籍のご家庭が多い学校には、子どもたちの健康に寄与するためには必要だと思いますし、こまめに病院の受診ができるご家庭には必要ないかもしれません。ちなみに我が家は…。毎年歯科検診にはドキドキです。(歯科は回数と時間がかかるんですよね…。しかも歯並びが悪いので、そこを指摘されると、矯正治療がいるのかな?とかいろいろ考えます。子ども目線でなくてすみません)

ただ、子ども目線でみるとこの検診。あまりいいものではないみたいです(笑)検診が好き。楽しい。という子どもはあまり聞いたことがありませんね。早期発見早期治療で不必要な苦痛をしなくて済むからがんばろうねということでしょうけど子どもたちにはなかなか…。

皆さんは、この学校での集団検診。どのように考えられますか?

社会科の授業を対人援助学の視点から

2023年5月14日　内田一樹

0. はじめに

年度末は卒業式に入学式とバタバタと式典に追われるうちに慌ただしく過ぎ、年度初めも新しい生徒や授業との出会いでゴールデンウィークまで一気に駆け抜けました。この間クラスの生徒達は高校3年生に上がり、卒業式や入学式といった式典でも中心的な役割を果たしていました。行事をつくる過程に関わっていると、子ども達が互いに助けあっている様子や教員が助けられる場面に遭遇します。一方で子ども達に伴走していく過程で、寄り添い方について考えさせられる場面も多々あります。例えば、悩みを抱えた生徒が来た時です。生徒の話を何時間でも聴くということ/きちんと聴く時間を区切って一定の所で切り上げること/対案や解決策をこちらから提示することなどです。スキル的な部分だけでは無く、その状況や時と場合によって判断をして、こちらからの対応は変わります。そしてその都度「これで良かったのかな～」と思いながらもすぐに次の対応がやってきます。この繰り返しをしているうちに1年が終わっていきます。

先日、ゴールデンウィークに愛知県の全国高校生サミットと新入生歓迎フェスティバルに生徒の引率で行ってきました。高校生が校則等学校の在り方や学校内での関係性など互いの悩みや困りごとを共有し、こうした悩みや困りごとを持っているのが自分だけではないと気付いていました。一人ではないという発見、良い意味での“つながり”は次に進む力をもたらしてくれるのだなあと感じます。そして生き生きとしている高校生を見ると、不思議と自分も励まされているような、エネルギーをもらえるような気持ちになります。「援助する」という行為のさらにその前にある踏み出しかけの何かしらがそこに存在するのかもしれない、というと少し理想論が過ぎるでしょうか。

1.「対人援助」と「ケア」の違いは何なのだろう？

「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」これは改正された教育基本法の前文の言葉です。教育基本法改正については議論もありますが「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を育てることが教育の目的であるとするならば、そのことと「対人援助」はどのようにつながるのでしょうか。今回は「ケア」という観点から考えてみたいと思います。

「対人援助」は「Human Service」と訳出される言葉です。Serviceは「奉仕する」という意味が強く、「たすける」という実践的行為[1]の意味合いが全面に出されているように感じます。マルクスの一方の「ケア」＝「care」は語源については「悲しみ」と「耕す」の2つの説があるようです。ベレニス・フィッシャーとジョアン・トロントは「もっとも一般的な意味において、ケアは人類的な活動α species activityであり、わたしたちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編み込も

[1] 望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇編『対人援助学の可能性　「助ける科学」の創造と展開』2010年,福村出版

うとする、あらゆるものを含んでいる。」と定義づけています。そしてよりよいcareを行うために4つの局面として、「関心を向けること Caring about」「配慮すること Caring for」「ケアを提供すること Caregiving」「ケアを受け取ること Care-receiving」を提示し、こうしたケアの複雑なプロセスを経た実践は民主主義における「善き市民」を想定するときの基礎になっている[2]としています。この点において、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を目指していく上で「ケア」の果たす重要性が現れているように思います。

私自身の印象としてはHuman Serviceもcareもどちらも重なる部分は多くあるけれど、Human Serviceはより高度な、特定の人々に対する「たすける」行為であり行為の実践そのものを焦点にしているのに対して、careはもっと広く一般の関係性の中で生じる「たすける」行為であり、他者への向き合い方を焦点にしているように感じています。しかしまだまだ私自身の「service」と「care」の違いや「help」など他の「たすける」という言葉や概念との差異に対しては理解も浅く、これからも考えていきたいなあと思っているテーマです。

そのうえで、現時点で私が考えているのは「ケア」する人→「対人援助」者という図式が成り立つのではないか、ということです。日常の中での困っている人に目を向け、配慮し、行動することが「ケア」であることに対して、さらにその困っている人に対してその方策の種類を増やしたり質を高めて行ったりすることが「対人援助」なのではないでしょうか。そしてさらにその先に「「助ける」という手つかずで自然な因果としては維持され難い行為を維持することを絶えず確認していくこと、継続的に「助ける」を実践する対人援助者が、被援助者の自己決定を疎外しない「他律的自己」を実現するための作業を行い得ているかを絶えず自己検証すること、そして、そのための社会的要請としての援護行動は「言語行動」を誠実に実行しているか、ということ」[3]があるのではないでしょうか。

そう考えたときに、「対人援助」を専門で学ぶ大学、あるいは大学院で教育を受ける前に、「ケア」についての教育を義務教育、あるいは高校の中で行っていく必要はあるのではないでしょうか。それは教育の目的とも矛盾しません。

ただし、ここでいう「ケア」を学ぶということは子どもを「ヤングケアラー」にするということではありません。確かに子どもと「ケア」といったとき「ヤングケアラー」が想起されます。この問題は「子どもがケアすることが悪い」というものではなく、子どもの権利条約に定められているような子どもたちの持っている様々な権利、例えば子どもの意見表明権や学習権などが侵害されていることが問題であると私は思っています。合わせて「ケア」を教え込む、「ケア」する人であることを強く評価すると、それこそ「ヤングケアラー」を肯定することになりかねません。フーコーが『監獄の誕生』で指摘している通り、学校あるいは教師はそれだけの権力を有しています。そのため「ケア」について学ぶことは、「ケア」を評価する、あるいは教え込むということではなく、自らが自然と気付くこと、「ケア」の場に立ち会うことではないでしょうか。教育の中にどのように「ケア」の視点を落とし込んでいくのかについては教育哲学者のネル・ノディングズも提言を行っています。

かれこれ10年ほど前、私がまだ大学生だった頃医学部に進学した高校時代の友人と久しぶりに会う

---

[2] ジョアン・C・トロント著,岡野八代訳『ケアするのは誰か？』2021年,白澤社

[3] 望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇『対人援助学の可能性　「助ける科学」の創造と展開』2010年,福村出版

機会がありました。医学部生の彼が言うには「医学部に入って一番難しい科目は倫理だ」そうです。彼は笑いながら半分冗談めかして「周りの学生含めて自分たちはこれまでは理系科目の勉強しかしてこなかったから、答えのない「倫理」のような科目がとても苦手なんだ。数字で測れないし答えの出ない問いは難しい。周りもけっこう単位を落としたよ」とこぼしていました。これはあくまでも居酒屋での雑談程度のものではあります。それでも一般に偏差値の高い難関といわれる医学部に入学するような、いわゆる「勉強のできる人たち」であっても答えの出ないような問いは難しいのか、と驚いたことを覚えています。それぐらい倫理や哲学と言われることは難しいのかもしれないし、大学までの学校教育の中での扱われ方にも問題はあるのかもしれません(私と彼が学んだ高校は確かにいわゆる地方の「進学校」と言われる高校であり、受験でのペーパーテストを意識した問題演習中心の授業が行われていた)。「ケア」について早くから考えることは、何が援助になるのか、どのような人が援助を受けるのかというような答えのない問いに結びつき、答えの出ないような問いに向き合う素地を作ることにつながるかもしれません。

最後に「ケア」の視点を意識した高校の社会科の授業をどのように作っていこうとしているのかということです。それは「関心を向けること Caring about」「配慮すること Caring for」「ケアを提供すること Caregiving」「ケアを受け取ること Care-receiving」をどのように実践していくかともかかわっています。歴史や現代社会の中で誰の声に耳を傾けるべきか「Caring about」、そしてその声に対する責任を引き受ける「caring for」。そして自分にできることは何かと考え行動、あるいは言葉で表現する「Caregiving」、そして同時に自らも他者からの言葉で救われたり、行動によって助けられたりしていること「Care-recieving」に気づきます。今月の「はじめに」に書いた全国高校生サミットはまさにそうしたことが高校生同士で行われている場であったように感じています。こうした時間を日常の授業(歴史・地理・公民・探究等)の中でつくっていくことが一人の社会科教員としての自分の目標です。

2.授業実践報告

①「Caring about」と「Caring for」における失敗

現勤務校に来てから1年目の公開教育研究会でのことです。公開教育研究会とは保護者や研究者、教員や市民など広く一般に公開される授業日のことです。前半に授業が行われた後、後半には教科やテーマごとに分かれて来校した人たちとともに検討会を行います。その時の社会科は中学3年生で裁判制度についての授業でした。授業者はかねてから弁護士会と協同で授業をつくるための準備を進めており、当日は裁判員制度にかかわって教材であるドラマ映像を視聴したのち、映像の中に出てきた事件の被告人に対してどのような判決が適切かを生徒達に議論してもらいました。全部で4、5グループに分かれ、各グループ生徒4~5名と1人弁護士がつくというものでした。私の役割は映像記録であり、当日はビデオを回していました。授業は大変盛り上がりました。子ども達はドラマの内容をもとにあーでもない、こーでもないと楽しそうに議論を交わしています。難しいところや判例のようなものを求めて弁護士さんに質問をしている場面もありました。弁護士さんと一緒に考えられることで、質も伴った議論を行っています。大変良い授業だと私は思いました。それぞれのグループで最終的には結論を出し、最後に来てくれた弁護士さんたちから一言ずつ生徒たちにフィードバックがありました。しかし、そこでのある弁護士さんからの一言に私はハッとさせられました。それは次のような言葉でした。

「今日は皆さん楽しく議論をされていました。自分事に引きつけて学んで考えてくれていることは嬉し

いです。ただし楽しいだけではなくて、自分が裁判員として呼ばれた際には被告人、人一人の人生がかかっていることも忘れずにね」

その言葉に私はハッとさせられました。記録をとっていて子ども達が楽しく議論をしていることをもって、私はこの授業を大成功だと思っていました。しかし確かに楽しそうに議論をすることの裏に確かに被告人の人生もかかっているのです。量刑や判決を子どもたちが楽しく話し合っていた場面を思い出します。楽しく学ぶことは大切です。強制されるあるいは知識理解だけの裁判員制度の授業よりも、判決を出すという子どもが主体的に学びを得ていくことも重要です。しかし、確かに人一人の人生がかかっている責任という視点も確かに忘れてはいけないのだ、ということに気づかされました。

もう一つ、これは昨年度のことだが、私はウクライナ戦争について子どもたちと学ぶにはどうしたらよいかを考えて、実際にウクライナから日本に避難してきている人に話を聞こうと考えました。今考えるとこの時点でかなり危うい発想であったと思います。そこで、本学園が連携している大学に問い合わせを行いました。すでに大学附属校の別の先生も問い合わせをしていたらしいのですが、問い合わせをしている過程で、大学の方からかなり「倫理的な面」で難しいのではないか、というお返事をいただきました。母国での戦争は今も続いていて、日本に逃げてきた人に戦争のことについて話したり、聞かれたりするような状況になることは相談することも含めて難しいのではないかと。なんでそのことにもっと早く思い至らなかったのかと思いました。確かにその通りであり、大変に猛省しました。

以上の２つの経験を通して思うことは、子ども達により伝えたい、より考えてもらいたいと教材を選ぶとき、そして子どもたちへの問いの中で「Caring about」「Caring for」を忘れてはならないということです。関心を向けても、そこに配慮が無ければ土足で踏み入ることになりかねません。当然ですが、子ども達が考えるための教材や議論を行うにあたっても、「子ども達のため」という大義名分のもと何でも許されるというわけではありません。何よりも教員に「Caring about」「Caring for」の視点が欠けていた場合、子ども達の議論や考えの中にもその視点は欠けたままになりかねないのです。授業で子どもたちが盛り上がりさえすれば、どのような問い、議論でも許されるわけではないのではないでしょうか。教材・問いの質を考えるときこのケアの視点を忘れてはならないと思います。

②「女性の人権宣言」

毎年この季節になるとフランス革命を教えています。かっては世界史Ａの中で、現在は歴史総合という科目の中での単元です。２年ほど前から、その中でメアリ・ウルストンクラフトとオランプ・ド・グージュを取り上げるようになりました。

その中で大きな問いにしていることは２つ。１つは「メアリ・ウルストンクラフトはルソー『エミール』のどのようなところを批判したのか？」という問い。もう１つは「オランプ・ド・グージュの書いた『女性の人権宣言』と『フランス人権宣言』はどのように違うのだろうか？」ということ。フランス革命はこれまで声を上げることを許されなかった人々が声を上げて、社会を変革していく過程です。そうした中で女性も権利獲得に向けて声を上げました。

メアリ・ウルストンクラフトはイギリスの女性で、『女性の権利の擁護』の中でルソーの『エミール』における女子教育について批判しました。ルソーはフランス革命においては『社会契約論』で思想的な背景となった人物であり、『エミール』についても教育に関する古典として一定の評価や教育へ及ぼした影響があります。ルソーについての説明はフランス革命を学ぶ前に、社会契約説の中でも生徒たちに

詳しく行っています。ルソーの『エミール』の女子教育の部分については、当時の価値観が反映されているものでもあり、生徒達にはメアリになったつもりで批判をしてもらいます。以下はその資料として用いているものです。

男と女とは、性格においても、体質においても、同じようにつくられてはいないし、同じようにつくられるべきでもないということが証明されれば、男と女とは同じ教育を受けるべきではないということになる。男と女とは、自然の指示にしたがって、協力して行動しなければならないが、同じことをすべきではない。
(中略)
女性には、あるいは一人の男性に、あるいは人々の判断に、服従しなくてもすむようになるときはないし、人々の判断に超然としていることは許されないのだ。女性の基本的な、そしてもっともたいせつな美点は、やさしくするということだ。男性という不完全な存在、しばしば多くの不徳をもち、いつも欠点だらけの存在に服従するように生まれついている女性は、正しくないことにさえがまんをし、夫が悪いときでも不平をいわずに耐え忍ぶことをはやくから学ばなければならない。夫のためにではなく、自分のために、女性はやさしくしなければならないのだ。女性の恨みごととしつこさはいつも自分の苦しみを大きくし、夫のたちの悪いやりかたをひどくさせるだけだ。男性は女性が自分を征服することになるのはそういう武器によってではないことを知っている。天が女性を人に取り入ることがじょうずで説得力に富んだ者にしたのは、わめきたてる者にするためにではない。弱い者にしたのは、命令させるためにではない。やさしい声をあたえたのは、悪口を言わせるためにではない。容貌を繊細につくったのは、怒りに顔を醜くさせるためにではない。腹を立てると女性は自分を忘れてしまう。女性が不平を言うのはしばしば正しいことだ。しかしわめきたてるのはどんなばあいでもまちがっている。男も女も自分の性にふさわしい調子をもちつづけなければならない。やさしすぎる夫は妻をなまいきな女にすることがある。ところが、どんな荒っぽい男でも、怪物でもないかぎりは、妻のやさしい態度はかれをなだめ、いずれはかれを征服することになる。

—ルソー著　今野一雄訳『エミール』

私も性自認が男性である以上、男性としての恩恵をこの社会の中で受けてきたのだと思います。この文章を読んで思う私の批判は男性である私目線のものです。高校生に授業の中で問うた時、男子生徒ももちろんおかしいと声をあげてくれるが、女子生徒が多く声をあげてくれる印象があります。

去年はこんなことがありました。ある男子生徒が「でもやさしくするって大事じゃない？彼女にするなら怖い人よりも優しい人が良いよ」と。私はどう返事をしようかなと思っていましたが、女子生徒たちから「おかしい、おかしい」「女性だけが男性に優しくするのはおかしくない？だったら男性も優しくないと」と返されていました。私は自分が教えるよりも、生徒同士が自分たちの感覚、言葉で伝え合って互いのコミュニケーションの中で考えを変化させていく様子を目にすることができました。メアリが声をあげて伝えたかった内容は、ジェンダーギャップ指数が先進国中最下位であり、ニュース等で政治家による女性蔑視発言や女性差別的な制度が度々明るみになる今の日本社会の中でも通じることだと思います。

オランプ・ド・グージュについては、生い立ちやその最期も含めて２つの『人権宣言』比較の中で考える。オランプは劇作家として奴隷制度に関しても彼らに寄り添うような劇を作っています。『女性の人権宣言』には前文と後文で男性と女性にそれぞれ呼びかけるグージュの言葉があります。

「男たちよ、公正であることはできないのだろうか。ひとりの女として問いたい。少なくとも、女性から権利を奪わないと誓うことはできないだろうか。おしえてほしい。誰が、あなたに女を虐げる上位者としての支配力を与えたというのか。」

「女よ、目覚めよ。理性の鐘が世界中で鳴り響いている。あなたが持つ権利を認識せよ。強力な自然の帝国を取り巻いていた偏見や狂信、迷信、嘘はもはや存在しない。真実の光が、愚かさと簒奪の影を追い払った。隷属状態にあった男は力をつけ、鉄鎖を打ち砕くために女の力を必要とした。だがひとたび自由になるや、彼は仲間である女を不当に扱った。ああ、女たちよ。女たちよ、いつになったら目を開くのだ。あなたたちが革命で獲得した権利とは、いったい何だったのだ。」[4]

オランプの言葉をきいたうえで、「フランス人権宣言」と「女性の人権宣言」の差異をさぐっていきます。その差こそが彼女が革命下のフランス社会に訴えたかったことです。

この２人の女性を取り上げることを通して、弱い立場の人たちの声をきく営みとそれに対してどのように応答していくかを生徒たちには体験をしてほしいと願っています。とはいえ、先日高校１年生に授業をしてこの問いを出しましたがやはり難しい様子でした。それでも比較を通して新しい気付きを得ている人たちもいて、僕も生徒達の気付きから学ばせてもらっています。

疑問に思うこと、答えの出ないことはあるが、それに対して応答しようとすることが、歴史の中の問いから責任を引き受けるということであると思います。授業を通してジェンダーギャップを解消する方法やこうあるべきだという答えは言いません。目の前にある課題にまずは気づいてもらって、その声に耳を傾ける時間を作ること、そしてそれによって生徒達自身が応答責任として、これからの社会を作っていく一員として考えていかなければならない問いを残しています。女性の声だけではなくて、現代では性的マイノリティの人達やジェンダーに関わってこれまで無視されてきた声もたくさんあります。それらに耳を傾けようとすることが、「Caring about」「Caring for」であり、さらに「対人援助」を学んでいく素地へとつながっていくのではないでしょうか。

③動機づけの転移―「東北と復興」文集から

教育哲学者のネル・ノディングズはケアする者の意識状態について、他者を完全に自己の中に受容する専心と動機づけの転移と特徴づけました。特に動機づけの転移について「私たちを動機づけるエネルギーが、他者と他者の課題に向かって流れ出すことを意味する。私は他者が伝えているものを受け取り、他者の目的や課題を助けるように対応したいと望んでいる。動機づけの転移を経験すると、人は考え始める。自分自身の課題を考慮し、計画し、再考するのと同じように、今度は自分たちが他者を助けるために何ができるのかと考える。専心と動機づけの転移は、何をすべきかということを命じない。ただ、ケアするときの意識状態をと特徴づけるのみである。しかしながら、私たちの思考は、今や自分自身のことを行うときのように注意深いものとなるだろう。私たちは他者のニーズに心を奪われている。」[5]と書いています。

昨年度一年間行った選択講座「東北と復興」は、東日本大震災と復興の今を石巻市へのスタディツア

[4] シモーヌ編集部編,『シモーヌ』,2020 年,現代書館

[5] ネル・のディングズ著,佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦　もう一つの教育を求めて』2016 年,ゆみる出版

ーや 3.11 子ども甲状腺がん訴訟について扱う中で当事者の方たちとの出会いを通して、学び深めていくものでした。事前、事後学習を通して主に生徒同士でグループワークをして話し合う時間も多かったです。年度末に生徒達には 1 年間学んで感じた事について 400 字詰め原稿 4 枚程度でまとめてもらい、文集として作成しました。今回はその文集の中の各自の言葉を一部抜粋し何が生徒の中で起こっていたのかを最後に考えたいと思います。

A さん
「この講座では色んなことを教えてもらったり、また新しい発見などができて個人的にもっと調べたいと感じました。震災から 12 年がたって、震災を知らない人も増えていってると思います。自分にとって東日本大震災は日本にとってとても大きな歴史の一つでもあります。震災を知らない子どもたちにどう伝えて、今後このような震災にであったときにどうしていくべきかを考えるのがとても重要です。」
B さん
「三つめの「ひとくくりに復興と言っても、人それぞれの考えや思いがある」ことは、様々な場所での遺族の方々のお話から学んだ。私自身震災に興味を持ったきっかけが、「伝える」写真集だったため、色んな人たちの大半は伝えたい、残したい人なのだろうと勝手に推測していた。だが、「残しておきたい、伝えたい」と思っている遺族もいるが、それと反対に「見たくない」などと思っている遺族もいたのだ。一くくりに「残すべき、伝えるべき」と思いこまず、色々な考えや思いがあってこその復興なのだと学ぶことができた。」
C さん
「だから、実際に行ったときに受けた衝撃がすごく大きく残っています。こんなに海や川や山が近くて、何もなくて、あたたかくて、綺麗で、ここでたくさんの人が亡くなっていて、当時のことは分からないし、今のことしか見ることはできないけど、それでもたくさんのなにかが私の中にあって、それを言葉にすることはとても難しいです。その時に感じたものを忘れたくなくて、残しておきたくてでもできなくて、すごくもどかしくて悲しくなります。今も書いているけど本当に書きたいことは何もかけていなくて何もできないな、と思ってしまいます。でも、諦めたくないから、頑張って、がんばって、いつか自分の言葉を見つけたいです。この 1 年はそんな自分の中での葛藤が大きかったです。復興ってなんだろう、被災者って誰をいうんだろう、自分には何ができるんだろう、どうしたら伝えられるんだろう。きっと全部答えなんてないから、これからもずっと考えながら生きていきたいなと思いました。そしてまずは聞いた人みんなが言っていたこと「知ること」を続けていきたいです。そのためにいろんな人と出会って、繋がって、見て、聞いて、調べて、考えていきたいです。私も繋げていけるように、学び続けていきたいです。」
D さん
「ずっと心に残っていることは、今も現地に住んでいる方に、「私は震災遺構(門脇小学校)をみたくない」と言われた事だ。現地に住んでいる人はほぼ毎日見るだろうし、それを見て辛いと思うなら「撤去するべきなのかな」という気持ちもある。しかし、私は震災遺構がないと「本当に被害があったの？」と思ってしまうだろう。写真だけでも理解できるが、実物が無いと実感が湧かない。震災遺構を残したい人と残したくない人、現地の方も色々な意見があるだろう。この問題は「復興」を考える上で重大であると思った。大川小学校は在学していた生徒が残して欲しいという事で震災遺構になった。この場合、

住民の反対はあったのだろうか。反対派は言いづらいだろうなと思う。この疑問が私の中でずっと残っている。」

Eさん

「甲状腺がん裁判の原告の方の意見陳述を読んだ時、本当に言葉にならない苦しさを感じました。このような経験をしなければならない苦しさを感じました。このような経験をしなければならない人がいる現実がものすごく悲しいし、このような実情に無知だったことを反省しました。北村弁護士のように直接的に人助けをすることはまだ難しいかも知れないけど、「知る」ということだけでも向かい風の中勇気を出して声を上げ続ける原告の方に寄り添うことができる、意味のあり価値のあることだと感じました。この「知る」ことが大切であるということは、一年間「東北と復興」の授業に参加して生まれた私の思いです。更に「知る」ということが「復興」に繋がると考えます。一年を通して被災者の方にお話を聞き、一人でも多くの人に知ってもらうということを基にして行動されている方が大多数だと感じました。学んだことを活かして自ら行動を起こすというのは容易ではなく、それを目標として学ぼうとしてしまうと、中々足を踏み入れづらい部分があると思います。私自身も、学んだからには周囲の人に伝えなければならないという義務感を感じていました。しかし、発信しなければ必ずしも復興の手助けにならない、という訳ではないと思います。まず、知ってみるという一歩を踏み出すことで、被災者の方に寄り添うことができ、何か特別なことをしようとしなくても、「知る」というだけで私たちは復興の手助けが出来るのだと思います。」

Ｆさん

「また「自分にできること」に立ち尽くすような気持ちになることも多くあった。学んだ責任を果たせているかという問いが常にあった。そんな中で「東北のことを忘れない」「考え続ける」という言葉をきいても、それだけでは何も力になれないのではないかと無力感を感じていた。しかし学びを重ねていくうちに、それしかできないのではなく、それができるのだという風に響くようになった。自分ができることを問うてそれが抽象的であっても意味がないと切り捨ててはいけないのだと思った。」

「震災直後、一刻も早い復興をめざし支援が迅速に行われた。しかし素早く変わる状況の中で精神的に復興から取り残されてしまった人もたくさんいる。震災から十一年経った今必要とされているのは、持続的で細やかな心のケアであると思う。再生には時間がかかるし、ケアに明確な正解があるわけではない。だから傷付ける怖さや向き合いづらさから躊躇してしまう。けれど、曖昧だからこそ人と人の繋がりが必要な分野であると思う。人と人の間、その曖昧な境界で人は傷を癒やし少しずつ前に歩みを進めていくのだろうと思う。」

Ｇさん

「次にこの復興という出来事に、被災者ではない自分が、どう向き合うべきなのか。この問題に、年明けから考えるようになった。でも東北と関東は距離もあるし、簡単につながる事ができないし、実際にこの学校で、被災地に行った人は、少数派だと思う。最初は、つながりがないと、復興に向き合う事は出来ないと思っていた。でも、つながる事だけが全てではないんじゃないか。そう思うようになってきた。スタディツアーで沢山の現地の人の声を聞いたが、全員に共通して言えた事は、僕達に知って、考えて欲しい。という願いだった。それを受け取った僕達が、今度は、この学校のみんなに、現地の声を、届けて、知ってほしいと、願い、伝える側に回るべきなのでは、と考えた。この間接的ではあるが、誰かに伝えるという事は、ある意味、復興の手助けになると思う。被災者の願いを拡散して、同じ事が起

こった時、二度と同じ思いをしないように、考えていく事が、復興なのではないか。」

Hさん

「こうして、東日本大震災を振り返ってみると本当に衝撃があったなと深く思い、実際に自分の目で見ることで込み上げてくるものがありました。まだ被災の現状を知らない誰に自分の目で見て確かめたことを伝えていく事の大切さを知って、今自分が出来る事として学んだことを伝えたいです。伝えていくことも復興の手助けになると教わり、人と人との繋りで復興は徐々に出来ていくんだなと私の中でそう感じました。」

Ｉさん

「ある人から「伝えられる側でもあるけれど、これからは伝える側にもいる」という言葉を聞き、その言葉が印象に残っている。知るということは伝えていけることでもあるのだと気づいた。上手に伝えていかなければならないとも思った。そう考えたとき、どのようにして伝えるべきか。私や講座を受講している人は震災や東北、授業で扱った内容について興味があって同じコミュニティの中ではある程度同じ方向を向いて話をしていると思う。でも講座外の人は興味のある人もいれば全く興味のない、関係ないことだと思う人もいるだろう。それに、私は授業を通して、自分が何を伝えたいかが分からなくなるときや、考えていることがあってもそれを言葉にするのに苦戦することが多々あると感じた。頭に浮かんだもやもやをどう言葉にするかすごく悩んだ。宮城に行った後の意見交換が大切な時間だったと思う。行ってよかった、また行きたいという意見から、行っても実感が湧かなかった人、すごくもやもやして悩んでいる人、別の立場からの声も聞きたいと感じた人、他人事になりがちだと気づいた人、新たに疑問が生まれた人など講座を受講している人それぞれにいろいろな向き合い方があって、みんなの想いに共感して、新たな視点を知って改めて考え、私にとっては知ってそれからが大事なのだと思った。人と関わることがたくさんできた授業だった。授業内や宮城での交流会でアイスブレイクをしたり、宮城に行った後の意見共有や質問出しなど授業全体やグループ共有を通して考え、話した。後期に行われたシンポジウムに参加して、立命館大学院生や大人のみなさんなど授業外からの人の声が聴けた。普段授業で交わすことに近いような想いの人もいれば新たな視点や観点もあり、いろいろな声が聴けたことが嬉しかった。人と関わっていくことで、自分の考えたことからさらに発展したり、まとまらない気持ちを少しずつ言葉にできるようになった。」









子ども達は出会った人たちや復興の過程で起こっていることを前に、より学びを深めたい、考えたいと書いてくれています。学んだ責任や知った責任について、まさに自分の方へと動機の転移づけがなされています。それはもちろん、この選択講座を選んだ子ども達が元々そうした支援に興味関心が高い人たちだったこととも関係していると思います。高校生の彼ら、彼女らはまずはさらに学びを深めて目の前で起こっていることを説明する言葉や自分が分からないと感じたモヤモヤを突き詰めていきたいと感じてくれています。事前学習に比べて、事後学習においては格段にみんなのグループワークに対する向き合い方や言葉も変化しました。自ら学ぼうとするその姿勢は、自分に何ができるのだろうかという問いから発しています。教員としての私の今後の課題は、こうした事後学習での子ども達の姿勢をどのように支援してより学びを深化するところに携わっていくのかということです。

3.おわりに

「臨床」とは何だろうか。「対人援助」とは何だろうか。最近の疑問です。学校の先生は一体何者なのだろうか、と思っています。AIが聞けば何でも教えてくれる時代、「教える」行為は何を「教える」必要があるのかなあと。私は「対人援助」学領域で学んで教員になったからこそ、余計に自分自身のルーツを探る意味でも、「対人援助」と「教育」について考えている時間が増えました。「対人援助」と「教育」を架橋することはできるのでしょうか。こういった場で改めて文字にしてまとめることのできるありがたさを感じています。今号もありがとうございました。

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その3　京都国際社会福祉センターの家族面接

坂口　伊都

早樫　一男

千葉　晃央

大谷　多加志

はじめに

前号に引き続き、特別連載３回目を迎えることができました。今回は、坂口が担当させていただきます。第１回は、ジェノグラムから里親家族に思いを巡らせ、前号では「家族理解」と「家族支援」の視点から里親家庭について整理していきました。何となく感じていた事柄が文章となると、改めて里親家庭が複雑な関係性を抱えながら家族を成り立たせていることが見えてきました。

里子は、里親、里兄弟姉妹、実親、里親の親戚、支援者、地域の人々等、いろいろな人が関わっています。「親」とつく２つの家族が存在するだけでも、子どもから見ればわかりにくく混乱しやすくなります。里親の方も里子と実子の違いを感じたり、出会う前の里子の姿を知らなかったり、親戚や地域に里親制度を理解してもらえずに苦労したり、様々な難しさに出くわします。また、里子とのトラブルが続いていけば家族ではいられなくなる現実が横にあり、それを意識しながら支援者と協働し、家族を築き、里子を含めた家族を維持し続ける労力は相当なものだと言えます。

里子が里親家庭に入り、未知なる新たな環境に適応していくのは、想像以上に大変な体験でしょう。家族の関係、暗黙のルール、生活様式の変化、苗字が変わる子もいます。転校先でクラスメイトや保護者達に自身の存在をどう紹介していくのか等、里子自身がどう行動すればいいかわからないことだらけでしょう。里親家庭は、始める段階から様々な事柄を抱えながら、慣れない道のりを歩んでいかなければなりません。どこの家族も関係が良好な時もあれば、バランスが崩れている時も出てきます。里親家庭が、新たな家族のバ

ランスを築いていくことは簡単なことではありません。里親を支援していく際、この「家族」の視点は欠かせないものではないでしょうか。

そこで今回の特集では、著者がかかわってきた『京都国際社会福祉センターの家族面接』を紹介します。

京都国際社会福祉センター

京都市伏見区の桃山の山手の住宅街を抜けると京都国際社会福祉センターが見えてきます。目の前に小さな公園があり、子ども達が遊ぶ声が聞こえてくることもある、落ち着いた雰囲気の中にあります。社会福祉法人京都国際社会福祉協力会が母体となり、1983 年から対人援助職の現任者向けの研修会を多数開催しています。その一つにジョン・D・シメオン氏による家族療法の研修があり、対人援助学マガジン編集長の団士郎氏や、この特別連載の早樫一男氏も講座を受講し、現在は両氏が「家族理解のための講座」を複数担当されています。その講座を千葉さん、大谷さん、坂口も受講してきました。

特集メンバー紹介

早樫一男：児童家庭支援センター「山城こども家庭センターだいわ」センター長。京都府の児童相談所等で長年心理職として勤務し、同志社大学心理学科教授を経て、2014 年より児童養護施設/乳児院「京都大和の家」統括施設長を務める。2023 年度より、センター長に専念。対人援助学マガジンでは「家族造形法の深度」「日本のジェノグラム」を連載。

千葉晃央：京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻講師。京都国際社会福祉センターで家族療法を学び、障害福祉領域の現場で長年の実践を行う。2020 年から 2021 年に京都府家庭支援総合センターで里親支援に携わり、立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座の運営にも関わる。

大谷多加志：京都光華女子大学健康科学部心理学科准教授。2003 年から 2020 年まで京都国際社会福祉センター発達研究所で勤務。家族療法について集中的に学んだ経験がないことを武器に聴き手として座談会に参加し、本特集メンバーに加わる。2012 年から対人援助学マガジン編集員を務める。

坂口伊都：家族関係支援・相談支援 憩都（いと）主宰。大学教員、NPO 法人チャイルド・リソース・センター、スクールソーシャルワーカー等の経験を持ち、京都国際社会福祉センターで家族療法を学ぶ。現在は、家族支援や専門職養成に関わる。対人援助学マガジンでは、自身の里親体験をもとにした「養育里親　―もうひとつの家族―」などを連載。

家族理解のための講座の他に社会福祉講座、治療教育講座、対人援助職のための講座、ケース検討から学ぶ発達障害児・者支援等、数多くの研修を社会人の方が参加しやすい時間帯に開催しています。受講生は近畿圏のみならず、全国各地の援助職が学んでいます。自治体によっては、職員研修としてプログラムされ、定期的に受講し、支援者のスキルアップを図っています。

家族面接

京都国際社会福祉センターでは、研修だけではなく、「のぞみ親子相談室」の一機能として、家族面接による相談を受けています。早樫さん、千葉さん、坂口はそこでファミリーセラピスト（以下FThと表す）をしています。京都国際社会福祉センターの家族面接は、以下の５つの特徴を持っています。

１．チームとなってケースを受ける
２．家族面接をビデオ撮影している
３．10 回程度をワンクールと設定している
４．ジェノグラム面接をしている
５．次の面接までに家族でしてきてもらう事（宿題）を提案している

面接室には、家族と面接担当ファミリーセラピスト（1 名）の椅子を丸く並べ、その中央にマイクが置いてあります。ワンサイドミラーがあり、観察室では他のチームスタッフが家族面接の様子を一緒に見て聞いています。

家族には、好きな席に座ってもらいます。FTh の紹介、他のスタッフが一緒に聞いていること、動画撮影をするが、家族面接をより良いものにするために見返すためで、外には出さないことを伝えています。希望があれば、家族面接後に観察室の様子を見てもらうこともできます。

家族面接は、

「どなたからでも結構ですので、ご家族の紹介をしてください」

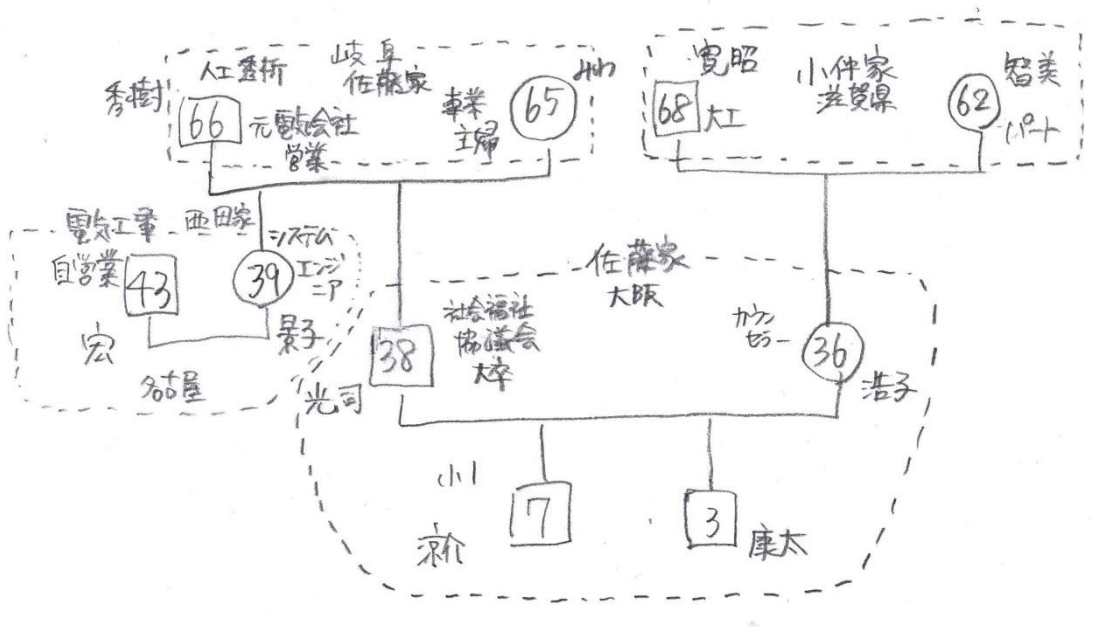
から始めます。ジェノグラムを描きながら、名前や年齢、職業等を尋ね、面接担当 FTh は記入していきます。

家族の歴史、家族の呼び方、暮らし方の変遷等を話題にします。



家族にもジェノグラムを見てもらいながら書いていく作業は、何も家族のことを知らない FTh に伝えようとする意識が働くようです。教えようとしてくれた事柄から、質問を重ねていくと、抵抗感をあまり感じずに応じていただいています。

ジェノグラム　見本（架空の事例です）



家族面接をする際は、家族を理解するために 3 つのワードを意識します。

家族理解の 3 つのワード

① サブシステム・・・家族の中の小さな単位（夫婦サブシステム、両親サブシステム・きょうだいサブシステム）がどのように機能しているか

② 境界・・・世代間境界、内と外の境界が保たれているか

③ パワー（決定）・・・権威、決定、支配、管理の側面　誰が決めているのか

詳細は、
団士郎著『対人援助職のための家族理解入門　家族の構造理論を活かす』 中央法規
早樫一男著 『対人援助職のためのジェノグラム入門　家族理解と相談援助に役立つツールの活かし方』 中央法規
早樫一男編著　千葉晃央　寺本紀子著『ジェノグラムを活用した相談面接入門　家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』 中央法規
をご覧ください。

例えば、「子どもさんの進路はどのように決めていったのですか？」と尋ねるとします。

A 家族は、「子どもが行きたがったので」
FTh「それは、子どもさんの方から打ち明けられたのですか？」
A 家族「いえ、先に母親が聞いて、母から父に話しました」

B 家族は、「両親に言われたので」
FTh「そこは、〇〇さんも希望していたところだったのですか？」
B 家族「えー、まぁ…」

A と B の家族は、進路の決め方が違いました。それぞれの家族の返答から、3 つのワードを意識した質問を展開していきます。A 家族は、子どもと母親の境界、両親サブシステムがどのように働いているのか気になります。
B 家族の方は、パワー（決定）が家族のどこに集中しているのか確かめます。

家族の話を一通り聞いてから、**一旦休憩**を入れます。
面接担当 FTh は、別室で面接を見ていたチームと合流し、今後のことについて話します。そのことは、家族にも伝え、家族の皆さんには、控え室で休憩してもらいます。

別室では、家族の印象、聞き取りにくかった部分の確認、家族が抱える課題、ここでの家族面

接の方向性（扱うテーマ）、次回の予定と宿題等を考えます。実際に面接している者と観察室で見ている者の間では家族の印象が違うこともあります。家族と面接をしているFThは、他のチームメイトが同時刻に客観的に見て意見をもらえることで、次回の家族面接に向けて冷静に考えることができるので、面接時は家族の話に安心して集中することができます。

宿題は、その家族に合わせて考えます。

例えば、
家族全員で目的地を決めて出かけてもらう
次回は、来ていない家族に一緒に家族面接に行くように誘ってもらう
子どもに晩御飯を作ってもらう等

家族がこれまで実施/体験したことがないような事柄を提案することが多いですが、その宿題をしてこなくても構いません。次回の家族面接で、何故しなかったと思うかを話題にします。

休憩が終わると、また家族に部屋に入ってもらい、どのような話題が出ていたか、質問や宿題の内容等を伝え、次の予約について話をして面接を終えます。

簡単ですが、以上が家族面接の流れとなります。そして、回を重ねるにつれて家族の対話が深まっていきます。最初にだいたい 10 回で一区切りすることを予告しているので、後何回で終わるのかを FTh も家族も意識し始め、終結に向けての心構えをしていきます。ケースによっては、10回を過ぎても、必要があればテーマを変えて継続していくこともあります。

家族に起こっていること

日常生活の中で、家族の問題について話し合うことは難しいことです。話をしても、取り合ってもらえなかったり、感情がぶつかり喧嘩になったりして、話し合いになりません。家族面接では、第三者が介入することで、自分が話す時は、FThにもわかるように丁寧に伝え、その言葉は他の家族の耳にも届きます。その繰り返しが、家族でじっくり話す空間を作ります。FThは、第三者として家族の話を整理し、あまり話しをしていない家族に、他の家族の話を聞いたことがあるか、聞いてみてどう思うか等の話題を振ったりし、発言者が偏らないように気を配っていきます。こうして「家族の対話」が成立していきます。対話の中で、家族の思いに驚いたり、自分の中の整理をしていく作業をしていきます。

また、「宿題」が出されることで、それをどうしていくか話題にするだけでも、家族が協働する機会となります。家族面接を希望する人の中には、風邪薬のように家族の問題が解決するのではないかと期待する人がいますが、宿題をしたからといって、家族の問題が解決されるというものでは

ありません。宿題と向き合い、実践し、やってみてどうだったか振り返ることが、家族の新たな行動様式となっていきます。上手くいっているようなら続ければいいですし、上手くいかなければ家族と一緒に考え、新たな宿題を考えていきます。家族が協働して試行錯誤する経験が、これからの家族の可能性となり、家族が何かトラブルが起きた時に対処していく力となります。

家族一人ひとりが力をつけていくケースでは、次のことが起こっています。

家族でも、それぞれ違う考えを持つ個だと知り、
家族が対話できる体験をし、
答えを一つに決めず、試行錯誤をしていける

これを家族で実践できると、自分たち家族で問題を解決できるイメージを持てます。

家族を長く営むことは、誰であっても簡単ではありません。里親家庭なら、なおさらです。世の中にこれが正解という答えがないものを家族も支援者も一緒に考え、試行錯誤することで次を考えることができます。家族として子どもを迎える里親家庭だからこそ、家族を視点に入れた支援が求められるのではないでしょうか。里子との関係に衝突が起こると、生活を回していくことで手一杯となり、これからが見えなくなります。そこに、次を考えられる支援に、大きな意味があると私たちは考えています。

ある訪問看護師のアタマの中

1

～素直に映画を楽しめないひねくれ者に女神降臨～

山岸　若菜

はじめに

対人援助マガジン執筆の記念すべき第一回目、何を書こうか悩みました。

仕事で出会った事例紹介のようなことをするつもりでしたが、いざ書こうとすると、どうも自分らしくないなと思いました。

さて、自分らしくってどうしたらいいかなと迷っていた時「マジメな顔してるけど、面白いですよね。」と人によく言われることを思い出しました。

出会った物や人、出来事に対して、自分が頭の中でこっそりしているツッコミを書いたら面白いかなと考え、そのまま連載のタイトルは『ある訪問看護師のアタマの中』に決めました。

別に訪問看護師でなくても良かったのですが、そこは一応対人援助の仕事してるよアピールです。

今回は家族で映画を観に行った時のことを書こうと思います。

医療従事者の習性

医療の仕事をしていますが、医療系のドラマや映画があまり好きではありません。

なぜならすごくかっこいい。かっこよすぎるからです。

シリアスな展開のドラマほど、描かれる主人公たちは自己犠牲精神の塊で、常に献身的に仕事をし、ありえない奇跡を起こします。

イエス・キリストも顔負けの活躍です。

そういう映像を観ると、自己犠牲をしながら一生懸命人のために尽くす医療従事者はすごいと言われている気がして、すごく居心地が悪くなります。

同業者はたいてい同じことを言います。

医療従事者はなかなか医療系のドラマに没頭できない習性があるようです。

とはいえ、医療系ドラマは現代の水戸黄門です。

無茶苦茶だけど『お約束』があって、ドキドキするけど最後はスカッと終わるので、あまり好きではないと言いながらもついつい観てしまいます。

それなのにどこか「いやいや、そんなアホな」と冷めて観てしまうのが残念ですが。

先日、『TOKYO MER ～走る緊急救命室～』という映画を観てきました。

ドラマが好評で映画になる最近よくあるパターンです。

観たことがない方のために映画の宣伝文句を少し書いておくと、

『重大事故や災害現場に駆け、命を救うために危険な現場に勇猛果敢に飛び込んでいく、救命救急チーム“TOKYO MER”の活躍を描く。』

主演は鈴木亮平さんがつとめておられます。

ドラマから観ていますが、鈴木亮平さん演じる喜多見チーフがまぁかっこいいんです。

仕事中は冷静沈着、技術は世界レベル。

その上勇敢で力持ち。

仕事を離れるとユーモアがあり、みんなに優しく男前。

そして何かとすぐ脱いで、鍛えた身体を見せてくれます。

最高です。

そして、喜多見チーフの奥さんも、若いのに心臓移植の権威で世界的に有名、というありえない設定の高輪千晶という心臓外科医です。

彼女も自分を犠牲にしてでも患者さんや子供を助けようとする職業意識の強い医師で、仲里依紗さんが演じておられます。

ドラマでも映画でも、喜多見チーフは大災害の現場に果敢に乗り込んで、次々と人びとを救います。

途中大きな爆発が起きたり、ガスが充満して酸欠になったり、絶体絶命！もうダメ～！

となっても大丈夫。

勇ましい曲とともに必ず誰かが助けに現われ、そんなアホな！な奇跡が起こり、

「出動した現場で死者は出さない」

という MER に課せられた使命はたいてい達成されます。

今回は奥さんの高輪先生も大活躍でした。

妊娠中にもかかわらず、夫婦共倒れの大ピンチに遭遇し、さすがに弱気になる喜多見チーフを叱咤激励します。

自分も一回心臓が止まり、死にかけながらも立派な赤ちゃんを産み、数日後には車椅子で赤ちゃんに会いに行く不死身ぶりでした。

映画を観て泣く家族にドン引き

映画はドラマより奇跡の起こる回数だいぶ多めやな。

でも、大画面で迫力あるし、元気もらえるわ。と思いながらふと横を見ると、

夫と息子が号泣していました。

えっ！？ちょっと待って。

なぜこれで泣ける？

水戸黄門で泣く人いる？と不思議だったので、映画が終わってから 2 人になぜ泣いていたのか聞いてみました。

すると「みんな助かってよかったな、の涙やん。MER めちゃかっこええし、高輪先生なんか自分ヤバいのに人の心配するとか、やっぱ医者てすごいなぁ。」という答えが返ってきました。

いやいや。そら助かるやん。

毎回助かってるやん。

なんならレギュラーメンバーほとんど一回心臓止まったことある人ばっかりやん。

と、私の頭の中は混乱しました。

あんなにスタイル抜群で美男美女揃いの医療スタッフなんて見たことないし、現場で奇跡が起こりまくることはありません。

喜多見チーフたちは一生懸命に仕事をして死者はゼロだったかもしれません。

けれど、心臓が止まっていた時間を考えたら植物状態の人は多数出ているはずです。

この後、命は助かったけど植物状態になった本人の家族から「こんなことになるなら命を助けてくれなくてよかった」とか言うてくるヤツが出てきてややこしなるやろな。

なんていう想像もついつい頭によぎってしまいます。

だけど、日常が医療と離れている夫と息子は違いました。

彼らは役者さん達の熱演によって、映画の世界にどっぷり入り込んで楽しめるんだと、自分との違いに驚き、羨ましく感じました。

でもそれと同時に、普段医療と関係なく生活をしている人がこの映画を観ると、心臓が一回止まってもみんなすぐ元気に回復するもんだと素直に思うんじゃないかと不安にもなりました。

さらに医療職ならば人を助けるために献身的に働き、自己犠牲をするもんでしょと思う人が増えるかも。

そう考えるとまた少し、気持ちが重たくなりました。

物語と現実とを線引きして観るのが難しいのです。

現実に引き戻す女優の力技

しかし、そんなモヤモヤした気持ちを吹き飛ばしてくれる人が現れました。

映画で喜多見チーフの奥さん、高輪先生を演じていた仲里依紗さんです。

彼女は自分で YouTube チャンネルを運営しています。

赤い髪にど派手な服を着て「ど〜も〜。なっかりいさでぇ〜す！」と配信を始める姿に、黒髪で冷静にオペをする知的な高輪先生はどこにもいません。

時代劇をやっている時も、絢爛豪華な女将軍の扮装のまま、コンビニで買い物をしたりしています。

それでも実力のある方なので、その女将軍の役は高く評価されていました。

ドラマや映画はフィクションで、それはそれ、これはこれ、とはっきり教えてくれました。

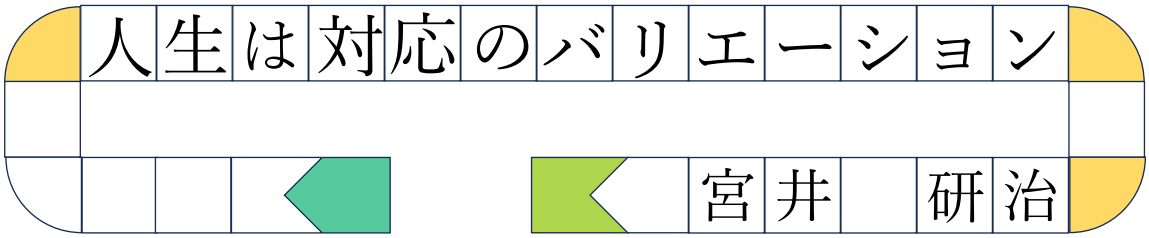
映画を観て泣いていた夫と息子も、YouTube を観てからは『高輪先生すごい』から『役者さんてすごい』に変わっていました。

これから TOKYO-MER を観る人は、ぜひ彼女の YouTube チャンネルも同時にチェックしてください。楽しさが倍増するのでおすすめです。

仲里依紗さんのおかげで医療系ドラマの見方が変わりそうです。

物語に入り込んで感動できない自分に『これはフィクションだから好きに観たらいいんだよ』と言ってもらえたような気がします。

これからもひねくれモノはひねくれモノなりに、画面の中で起こる様々な奇跡に「そんなアホな！」と盛大にツッコミながら、気楽に楽しみたいと思います。



-第１話　対応のバリエーション勉強会の話-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんなで楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。

（「そだちと臨床」研究会主催　対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

１．　書いてみてぇ

執筆者@短信の中でも触れましたが、私は児童相談所を始めとする公的な児童福祉臨床畑の中で三十数年、基本、心理士として働いてきました。現在は、縁あって大学の先生をしています。少ないほうですが、けっこう様々な研修会で勉強してきました。ついには、自分たちで主催して、好きな形でやりましょう的な研修会に行きつきました。所謂、自主研修会です。いくつかのテーマ、方式の研修会が続いてきたのですが、そのひとつのやり方が「対応のバリエーション勉強会」というものです。今回、連載を始めるにあたって、この「対応のバリエーション勉強会」からインスピレーションを受けて、なんか書いたろかなっと思ったわけです。読者の皆さんもそうだと思いますが、人は社会的な立場や役割があります。わしゃ世の中になんの関わりもしがらみもないけんね～（ちょっと椎名誠風を意識してみました、若い人は知らんか）なんて言い切る人もいますが、それでも、何か物ごとを考えたり、世の中のニュースに引っ掛かりを感じたりする場合、自分の立ち位置が作用してくると思います。天涯孤独の身としても、その孤独な立場から自分の周囲を見渡すと思います。で、私の話へと戻りますが、三十数年に渡る公務員生活から足を洗う時（もう７年前になりますが）、やっとこれから好きなことが言えるわい、あっち立てればこっちが立たず、何も言えません、みたいなことは無くなると思いました。青空に一点の曇りなし状態みたいな立ち位置ですね。幾分かは、そうした清々しい感覚も味わいましたが、すぐに現在の立場を少なからず意識した発言を心がけちゃうんですよね。特にこうして、文章を書くときにそれを感じずにおれません。まあ、100 パーそんなしがらみが、無くなることが、良いこととは思いませんが、気にせんと好きなことを発信するような機会なんてはっきり言ってないでしょ！ところが、ある、あった！それが、この Web 誌「対人援助学マガジン」でした（勝手にそう思い込んでますが）。だからって、いい加減なことを書き散らかそうというわけではありません。自分の経験や、感じたこと、思

ったことに、できるだけ自由で開かれていたい、それこそが私の行動、思索における対応のバリエーションの道筋なのです。だから、書かれることのほとんどは私発信、私調べ、私の個人的感想、個人差ありありです。細かいことに目くじら立てないでください（まあ、目くじらたてる方は読まないでしょうが）。のっけから、いいわけがましいことを書きましたが、お許し下さい。つまり、まとめて、言いますと、
「我思う故に我あり、知らんけど」です。大阪弁は、すごいですね！！

2.　研修会がスタートするまで

第一回目は、本文の発想のきっかけとなった「対応のバリエーション勉強会」について書かせていただこうと思います。この研修会は、大阪市内の研修施設を会場にして、30 年ほど続いている自主的研修会で、だいたい年３回ぐらい開催してきています。「そだちと臨床研究会」というこれも自主的なグループが、母体となって続けてきた活動のひとつです。この研究会について話だすと長くなりますので、またおいおいお話していこうと思います。で、この「対応のバリエーション」という「対応」も「バリエーション」も言葉としては分かるですが、繋げて提示されると、なんのこっちゃっていう名称ですが、これはまあ造語ではないかと思っています。造った人は川畑隆という人で「そだちと臨床研究会」のコアメンバーの一人でこの Web マガジンにも絶賛連載中（「かけだ詩」）だったのだけど、１２回で一応一区切りと聞いております（“川畑さん、第２クール楽しみにしています “）。それでですね、この川畑さんが、同研究会の衣斐さんという方のケース事例を知りまして、「こりゃ、素晴らしい」といたく感動されたわけです（この辺りはご本人から聞いているので間違いありません）。当時、この研究会のメンバーは近畿圏の児童相談所の職員の集まりでしたから、当然このケースも児童相談所での取り扱いケースでした。非行のケースです。

そこで、関係機関（その時は主に児童相談所及び児童福祉施設職員を念頭に置いていた企画だったような）の職員に声かけして、第１回の研修会を開いたように記憶しています（何度も言いますが、研究会メンバーにきちんと裏を取って文章化してるわけではありませんので、また、そういった縛りや厳密さから離れたところで文章を書きたいので、これから先の連載でも、“間違ってるよ”と気が付いた人は後で宮井までお教えくださいね。でも多分、訂正にてお詫び文は出しませんが）。

3.　対応のバリエーションのええとこ

冒頭の囲み文にあるように、単なる事例検討ではなく、それをロールプレイに落とし込んで、他の人も体験しようよというアイデアは、川畑さんの発想だったと思います（たいしたもんだ！！）。ただ、いくら難事例に対して、ある心理士なりケースワーカーなりが、うまく対応したとしても、それが家族療法の中の手法だったり、短期療法の一つの技だったりしても、それを追体験するようなロールプレイは、それはお芝居のシナリオをなぞるようなものにすぎません（なぞるロールプレイで練習するというような研修形態もあっていいのでしょうが、知らんけど）。研修会を続けると、ある事例

をもとにしてロールプレイで解釈するのではなく、自分のやり方でロールしてみるということに意味を見出すようになりました。もととなる提出事例はありますが、ロールプレイでやっていく中でどんどんもとの事例ではなくなる、これは当然のこととして受け入れるようになりました。対応のバリエーションも増えたらいいけど、人はそんなにいくつもの違った形で対応なり面接はできないということも、当然わかってきました。いろんな対応、いろんなスキルを学ぶというより、自分なりにやってみることに主眼が移っていったように思います。そんな中でも普段とは違う自分の面接に挑戦してみる機会であるという意義も見いだせたように思います。普段のお仕事の中で、「ちょっと今日は団士郎風のおしゃべりでまとめてみました」なんてことは、なかなかやりたくても、できないでしょう。思っていても言わないでしょう。でも、対応のバリエーション勉強会ではそれができる面白さもあるわけです。ただ、ロールプレイだといっても、ロールプレイヤーにエントリーする人（この場合は相談を受ける側、支援者側、ケースワーカーなどを演じる人）は、事例の中の父親、母親、子ども、関係者、あるいは上司に対してうまく対応したいわけですから、ただ自分が演じたいように演じる人は、まあ、今まで経験的にはいなかったです。

もうひとつこの研修会の大きなベースラインは、「失敗より成功している点に着目する。問題より解決に視点を注ぐ。ほめる、それもお世辞でなく、具体的に」ということがあります。このベースラインについても研究会コアメンバー（現在８人いてます。毎回全員参加ではありませんが）でじっくり話あったということもなく、なんとなく、回を重ねるにつれ練られてきたラインだと、個人的に解釈しています。批判したり注意したりしてはだめよというわけではないですが、あまりにも巷に広がる事例検討会というものの性格が、一言でいえば「問題志向」的だと思います。事例検討のケース募集するときは、「とにかく何かケースを出してほしい、きっとあなたのためになるよ。」的なお誘いから始まり、事例検討会が近づき当該事例が出てこないとなると、研修企画担当者は「何でもいいから、とにかく事例ないかしら」となり、出そうものなら賞賛の嵐です。それもつかの間、事例検討会が始まり、発表者が苦労してまとめた事例に対して「この介入はどうかな！？」「これ一番やっちゃあいけないことだね」「発表者には、今回の失敗を糧にしてより精進していただきたいということをまとめとして今回の検討会は終了させていただきます」なんて手のひら返しがけっこう横行してきた過去がありませんか？こうした袋叩きを成長の糧にできるできた心理士もおられるでしょう。しかしながら私は特にちっともそういう愛のムチ風な指導を信じませんので、まず基本ホメる、賞賛する、認めるほうが役に立つと信じています。批判はその後のほうが効果的だとこれも信じています。何が言いたいかと言いますと、私たちの研修会のような「何でもやりんしゃい」的な雰囲気がありますとロールプレイヤーはやりやすくなりますよね。この研修会では、そういう雰囲気を醸し出すようにするのは、スタッフの役割かと考えます。

あと、ロールプレイをする中で実際の事例から離れていくわけですが、その事例の

親や子どもを演じることで、事例提出者がケースの立場に立てる体験的可能性が広がる。児童相談所やその周辺で自分が対応に困った事例を出してもらうというのが提出事例の前提ですから、まあ、笑い話にもならない事例がたくさん出てきます。共感などと簡単には言えない事例です。それでも、提出者はロールプレイの後で「もしかしたら、こんな気持ちだったのかもしれませんね」「次回は少し違った気分で面接できそうです」と憑き物が落ちたような表情を見せることがあって、ロールプレイすげえなと思わず感じたりした経験は少なくはありませんでした。

研修会を重ねるとともに、ロールプレイされなかった事例も出てくるわけです。聞くだけ聞いて（ロールプレイ決定前段ですから、簡単にしか聞きませんが）ほかすんかい！ということに対応する（ここでも対応です）べく、最後に時間を設けて、各事例に参加者でコメントして終了という形が出来上がりました。コメントはどうしても研究会メンバーであるスタッフ中心に出てくることになりますが。これでロールプレイでの事例検討とコメントによる事例検討で、バランスが取れるというところです。

４．手順について

手順についてもシンプルです。基本マニュアルでは、参加者が二人ペアになってもらいます。お互いの相談支援のお仕事の中で、「困ったな！」「もう一回やり直せるならやり直したい」「来週、面接だけどどうしよう」といった過去、現在、未来を抱える難しいと感じた事例をそれぞれに伝えます。聴く側は上手に聴きます。この聴き方も研修の一環です。

次に、全体でシェアリング。ペアで聴いた相手の事例を、どんな事例かみんなの前で、端的にしゃべります。次にペアの一方が、自分が聴いた相手の事例をしゃべるわけです。お相子で進めます。ペア単位で全体に向けシェアリングしていきますが、研修会に 10 人参加していれば、10 ケース出てきます。シェアリングの内容は簡単にホワイトボードにまとめておきます。ジェノグラムは必須ですね。この辺りの進行やホワイトボードへのまとめは、やはりかなりの熟練が入りますのでスタッフメンバーの仕事となります。ファシリテーターですね。このお仕事は、いつの頃からかコアメンバーの菅野道英さんのお仕事として定着してきました（菅野さん、いつもご苦労さん！）

いよいよ、ロールプレイをする事例を決めます。参加者全員の投票で決めます。どんなケースが選ばれるかは、その時その回での参加者のメンツや雰囲気に依るように思います。まあ、面接の形態として再現できるものが基準ですが、ある回では、電話相談でのやり取りをロールプレイしたこともありました。参加者全員で１番得票数の多かったケースをまずロールプレイの１番目の事例とします。次にロールプレイヤーを決めていきます。配役ですね。今は、ロールプレイに取り上げられた事例の提出者が、自分の事例の中の当事者と言いますか、困ったお母さんやお父さん、或いは子ども役をまずするということが定番になっています。そのケースの人物を実際知っている人が演じるのが一番わかりやすいですよね。その後の配役は、登場人物に応じて、参加者の中から自薦他薦で決められていきます。ちょ

っと緊張の走る時間ですね。嫌いじゃないです。

で一回、７分なら７分、通しでやってみて何が起こるか、起こらないか、対人ロール化学反応（今考えました、造語です）を待ちます。ロールプレイでのお約束は、シンプルです。役者でもありませんし、人前で演じるのは恥ずかしいものです。でも、笑ってしまうと現実に戻ってもっと恥ずかしくなるだけです。コツとして、「とにかく、ロールプレイの時間は笑わない、マジメに演じる」もちろん、ロールのやりとりの中での笑いには制限はありません。ロールプレイが終われば、見ていた人、ロールプレイヤーの順に感想を言ってもらいます。「相談者の良かったとこ、参考にしたいこと」といったアナウンスを基に発言してもらいます。もちろん、「お母さん役がリアルに怖かった」という感想もありですが、演技の向上をめざす研修会ではないので、相談支援者側にフォーカスして聞いていきます。

で、プレイヤーを代えて時間の許す限り先ほどの手順でロールプレイを繰り返します。時間の都合で、１番目２番目あたりの事例をロールプレイするところでロールプレイは終了です。ロールプレイはされなかった残りの事例のコメントの時間に移らざるを得ません。このコメントが終わると、最後は参加者が一言づつ感想を言ってしめる感じでしょうか。以上が、１０人程度（スタッフを除き）参加して、３時間半の工程で行うスタンダードタイプの「対応のバリエーション」の手順です。だから、参加人数、研修時間などによってフレキシブルに微調整します（これも含めて対応ですね、うまいこと言う！）

５.「対応のバリエーション」を通しての世代間交流

「対応のバリエーション勉強会」を積み重ねてきて、ロールプレイをできるだけ参加者に体験してほしいというスタッフ側の配慮の時期があったように記憶しています（個人の感想です）。で、終わってみると、スタッフは誰もロールプレイしてないというような回もありました（たぶん）。するとですね、終了後の飲み会（これが楽しくてやってる部分もあります）で、「先生方のロールプレイを見てみたいっす」みたいなことを言われることが、結構ありました。いやいやいやいやいや、こっちは参加者の皆さんにロールプレイの機会を提供したいのに、意図が伝わんねーなとちょっと困惑したこともありました。でも、これは若い世代にすれば当然です。少しでも「面接がうまくなりたい」「ケースにうまく対応したい」このために、研修会に参加されているわけですから、当然の気持ちでしょう。それからでしょうか、スタッフも遠慮せずにロールプレイに参加しよう、してもいいんだと切り替えられたように記憶しています（これも個人の感想）。

さらにここからも個人的な意見なのですが、ベテランだからといっていつもいつもロールプレイがうまくいくなんてないですよね。でも、それでいいんです。当たり前です。逆に、就職２年目ぐらいの新人君が、おおっと思うようなロールプレイをしちゃったりします。ご本人はなんでうまくいったか分かってなかったりしますが。ここにロールプレイの良さがあると思うんですわ。面接は生き物です。ベテランは経験値で勝

りますので有利さは相対的にはあるでしょうが、面接の相手は、面接の状況は、どれひとつとって同じものはないのです。ベテランも新人も同じ土俵に立てる、これこそ、ロープレイを通してのリアルな交流ではないかと考えるに至っています。

このロールプレイの時間と、研修終盤のロールプレイできなかった事例へのコメントの時間が内容的にもバランス的にも対をなしていると考えるわけです。コメントではスタッフ（ベテラン）が中心になりますが。役に立つ見立て、ヒント、いわゆるアセスメントが語られます（素晴らしいぞ、スタッフ）。参加者は肯いてくれているように思えます（たぶん）。この研修会のベースラインにある「解決志向」的な方向で行いますから、それだけでも他の「事例検討会」とは一線を画すかと思います。とすれば、ロールプレイはなくてもこのコメントの時間だけで事足りるのかというと、そうではない！ということが、最近ひしひしとわかってきたのであります。集約しますと「経験を積んだベテランで、面接には一家言あろうと、ロールプレイではしょぼい面接を見せてしまうこともある。コメントの時間はなーんにも言えない新人であろうと、ロールプレイでは大谷君バリの飛距離の大ホームランを打つこともある」ということ。これこそ人生の縮図というか、バリエーションだよなと最近、感じているわけです（あー、なんか、ここまで書けて、スッキリ！！）

5.　最後に、そして、これから

今回は、なぜ、この「対人援助学マガジン」に執筆させていただこうと思ったかということを書いたわけです。そのきっかけとなった「対応のバリエーション勉強会」のことを取り上げないと、なんの話か分からないし、今回は落語で言う枕みたいなものです。

次回からは、この「対応のバリエーション」的視点をもって、人生における（もちろん、私のですが）諸々を取り上げて語ってみるつもりです。こうご期待！

（おまけ）

対応のバリエーションについて、あら面白い、もっと知りたいと思った人向けに雑誌を紹介しておきます。「そだちと臨床 Vol.4」（明石書店発行）に「援助に役立つ対応のバリエーション」という特集が組まれています。

https://www.akashi.co.jp/book/b65738.html



講演会&ライブな日々㉟

古川　秀明

『自殺防止と健康観察』

目的：K 中学校における生徒の自殺予防

中学生の自殺について

① 日本全体の現状

2022 年度版の政府による自殺白書によると、コロナが蔓延する前の 2019 年、女子中学生の自殺者は 46 人でしたが、感染拡大後の 2020 年には 69 人、2021 年には 74 人に増加。日本の自殺者数は 2022 年度で前年度比４.２％(874 人)増の２万１８８１人となり、2 年ぶりに増加。児童生徒の自殺は 2016 年から増加傾向が続いています。

２０２２年度の小中高校生の自殺者は５１４人で初めて５００人を超え、１９８０年の統計開始以降最多となりました。そのことに厚生労働省、文部科学省は強い危機感を持っています。

中学生の自殺は 2020 年度、2021 年度の 2 年連続 100 人を超え、その約 6 割が原因不明ですが、学業不振や入試の悩みなどが多くなっています。

特に１８歳以下の自殺は、４月の初めに大きく増加します。

また、令和５年３月７日に文科省より、各都道府県教育委員会に、児童生徒の自

殺予防に係る取り組みを実施するように指示が出て、各中学校に伝達されていることから、現在、児童生徒の自殺問題がいかに深刻なのかがわかります。

② K 中学校の現状

自殺の前兆である「自傷行為・リストカット」「自殺企図」「抑うつ症状」の相談が年々増えており、自殺未遂により、医療機関に繋げたケースも 2022 年度だけで 5 事例ありました。

K 中学校は 2021 年度における生徒数は 1073 人と大規模校であり、最近では一般的な規模である 300 人程度の中学校と比べて、自殺者が出る確率も必然的に高くなります。

スクールカウンセラー（以下 SC）の人数や時間数を増やすのは予算や制度の課題があり難しく、また時間や人員を増やしても、個別のカウンセリングだけでは生徒数の多さから、すぐに限界がきてしまう可能性が高いです。

SC として、学校マネジメントを考えるうえで、チーム学校の考えに基づき、個別カウンセリングだけではなく、学校全体として全校生徒の自殺防止に関するアセスメントの必要性を強く感じます。

その為の基礎資料として、生徒一人一人の日々の心と身体の状態を把握、分析し、自殺の前兆と思われる変化を早期に察知して、その対応策を講じることにより、K 中学校生徒の自殺防止に役立てたいと思います。

「なぜ、自殺防止のために、生徒の毎日の心と身体の様子を知りたいのか」

2016 年、2020 年に別の中学校で起きた生徒の自殺案件に関しても、2 名とも不登校ではありませんでした。しかも、そのうち 1 名はカウンセリングも受けていません。

また、他の中学生の自殺ケースを調べてみても、必ずしも不登校やカウンセリングにかかっていたこととの関連性が見つけられません。

つまり、毎日「普通に」登校している生徒が、自殺しているという現状があるということです。

それにも関わらず、現状ではカウンセリングや不登校生徒を中心に注意が払われ、毎日登校しているノーマークの生徒にはなかなか注意が向けられません。

K 中学校でも、自傷行為・自殺をほのめかす生徒の 8 割は不登校ではなく、毎日登校しています。

また 2022 年度に実施した教育相談アンケート（1 年、2 年対象）では、生徒の日々の悩みの 1 位は「成績のことがとても気になる」でした。

これは中学生の自殺三大要因と思われる「親の叱責」「家庭不和」「勉強、進路問題」と連動していますし、児童生徒の自殺原因として「学業不振や入試の悩みなどが多くなっている」という先ほどの文科省の報告と一致しています。

またその事実は、生徒指導提要（令和４年１２月文部科学省・以下同じ）8・2・4 に記載されている、厚生労働省が発表した（「令和元年版自殺対策白書」）の、警察庁の資料を基に作成した統計結果とも一致しています。

厚生労働省（「令和元年版自殺対策白書」）

原因・動機別自殺者数の平成 21～ 平成 30 年の 10 年間の累計

中学生男子
「学業不振」（18.7%）
「家族からのしつけ・叱責」（18.1%）
「学校問題その他」（12.3%）。

中学生女子
「親子関係の不和」（20.1%）
「その他学友との不和」（18.3%）
「学業不振」（14.0%）

つづく

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

対人援助学マガジン

第５回　執筆者トークライブ実施報告



2023 年 5 月 25 日（木）の 21 時から 23 時という日程で、「対人援助学マガジン第 5 回トークライブ」が開催されました。第 5 回の話者は「幼稚園の現場から」を連載中の鶴谷主一さんです。前半は鶴谷さんのトークライブで、連載のきっかけや連載を通して感じていること、園長を務めておられる原町幼稚園での取り組みの実際などをお話頂きました。後半は鶴谷さんのお話を受けて、参加者全員がひとことコメント（感想、質問、意見など）を出し、そのコメントをめぐって話者もフロアも一緒になって話し合う時間となりました。

近年、幼稚園バスへの子どもの置き去りや、遊具での事故、保育園における虐待など、保育や幼児教育を巡る事故や事件の報道が相次ぎました。“とにかくリスク回避”が優先されるあまり、公園から大型遊具がどんどん消えていったり、使えないように固定されたりしているという状況も耳にします。そんな中、“木登りができる園庭”（マガジン 50 号：子どもが育つ園庭を参照）を持つ原町幼稚園の取り組みは、際立って見えるように感じました。思考停止して単にリスクを無くすのではなく、十分なシミュレーションと検討をしたうえで、リスクを管理、把握する。その上で、リスクをゼロにはしないことで、子ども自身にも「何が危ないのかを理解する」力を育てる、という重要な視点が示されました。

事件や事故の報道を通してネガティブな印象が形成され、“成り手がない”という状況も聞かれる幼児教育、保育の現場ですが、原町幼稚園には、卒園生が“ここで働きたい！”と戻ってくる、というお話もありました。鶴谷さんが幼児教育について、未来を生きる子を育む「クリエイティブな仕事」と語っておられたことが、強く印象に残りました。遅くまでご参加いただいた鶴谷さん、参加者のみなさま、ありがとうございました！

執筆者トークライブは年 2 回程度の開催を予定にしており、第 6 回のトークライブは 2023 年 11 月頃に企画する予定です。引き続きよろしくお願いいたします。読書会やトークライブの開催情報については、Facebook や Twitter などの SNS でもお知らせ致します。

◆マガジン公式 Facebook　https://www.facebook.com/taijinenjyogakumagazine
◆マガジン公式 Twitter　https://twitter.com/taimagahenshubu

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

今号からも新連載が二本。それぞれ、編集者と個人的繋がりのある方々だ。どうぞ息長くの執筆をよろしく。

マガジンは活発に14年目突入だ。六十名もの連載執筆者となると、入れ替わりも休載もあり、このところ300ページあたりで落ち着いてきている。プリントするとけっこうな厚さだが、Web で興味のある所だけ読む姿勢なら、適度なメニューの量かもしれない。

年四回の定期刊行を、粛々と続けながら、腹の中では、「こんな事はなかなか出来るものではないぞ」といつも、十数年を振り返ったりしている。（ご存知のように、結構な自慢屋さんなもんで！）

世間にはこのような刊行物が山のようにあって、その編集担当者は口を揃えて、原稿の遅れる執筆者への不満を漏らしている。断言するが、編集者のこのようなコメントくらい無意味なものはない。そんな愚痴にはひとかけらの改善へのきっかけもない。

これは編集に付きまとう問題を、どう対策、解決するかだけが焦点の課題なのだ。多くの人達（素人も玄人も）が、昔から相も変らぬことをこねくり回している内に、こういった発行物がどんどん消えた。

対人援助学マガジンは、息長く、創刊当時から変わらずの執筆者と、新しく開始して長く書き続けてくれる方々に支えられてきた。それにゴタクを言わずに役割に徹してくれる編集者二人の貢献も大きい。この良循環が存続の秘訣だ。

しかしそれに一つ付け加えるとしたら、マガジンが継続定期刊行できるためのシステムを構築できていることが大きい。何でもそうかもしれないが、見えないところにセットされたシステムなど気がつく人は少ない。

しかし継続の秘密はそこに隠されていて、それを発見して具体化し、世の中の新たな智の財産にする時代に突入している。

昔からある愚痴を継承して、ありきたりなことを口にしている人は、それ故に滅びるのである。

編集員（チバ　アキオ）

「報道の自由度ランキング 2023」を国際 NGO「国境なき記者団」は今年も発表した。調査対象の 180 カ国・地域のうち、日本は 68 位。前年よりは順位を上げたが、主要 7 カ国（G7：日本、アメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、イタリア、EU）の中で今年度も最下位だった。日本の状況について、「政治的圧力」や「ジェンダー格差」などが指摘されたニュースがあった。

こうした状況から最も影響を受けるのは若い世代である。自分たちがみている、知っている状況は、偏っている、若しくはられていると気づくのがどうしても遅くなる。長く生きてくると様々な場面でなかなか届かなかった情報に触れることも出てくる。また、情報がどのように？いつ？もたらさせるか？も影響するのは言うまでもない。学校時代にきいていても、「いつもの先生がまた言っている…」で終わることもある。また、自分の経験が豊かになったから「あの時の意味が分かった」ということも起こる。学びには「時」がある。目に触れても関心がなかった本も数年後に関心を持つということもある。これも1度その情報に触れたことから始まる。その後に 2 度、3 度触れて、あちこちできくから手を伸ばす。

マガジンもこうした情報に触れる「接点」の一つになっているとうれしい。若い世代も自分たちなりに情報を得て、物事を選択していく。その時に、あそこの業界にはこんなこともあって、あんなこともあって、そんな中でやりがいを感じて、働いている人がいるよ！となるような情報源でありたい。

たとえG7最下位でも、マガジンが現状の自由の度合いを構成している小さな要素であることも支えである。それが対人援助学会からの今の社会へのソーシャルアクションでもある。

編集員（オオタニ　タカシ）

マガジン執筆者の団遊さんが書いている日記（Note）の新着情報が届くと、いつもすぐに読んでし

まいます。単純に小噺が面白いというのもあるし、出版物や研修の情報も届くので、そのお知らせをもとにいそいそと申込をする…ということもよくあります。

前号の編集後記が“編集長のファンクラブ通信のようになっている”と書かれたばかりですが、先日 Facebook から“「木陰の物語」の LINE スタンプができました”というお知らせが届き、早速購入してしまいました。これは間違いなくファンです。団遊さんのお知らせに「シロラ―必見のスタンプができました」と書いてあり、最初は「シロラ―」の意味がわからなかったのですが、少し考えて(士郎 er)だと理解しました。スタンプの絵を見て、「ああ、これは子ども部屋のドアを外した人だな…」とわかってしまう私は、なるほどシロラ―のようです。

今号の編集会議で話題になったのが、“自分の言葉で語ること”と“うぬぼれ”について。どちらも自戒を込めて噛みしめる必要があることだなぁと感じています。

対人援助学マガジン

通巻53号

第14巻　第1号

２０２３年６月１５日発行

http://humanservices.jp/

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第53号は2023年9月15日
発刊の予定です。
原稿締切2023年8月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

このヴァリエーションの絵をよく描くなぁと思った。家族で大海原を目指してきた実感が私にはあるのだと思う。

我が家では子どもたちの大学卒業を最終リミットに、それ以降は自宅に置かない方針で巣立たせた。末娘など東京の専門学校に行くために 18 歳で我が家を離れた。

だからそれまでの期間は意識して一家で旅をしていた。私が運転をしないので、長く車を持たない生活だったから、旅支度は最小限の荷物をカバンに詰めて出発だった。

今、振り返ってみても、5 人揃って出かけていた頃の航海感はワクワクするものだった。私が船長で、クルーの安全と無事目的地への思いは強かった。

京都・宮津湾の観光船でのことだ。長男の姿が見えなくなり、落水したのではないかと夫婦で大慌てしたことがあった。しばらくしてトイレから出てきたのだが、思わず叱ってしまった。考えてみれば、小学生が便所に行くのに、いちいち「お父さん、おしっこしてきます」なんておかしいのだけれど。

団士郎　(2023/06/15)